山岳

Vol.87／1992

エーデルワイス・マークの

好日山荘®

全日本登山とスキー用品専門店協会加盟

■東京銀座店　東京都中央区銀座3-5-7〒104 ☎03(3561)3600・スキーショップ☎03(3561)0966
■大阪店　大阪市北区曽根崎1-2-8〒530 ☎06(364)0933㈹ ■谷町店　大阪市中央区谷町6-10-26〒542 ☎06(764)5206㈹
■福岡店　福岡市博多区須崎町1-1〒812 ☎092(281)3440・(291)6211

第八十七年（通巻一四五号）

山岳

一九九二年

山岳　一九九二年　目次

山々の環境問題について登山家たちは、何を語ったか—一九九一年山岳環境保護国際シンポジウムから—……江本嘉伸……7
マッキンリーの烈風—「風」の実態解明のための第三次観測機器設置登山隊の報告—……大蔵喜福……21
登山における新しい分野としてのスポーツクライミング……神崎忠男……32
〈特集　中高年登山を考える〉
日本山岳会中高年登山対策全国大会から……浦井孝夫・小倉董子・大森薫雄・討論……38
中高年パーティーの八〇〇〇メートル峰登頂　シルバー・タートル隊チョ・オユーに登る……神崎忠男……56
高齢者登山・私の場合……笠原藤七・小林太刀夫・望月達夫・三ッ石清・港　叶・坂倉登喜子・川崎精雄・牧野　衛・浅野初子・山田二郎・垣内康時・石坂久忠・石間信夫・西郷正郎・脇坂順一・橋本廣・松浦勇次・宮原利重・上岡謙一・羽根田二郎……60
一九九一年ナムチャバルワ峰合同登山……重廣恒夫……90
群馬県冬期サガルマータ南西壁登攀……尾形好雄……98
カラコルム　トリボール峰の登頂……大貫敏史……104
ブータン・ヒマラヤ　ツェンダカンの初登頂……桜井文隆・吉永英明……110
ヒンズークシュの名峰・ティリッチミール……須藤建志……116
五十歳以上のチョ・オユーの登頂……池田錦重……122
東京農大ブロード・ピーク登山隊一九九一の記録……佐藤正倫……128

福岡支部創立三十五周年シシャパンマ隊報告……日野悦郎……132
青年部第二次海外登山・慕士塔格山登山の記録……相馬勉……136
関西学院大学山岳部七十年の歩み
……橘　真琴・塩津正英・藤木高嶺・長井弘光・尾崎　進・三戸田一郎・日上耕司・高田英明……140
ヒマラヤ文献目録とその周辺……薬師義美……150
図書紹介……162
『西堀榮三郎選集』（高遠　宏）、松永敏郎『空にただよう峰』（村木潤次郎）、アーネスト・サトウ『日本旅行日記』（水野　勉）、ドイツ語だけの文献目録『チベット・ネパール・ヒマラヤ文化圏』（薬師義美）、会報『山』図書紹介一覧
＊
追悼……172
早川種三氏（内田勇三）、国分勘兵衛氏（内田勇三）、谷口現吉氏（金山淳二・山田二郎）、山田二郎氏（長島春雄）、進藤波男氏（中　保）、佐藤金一氏（室賀輝男）、泉隆二郎氏（大橋秀一郎）、徳永芳雄氏（相川　修）、阿達　憲氏（春日部薫）、川端信治氏（山本朋三郎）、熊谷太三郎氏（増永迪男）、佐藤敏彦氏（望月達夫）、西岡京治氏（川喜田二郎）、酒井昭市氏（藤田純江）、早坂敬二郎氏（原　康博）、長谷川恒男氏（松本正城）、大西　宏氏（山本　篤）
会報『山』追悼文一覧
＊
支部だより……209
会務報告（一九九一年六月～一九九二年五月）……221
日本山岳会・自然保護の歩み(2)……日本山岳会自然保護委員会……A59

落石から身を守る基礎知識……岩船昌起……A51
ナムチャバルワの気象（一九九一年）……奥山巌……A37
英文梗概……A25

写真

海外登山の記録……96～97
追悼……176～177

表紙挿画・本文カット

アルパイン・スケッチクラブ（榎本進、塔田也寿、福島幸太郎、三宅次郎、田中邦彦、中川久）

山々の環境問題について登山家たちは、何を語ったか

―一九九一年山岳環境保護国際シンポジウムから―

江本嘉伸

一九九一年六月中旬、北京で「環境と開発に関する開発途上国会議」が開かれた。

前年の九〇年四月、インドで二十か国が参加しての途上国会議が催された際、中国が閣僚級の会議の開催を提案、四十一か国の閣僚レベルの代表が参加して実現したのである。

九二年ブラジルで開かれる「地球サミット」を念頭に、環境問題への開発途上の国々の発言力を強めよう、というねらいで、「貿易上の障壁や差別を受けることなく、環境と開発の政策決定ができるような公平な世界経済秩序を確立する」「途上国は自然資源を使用する絶対的な権利を有する」「地球環境の悪化と途上国の損害の責任は先進国にある」などを骨子とする『北京宣言』が採択された。

今や〝地球人の正しい生き方〟のキーワードとなった「環境問題」は、この北京宣言の表現から伺えるように、先進工業国と開発途上国の対立、という宿命的な図式を抱えている。

途上国の主張の一つは、たとえばこのようなものだろう。

「私たちは、まず食べなければならない。途上国を踏み台にして、あるいはその貧困を無視して腹を満たしてきた

国の言いなりで環境問題にあたるわけにはいかない」

さんざん異境に鉱脈を探し、開発し、木々を伐採して自ら発展し続けてきた先進工業国への痛烈な批判、あるいは皮肉がそこにはこめられている。

ヒマラヤをはじめとする山岳環境の保護の問題も、根底にはその問題を抱えているように思われる。ただ、そこに〝侵入者〟として関わっているのが経済行為とは通常無縁の、自然を愛し、天に最も近い美しい世界に憧れてやって来る登山家、あるいは旅人たちである点が、はっきり違っている。

ヒマラヤの高峰がバリエーション・ルートを含めてほぼ登り尽くされた今、登山家たちは、山ともう一度向き合うことを要求されている。山を静かにしておく。山をあるがままに残す。それらは、山を愛する者の使命になろうとしている。

登山家や旅人の中には、もともと想像力豊かな人が多い筈だから、山と上手につきあえば、自ずと山麓に住む人々の生活レベルの向上ということを深く考えるようになるだろう。

北京宣言が訴えようとしていることを、登山家と土地の人々は、うまくやれるかもしれない。一九九一年十一月九、十の二日間、東京・世田谷の昭和女子大人見記念会館で開かれた「山岳環境保護国際シンポジウム・東京会議」と、それに次ぐ富山会議を聞いていて、最も印象に残ったのは、そのことであった。

登山に関して言えば、私たちが今いる、二十世紀末、という時代はまだまだ語り手を持っている。

初日の会場で次々に紹介される登山家たちを見て、そんなことを考えた。

この四十年間、多くの優秀なクライマー、ヒマラヤニストたちが、山から帰らなかった。それでも、なお生き残った、優れた登山家たちは、いる。彼らは、ヒマラヤの八千メートル峰に人類がいかに憧れ、挑戦し、目的を達し、新たな登攀スタイルを生み出し、やがて山の環境保護の困難な問題を抱えるに至ったかを、身をもって体験した登山史の証人

たちである。

ニュージーランド人のサー・エドモンド・ヒラリーは、七十二歳になった（以下年齢は、シンポジウム当時）。彼は、一九五三年五月二十九日、テンジン・ノルゲーと共に初めて地球で一番高いエベレストという山に登った、というだけではなく、エベレスト山麓クーンブ地域に二十六の小学校を作り、診療所を開き、植林を助け、燃えた僧院の再建に力を尽くした人間、そして今や「ヒマヤラを汚さないために行動する登山家連合」とでもいうべき運動の中心人物として、知られ始めている。

「九一年の四月、エベレストのベース・キャンプに行った時、八つの登山隊がいた。中には、ゴミを片づけようとしていた隊もあったが、何百人もの人たちが巨大なゴミの使い捨てを生み出した。登山隊は、今や廃棄物を持ちかえることを登山計画の当初から織り込んでおかねばならない」

シンポジウムで、そう語ったヒラリーは、各国の代表的登山家に呼びかけ、一九八九年十月十四日、ＨＡＴ（Himalayan Adventure Trust。後にＨＥＴ＝Himalayan Environmental Trustと改称）を創設、ヒマラヤの保護のための行動を訴えた。

一九五〇年、人類初の八千メートル峰の頂きに立ったモーリス・エルゾーグは、ヒラリーより六か月早い生まれで、シンポジウムに参加した登山家の中で、最年長だ。

「アンナプルナの登頂は、登山家たちに新たな時代を開いたが、同時にネパールという、神秘的で魅惑的で、それまで知られていなかった国を世界に紹介する出来事でもあった。この極めて中世的な貧しい文明が、ネパールを無視し、時には軽蔑してきたもう一つの文明に開かれたことによって、大きな危険が生まれた」

観光客が余りにいろいろ注文して、厚かましくいろいろ要求したことから、観光という概念についてゆがんだ考えが生まれた、とエルゾーグは続け、使い捨てのものをみんな観光客が捨てて登山道を歩いていることにショックを受けた、と語った。

「ヨーロッパ・アルプスやアメリカのロッキー山脈では環境を大事にしてきた人が、なぜこんなに態度を変えるのだろう。この心理、考え方は改めなければならない。それは人間の尊厳の問題です」

一九五〇年エルゾーグを隊長とするフランス隊がアンナプルナに初登頂した時の貴重なビデオ・フィルムがこの後上映された。劇的な登頂と、モンスーンの中、雪崩と凍傷に脅えながらの、あまりにも有名な生還のドラマ。手あかのついていない山で、自然の脅威にさらされつつより良く生き抜こうとする人間の小ささと果敢さが胸をうつ。

二人の年長者が語り終えたところへ、遅れていた三人の登山家が会場に到着して紹介された。イギリスのクリス・ボニントン、イタリアのラインホルト・メスナー、ソ連のエドワルド・ミスロフスキー。

ここで、他の参加者を紹介すれば、シンポジウムの外国からの招待者として既に席についていたのは、次のような人々である。

スイス山岳会員で国際山岳連盟会長のピエトロ・セガンティーニ、アメリカ・ヒマラヤ財団理事長のリチャード・ブラム、アメリカ山岳会自然保護委員会委員長で、九〇年にチベット側から「E3隊」つまりEVEREST ENVIRONMENT EXPEDITION隊を出して、ロンブク氷河周辺の清掃をやった、ロバート・マッコーネル、パキスタン山岳会創立者で、今も会長をつとめるカマール・アリ・ミルザ、第三次インド隊の隊長として一九六五年エベレストに初めてインド人を立たせたインドのモハン・S・コーリ、ネパール山岳協会会長であり、ヒマラヤン・レスキュー協会会長をつとめるテク・チャンドラ・ポカレル、一九六四年、シシャパンマに初登頂した中国登山協会副主席の許競、ブータン政府観光局に十七年勤務、来日四度目のドミニク・シトリング。日本を代表する形で、HAT-J代表の田部井淳子が、これに加わっている。

小休止の後、クリス・ボニントンが、壇上に立った。エベレスト南西壁の登攀を隊長として成功させたこのエネルギッシュだが、静かな登山家はイギリスのナショナル・トラスト運動の活動家でもある。九〇年夏、ナンガ・パルバットのディアミール谷をビデオ撮影のため登っていた時体験した驚きを、彼はスライドを見せながら説明した。

「一八八五年にマンメリーが登って、帰って来なかった時と同じと思われるような壮大な景観が、初めは眼前に展開した。しかし、近づいて見て本当にショックを受けたんです。そこはどこを見回してもゴミの山だらけだったから。その夏だけで八つの登山隊が入ったが、ゴミを置いていくことに何の神経も払わなかった、ただただ無造作に捨てていったような感じだった」

我々がゴミをこのように山に置いたままにして平気でいるとすれば、実は我々は山を愛していないのではないか。そして、ゴミをこのように無神経に捨てていくということは、もっと深刻な問題も軽視してはいないか。そうボニントンは語り、六〇年代、アンナプルナⅡ峰を登るために初めてカトマンズを訪れ、山に入った時の模様を回想した。静かなヒマラヤがそこにはあった、というのである。

自分の住んでいるイギリスの湖水地方を例にとって、受入れ国の対策、たとえば清掃登山がなされたとして、集められたゴミをどう処理するのか、キャンプ場をどう管理するのかなどについても、考える必要がある、とボニントンは言及した。そして、今回のシンポジウムの開催のように登山家同士が協調すること。「山に登り続けるために、今からアクションをとらなければならない。厳しい決定を行わなければならない」

ラインホルト・メスナーは「ホワイト・ウィルダネス」、つまり汚されていない自然の重要さをテーマに話した。

初期の登山家たちは、探検のためにヒマラヤに入ったが、今や高峰は登られ、地形は衛星によって調べることができる。イギリスやドイツ、イタリアに山岳会ができた頃は、誰もが登りやすいように山小屋を作り、マーキングをすることがルールだった。しかし、今は山小屋はこれ以上作る必要などなく、マーキングも要らない、全く逆のことをしなければならない、とメスナーは強調する。

「山で自分たちの内部に目を向けること。内なる心の奥深くに目を向け、山に対して我々がどんなに小さい存在であるか、恐怖心を覚えているか、自分のことを発見すること。外なる探検から内なる探検へと登山の哲学は移っている」

次の世代にもヒマラヤへ行く権利はある。エベレストを何時間で登ったとかで自分の成果をはかるのではなく、どこまで汚すことなく次の千年、次の五千年の人々のために残したかということで成果をはかるべきだ、とヒマラヤ八千メートル学校を首席で卒業した、このクライマーは結んだ。

基調講演をやった四人の登山家の認識は、ほぼ共通している。ヒマラヤのような美しい場所へは、人の出入りをある程度制限すべきだ、ということと、持ちこんだ物は、全て持ちかえらなければならない、という指摘である。その背景には、「先人たちの経験を単になぞっているに過ぎない冒険日誌を作るためだけのために、自然に入っていくのは、いかがなものか」（メスナー）との、手厳しい観察がある。登山家たちの手あかのついた山を同じルートをたどって、登ったとしても、その価値は個人が思う以上に小さいことを知っておく必要がある、と次代に呼びかけたわけだ。

多くの外国人が訪れるヨーロッパ・アルプスやロッキー山脈でのことを別に考えるとすれば、シンポジウム参加者のうち、この四人は、完全に「登る側」に属する。それならば、言わば北京宣言グループと言えないこともない「登られる側」は、どのような考えだったのだろう。

シンポジウムの出席メンバーをもう一度国別に見てみよう。

ネパール、インド、中国、ブータン、パキスタンは、登られる側と言っていいと思う。旧ソ連は、両方の意味があるが、フランス、イギリス、イタリア、アメリカ、日本は、まあ「登る側」である。スイスは、…これも両方か。個々の報告は興味深い内容ではあったものの、基調講演が四人とも、登る側によって行われたのは、シンポジウムが行動者からの呼びかけであったためやむを得なかったとは言え、少し寂しい事であった。

山岳を抱く国として、ポカレル・ネパール登山協会会長の話を聞いてみたい。シンポジウムは、二日目は「高所登山」「トレッキング」「山岳観光」の三つの分科会に分かれて進められたが、ポカレルは「山岳観光」の場でパネリストとして、受入れ国で起きている問題について率直に語った。

ヒマラヤ地域の公害が問題となったのは、一九八二年、国際山岳連盟（ＵＩＡＡ）の会議がカトマンズで開かれた時だった、とポカレルは言う。八六年のミュンヘンでの会議でもこの問題は取り上げられ、やがてＨＡＴの創立となってゆく。

ネパールの山々の現状は、どうか。サガルマータ（エベレスト）に関して言えば、最初の登山隊が入ったのは、一九五二年だった。以後九一年春までに百二十七の登山隊が繰り出した。ポカレルたちの推測によれば、一つの隊が四百キロのゴミを残しており、総量は五十トン以上に上る。

金属屑、酸素ボンベ、ＬＰＧボンベ、医薬品、トイレットペーパー、プラスチック製品といったさまざまなゴミが、そのまま放置されている。そのうち、鉄製品は九十年かかって分解する。プラスチックは二百二十年、アルミ缶は四百九十五年かかり、ガラスに至っては百万年ももつという。

おまけに多くのゴミは、氷河の下に埋まってしまい、すぐには出てこない。「我々の推測では二隊の登山隊が清掃をしても二年間で十六トンぐらいしか処理できない。費用も五十万ドルはかかる。しかし、行動を起こさなければならない」

山々を全てきれいにするためのコストを考えると、ネパール・ヒマラヤ地区の山の入山を全て禁止した方がいい、とさえ考えられるが、それでは問題の解決にはならない。最高峰には、皆が登りたいと考えるからだ。一つの方法として、ネパールに来る人々全員にゴミ袋を渡すという、ドイツ山岳会の始めたキャンペーンを、ポカレルは紹介した。

「説明書には持って入ったものは、全て持ちかえる、カトマンズではなく、ミュンヘンやフランクフルトまでだ。この考えは、いいと思う。ヒマラヤは皆の普遍的財産だから」

勿論、登山全面禁止となれば、ネパール側にも被害を受ける者たちが出ることを、もともと登山家というより旅行代理業者であり、ネパール旅行代理店協会の会長を兼務するポカレルは、よく知っているだろう。

「登る側」「登られる側」と言っても、内実はさまざまな立場があり、単純に二つに色分けするだけではむしろ事実

を見失うかもしれない。ポカレルにしろ、コーリにしろ、外国登山隊との交流に貢献しつつ、自分のビジネスの世界を築き上げた人である。その地域に戻れば、別の立場が待っている。

ところで、ポカレルの指摘したエベレストの賑わいは、九二年五月十二日、あらためて証明された。この日一日だけで、東南稜から各国の五隊三十二人もの登山者が登頂したのである。

地球最高峰のてっぺんに三十二人目の人間が立ったのは、ヒラリーたちの時からちょうど二十年経過した一九七三年春のイタリア隊の時だった。その二十年分を、たった一日でやってのける時代となったのだ。

ネパール観光省は、さすがに対応策を考えていたようだ。あるいは、五月の出来事に対策を急いだのかもしれない。エベレストへの入山料の大幅上げと一ルート一隊の規制、隊員数の規制、そしてネパール国外へのゴミ持ちかえりの義務化を七月になって発表したのである。

ゴミを持ちかえる、ゴミをおろす行為については、「高所登山」分科会でのアメリカのロバート・マッコーネルの報告が印象的だったので紹介したい。マッコーネルは、八七年、十五名から成る登山隊のメンバーとしてチョモランマに出掛けた。うち五名は女性で、隊の目的も「アメリカ女性を初めて最高峰の頂上に立たせること」だった。

目的は頂上直下まで行きながら達成できなかったが、帰国後女性隊員の一人と結婚したマッコーネルは、妻と再度チョモランマへ行くことを決めた。現地で見たゴミの山が忘れられなかったからだ。九〇年、七人のチョモランマ清掃登山隊を組織、チベットに向かった。

ベースキャンプに石のゴミ貯蔵所を作り、上部から計二トンのゴミをヤクに背負わせてそこまで下ろした。トラックを一台寄贈し、そこから先シュガールという町まで運んでもらうこととした。シュガールにゴミ捨場を掘り、そこへゴミを集めた。子供たちがやって来てゴミのリサイクル、つまり使えそうなものを拾い出し始めた時、マッコーネルたちは自分たちの考えていたことが実った、と喜んだが、すぐトラクターが来て、ゴミ穴を土で埋めてしまった。子

供たちの手でゴミが再利用されることを喜ぶアメリカ人に対して、チベット人たちはそれをいいことと考えなかったのだ。

マッコーネルは、今後もチベットへ出かけ、環境問題のために自分の労働力を提供するつもりだ、という。

「この四十年間、我々登山家は、勝手に山へ入る自由を享受してきた。自分たちにチャレンジしてきた。肉体的、精神的高揚を求め、山の美を求めてそこへ行った。しかし、その後に残ったのは、ゴミ伝説だ。世界で最も遠い地、最も美しい、最も聖なるところにゴミを残している、という伝説を残した。もはやこれを許容できない。ただ信じるのは、こういう会議で、メスナー、ヒラリー、ボニントンといった人たちの話を聞いて我々が山で何をしなければならないか、気がつき始めた人が出てくるということだ」

自分で汗をかいた人間として、マッコーネルの話には説得力があった。彼は、もう一つ重要なことを言った。

「本当の危機はゴミではない。本当のヒマラヤの危機は人口の過密と森林の破壊だ」

ただ、その問題を解決するほどには自分は頭はよくない。まずゴミの問題から片づけよう、と考えて始めている。そう、コルラド・スプリングスで法律事務所を開くこの元気な登山家は結んだ。

マッコーネルの指摘する人口の過密が、環境問題にとってどのように重大な関わりを持っているか、は、言をまたない。そして、人口問題と関連してエネルギーをどう調達するか、という問題が生じる。「トレッキング」分科会では、この問題が具体的に話し合われた。

まず座長をつとめた北海道大学大学院環境科学研究科教授・小野有五がネパール・ヒマラヤのランタン谷にミニ発電設備を作った話を報告した。

八一年ランタン谷の氷河調査に行って三か月滞在した際、村人が自分たちのために木を伐っているのを知り、罪悪感を覚え、日本に帰って「ランタン・プラン」という組織を作った。

「何とか村の人たちのために木を切らないでいいような技術を伝えたい」と、塩化ビニールのパイプと発電機を持っ

て行き、ごく簡単な発電をやることができた、という。薪に代わるほどのエネルギーではなかったが、村の人の技術でできた、という点で貴重な試みだった。

この分科会に出席したエドモンド・ヒラリーは、このことに関連して、現地の人々に技術的支援を与えることがいかに大事であるかを、強調した。ただ小型の水力発電では時によっては不十分だ。

「多くの場合、発電をして村人たちの光源にするということで、調理用ではない。これが問題なんです」

シェルパたちが夜更しをするようになって、結局薪を燃やして暖を取る、ということが多いのだそうだ。木を伐採させないために、考えた技術援助が、かえって環境破壊を助長することになりかねない。

だから、小さいと言っても、やや大型にして調理にも暖房にも使えるぐらいのものが望ましい、というのだが、そのことについては、リチャード・ブラムの報告も聞く必要がある。

八一年カンシュン氷河源頭からエベレスト東壁に挑んだアメリカ隊の総隊長をつとめたブラムは、銀行家であるとともにネパール、ブータン、インド北部、チベットなどで医療、教育、植林、文化保存の四つの仕事を進めているアメリカ・ヒマラヤ財団の理事長でもある。

ナムチェバザールに近い有名なタンボチェ僧院でラマ僧たちが毎日薪取りに追われていることを知り、六十八か月かけて水力発電システムを完成させた。二十四時間発電が可能な設備で画期的な成果であったが、問題は、僧たちが電気に慣れていないことだった。

「台湾製のヒーターが人気となって、僧院の中で使われ始めた。カトマンズでお葬式があって僧たちが出かけた時、近くにあった燃えやすいものに火が飛び、大きな火災となってしまった。僧院と学校も全焼してしまったのです」

火の管理について知らなかった人たちがヒーターを使うようになれば、こういう事態は今後も起こり得る。技術援助の隙をつかれた事故だったと言えるかもしれない。

ナムチェバザールについては、京都大学医学学術研究計画で現地調査を続けている中央大助教授・古川彰が、植林、

水道と電化プロジェクト、ゴミ掃除の問題に分けて報告した。ヒラリーがシェルパの人々をニュージーランドに招いて森林保護官の教育を受けてもらい、「ウオーデン」という身分となった専門職員が中心となって植林活動を続けていること、九三年以降、電気の二十四時間供給と各家への水道供給が始まるが、排水処理プロジェクトとセットになっていないため、かなりの水汚染が心配されることなどが、伝えられた。

三つの分科会で語られたことの全てを今書くスペースはない。以下、何人かの参加者の言葉をアトランダムに紹介する。

まず、激動する旧ソ連を代表してやって来たエドワルド・ミスロフスキー。ソ連山岳連盟会長をつとめる五十四歳。八二年のエベレスト・ソ連隊で南西壁の新ルートを開拓、自らも頂上に立っている。八九年には全ソ隊を率いてカンチェンジュンガに行き、西峰と南峰の交差縦走を成功させた。シンポジウムでは「高所登山」分科会に参加した。

ミスロフスキーによれば、旧ソ連の山々での環境保護の意識は最近まであまり高くなかった。たとえば、パミールでは、ヘリコプターで登山者を輸送しているが、包装資材、建築材、その他の廃棄物が無造作に氷河のクレバスに捨てられている。

さらに、ソ連の解体と各共和国の独立で、山自体がそれぞれの共和国の管轄となったため、まず中央であるロシアと各共和国の間で山岳環境保護をめぐる新たな協力体制を結ぶことから始めなければならない事態となった。

無論、ヒマラヤにも何隊も出かけているので、環境問題についての認識はあるが、国内問題の困難が大きく、それどころではない、というのが本音のようだった。

ただ、一登山家として、またラジオ技術を専門とする科学者の一人として、ミスロフスキーは、筆者との雑談の中でこんな意見を述べた。

「本当は、ヒマラヤだけの問題ではないと思う。自分たちが今いるこの場所から始めなければいけない。たとえば、

今回ここに集まった登山家たち、ヒラリー卿にしろ田部井さんにしろ、メスナー氏にしろ、エベレストに登ったことで何かを得た人たちで、今そのお返しをしたい、と考えているように見える。だから、サウスコルのゴミが気になるのだろう。八千㍍のゴミは、無論良くないことだが、科学的には冷凍庫にあるようなものだから、さほど危険ではない。むしろ山麓の、生態系を変えてしまうような汚染が私は心配だ」

ブータンから来たドミニク・シトリングは、「山岳観光」分科会で、「ブータンには毎年二千人の観光客、トレッカーが訪れているが少しずつ受入れ体制を整備して九五年までに年間四千人としたい。しかし、それ以上は収容できないだろう」と語った。人口百三十万の小国が、徹底的に入国者を制限する方法で環境を守ろう、としている事を、私たちはあらためて理解しておくべきだろう。

インドのコーリは、インドでの登山状況を説明した後、文化的風土を守る事の重要さについて言及した。「物乞いに無闇に金をやってはいけないし、写真もむやみに撮ってはいけない。服装についても考えるべきで、たとえば、川で裸になって泳ぐようなことも、現地の人のひんしゅくを買うということがある」

スイスのセガンティーニは、スイスの地元民にとっては山岳地帯そのものが、第一次資源であり、そのために観光政策と自然保護が戦略的に進められていると発言、ヒマラヤにしても、住民にとっては、山が第一次資源であることは同じだ、と述べた。

また、国際山岳連盟の会長として、メディアを通じた環境教育、山岳環境について高い認識を持ったトレッキング・エージェントの育成を強調した。

メスナーは「高所登山」分科会で、富士山に登った時の印象を「世界でも私の見た最も汚れた山の一つだった」と明言し、日本人は日本でこそ第一歩を踏み出せる筈、と述べた。また、南極大陸横断したときの梱包、包装について具体的に語った。南極に何も残してこないように食糧は全てゼラチンに封じ込んだものを持っていったという。ゼラチンはそのまま凍って缶代わりになるし、後でスープに入れれば溶けてそのまま飲んでしまえる…。

東京での二日間、そして富山会議でも、どのパネリストも、真剣だった。登山家の連帯は国際的な規約の裏付けがあるわけではないから、こうした会議のような場が、唯一と言ってもいい発言の機会、あるいは作業の場と考えるからだろう。

シンポジウムを通して出た議論の一つに、「土地の人々に学ぶ」という考えが強調されたことを、最後に付け加えたい。

これまで、登山する側は、資金を用意して土地の人々を雇用し、自分たちの価値観を地元の人々にまで押しつけることが少なくなかった。しかし、一体、土地の人にものを教えることなどできるのだろうか。そんな議論だった、と思う。

山に入る人も、そこに暮らす人も、互いに学び合う。そうした発想でやれば、山々の静寂、美しさは保たれるのではないか。「先進工業国」対「開発途上国」の図式ではない、山を愛する人間の新たな連帯が、生まれはしまいか。

「山岳環境保護国際シンポジウム・東京会議」は、日本山岳会、日本山岳協会、日本勤労者山岳連盟、日本ヒマラヤ協会の四団体の共催で行われたが、そのこと自体これまであまりなかったことらしい。日本の山の世界にとっても、何かを学び合ういい機会であったようだ。「山登りをする人たちは、今山岳クリーン問題と取り組んでいる、と思う。トレッカーや観光客への啓蒙運動は必要だが、規制が行き過ぎて、登山者が登山者の首をしめるようなことはやるべきではない」と、日本ヒマラヤ協会の山森欣一は、会議の感想を筆者に語った。

ロシア語通訳を手伝う役まわりもあって、筆者は東京、富山と行動を共にして、公式、非公式に、登山家たちのナマの声を聞くことが多かった。ヒラリー、エルゾーグ、ボニントン、メスナーほか参加者たちは、東京シンポジウムの開催とその運営ぶりを、お世辞でなく評価、感謝していた。仕事で必要なのは、汗をかく人である。一部で単なるお祭り騒ぎではないのか、と声もあった、と聞くが、田部井淳子はじめ事務局の踏ん張りは、無茶もあったにせよ、

相当なものであり、一つの困難な登山に匹敵することをなしとげた、と言っていい、と思う。富山の友人たちがそれを支えた。

九二年八月、メスナーが「世界一ゴミに汚された山」と指摘した富士山で、インド、ネパールの少年少女たちを招いてHAT-Jによる清掃登山が行われた。ネパールから来た一人は「山頂にも、機械があるのでびっくりした」と感想を書いた。清涼飲料の自動販売機のことだ。

日本から年間千万人を越える人々が、毎年海外へ行く。強い円のおかげで、日本人はアジアの中でも、格別に頻繁に地球を見ることのできる立場になった。登山やトレッキングも、その大事な部分だ。しかし、地球を見る旅から私たちが学ぶものがあるとすれば、ミスロフスキーの言うように、ヒマラヤだけではない、身近な暮らしからまず疑問を発する必要があるように思える。

マッキンリーの烈風

―「風」の実体解明のための第三次観測機器設置登山隊の報告―

大蔵喜福

日本山岳会では科学研究委員会が中心になり、冬期高所山岳における気象遭難について、悲劇を繰り返さないための気象知識を学ぶ研究会や、多くの登山者に知識を広めるためのシンポジウムを開催してきた。非常に有効な防止策であり、また登山界のオピニオンリーダーとして相応しい価値ある行動として評価されている。しかしながら、一番知りたい情報である厳冬期の山岳（国内及び国外）における現場の気象状況は全く不明である。サテライトをはじめとするハイテク機器が幅を効かす世の中において、人力のみに頼る天と地の境目での調査が一番遅れている。観測機器自体も改良もしくは新しく製作しなければならず、大変である。また実体解明に必要な山中に観測点がほとんどなく、長期観測した有効なデータも非常に少ない。とくに高所厳冬の気象遭難の主因とされる「風」に関してはその実体はほとんどわかっていないのが現状である。

今、世界のアルピニズムは様々な変遷を経て、よりシンプルに、より厳しい真の「冒険的登山」に戻ってきている。高峰無酸素登頂、スピード登頂、単独登頂そして厳冬期登頂と止まりを知らない。ヒマラヤニストに限らず極地探検を志す冒険者にもあてはまる潮流とも言え、この動向は、現場の気象に関する正確な情報をいかに把握するかという

必要性がますます高まっていることを示している。なぜなら気象は、冒険の成否そしてアクシデントをも左右する重要なファクターだからである。

私が高峰での気象観測を思い立ったのは、十年前の一九八二年十二月、エベレスト登頂後消息を絶った加藤保男、小林利明両氏の遭難時であった。とくに加藤氏は山岳会の先輩であり、翌年冬には私自身がチョモランマ北壁登山を控えて、登頂を成功させるために厳冬期のヒマラヤの風を調べていた事情もあったからだった。当時から「烈風」が問題視されていて、現場では一体なにが起こったのか、どのような気象条件だったのか、「風」というとらえどころのないものへの恐怖心とともに、実態をぜひ知りたいとの思いから調査方法を模索し始めた。

そこでまずヒマラヤ周辺の高層気象データより、風速・風向・気圧・気温の数値を過去十年間分収集し、そのデータをベースにどんな風が吹き、また強風下で人間の行動はどう制約されるかを調べた。

データの分析においてはグラフを作成し、理論的とは言いがたいが周期説など稚拙な試行錯誤のすえ、ベースキャンプなど下部での気温・気圧の測定値が上部と相関関係にあることが分かり、ここに解明の糸口があるのではないかと気付いた。

三〇〇ミリバール（約九四〇〇メートル）の気温・風速、五〇〇ミリバール（約五六〇〇メートル）の気温・風速のグラフを比較すると、少しずれがあってグラフが対応した。地表の観測結果から高所の天候を知ることも不可能ではないと考えられた。

簡単に結論を記すと、八〇〇〇メートルの風を予測する場合、ベースキャンプ（例えば五〇〇ミリバール気圧面地点）での気温・気圧の変化を細かく測定しグラフにすると気温の数値は悪天・強風になる四日から一日前の間に徐々に下がって、その後急激に気温・気圧とも上昇していく。その後数時間から一日の間に上部で強風が吹くというパターンが分かった。この方法を実際に私が参加した冬期チョモランマ・エベレスト登山隊で用いたところ、推定した通りの結果がでて登頂に非常に役立った（カモシカ同人隊八三年十二月十六日冬期第三登）。

しかしこの理論はサンプル例が少なく確信にはいたっていない。そこでぜひ現場での実測データが欲しいと思い

たったわけである。実測のデータと高層のデータがほぼ同じならば高所厳冬の気象を立体的構造で局地的に予測できることになる。ヒマラヤなどで数多くのサンプル測定をとっていけばより確かなものになるはずと確信した。

つぎに風によって惹起される人体への物理的な影響はどうなのか、八三年六月に風洞での実験を行なった。一気圧の平地における人間の起立限界、耐風限界はつぎのようになった。三三㍍／秒で呼吸がしづらくなり、ピッケル確保等耐風姿勢をとらないと立っていることが困難となり、三五㍍／秒では行動は不可能だった。

この数値から計算すると、エベレスト頂上では五二・九㍍／秒、マッキンリーの場合は四三・八㍍／秒（五五〇〇㍍地点）が耐風限界値となる。高層データでは加藤隊遭難時の頂上付近の風速は七〇㍍／秒、山田隊の時は三九㍍／秒が記録されている。頂稜を抜ける風は一・三倍に加速される（実験値）から乱気流に巻き込まれたとすればひとたまりもないと想像できる。この実験を踏まえて高層のデータや計算からでない実際の「烈風」を捕らえてみたくなった。以上二つの理由がこの観測を始めた動機である。

どこかの高山で長期観測ができないものかと考えていた矢先、世界屈指の登山家として将来を嘱望されていた山田昇、小松幸三、三枝照雄の三氏が一九八九年二月下旬、マッキンリーで遭難死するという悲劇が起こった。それ以前の一九八四年二月に起こった植村直己氏の遭難も記憶に新しい。「成功した」と無線連絡をしたあと消息を絶った植村氏は以後行方不明のまま、山田隊の三人はデナリ・パス直下で遺体となって発見された。植村氏が最後に確認された地点もその近くだった。

この二件の遭難の原因が何なのかは推測の域をでないが、山田隊の発見された状況から、強烈な風に吹き飛ばされ滑落したものとみられ、植村氏も同様の運命を辿ったものと推定された。主因は「風」という気象遭難説が有力となった。

マッキンリーといえば、天候の安定している五、六月のシーズンには毎年約千人の登山者をむかえる人気の高い山であり、日本人にとっても手軽？な高所登山の対象と考えられていただけに、二つの遭難事件はこの山の恐ろしさを

再認識させるものだった。四名は超一流の登山家で岳界に与えた衝撃は多大であり、「風」に対する認識が高まってきた。特に山田等は共にヒマラヤで苦労した仲間であり、このアクシデントが計画の実現に拍車をかけた。

しかし、実際のところ登山行動中に「烈風」をどう察知し、対処したらよいかの方法は残念ながら確立されていない。有効なデータがあれば気象遭難の解明に随分と役立つ筈であり、その実態を探ることは「厳冬期高所登山成功」の鍵でもある。

そこで観測対象の高峰をマッキンリーに絞った。何故マッキンリーなのかは現実に起こった遭難を分析したいという思いと、この山の立地条件だ。北緯六三度に位置し標高六一九四メートルという極北の独立峰マッキンリーは、五〇〇ミリバールの指定気圧面高度を他の山群と比較すると冬期で最大一〇〇〇メートルほど低く、気圧の面からみると実際の標高よりはるかに高い山になるという特異な気象条件をもつ。また低気圧の墓場といわれるベーリング海から吹き込むジェットストリームにより、冬期は「凍る魔の山」に一変し、極北特有の過酷な気象状況をも観測できるという場所でもある。烈風は七〇メートル／秒を越し、気温はマイナス七〇度Cあるいはそれ以上の極悪な気象を観測できるというわけだ。そのうえ、ヒマラヤと異なり設置および機器の回収が容易な点も見逃せない理由のひとつだ。いうなればヒマラヤ七〇〇〇メートル峰クラスの計測を比較的楽にできるといった好都合な山なのだ。

第一次登山隊は一九九〇年四月デナリ国立公園に設置許可を申請し、五月初旬許可を得た。六月二日出発し翌三日より登山活動に入り、十七日登頂後デナリパス上部五七一〇メートルの岩峰上に無事自動観測機器を設置することができた。このプランには現地アラスカでもデナリ国立公園レンジャーをはじめ気象台関係者、アラスカ大学の気象学者などから好意が寄せられ励まされた（設置許可は一年間ということで次年度回収する）。

長期にわたる風速・風向・気温などの自動観測が果たして成功するか一抹の不安は残ったが、第一歩を踏み出せた喜びは大きかった。

第二次登山隊は、九一年六月二十六日設置点に到達した。しかしセンサーの支柱が倒壊しており唖然とした。半永

久的な固定は好まないという国立公園側の要望とはいえ固定方法が甘かったと、惨憺たる姿を見て悔やんだが後の祭りだった。失意のうちに記録装置を回収し、登山活動を終了。国立公園局に報告し九二年度の設置について話し合いを持った。五年間は観測を続けたいことと、設置方法を強固にすることで次回の承諾を得てきた。

帰国後、記録装置は立派に一年間作動していたことがわかり、望外の喜びとなった。肝心の冬期の風を捕らえることはできなかったが、外気温度と記録装置内気温は無事記録されていた。風速計の倒壊は九〇年十一月二十二日で、それまでの最大風速は約六三㍍／秒、倒壊の直接の原因はワイヤーの切断二本と、固定用ハーケン一本が外れたためだった。ワイヤーを持ちかえり調べたところ、破断の原因はあらゆる方向からの突風が衝撃荷重をあたえ、疲労破壊にいたったことだった（使用ワイヤーは一㍉径、破断荷重三六六㌔のもの八本）。このような反省に立って再度の設置は堅牢にする方針に決めた。センサーも完璧に破壊され、九一年度の観測が不可能になってしまったことは誠に無念だった。

年間計測ができた外気温度は、マイナス五〇度C以下になった日がのべ二八日間あった。そのうち五割の一四日間が十一月に集中し、次が二月の一〇日間だった。最低気温は二月三日午前七時のマイナス六〇度C。高度差から計算するとマッキンリー頂上ではマイナス七〇度C前後になる。

一九八三年七月二十二日にマイナス八九・二度Cという世界最低気温を記録した南磁軸極（南緯七九度、東経一〇九度）にほど近いボストーク基地との単純な比較はできないが、マッキンリーの環境は地球上で人が到達できるポイントのなかではおそらく最上位にランクされる寒冷地であることに違いはない。

風についてはセンサー倒壊前のデータに最大瞬間風速六三㍍／秒が記録され、五〇㍍／秒を越えた回数が一〇回ほどあった。しかし、センサーの調子が悪くデータの信頼性に疑問が残るが、このような風が冬ではない六月から九月にかけてあったことは驚きにあたいする。マッキンリー西方マグラスと東方アンカレッジ気象台の五〇〇㍐高層気象データを調べると、同時期に相応な風が吹いている。マグラスでは南西の風六〇から七五㍍／秒、気温マイナス一〇

度C前後だった。

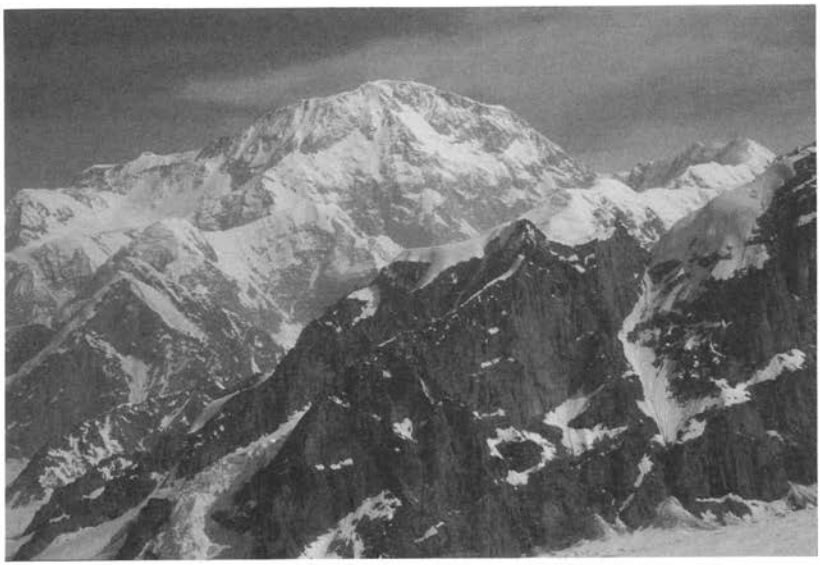
最初のステップは一応成功したといってよいと思っている。第三次隊の展開については前回の失敗とくにセンサーの支持台を強固なものに改良することと、センサー、自動記録装置をともに新たに考え直した。支持台は四本の支柱からなる四角錐型で、上部および中部に水平に十字型の支柱を渡したものにした。留意した点は、軽量であること、建設しやすいこと、十分な強度を持つことの三点である。素材は三二ミリ径のアルミパイプで厚みは三ミリ、接合には現場で臨機応変に位置を調節できるようにUボルトを使用。下部はスコープタイプにし支柱の長さを現場の地形に合わせられるように設計。固定方法はボルト及び三ミリ径のワイヤーを使用することにした。

センサーは前回のプロペラ型が極端な風向変化に対し反応が鈍いことと重量が重いことを考慮し、今回は三杯型アナログ・パルス両出力風速計・矢羽根型ポテンショメータ式風向計（着氷対策・特殊塗装セラミック）に変えた。地上一七〇センチおよび四五センチの高さにそれぞれ一組ずつ設置するよう設計した。また支持台の上・中・下三箇所に電気抵抗温度計を設置。さらに、気圧計（シリコン・容量式圧力センサー）および電気抵抗温度計を記録計機器ＢＯＸ内に設置することにした。

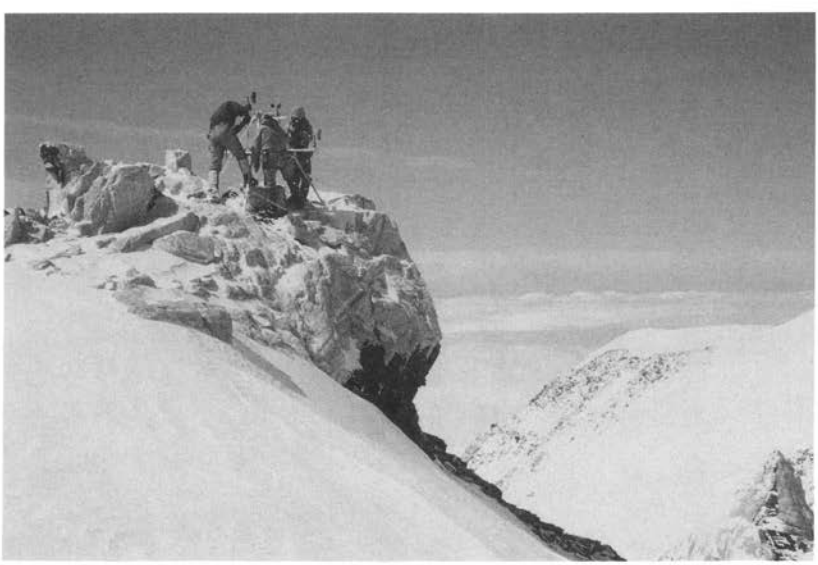
自動記録装置（データロガー）は前回の四倍の記録容量を録れるように四台に増やすなどシステムを改良した。測定内容は瞬間最大風速、瞬時風速、平均風速、風向、気温、気圧、記録機器内部温度である。必要な記録インターバル（一〇分、三〇分、一時間）で一年間充分に測定できる。

センサーのそれぞれ二個設置は、故障に対応できるように冗長性を持たせた。データロガーに関しても同様に二つのロガーで同じデータを録るようにし、一つが故障してもデータのバックアップが出来るようにした。

なお、測定機器はデータロガー以外はすべて特注品で、それぞれ耐風性、耐寒性を考慮してある。観測システムに関するものは全てマイナス五〇度C程度の低温特性試験を済ませている。参考のため、各機器のメーカー名を付記しておく。センサー類は牧野応用測器研究所、データロガー、電源等は白山工業、支持台は飯田製作所に依頼した。



南面よりのマッキンリー全景



東より見た設置点（5710 m）と作業の様子

以上の機器を完成させ、隊は本年六月六日マッキンリーに向かった。七月一日までの二六日間の行動内容は以下の通り。

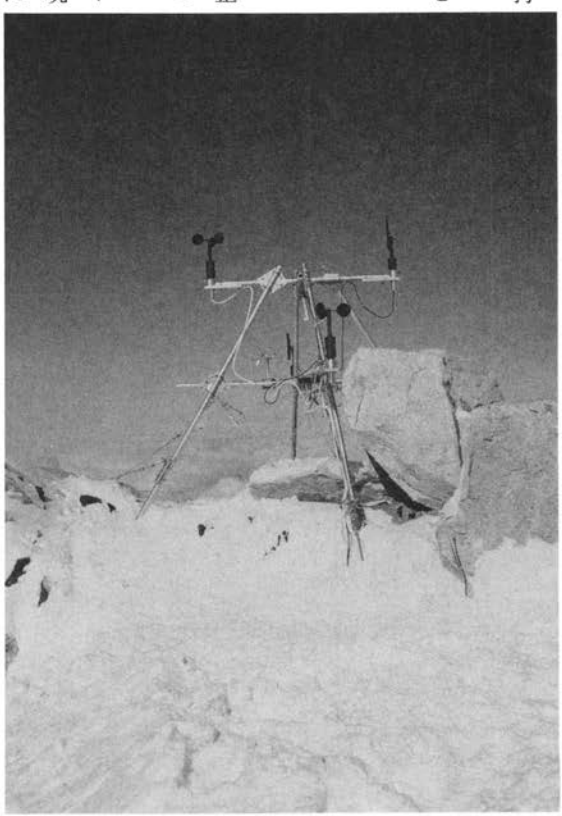
六月　六日（土）　成田発。七日（日）午後アンカレッジ到着
八日（月）　アンカレッジ―タルキートナ＝ランディング・ポイント
九日（火）　ランディング・ポイント～二三一〇メートルに移動
十日（水）　二三一〇メートル～三一〇〇メートルに移動
十一日（木）　ＢＣに荷上げの予定も悪天候のため三八〇〇メートルにデポジット　三一〇〇メートルよりＤＣ（三三〇〇メートル）へ移動
十二日（金）　三八〇〇メートルのデポジット装備をＢＣへ荷上げ
十三日（土）　ＤＣ（三三〇〇メートル）～ＢＣ（四三〇〇メートル）に移動
十四日（日）　休養停滞
一五日（月）　ＢＣより四九五〇メートルへ荷上げデポジット
十六日（火）　ＢＣ（四三〇〇メートル）～ＨＣ（五二五〇メートル）荷上げ移動
十七日（水）　四九五〇メートルのデポジット品を回収（逆ボッカ）
十八日（木）　休養停滞
十九日（金）　悪天候のため停滞（設置機器準備）
二十日（土）　設置作業一日目　設置点五七一〇メートルに荷上げし作業
二十一日（日）　悪天候のため停滞（ＨＣ）
二十二日（月）　設置作業二日目　登頂
二十三日（火）　ＨＣ～ＢＣ

二十四日（水）　BC～ランディングポイント
二十五日（木）～二十七日（土）　ランディングポイントでフライト待ち（二十七日は火山噴火のため火山灰降る）
二十八日（日）　ランディング・ポイント＝タルキートナ―アンカレッジ
二十九日（月）　荷作り、帰国準備
三十日（火）　アンカレッジ発

七月　一日（水）　成田着（午後三時）

＊1　日時はいずれも現地時間
＊2　前記の記号は次の意味を持つ
～徒歩、―自動車、＝セスナ機
HC　High―Camp　BC　Base―Camp
DC　Deposit―Camp
各キャンプの名称は正式名ではない（便宜上つけた通称名）

今年度は天候が悪く、マッキンリー周辺では過去最悪の死者（七月一日現在で十三人）が出た。私たちも悪天に



改良し強固に設置された測定機器全景

阻まれ、当初より予定が多少長引いたものの観測機器の設置および四名全員登頂に成功した。観測機器の設置はデナリ・パスより約二〇〇㍍上、標高五七一〇㍍の登山道より少し離れた（約三〇㍍）地点にある岩峰上にて行った。設置は当初の予想より困難で手間取り、二日間かかったものの、かなり頑丈なものを組み上げることができた。

総重量二四〇㌔で各自六〇㌔の荷上げは相当こたえたが、プランどおり遂行することができ満足している。

また、組織は次のとおりである。

・実行委員会（マッキンリー気象観測機器設置登山隊プロジェクトチーム）＝科学研究委員会担当理事大森弘一郎、同委員長徳久球雄、同委員会各委員

・隊の構成＝大蔵喜福（隊長・渉外・資金）、千葉信一郎（機器製作）、中村真（機器製作）、田中清隆（装備・食料）、ソロモン・ハロルド（渉外・BCマネージャー、ランディングポイント滞在）

・本部＝大森弘一郎（統括・指揮）、徳久球雄（科学研究委員長）、長谷川厚志（機器製作リーダー）

私たちの考案した極地とくに高所山岳における無人気象観測システムは、毎年回収のため登山しなければならないので、これから一年間の測定結果は来年の登山までお預けだ。だからいずれはトランスポータ方式を用いて直線で約一〇〇㌔離れたタルキートナのレンジャーステーションでリアルタイムにデータが見られるようなシステムを確立したいと考えている。現在、多くの協力者を得て鋭意進行中である。幸い地元アンカレッジの気象台の協力も得られそうなので今後が楽しみである。

三年の間に私たちの行動は現地でも注目されるようになり、関係機関も非常に協力的で、なかには寄付を申し出てくれる有り難い人も現れるなど理解が深まってきた。日本山岳会内でも今年は海外登山基金補助金を頂き、新たに青年部・学生部の協力も得られ、強力な隊を組むことが出来有り難く思っている。登る側からの科学的な究明という使命を多くの会員に理解、認識して頂くきっかけともなった。少なくとも五年間は記録をとりたいので、現在も科学研

究委員会の委員をはじめ、多くの協力者を得て取り組んでいる。今後は、気象専門家および科学者と登山家が結集して、極地用自動気象観測機器の開発、予測の精度向上、地球規模の大気汚染観測までの展開も見据えて、計画を進めていきたい方針である。

費用捻出が一番の問題なので、会員各位によい知恵をいただければ幸いである。ご協力ご支援を切にお願い申しあげたい。最後になったが、機器製作において多大なご支援、ご協力をいただいた白山工業㈱吉田稔氏、小林正幸氏、㈱牧野応用測器研究所牧野章汎氏、牧野良誓氏、飯田製作所飯田信次氏に本誌上をかりてお礼を申し上げたい。

登山の新しい分野としてのスポーツクライミング

―ワールドカップ・東京大会を開催して―

神崎忠男

一九九一年十月十六日から二十日まで東京・代々木公園において日本ではじめてのワールドカップが開かれた。四方を海に囲まれ、ヨーロッパからも、アメリカからも遠い国、日本での大会に参加する選手はいるのだろうか……大会運営の以前に選手来日が心配される程に初歩的な問題をかかえてのワールドカップ開催であった。

日本の登山界のなかにもそろそろフリークライミング論がまとまりつつある時期を迎えようとしていたところで、思い切って開催に踏み切り、ワールドカップ大会を実現させたことはスポーツクライミングを定着させるに最も効果的な方法であり、登山界の新たな分野として認められる上に大きな進展をみた。

以上のようにワールドカップ日本開催は唐突ではあったが、それなりの背景があっての開催でもあった。スポーツクライミング競技種目をオリンピックに参加させるには、アジア、アフリカ、南米での国際大会、ワールドカップ大会開催を実現させなくてはならない。その対策に応えて日本での開催決定をした。スポーツクライミングはすでにヨーロッパでは一つの競技として定着し、若い人たちの人気もなかり高いものになってきている。

登山の岩登りのエキスを競技化したこのスポーツクライミングが、オリンピック競技種目参加への可能性をうけ、

国際山岳連盟（ＵＩＡＡ）は新しい委員会を設けて普及と振興をはかった。オリンピック種目への道は、より多くの競技者、競技国そして、多くの大会開催の実績が必要であり、国際山岳連盟では、アジア、アフリカ、南米の地域における大会開催に力を入れはじめ、そして一昨年、香港においてアジア地域における岩登り競技委員会（ＡＣＩＣＣ）を発足させた。香港が議長国を受け、日本、中国、中華台北、韓国、マレーシア、シンガポール、イランが会議に参加、当然、インド、ネパール、タイ等、アジア全域にわたる組織づくりをしていなかければならないが、アジア山岳連盟もまとまらないなかで、スポーツクライミング部門のみがまとまることも困難をきわめ、競技大会参加に関心の高い国のみが集まったというのが現状である。しかしながら、国際山岳連盟はアジア岩登り競技委員会の発足に期待も大きく、会議における役員の派遣はもとより、ルートセッティング、ジャッジ等の研修会開催、指導者、講師の派遣に積極的な姿勢を示し、昨年からは年二回位、アジアのどこかの国で研修会を開くという方策を打ち出した。

世界的クライマーの養成を早急に

日本に於いても一九九一年ワールドカップ東京大会を開催するに当たり、国際山岳連盟からイタリアのマルコ・スコラリー氏が派遣されて、一九九一年二月、約一週間にわたりジャッジ研修会が開かれた。アジア各国より二人から三人の参加者が集まり、日本からも五名ほどの受講応募があったが、日本での事情からどうしても語学の壁が破れず、準公認の資格者が一人にとどまった。この研修会での公認資格を得たのは韓国から一人と厳しいものであったが、ペーパーテスト等総合面で合格することの難しさはあっても、競技大会実施に伴う実力の面では、日本のレベルの高いことを確認することが出来た。すでに、日本フリークライミング協会での実績も高く評価されるところがあるが、このスポーツが新しい分野であるだけに、登山界全体の考え方や活動において、各組織・団体の足並みが揃わないところがある。しかし、どんなスポーツも初期においては困難もあり、これを乗り越えて本物になるものと信じる。スポーツクライミングを愛する人たちが、一生懸命になって普及、振興に取り組み発展させることが大切で、日本における今がその時期と受け止めている。

しかしながら、日本ではまだまだ、ごく一部の人たちのスポーツとしてしかあつかわれておらず、登山界においても賛否両論がある。特に年配者には、自然環境にふれあわないアクロバット的なクライミングは登山精神からも好感のもてるものではない、という受け止め方があるようである。一方若い人に聞くと、ヒマラヤ登山を見てもすでにピークハンティングの時代は終わり、より困難なルートからの登攀、登頂がこれからの登山の傾向であることをみるとき、フリークライミング術や、スポーツクライミング的トレーニングは当然必要であり、フリークライミングを認めずしてこれからの登山を語るのはナンセンスである。だいたい最近は登らずして登山家ぶっている人が増えたようにもみうけられるという若者なりの答えが返ってくる。それぞれのいろいろな考え方があるかと思うが、要するに登山の新しい分野のひとつとして割り切らなければ議論はつきない。やりたい人がいる限り、そのことを実践していけばよいことであり、第三者的な発言は避けた方がよいという雰囲気もみられる。また、結論的に考えてみて、もし、スポーツクライミングがオリンピック競技種目になったとしたら、何が起こるであろうか。国体競技の登山種目はどうなるのだろう。対応に遅れた日本として、国際的レベルでの参加はどうなるのだろうか。こういうことを考えたとき計画的に、組織だってやっていかなければならないだろう。具体的にいうと、早く国体の登山競技にワールドカップ方式（国際山岳連盟ＵＩＡＡ方式）を取り入れ、国際的にも通用する大会、世界に通じるクライマーの養成を早急にはかることであろう。その点、日本山岳協会が今の時代に合わせて機構改革を行い、競技部を設けたことはその意義が大きい。この新たな機構のなかで日本としても、日本で開催されるオリンピックということもあり、一九九八年長野冬季オリンピックを目標として積極的にオリンピック参加に力を入れるという方針を打ち出した。しかし、ＩＯＣの見解では夏期ゲームと考えているようだ。夏期オリンピックは参加希望種目が多いだけに加入が一段と大変になる。昨今のスポーツクライミング世界大会は、原則として屋内大会を決めている。天候や気温に左右されないスポーツクライミング大会をめざし、登攀をここまで人工的にしたのだから、全天候性室内競技としてはどうかという意見もあるくらいで、冬季競技としても開催に問題はない。

話が後と先になったようだが、ここで日本におけるスポーツクライミングの経過の大要にも触れておこう。大きな流れとしては、岩登り（自然壁）が競技化され、難易度制（ディフィカルト）、時間制（タイム）とかの方式とルールによる大会が、一時ソ連において岩登り競技会として盛んに行われてきた。日本山岳協会でも、日本体育協会の援助と指導のなか、日ソスポーツ交流の一環として毎年選手を派遣していた。また、一方では、ヨセミテあたりを中心に、フリークライミングという名のもとに、岩登りが盛んになり競技性を帯びてくると、スポーツ的記録追求の興味が高まり、近代スポーツ登山の名のもとに国際山岳連盟でも新しい委員会を設けての実践に入り、今までの岩登り競技のソ連方式等を取り入れた国際山岳連盟ＵＩＡＡ方式のルールをまとめ、年六戦～八戦ぐらいのワールドカップ開催を実施して、スポーツクライミング競技を確立した。日本ではまだ選手層も薄いが、平山祐二選手はワールドカップ東京大会では優勝、その後もヨーロッパに滞在して、ワールドカップを歴戦、毎年の年間ランキングにもトップレベルに位置している。このように、スポーツクライミングの歴史はまだ浅いが、中味に濃いものが生まれつつある。日本でも早くから世界の情勢に合わせて普及、振興に努め、日本山岳協会のジャパンカップも第六回を迎え、ワールドカップ及び世界大会への参加選手の選考を含めて年一回開催されている。フリークライミング界でも一九八九年六月には日本フリークライミング協会（ＪＦＡ）が発足、選手権大会の開催、毎年大倉カップなど日本におけるビッグイベントを主催している。また、最近では若い人たちにも励みになるＪＦＡクライミングコンペ・ジャパンツアーシリーズ大会（十二戦）を開催、ポイントランキングなどを決めて、人気を高めている。

また、このスポーツクライミングの発展には、人（選手）、壁（施設）そして資金（大会運営費）に大きく影響があり、先回の福岡国体の登攀競技でも、屋外ではあったものの、スポーツクライミングに準ずる壁面を使用したり、すでに日本の各地に立派な競技用の壁面施設が完成しつつある。今年（一九九二年）も昨年のワールドカップ東京大会につづき、十月九日、十日、十一日と神戸でチューリッヒ大会に次ぐ第二戦のワールドカップが開かれたが、開催資金も安いものではなく、特に低迷する経済状況のなかでスポンサー協力が困難であり、開催如何も資金集めにかか

わる問題となり、すでにヨーロッパにおいてもやむなく開催中止になった大会がいくつかある。

進む登山界の国際化

この様にスポーツクライミングが登山の新しい分野として世界的レベルで発展していくなかで自ずと日本も国際舞台の一員となり、日本の登山界にもスポーツクライミングを通して国際化が入り込んできた気もする。

しかし、スポーツクライミングのみならず、登山界の国際化は見えないところでもどんどん進展している。自然保護、山岳環境保全の運動は、世界的規模でひとつのうねりとなり、また、遭難対策などにおいても国際的に登山の秩序を守るためにも世界規模で積極的に取り組んでいかなければいけない時代になったことを日本の登山界は意識しなければならないだろう。

五、六年前のことだったが、私はチョモランマ登山のことをウェストン祭の講話として話をするよう依頼されたことがある。緊張して前夜日本山岳会の山研に泊った。その夜、初対面の会員の何人かの方と同宿し、夜の懇談の席となった時、そのひとりの人が言う。「最近の若い人は得意気に外国の山の話をしてばかりいて……気にくわん―」と。翌日のウェストン祭でチョモランマの話をしようと思っていた私は戸惑いを感じた。当時、私もこの人の言っていることが解るような気がしていた。自分の山登りを地道にコツコツと登っている人の純粋で素朴な登山のよさにひかれ、派手にとられがちな海外登山の話をすることに懸念を抱くようになり、心の傷のように山研で聞いた一会員の話がいつまでも私の耳に残っている。このことが私の「国際化論」にひずみをもたらしたが、その後、どういう巡り合わせか、海外登山のみならず、国際山岳連盟への出席など国際化の第一線で活動しなくてはならないことになった。

また、国際山岳連盟においても昔の親睦、交流の時代は変わり、現在では実質的に世界の登山界の組織として機能的、現実的活動をしている。そして、日本は十七カ国ある理事国の一員として一役を担わなくてはならない立場にある。そんななかでの、東京、神戸の二年連続のワールドカップ開催、そして、日本ＨＡＴ-Ｊの山岳環境保護国際シンポジウム開催は、日本の登山界の国際化というよりむしろ、国際活動そのものであった。先回のスペイン・サンセ

バスチャンＵＩＡＡ理事会でも、日本の評価は高く、一九九二年秋国際山岳連盟総会が日本の松本市で開かれるに至っては、国際的にも認められ期待される日本の登山界として、世界の登山界の一員という自覚のなかに、国際的な登山の秩序を守っていかなければならない。

自分は海外の山には行かないからといって、国際化は関係ないということではなく、登山界というグローバルな立場での国際化、国際交流に対する登山者の理解が大切である。再三言うように、今の日本の登山界は国際舞台そのものが、活動の場になっていると考える方が適切であるといえるだろう。国際イベントとしてワールドカップ東京大会がそのきっかけともなり得たことに、いささかの自負をもっている。

日本の登山界が、国際山岳連盟を通し、世界の登山界のなかでますます発展することを期待する。

〈特集・中高年登山を考える〉

近年中高年登山者の増加に伴い、その角度からの安全登山対策の必要性が論議されている。日本山岳会においてもその視点から、一九九二年二月二十二日、東京において中高年登山対策全国大会を開催して論議を深めたので、同大会における講演および討論の概要を収録した。また、中高年者が海外の高所登山を楽しむという積極的な動きも今後増えてくると予測されることから、五十歳以上のパーティーで八〇〇〇メートル峰に挑んだ体験を寄せてもらった。なお、六十歳でシシャパンマに登った斎藤惇生・中島道郎両氏の記録が「還暦男二人、八千米峰に登るの記」として、『山岳』一九九〇年に掲載されているので、合わせて参考にされたい。さらに、「高齢者登山・私の場合」と題して、今日なお壮者を凌ぐ元気な登山を続けている高齢会員に、その元気の秘訣・訓練法・安全のために心がけていることなどについての体験記を寄せてもらった。

（編集委員会）

〈中高年登山対策全国大会における講演〉

文部省登山研修所の活動

浦井孝夫
（文部省登山研修所長）

本日は現在私どもが行っています登山研修所の仕事、これからやらなければならない事など申し上げてご理解いただき、ご指導をいただければ幸いと存じます。

まず最初に登山研修所が現在行っています事業等について簡単にご説明し、次いで中高年の安全登山という観点からいくつか提言してみたいと思います。

ご承知のとおり文部省の登山研修所は富山県の立山町にあり、今から二十五年前の一九六七年に設立されました。日本で唯一の登山指導者のトレーニングセンターです。一九六〇年代前半に遭難事故が相次ぎ、特に一九六三年、六四年には若いパーティーが大量に遭難死しまし

たことが開設の大きな契機となりました。

つまり、わが国のスポーツの健全な普及発展のための仕事を担当しています文部省としては、何をなすべきかということで論議を重ね、このような痛ましい遭難事故を未然に防止するには、まず登山指導者の研修訓練を行い、それによって正しい安全な登山を全国的に普及することが大事ではないかとの見地から、開設されました。

この研修会には、本日お見えの方々の中にも講師としてお世話になった方や研修生として参加された方もおられますが、これまでに約八千名が登山研修所で研修を修了しております。年間で三百～四百名になります。

研修の内容は講義、実技、研究協議の三つの内容で行っておりますが、中心になるのは冬山、春山、夏山における歩行技術、登攀技術、緊急時対策、生活技術といった実技訓練です。一回の研修期間は研修会の種類や参加対象者によって多少異なりますが、約一週間で、主な参加者は大学山岳部のリーダー、地域や職域の山岳会や登山クラブの指導者、それに加え高校、高等専門学校の登山部や山岳部の顧問教員等です。顧問をやっている先生は必ずしも若い時に登山をやったという人ばかりではなく、むしろそういう経験者は少ないといえます。

これら参加者の多くは登山の仲間を持っており、平素から登山についての何らかの活動をしている活動母体があります。つまり、クラブとか同好会のメンバーとなっており、それらのリーダー格の人が受講しております。それらの組織はにわか作りではなく、継続性のあるしっかりとした登山者の集まりであります。そのようなクラブや同好会の代表者が研修に参加すれば、帰ってからその内容を仲間に伝えることができます。そういう仕組みがないといくら研修を行ってもその人だけで終ってしまい波及効果が少ないわけです。また、研修に参加してくる人々の母体のクラブや同好会の多くは日本山岳会といった組織に加盟しており、登山に関する情報とか指導がわりと伝達されやすい登山愛好者の集団ではないかと思います。

これまで、私どもはどちらかというと若い人たちの遭難防止に対する研修、指導等を行ってきました。近年、余暇時間の増大、高齢化社会の進展等社会環境が変わってきまして、同時に生活水準が向上して中高年のスポーツ実施人口が増えてきております。昔は、四十歳を過ぎ

ればスポーツをやる人はいなかったのですが、最近では四十代、五十代、六十代、七十代いずれもスポーツを行っており、特に六十代、七十代のスポーツ人口は十年前、二十年前と比べると随分増えております。二十代、三十代のスポーツ人口はそれほど変わっておりません。登山についても同様で、登山人口全体はそれほど増えていないのですが、中高年の占める割合が増えております。そのため一方で遭難事故も大変多くなっており、その対策が急務となっています。そこで文部省として遅まきながら一九九〇年からその対策に乗り出したわけです。その最初の仕事が『楽しい登山』という本の出版です。

当初は、そうした本を出すのが良いのか、講習会を実施するのが良いのかと、内部で随分論議をしたわけですが、中高年で登山をしている人は、どちらかというと組織には所属しないで個人個人でやっている人が多いので、講習会をやってもその参加者が帰って組織的に伝達するという形にはなりづらいので、まずは本を出して皆に知識を普及するのが先ではないかとの考えから本の出版を手がけたわけです。昨年の八月に出来上がり、十二月までに一万四千部が売れ、何とか趣旨は達成できたのではないかと思っております。

本年度の事業としては中高年の安全登山講習会を予算化しました。立山（富山）、大山（鳥取）及び丹沢（神奈川）で行いましたが、今年は岩手、岐阜、高知で実施することになっています。どういう講習内容にするのか、何を教えるのかというのが課題であり、日本山岳会の皆さんからご指導をいただき、充実した内容にしたいとおもいます。参加対象は第一に都道府県、市町村教育委員会の体育・スポーツの行政担当者です。行政の中核になっている方々に理解してもらわないと登山の普及という仕事は進みません。第二は日本山岳協会とか日本山岳会とかの指導的立場にある人にも入って来て欲しい。第三には地域や職域の中高年登山グループの指導者で、これらの方の参加が一番大事です。

そこで、中高年登山の問題点でありますが、やはり中高年になって登山を始めた初心者が多いということ、もう一つは観光とかレジャーとか気晴らしといった安易な考え方で山へ行くこと、さらにはにわか作りのグループで計画や準備がずさんなまま山へ行ってしまうことです。そこで二つほど提言したいと思います。

一つは、中高年齢者の中には登山をやりたいという人はかなり多くいるとおもいますので、そういう初心者を対象とした中高年登山者のグループ作りを進めなければいけないのではないか。富山県においては日本山岳会の副会長をしておられる藤平さんのもとで富山県山岳連盟が指導して、富山市に中高年の大きな登山グループができました。そのような形のグループ作りを指導してすすめなければならないのではないかと思います。

もう一つは、すでに中高年のクラブとかグループがあり、そういうものを行政や山岳団体等が把握する必要があるのではないか。そうしたグループを把握すると同時にその代表者に集まっていただき指導していかなければならないと考えております。ただ、未組織の人だから組織に入ってもらうといっても、そういった人には既存のベテランのいる会にはなかなか入り難いと思いますので、そうした面への配慮も必要であると思います。

〈中高年登山対策全国大会における講演〉

女性のための登山教室18年

小倉董子

十七年前（一九七五年）、朝日新聞の運動部記者片山全平（日本山岳会・故人）さんから、朝日カルチャー・センターに、女性のための登山教室を新設したいので、協力をして欲しいとの話がありました。さすがに新聞社が母体となって発足しただけに、世の中を先取りした企画だと感心したものでした。ただ、山登りをするために、受講料を払ってまで、一般の女性が集まってくるだろうか、半信半疑でした。

ところが、フタを開けてみますと、定員四十名のところに、六十名ほどの申し込みがあったのです。びっくりしました。それはどういうことかと考えてみますと、第

一次登山ブームは、日本山岳会が行ったマナスル登頂がきっかけでした。あの時代に山に憧れた若い人たちが、（男性は企業戦士として）女性は子育てや仕事などで、登山を一時中断していた人たちも仕事をリタイア、または子育てが終り、時間的にゆとりができたということで、再び山歩きや山登りに、復帰した時期と一致したのでしょう。また、スポーツにまったく縁のなかった人たちも、時間的、経済的に余裕ができた時、歩くことならできるだろう、と山歩きを選んだようです。と同時に、交通網の発達によって、比較的体力の弱い人たちでも、山々へ向かうチャンスが得られるようになりました。装備類の開発や軽量化によって、中高年にぴったりの要素が、整った時期ともいえます。

実は、カルチャー・センターでカリキュラムを作る時に、受講生は、山についていろいろ興味を持ち、実際に登るだけでなく、動物や植物など、自然に対しても興味をもっているのではないだろうかと思いました。そこで、それぞれ専門の講師に参加してもらいました。ところが、受講生の目的は、実際に山に登るノウ・ハウが知りたかったのです。

二十代の学生さんから、三、四十代、五十代と年齢層に幅がありましたが、思いは同じでした。ことに、中高年の人たちには、楽しめる時間が残り少ないので、とにかく早く山を歩けるようになりたい、というのが本音だったようです。ただ、山歩きを積み重ねていくことで、体力もつき余裕が出て、はじめて山の写真を撮りたい、高山植物の名前を知りたい、スケッチをしたい、と興味がわいてくるのだということを知らされました。

試行錯誤の末に、講座内容は①山を歩くための基本（大自然相手の山であること。常に最悪の状態を想定し、判断と対処がいかに重要か。計画のたて方、実行に際しての留意点。チーム・ワーク。体力のない女性が中高年の場合、メンバーが身動きできなくなった時は、チーム全体の安全確保すらできなくなる。一人一人の責任である。人を頼らず、自立心を養う。リーダー体験で、山歩き山登りの基本を身につける）②服装と装備③安全と健康④地図の読み方⑤山の気象⑥山行計画書提出・まとめ。

週一回二時間、六回講座とし、一泊二日の実技登山を加え、短時間に基本を身につけてもらうようにしました。

実技登山では、チームのつくり方。準備体操や整理体

操の重要性。服装（汗をかかない工夫、寒暖調整）。歩き方。水の飲み方。休けいのとり方など。どうすればバテずに歩けるか、体験してもらいました。

例えば、ネパールで重い荷を背負ったポーターが、急坂で二、三歩ずつのジグザグ上りをしているのを見て、私も見習ってみました。非常に呼吸が楽なんですね。山に慣れていない初心者や中高年の人たちには、運動不足や体重オーバーなどで、心肺機能が落ちて、呼吸が苦しいと、上りをいやがる人がいますが、このジグザグ上りを取り入れると、苦しまずに上りを楽しめるようになりました。また、下りが弱いことも知らされました。計画を立てる時の重要なポイントですね。こうして、自分自身の体験や失敗談を加え、できるだけ早く、実体験を通して山に親しんでもらうよう、心がけました。

ところが、中高年になりますと、とにかく早く高い山へ、数多く登りたいという気持ちが強いからでしょうか、わがままというか、自分中心なんですね。他人の面倒は見たくないという人が、ほとんどです。それでは、他人を思いやる気持、チーム・ワークが育つわけがありません。そこで、いい仲間がいなくては山歩き、山登りは楽しくないし、安全な登山もできない、ということを知ってもらうために、自分でできる範囲の山を選んで、リーダー体験をするよう（講座修了生で作った登山同好会「紫蘭会」）、義務付けています。

他人を連れて行くという体験は、計画、準備、気象など事前の問題、現地での判断や対処の仕方など、無事に全員が帰宅するまで、責任があるわけですから、能力以上の山の計画が、いかに怖いものか判ってもらえました。そういう意味で、人を頼って、連れられ登山をしている人は、山の怖さを知らないばかりか、何か起こった時は、他人に責任をなすりつけ、無責任な行動をとるものです。

リーダーを体験することによって、それぞれが、自分たちの能力、体力に応じた山に、助け合って登頂し、無事に下山した時の充実感は、連れられ登山では味わえない喜びとなるのです。日常生活もいきいきしてくるから不思議です。

一つのエピソードがあります。この講座の初めごろ、実技指導に、山岳会の男性会員に協力をお願いしておりました。ところが、男性は女性にやさしいというか、甘いというか、難所にかかると、すぐ手をさしのべてしま

うのです。このままでは、女性の自立はとんでもないと思いました。結局男性の講師は辞めてもらい、女性講師自らが、厳しさの中にやさしさと抱擁力を加味し、好評を得てきました。これが、私の十八年間を通じての体験です。

前にも述べましたように、朝日カルチャー・センターの女性登山教室（のちに山歩き教室とネーミングのみ変更）は、開講当時は非常にユニークにして新企画である、と好評を得て、十八年間続いてきましたが、今年を最後に閉講することになりました。今日のように中高年登山者問題が、社会問題としてクローズアップされている時期に、なぜ閉講するのか、と首をかしげる人もいます。時流というものでしょうか。朝日カルチャー・センターの所在地である西新宿に、東京都庁が移転してきたために、地価が暴騰し、経営を圧迫しはじめたのです。当然定員割れの教室は、切り捨てられるという破目に追い込められました。生涯教育をモットーにした朝日カルチャー・センターも、結局は企業ですから、採算が第一ということなのでしょう。

最近になって、大手スーパーマーケットが、登山教室を開くという動きが出てきています。これまた商売につながることなら、何でもやるという、企業の考え方も気になるところです。多分、日本山岳会の皆さんに、講師依頼が来ると思いますが、企業の思惑に惑わされることなく、登山というものは、一人一人の責任において、いのちを大切に、山を楽しむものであること、お客さまとして山に連れていってもらっていては、本当の山のよさを知らずに終ってしまうことなど、ご指導願いたいと思います。

最後に中高年登山者が、ともすれば忘れがちになることに、触れておきたいと思います。山を好きになる人には、頑固で意固地という性格を持ち合わせている人が多いと思います。年を重ねるごとに、ますます激しくなり、「若い時は……」という思い込みが強くなるようです。自分の体力、そして持病のことなどをわきまえ、過去の栄光は、青春の大切な思い出として、自分の胸の奥にしまい、その時々の体調に合った山を楽しんでいきたいものです。おたがいに仲間同士でチェックし合うのも、一つの方法だと思います。信頼し合える仲間を生涯持ちつづけられることは、素晴らしい私たちの財産ではないでしょうか。

〈中高年登山対策全国大会における講演〉

中高年者の体力とトレーニング

大森薫雄

(一) はじめに

わが国の登山界ではこのところ熟年登山者が大変気を吐いており、昨年は五十歳以上のグループがチョ・オユーに登るということがあり、一昨年は六十歳の方がやはり八〇〇〇メートル峰に登るという、大変に素晴らしいことがありました。その反面、最近では何でもないような尾根から転落する、あるいは登山中急死するといったような事故が増えており、また、ヒマラヤのトレッキング中に高山病で死んでしまうというような事故が毎年何件か報じられております。

そこできょうは中高年登山者の体力がどうなっているか、メディカル・チェックをどうするか、トレーニングをどうしたらよいかについて話をしてみましょう。

(二) 背景と最近の遭難の実態

私はもともと整形外科医なので、運動器の面からは歳をとった方でも全く問題はないので登山を薦めておりますが、中高年ともなるといろいろな成人病が基盤にあり、そういうような中でどのように登るのがよいかということが問題になると思います。

私どもは十三年前に日本山岳会の中の医療委員会のメンバーが集まり、登山医学研究会を発足させ、毎年「登山医学シンポジウム」という研究会を開催しております。一昨年、私が第十回の会長をやりました時に、この中高年登山者の諸問題をテーマに専門の先生方にディスカッションをしていただきました。その時に会員の松永敏郎さんが中高年登山者を三つのタイプに分けて現状を分析されています。それをまず紹介しておくと、第一は継続型で、若い時からクラブに所属して先輩のきびしい指導のもとで基礎技術を身に付けて積雪期登山あるいは岩壁登攀の経験を積み、今なお自分の登山を実践しているタイプで、常にそのためのトレーニングや摂生に努めてい

る人。この人たちは登山を続けながら自分の体力の衰えを自覚し、長い経験の中で培ってきた防御力を身につけている。二番目は復活型で、若い時にきびしいスポーツ登山をやりながら種々の事情で中断していたものが、時間や金銭的余裕ができ、仕事や家庭の状態が変わってきて登山を再開するようになった人。このような方はしばらく登山活動を中断していた間に自分の体力や技術が衰えていることを認識していないということが見受けられる。三番目は初心者型。職場内の友人や妻（夫）に誘われて、また定年後趣味を求めて、これまで山とは全く縁のない人たちが、ふと山登りを始めたという人たちで、中には大変研究熱心で率直にリーダーのいうことを聞く人もいるが、多くの人たちは登山に必要なチームワークやパートナーシップへの認識がないことが指摘されております。

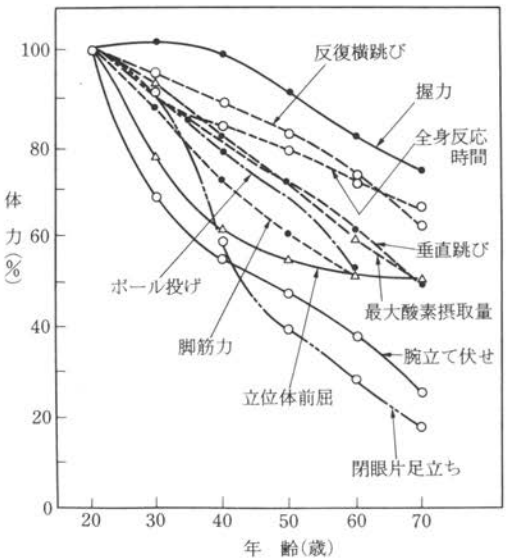


図1　体力の加齢による変化（20歳の体力を100とし、それぞれの年齢の体力を相対値で示している）（池上、1987）

ところで、医学的にみて中高年の最も大きな特徴は、体力が年を追って衰えていくことです。一般的にいって、人の体力は二十歳を頂点として衰退がはじまり、頂点時を一〇〇％として一年毎に約一％ずつ減少するといわれております。図1のように、二十歳の男性の各体力の指標を一〇〇として加齢に伴う変化を見ると、最も低下度の大きいのは閉眼片足立ちと脚筋力で、大体六十歳では三〇～五〇％低下を示しております。人は脚から衰えるといわれていることを証明していると思います。次いで腕立て伏せ、立位の体の前屈、それから垂直跳びも六十歳では大体四〇～六〇％に低下します。

気力の優れた人にとっては、自分はまだ若いという思

い込みがあり、無意識のうちに自分の肉体にそれを期待するわけですが、実際には気力と体力のバランスが大きく崩れて、反射神経が失われ、筋力が低下して瞬発的な動作が難しくなっているわけです。持久性や筋の持久力の低下で疲労が早く訪れ、何よりも決定的なことは疲労の回復が遅れていつまでも残ってしまうということが現れてきます。

警視庁保安部外勤課が毎年発行する山岳遭難発生状況の事故統計についてみてみますと、一九九〇年では登山道、沢、岩場、尾根からの転落、滑落が最も多く百八十五件（三二％）、次いで道迷い百七十件（三〇％）、疲労、病気七十六件（一三％）の順でありました。

事故の間接的な要因としては、登山技術の未熟や登山の基礎知識の不足によると思われる事故が多発しています。また、死者、行方不明者の原因についてみますと、転滑落者が最も多く七十三人（四七％）、次いで疲労、病気二十五人（一六％）、道迷い十四人（九％）、雪崩十二人（八％）、悪天候十人（六％）、の順でありました（図2）。

年齢別発生状況についてみますと遭難者は二十歳代が

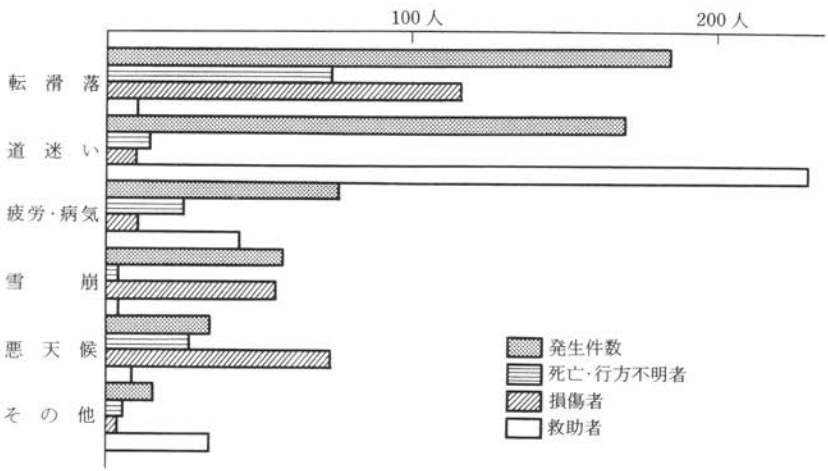


図2　原因別発生状況

最も多く百四十一人（一九％）、次いで四十歳代百十四人（一六％）、六十歳代百十三人（一六％）の順になっていました。

また、死者、行方不明者についてみますと、二十歳代三十三人（二一％）、次いで七十歳代の二十七人（一八％）、四十歳代、六十歳代のそれぞれ二十三人（一五％）となっており、四十歳代以上の中高年登山者の遭難事故が増加

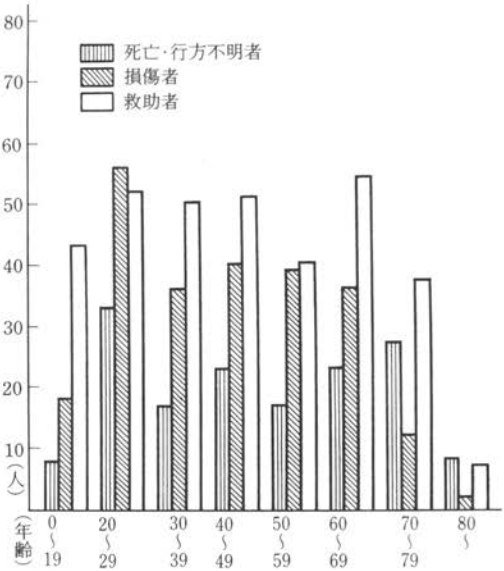


図3　年齢別発生状況

していることがわかります（図3）。信じられぬほど簡単に捻挫や骨折がおきたり、滑落したまま停止動作ができず、致命的な事故につながった例も多い。また、日常生活では潜在している疾患が、登山中のいろいろの負荷によって表面にでやすい点、あらかじめ充分な注意が必要であります。

（三）メディカルチェックについて

そこで、このような事態を招かぬためには、自分がはたして登山をやってよいのかどうかを確かめておく必要があります。いわゆる身体的なメディカルチェックを計画的、系統的に実施しておく必要があるわけです。とくに中高年登山者の健康管理はメディカルチェックに始まるといってよいでしょう。

メディカルチェックの目的は、登山活動に関連して発生してくる障害や潜在性の健康阻害因子をチェックすることであります。つまり、登山活動の障害になったり、社会生活を妨げたり、生命を脅かすような因子を前もって発見し、事故や障害を未然に防ぎ、すでに存在している異常については悪化させないようにすることです。登山におけるメディカルチェックでは、登山に関連して発

生が予想される病態について特に詳細にチェックを行うことになります。

大抵の方は成人病検診ということで年一回は受けていると思いますが、一般検査として糖尿病の検査、腎障害がないかどうか、肝障害がないかどうか、高尿酸血症といって通風がないかどうかの検査、貧血がないか等を調べます。特殊な検査としては、最も大事なのは心臓の検査で、大抵の場合は心電図をとります。それも普通の心電図だけでなく負荷心電図といって、ローラーの上を走ってある程度負荷をかけた時の状態を検査します。そのほか最近では心エコーといって心臓の状態が判る検査があります。心臓はドクドクと血液を排出するポンプの役目をしますが、その肝心な心臓の筋肉を養う血管があり、その血管に動脈硬化がきたり、ケイレンをおこしたりしてそのために胸が痛くなったりする狭心症、それが詰まって全く血液が行かなくなったり、切れると心筋梗塞で、それがかなりのパーセンテージで突然死の中に含まれております。そういう心臓を養う血管に障害をきたすようなところを十分に調べておくことが大事です。

一般的にいって、次のような項目に該当する人は登山は避けた方が無難です。第一は階段や坂道を登ると息がきれるほど心臓や肺に病気がある人、第二は成人病の機能検査の上で所見があるような肝臓の病気、腎臓の病気を持っている人、第三はリューマチなどの関節疾患のある人、第四は高度の高血圧症（程度の低い場合は薬でコントロールされるのであまり問題にはならない）、第五は重度の貧血症のある人、第六にてんかん発作をもっている人、第七は気管支喘息をもっている人、第八は主治医から登山は止めた方がよいと指示をうけている人。

（四）トレーニングについて

そうしたメディカルチェックの結果、登山をやっても差し支えないとなったら、トレーニングをしなければなりません。何の身体的準備もなしに登山をするのは無謀というものです。

体力の最も重要な指標であり呼吸循環機能を表すものに最大酸素摂取能力というのがあります。第4図にトレーニングをした人と一般的の人との比較をグラフ化してあります。最大酸素摂取能力は加齢により直線的に減少していきますが、トレーニングを行っている人は各年代において二〇～三〇％高い数字を示しております。常

日頃トレーニングを心がけておくことの必要性が判るとおもいます。最大酸素摂取量は高度の上昇に伴い減少し、一五〇〇㍍から一〇〇〇㍍上昇する毎に約一〇％低減します。富士山の頂上では約二〇％、六〇〇〇㍍では五〇％、エベレストの頂上では七〇％が減少するといわれております。しかし登山活動に要する酸素の摂取量は高度に関係なくほぼ一定値を必要とするために、高度の上昇に伴って登山活動の運動強度は増加していくわけです。従ってあらかじめこの最大酸素摂取能力を高めておくことにより、その比率を低下させたり、予備能力を高めることができるのです。

そこで、心肺機能を十分に働かせるような中高年に適したトレーニング方法として、私は速歩きを推奨しております。これはわりと実行しやすい、長続きしやすい、リスクが少ない方法だといえると思います。その目安は脈拍が一分間に一〇〇～一四〇くらいの範囲で、歩く時間は一時間くらい、週に二、三回やると効果が出てきます。脈拍は一分間に八〇以下が正常で、爽やかな朝の目覚めの時は六〇くらい、歳をとると七〇～八〇といったところです。熱があるとか、カゼをひいて具合が悪いという時は九〇以上になります。中高年の場合は運動で脈拍が一四〇を越すといろんな障害が出てくるので気をつけていただきたい

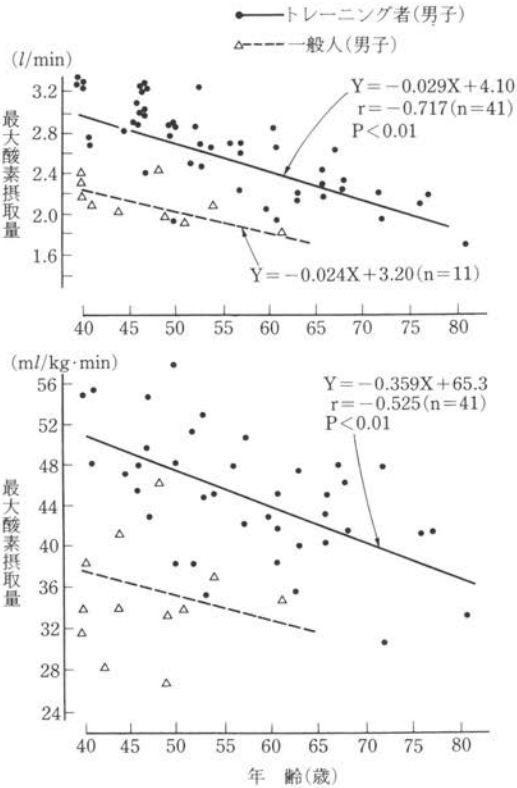


図4　中高年長距離ランナーと一般人との最大酸素摂取量の年齢別比較（Asano, K. et al., 1976）

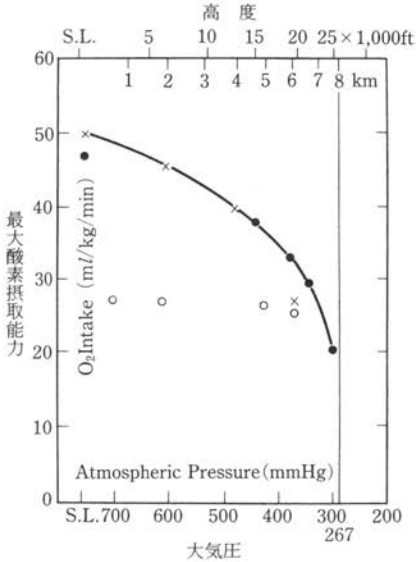


図5　高度、大気圧と最大酸素摂取量能力の関係

と思います。

速歩きによって得られる効果として次のような点があげられます。第一に毛細血管が発達してくるために身体の隅々まで血液が行きわたって血圧が下がる。第二に血管壁に付いたコレステロールを取り除き動脈硬化を予防する、第三に糖の代謝が良くなり糖尿病を予防し、肥満を防ぐ。第四に心臓に負担をかけることなく心肺機能を高める。第五に脳を刺激してその働きを促進する。第六に筋肉を強くすることによって骨が丈夫になる。などさまざまな利点があります。

四十五歳からトレーニングを始められた脇坂順一会員（久留米医大名誉教授、一九一三年生まれ）は、当時八十キロの肥満体で高血圧の傾向があったそうですが、現在は五十八キロで血圧も正常化し、一九八三年の古稀を十登目のマッターホルン峰頂上でお祝いしたということで、喜寿を過ぎた今日でもなおトレーニングをつづけて海外での登山を行っておられます。

日常生活の中での体力づくりによってこうした利点があり、またそれによって山登りに余裕ができて楽しさが倍増する訳ですから、ぜひ取り組まれ、皆さんにも推奨していただければ幸いと思います。

私はこの歩くこと、登山をすることは賢者のスポーツであると考えております。

＜中高年登山対策全国大会における討論概要＞

▽中高年登山者対策△

木戸（富山）　中高年の登山対策という場合、日本山岳会の中高年会員に対する対策を考える場合と日本山岳会がリーダーシップをとって広く中高年対策を考える場合がある。山岳会のメンバーについては、経験者の集まりであるから基本的な情報を流してもらえばよい。後者についていえば、どういう人がどんな所に、どれだけいるのか、を把握しておくことが大事だ。富山で中高年の安全登山講習会をやったところ、一回目に六十人の山は全く初めてという人が集まり、これまでに会員が二百十人になった。それは募集したわけではなく口コミで広がったものだ。年間四回の山行を行っており、岳連の中ではいちばん大きな団体になっている。また、岳連では年一回県民登山をやっており、今年で三十一回になる。山行の前に講習を行って必要な知識の周知をはかっている。そういうことによって会員を把握することが基本的な対策ではないかと考える。

坂井（越後）　県山協で中高年対策を担当しているが、中高年の登山者を把握するというのは非常に難しい。グループに入るのを嫌うとか、無線が目的で五月の飯豊連峰に入り遭難死した例もある。

新潟市内の四十歳以上を対象とした山の会では、初めは三百人くらいだった会員が、昨年秋に中高年登山講習会をやったところ会員が増えて八百人になった。そういう会では山行をすると、連れていってくれるという意識で参加してくる人たちが多く、自分自身で山登りをするという感覚があまりないという問題がある。

藤平（副会長）　募集しないのに二百何十人も集まってきたという富山の話があったが、それは大事な問題ではないか。そういったアクションを各支部でとってはどうか。その場合に大事なことは、これまではともすると技術論が多かったのではないか。それも大事だが、登山をどう楽しむかということを重視すべきではないか。山を楽しみたいというニーズに応えていくことが山登りを永続させることになるのでないか。

例えば、福井支部では「北陸の百山を登る会」を作って中高年登山者をリードしている。北陸の百山を選定する時に、山高きが故に貴からずという観点から、富山の呉羽山（一四五㍍）、金沢の卯辰山（一四一㍍）、福井の足羽山（一一七㍍）といったポピュラーな山も採り入れたのでとりつきやすいという感じがあると思う。また富山では、立山の室堂で星の観察、スライドを写して高山植物の説明、立山信仰の話、自然保護という四つの内容で講座を開いたところ、県外からの百人以上の人を含め四百人が参加した。圧巻は富山文化センターのプラネタリウムの主任技師が天体望遠鏡で土星を見せてくれたことで、大変な好評だった。こうした催しも中高年登山への一つのあり方ではないか。未組織の人は情報に飢えているから、求めている情報をどのように提供していくかということが今後のあり方ではないかと考える。

宮本（福井）　「北陸の百山を登る会」

というのは、中高年の人たちから北陸の百山を登りたいという声が大きく出てきて、それを目的にできた。口コミで広がり会員は百二十～三十人になる。できて三年で六十ちかい山を登ってきた。初心者が多かったのでそのレベルアップが課題だった。百山全部を登りたいという希望が強いものの、百山の中には剱岳、後立山、毛勝山といった山もあるのである程度の訓練が必要になる。一つ一つの山の体験を通して山の厳しさに対処できる経験や技術を身につけている。

▽トレーニング△

中（三水会）　トレーニングをしないで山へ入る者が多い。登山におけるトレーニング法の確立が大切ではないか。

大森（講師）　トレーニングなしで山へ行くというのは無謀だ。常日頃訓練をして筋肉を鍛えておくべきだ。人間の体には六百種類の筋肉があり、その半分が下半身にある。下半身の筋肉を動かすということはほぼ全身の筋肉を動かすことに匹敵するくらい重要なことである。そういう意味で、私は中高年の方には最小限度速歩きをすることを奨めている。

佐々木（秋田）　自転車の効用はどうか。

大森　ある一定の筋力を要求するという点では自転車も素晴らしい機械の一つだ。しかし地についた感覚をつかむという点では歩くのが一番である。

水科（北海道）　山登りの時には心拍数を計れる時計をかならず持って行き、百五十を過ぎたらひと息入れるようにしている。

大森　パルスメーターの付いた時計が安く買えるので利用するとよい。ただその数値は年齢によって異なるので、その人に合った脈拍数でコントロール願いたい。

西郷（静岡）　八十歳を過ぎても幸い元気で山を歩いているが、年齢とともにバランスのとれる範囲がだんだんと小さくなってくると感じられる。若い時にはその範囲をはみ出して重心を移してもそれを戻す筋力があるが、七十歳を越えるとそれを引き戻すことができず、よろけて前や横へ倒れるということになる。それを補うために杖によって、つまつり腕に与える感覚によってバランスをとる。バランスが悪くなった時のための対策はあるのか。

大森　人間は加齢とともに力の減退が起きる。足だけでなく総合的に退化するので、それを頭に入れて行動するべきだ。杖をつきながらバランスをとるというのは重要であり、私は皆さんに杖を使いなさいと奨めている。補助器具を駆使して山に登っているというのはぜひ参考にしていただきたい。

▽リーダー保険△

上野（北海道）　山での遭難による死亡事故があった場合、遺族からリーダーの過失責任が訴えられるということが近い将来相当増えてくるのではないか。北海道では最近スキー場での事故に対する損害賠償請求が増えている。登山についても、裁判官は山登りについては素人だから、登山は非常に危険な一つの遊びと認識すると思う。登山のテキストを見ると、リーダーのやるべきことを相当厳格に書いてあるから、それをそのままパーティーにおけるリーダーの管理責任という形でもってこられる。死

亡した本人はその気持ちがなくても、遺族は本人の感情を無視してまず法律事務所に相談に行く。そうすると、山登りはお互いに了解してやっているのだから損害賠償は請求できないと説明する弁護士と、リーダーの過失責任を問える可能性があると説明する弁護士があり、後者であれば、遺族はやってみようという気持ちになる。また、弁護士も新しい分野だから、やってみたがる傾向がある。

ちなみに、五十歳の人が死亡した場合にどれくらいの額を請求されるのかといえば、慰謝料が千五百～千八百万円。六十七歳まで五百万円の年収があるとすれば約八千五百万円、それから三〇％くらいが引かれるとしても、慰謝料を含めて七千万円くらいの請求額になる。

大学の山岳部や山岳会とちがって、中高年登山はあまり濃くない人間関係でパーティーが組まれて山へ行く場合が多い。そうした場合の事故では、遺族は他人に近い感情で訴えを起こしやすい。そのようなパーティーのリーダーは大変な目に遭う可能性があるから、リーダー保険に入っておかなければならない。

藤平　日本山岳会の山行にもリーダー保険を付けろといったのは私だが、それは、富山県キャンプ協会の会長を仰せ付かった時に、指導者の会合で第一に出された要望がリーダー保険だった。子どもを連れて行ってケガをしたといったものがすべてリーダーの責任になるからである。

入沢（集会委員会担当理事）　現在付けているリーダー保険の仕組みについて説明すると、藤平副会長からのお話もあり、四年ほど前に発足した。提携先は日産火災海上保険㈱で、日本山岳会のための商品を作り出してもらった。名称は「日本山岳会指導者賠償責任保険」である。リーダーとして他人を山へ連れて行って何らかの事故があった場合、訴えが起きる起きないにかかわらず、保険で賠償しようというもので、賠償額は一人について一億円まで、一事故について三億円までとなっている。また、最近の登山界の実情にかんがみ、単に登山のみに限らずスキー、サイクリング、パラグライダー、ハングライダー、カヌー等あらゆる分野を網羅してヘッジした。そして、国内だけでなく、海外の山も対象になるが、アメリカでの事故とネパールでの事故では評価の基準が異なる。現在、リーダー一人について年間千八百円ずつ払っており、リーダーが訴えられるような場合には山岳会そのものも責任を問われるだろうという考え方から、山岳会をヘッジする意味で、一山行・一人・一日当たり五十円の掛け金を払う。遭難対策・指導・集会の各委員会の委員全員と、他の委員会は推薦のあった委員のみの計約百人に付けている。

（編者註＝この会合での論議が契機となってリーダー保険に対する関心が高まり、その後各支部の支部長・委員も付保されるようになった）

▽無線の利用△

小倉（講師）　以前、女性だけのパーティーで剱沢へ入っていた時に、剱岳でルートを外れて登っていた登山者の事故を知らせる無線が入り、予定の山行を急遽変更して救出に赴いたことがある。それ以来、なまじっか無線に頼るよりも、自分自身で責任を持ち、事故を起こさないという方向

で指導している。その方が重要ではないか。

藤平　富山県山岳連盟の会長もやっているので、冬の剱岳のケースについて述べてみたい。昨年、一昨年と剱岳の八ッ峰で同じような遭難が起こり立ち往生となった。その際に無線が非常に有効に使われて、救助された。実はそこにはいろいろな問題があった。無線がとび交っていて割り込めない。ちょうどうまく割り込んだのもあって、救助要請を県警に伝えてくれと頼んだが断られた。これは無資格者であったらしい。八ッ峰だと富山県には入らないので、長野県の夜遅く受験勉強していた中学生が傍受、キャッチして富山に連絡してくれた。ところが県警の救助隊は番場島にあり、そこへは富山市からは無線は入らない。そこで立山町のアマチュア無線家の協力を得て番場島に伝えた。富山、石川のアマチュア無線家も受発信をダウンして協力してくれた。あの時、SOSが早過ぎたのではないかという批判があったが、もしあのままだったら遭難者はダメだったのではないか。早過ぎても良かったのではないかと私は思っている。人命の救助は、県警にとっては最大の使命だ。タイミングがずれて助けそこなった場合に、非難を浴びるのは県警だ。

アマチュア無線は業務用に使ってはいけないという規則になっているから、使う時はアマチュア無線連盟に協力を要請するよりない。

佐々木（秋田）　日本山岳会のメンバーはあまり遭難救助のお世話になることはないかもしれないが、遭難対策を話し合っているということは、いつその可能性があるか分からないからである。そういう場合を考えると、無線はないより有った方がよい。有った場合には、電波法を守ってやれば、遭難死亡事故の五〇パーセント以上は助かると思う。救助要請の連絡を断られたというが、それは電波法違反だ。緊急時に「非常・非常」と三回繰り返せば他の交信はすべて止まる。でなければ、メンチャンネル以外で「割り込み」というと必ずどこかに割り込める。チャンネルはたくさんあるから必ず通じる。緊急事態に入った場合、地区の遭難対策協議会に連絡すれば、秋田県では三十分あれば救助ヘリの準備が可能である。さらに自衛隊の救難隊を利用する方法もある。そうした点も含めて日頃から研究しておく必要があると思う。

▽サバイバル技術△

水野（静岡）　支部その他で高齢者と山へ行く機会が多い。その場合にいつも心掛けているのは遭難したような場合への対応策である。必ず持って行く物として、六ミリの補助ザイル二十メートル、ナタ、予定以上に時間がかかった時のためのライト、赤布、救急薬品、三角巾、予備の食料などである。赤布は一反でまとめて買い、端の方に一センチ幅くらいであらかじめハサミで切り込みを入れておき、現地で切り裂いて使う。道がまがるような場所の樹の枝等に結び付けておく。もう一つ大事なことはサバイバル技術で、非常時に火をたく、いざという時には大きいビニール袋に入って寒さを避ける、ポリエチレンの袋に水と米を入れて口を縛り、上でたき火をするとメシを炊ける、など基本的なことを知っておいてもらう必要がある。

〈中高年パーティーの八〇〇〇メートル峰登頂〉

銀亀隊（シルバー・タートル）チョ・オユーに登る

神崎忠男

「中高年とは何歳からを指すのか…」とあらたまって聞かれると答えに戸惑うことがある。三十五歳からとも四十歳からとも言われているいるが、登山ではそういったはっきりした年齢が何歳ということではなく、ある程度社会的に時間のゆとりが出来て山歩きを楽しむゆとりのある人たちを、一般に中高年登山者と呼んでいるようだ。そして、若い頃に登山をしていなかった人たちや、経験や技術的にも初心者が多く、危険などの面からも中高年登山の自主性、自覚にたった安全対策の重要性が問われている。極論でいうと中高年登山それ自体がすでに無謀登山と見る向きがある。

「中高年対策」という言葉が登山界でも語られるようになり、敬われているのか邪魔にされているのか何ともつかみどころのない言葉である。誰もが登山を楽しみ、また、健康を考えて山歩きをするのは、当然のことであり、ユネスコ「体育・スポーツ国際憲章」でも、第一条に〝体育・スポーツの実践はすべての人にとって基本的権利である〟と謳っている。

あえてここで中高年登山論を論ずることもないが、中高年登山も社会的現象の副産物みたいなもので、高齢化、国際化、情報化、都市化など現代社会における人口や産業、文化の構造変化に伴う、生活の在り方や、社会の変化に大きく係わっているわけで登山界にも中高年の人が増えてきた現象なのだろう。それらの対策として、中高年、高齢者の登山そのものの対策も大切だが社会的構造との相互関係などの面からも、日本山岳協会はじめ日本山岳会など、大きな登山組織団体が取り組まねばならない今日的登山界の課題のひとつと考える。

中高年登山対策とか、自然保護活動などは誰もが反対しにくい事柄だけに、時には組織運営の態勢づくり、イメージアップなどに利用されたり、本当に重要なことなのに真剣味を欠いたりして実質的な進展がはかられず「対策」の取り違い、見当違いといいたい場面

が登山界のなかにも見うけられる場合がある。私もよく、「中高年対策ってどんなことをやるのですか…」と聞かれたりして戸惑うことがある。〝なぜ山にのぼるのか……そこに山があるから……〟だと簡単に答えてしまうように、「今更、社会の波にもまれてきた人生経験豊かな頑固爺や婆あに登山論を言ったところで素直に聞く様な方々じゃない…」「そこに中高年がいるからだ…」といって簡単に話をそらしてしまう。自分自身、適確な論調を持っているわけでもなく明解な答を自分でもしっかりと持たなければいけないと日頃考えているが、齢をとったときのための自分の登山の対策を若い頃から考える「中高年対策」が大切なことだとは考えている。

五十歳以上の志を同じくする山仲間で編成

さて、今回は五十歳以上の中高年でヒマラヤ八千メートル峰、チョ・オユー（八二〇一メートル）の登山隊の隊長をつとめさせていただいた関係でこの原稿を書くように依頼されたのだと思うが、隊編成に当たっては中高年とか高齢者登山といった年齢を意識したことは全くなく、むしろ社会的に多少余裕が出来たというか〝時間〟的に自分の時間がもてるようになったという発想で編成されたといった方が適当かも知れない。

日本大学山岳部OB会の二次会の席で、酒の勢いも借りヒマラヤ登山談義となった。若かった頃、ヒマラヤへ行きたかった気持そのままが、「よし、仕事の方も少し余裕が出て来たし…昔の仲間で八千メートルでも行くか…」時間的余裕と、行きたいという情熱が先行して、年齢のこだわりは表面に出てこない。「学生時代の四年生、三年生、二年生、新兵で行けたら最高に楽しいぜ…」夢と現実の真中で、計画と準備がすでに進みはじめていた。日大山岳部のOBを中心にしての発想ではあったが、五十歳を越え、志を同じくする山仲間には登山隊を開放し、それぞれが責任をもった、自由奔放な精神に基づき、五十歳以上自分で自分の責任をとれる登山者であれば誰でも参加出来る登山隊を組むことにした。頂上を目指す者、自己ベストに挑む者、ヒマラヤを観る楽しみのみで参加する者、それぞれの思惑のなかに憧れのヒマラヤへ行ってみようという者が十五名ほど集まった。大雑把な人事分けは、昭和三十五年当時の日大山岳部集団、大城泰（OB）をはじめ、池田錦重（四年生）、根津皖一（三年生）、関孝治、神崎忠男（二年生）、山平靖（一年生）、と年こそとってはいるものの当時の日大山岳部流に言うと〝ヒマラヤ、チョ・オユー合宿〟。この隊員を核に中央大学ワンダーフォーゲル部集団の大山昇、本間堅一、三浦充哲の三氏、社会人グループから石川富康、遠藤京子、渡辺玉枝と野武士集団。体験集団としては成田蔵人、永田周子そして、ドクターの堀井昌子先生が加わった混成隊。悪く言うと雑居隊、良く言ってユニーク隊との自覚のうえでの隊編成であった。

どんな隊であっても隊長は決めなければならない。中国登山協会及びネパールにもコネクションのとれる者がよいと、神崎忠男がその任に当たることになったが、この隊のポリシーとして一口に言って申告登山という形態を取り、各隊員が自分の最終目標を申告し、自分は高度六千メートルまでとか、第二キャンプまでとか、自分なりの目標・目的をもって自分の責任で登山隊に参加、よって今までの登山

隊のように隊長が指示をしたり命令を出して隊を運営するのではなく、各隊員自身が主体となっての行動を取り、それらの調整役としての隊長であり、したがって隊長には権限がないかわりに責任もないということである。リーダーシップ指向というより各メンバーの自覚と責任に基づくメンバーシップ指向の隊編成がいかにも、中高年チームらしい編成であった。これからの新しいチーム論として実践出来れば、より民主的な登山隊の編成が出来るわけであるが、今までのように強いリーダーシップの牽引力で引っ張ったチームづくりから、一人ひとりのメンバーの自覚に基づくチームづくりの時代とかねてから私なりのチーム論を考えていた。真にそれを実践したのが、このチョ・オユー隊だったが、若い頃に厳しい登山を経験してきた頑固な中高年隊の一人ひとりの個性を尊重し、満足させるにマッチした隊の編成だったとも思っている。

ルール、マナー、自覚を守り

この様な編成はややもすると放任的、開放的な登山展開に隊運営が難しくなることも考えられ、また各隊員からの不平、不満も多いかと思っていたが、結果的に見て、心配する程のこともなく、これは各自隊員の人格的なものもあるが、自分の責任で自分の体力の限界まで思い切り挑戦しそれぞれが納得した登山が出来たことが功を奏したとも言えるのであろう。真に中高年的発想であり、かつ実践だったといえる。

中高年登山というとどうしても遭難とか事故の心配性がまず先に立ち、計画や行動を自重しなければいけないような社会の目がある。しかし〝社会の目〟を気にするのではなく、行く登山者自身の自覚をもたなくてはならない。口はばったく言えばこれも中高年登山者のルールであり、マナーなのかも知れない。登山や山歩きが中高年に好まれる理由のひとつに自分のペースで出来るスポーツということがあるが、それだけに責任も自分でとり、他人に迷惑をかけない精神が必要である。自分のペースを飛び出して「年寄りの意気がり」や「記録的挑戦」など考え違いをしたり、思い違いをすると大変なことにもなる。こういった中高年登山の正しいルールやマナー、中高年者という正しい自覚のなかでのスポーツとしての登山は生きがいになり、それなりに意義も大きい。

私は一九八〇年チョモランマ北壁隊に参加したとき、トレーニング不足ばかりが気になり、ヒマラヤなどの高所登山においては、すでに自分が高齢者であるという、自覚や意識を持たず、若い頃の気持のままで登ったため急性心筋梗塞を起こしてしまった。

こういった自分の生涯登山をふりかえってみると、自分は心臓が悪いんだというハンデキャップを認識していると、けっこう健康や体調への注意が高まり、自ずと行動が慎重になって安全がたもたれるものであるということを実感している。私のように身体障害を実際にもっていなくても、中高年登山者として常に「高齢ということ自体がひとつのハンデキャップ」という考えをもって山に入ることが必要なことなのかも知れない。しかし、あまり強く意識し過ぎてかえって登山の楽しみを失ったりするので、ほどほどに中高年、高齢者という意識をもつことが、自分たちに重要なことなのだと思う。あえて中高年対策なる登山指導を考えるなら、そういった自覚を登

山者自身にもたせるような対策こそ重要な問題で、規制とか、警告のようなものをもっての中高年登山の対策は、好ましくないと考える。自由におおらかな登山が出来る環境のなかでいかに事故を少なくし、安全が確保出来るかということは理想論なのかも知れないが、少しでもそれに近い登山が出来るなかでの対策を考えていきたいものである。

私たちが五十歳以上でのチョ・オユー登山を試みたころ他で海外登山遭難が多発した。十五人もの中高年者パーティーのヒマラヤ八千メートル峰登山で、四人も登頂に成功しながら何の事故なく、しかも全員が満足して下山出来たことは、各メンバーが中高年といういい意味での自覚のなかで登山に挑んだ結果だと考えている。事故のないことは当然のことで、威張ったり、誇ったりする問題ではないが、今、中高年が無事に帰ることも登山の成果のひとつと考えて満足することも悪いことではないだろうと勝手に喜んでいる。そして、高齢者が八〇〇〇メートルに登ったということよりも、それぞれが満足して、無事日本に帰って来たことに誇りを感じている。

今回の中高年チョ・オユー隊の別名を「銀亀（シルバー・タートル）卓奥友峰登山隊」と、中国流にも名付けたが、もしもし亀よ亀さんよ…ではないが、年寄った亀がゆっくりでもマイペースで最終地点まで頑張るという意を含めて名付けた。中高年…真に亀さんのごとく山登りを続けていきたいというのが私の念願でもある。

＜高齢者登山・私の場合＞

（文中①…⑦となっているのは、①生年・年齢、②登山を始めてからの簡単な経緯、③ここ二～三年の山行回数および主な山行、④今日まで元気に山登りを続けてこられた主な要因、⑤健康法または訓練法、⑥安全登山のために心掛けていること、⑦日頃山登りについて考えていること、について稿を寄せてもらったものである。）

笠原　藤七

米寿の平ヶ岳登山

一九〇三（明治三十六）年六月の生まれだから満八十九歳になる。昨年、米寿で登った平ヶ岳について記す。

私は一九五二（昭和二十七）年五月、魚沼駒から中ノ岳を経て、県界尾根を縦走して、尾瀬へ出たことがある。稜線はまだ雪が続いていた。平ヶ岳へかかった時は、生憎天候が悪く、まだ雪に埋もれていた頂上をかすめて通ったというだけであった。

次いで一九七一（昭和四十六）年七月、二、三十名の団体で鷹ノ巣から登ったことがあるが、その時は時間の関係で、玉子石までしか行っていない。それで機会があったら、こんどこそは平ヶ岳の全貌を探りたいというのが、私の年来の宿望であった。

なお、この度の登山に就いては、私が一九五四（昭和二十九年）三月、黒又川流域の積雪調査に協力して、三ツ又小屋で世話になったことのある星幸一君が、近頃中ノ岐川流域の開発が進むにつれて、車で奥まで行けるようになり、平ヶ岳登山が大変便利になったから是非来ないかとの再三の誘いがあり、私も年が年とて、この好機逸すべからずと、勇躍決行にふみ切ったのである。

さて、前書きが長くなったが、いよいよ本文にはいろう。

一行は笠原藤七（88）、牧野武彦（52）、清水一郎（48）、丹羽実（44）、案内人星幸一。

八月十七日朝八時村松の笠原宅発。三条・燕インターより高速道路に入り、小出インターで出る。十時湯中居の星幸一君を訪ねたら、嫁さんが一人、おやじさんは銀山平へ先行して待っているとのこと。間もなくシルバーラインの隧道に入り、三十分にして銀山平に出た処に星君の待つ小屋があった。そしてそこには旧知の佐藤広文君の顔もあった。彼は一九六二（昭和三十七）年二月北海道のニペソツ登山以来旧知の友。十時就寝したが、夜は鼠が走り廻って大変であったというが、私は幸なことに、熟睡していて何も知らなかった。

八月十八日　晴　六時伝之助小屋発、車はひたすら早暁の湖岸を東、南進して、雨池橋よりいよいよ湖岸を離れ、中ノ岐川に沿って遡上、池ノ沢の出合の先で車止めとなる。朝食。七時行動開始、右に剱ガ倉の岩峰を眺めながら登るとやがて針葉樹林帯に入り、潅木帯を過ぎると広々とした草原に出た。途端に前方に大きな濃緑の饅頭型の山が、どっしりと控えていた。これぞ平ヶ岳の頂稜である。この度の山は、私にとっては、出直しのきかない山である。是が非でもあの頂稜は極めなければならないとの執念が生まれて来たのであった。

玉子石十一時。平ヶ岳沢の源頭部の冷た

い清水で昼食十二時。平ヶ岳頂上二等三角点十三時。長年の宿望が満たされた感慨深い一時（ひとしお）であった。十三時三十分下山開始。車に帰ったのは二十時ともう暗くなっていた。そして一路帰途を急ぎ二十二時小出。二十三時三十分帰松。

余談　ある記録によれば、平ヶ岳登山の最高齢者は八十三歳と聞き、はからずも八十八歳の私がその記録を破ったことになり、何よりの米寿記念と喜んでいる。（越後支部）

（編者註―笠原藤七氏は慶応義塾大学在学中は山岳部に所属、卒業後は家業の山林業に携わる傍ら山登りを続けられ、一九四三年三月積雪期の飯豊・大日岳を石転沢側からの初登のほか川内の山を開拓された。それらは茗渓堂発行の近著『撫林　私の山旅』に詳しい）

小林太刀夫

①一九一二（明治四十五）年三月生まれ、八十歳。

②十五歳（中三）富士山（※＝単独）、十六歳烏帽子・槍・穂高。十七歳（一高）甲斐駒・仙丈・白峯。一高旅行部に入り一九二九（昭和四）年二月赤岳・阿弥陀、四月仙丈、五月立山、七月千丈沢・北鎌・小槍、八月赤石・悪沢、十月清津川より白砂山・白砂川（△＝『山岳』所載）。一九三〇年一月至仏・会津駒（△）、三月三国川より中ノ岳・八海山、四月マチガ沢より谷川岳（△）、奥穂高、八月会津駒より只見川下り（※）、万太郎谷より谷川岳（※△）、十二月早月尾根試登。一九三一年七月前穂高北尾根下り（※）。一九三三年四月北穂（※）、御岳。一九三五年三月仙丈・北岳・間ノ岳・塩見（△）。東大時代は時々のみ。卒業後はほとんどご無沙汰。昭和三十年代に数回夏山のみ。

一九七八（昭和五十三）年頃より再開し毎月三～四回。七九年北岳診療所開設。以後毎夏数回乃至十日の勤務を続けている。

③一九八九（平成元）年度三十九回、九〇年度四十一回、九一年度四十回。夏山の富士山、北岳の他は関東甲信越、東北、北海道の中級山岳。最近冬は雪山を敬遠し低山が多い。

④高校時代は月一、数日であったが、大学入学後は医学部のため実習が多く、あまりさぼれず、山行回数激減。卒業時、もう終りと思って、仲間と白馬に遊んだ後、単独で小谷より峠を越えて笹ヶ峰、火打に登り、妙高を越えて燕、さらに志賀高原より白根を越して草津、さらに鹿沢へとスキーを楽しんだ。一九三七年第一回応召で北支・中支、一九四一年第二回応召でハルビンに行き発疹チフスに罹患、骨と皮となって内地還送、除隊となった。一九三五年頃になってやっと山歩き可能となり、富士山、立山・剱、穂高、湯俣・三俣蓮華・笠と歩いたが捻挫で中絶。一九六八年アンプルのガラス破片が目にささり、すぐ抜いてもらったが、あとブドウ膜炎より白内障となって左眼失明、もう山は無理と思ってあきらめていた。一九七二年、東大を定年退職後、しばらく伊豆に遊び、一九七五年より昭和大学藤ヶ丘病院長奉職、七八年頃ようやく病院運営が軌道にのった頃より、ポツポツと低山歩き、ついで比較的楽な高山、さらには雪山へと進んでいった。七十歳で退職したが、まだ十分歩けた。七十五歳を

過ぎる頃より次第に体力の減退を自覚し、専らマイペースで歩くことを続けている。

要するに、四十年余のブランクの後、低山より次第にグレードアップする山行リハビリテーションにより、ある程度回復し、維持していたが、経年とともに七十五歳頃よりの体力低下に伴い、程度を下げて続けているのが現状である。

⑤週二～三回の早朝散歩、速歩、ジョギング、体操。

⑥絶対無理しない。マイペースをまもる。

⑦歩けるうちは山歩きを続けたい。楽しみを伴うよい健康法と思う。

望月　達夫

一九一四（大正三）年生れ。七十八歳。

山登りは中学時代から始め、初めて山らしい山の金峰山へ登ったのが中学三年（一九二八）、北ア（燕岳）、奥秩父（雲取山―雁坂峠）へ行ったのが中学四年（一九二九）、十五歳のときである。一九三二年（昭和七）東京商大（現一橋大）予科に入学と同時に山岳部に入り、一九三八年（昭和十三）卒業、後間もなくJAC入会。

社会人になっても出来るだけ山歩きを続けたが、一九四一年（昭和十六）七月、兵役に就き大戦中はキスカ島で九死に一生を得て敗戦となった。ソ連軍の捕虜となり一九四七年（昭和二十二）十二月復員した。その間の六年半と、その後の三年ぐらいは殆ど山歩きはできなかった。一九五一年（昭和二十六）三十七歳ごろからほぼ途絶えることなく山登りを続けて現在に至る。

但し一九五一年以降一九七二年（昭和四十七）までの二十余年間は仕事が繁忙をきわめたため、月一回年間十二回を目処（めど）として出かけていた。登山回数がふえたのは、むしろそれ以後、六十歳になってからである。

また一九八七年（昭和六十二）四月に妻が大病し、その後四年半の病養生活を経て一九九一年（平成三年）十二月に病没したため、その間は登山の回数日数共に激減している。

社会人になってから、いちばん出かけられたのは、完全に職場を離れた一九八五年（昭和六十）七十一歳のときで、この年は登山回数年間五十三回、延日数九十五日に達したが、それ以後は残念ながらそれを超えた年はない。

この二、三年の山歩きは右の理由から大きく激減しているが、一応左記する。

一九九〇年（平成二）四十四回、日数延六十七日。日帰り登山が多く、五月下旬金剛堂山、青海黒姫山、六月初旬天狗岳（北八ツ）、六月下旬佐渡の山、七月上旬南蔵王、八月下旬白山の別山から石徹白、十一月甲州の常葉山（唐松山）、十二月ハト峰、鶏岳など。

一九九一年（平成三）二十八回、日数延三十八日。日帰り登山が多い。一月三ッ界山、尺丈山、二月白浜山、四月日暮山、荷鞍山、五月光兎山、鷲ヶ巣山、角落山、六月斑尾山、十一月角間山など。

一九九二年（平成四）五月上旬迄十二回、日数延十四日。依然日帰り登山が多い。三月向山（奥利根スキー場付近の）、四月向山（奥多摩）、五月板沢山など。

現在まで元気に山登りを続けられた要因を考えてみると、元々私自身頑健な体軀ではなかったものの、特に大病もせずに過したのが一番大きかったと思う。その基に

なったのが、ごく当たり前のことながら暴飲暴食や睡眠不足などの不健康なことを、つとめて避けたことであろう。何時でもすぐ山へ出かけられるよう、平素から体調を整えておくことが不可欠だから、普段からできるだけ健康的な生活をおくるようにした。酒は生来殆ど呑めない体質であるが、若い頃パイプ党であったものの約二十年位前から禁煙者となった。

自分が体調を常に整えておくと同時に、近親のなかに病弱者が出ないことも、山行きを左右する重要な要因になる。

私自身は健康法とか訓練法といったものは特にやっていない。ただ七十歳を過ぎてからは、老化の速度が早まることを顧慮して、山行の間隔が一週間以上ひらいたときなどは、できるだけ近所を約一時間ぐらい歩くようにつとめた。

安全登山について――私は自分の趣味のために、他人に迷惑をかけることは絶対に回避すべきことと思っているので、六十五歳ごろを過ぎてからの単独行は厳禁している。元々私は、青壮年時代でも単独行の回数はごく少ない方である。老年になってからは、なるべく中年ぐらいの元気のある人を仲間に入れて登るようにしている。それは最初からサポートして貰うということではなく、万一の場合老人だけの仲間よりずっと強力だからという理由である。

現在の年齢で、数日間連続して毎日六、七時間以上行動することはむずかしくなった。殊に少し重い荷をかついだ場合は。それで日帰りでもいいから一週間乃至十日に一回ぐらい（即ち月に三～四回）出かける方が体がらくで長く続けられそうである。一日十時間以上の山行なら、精々二日ぐらいが限度であろう。筋肉の回復力もぐんとおそくなる一方、あまり間をおいて、体軀、殊に脚を使わないとすぐダメになるように思う。

三ッ石　清

①一九一三（大正二）年生まれ、七十八歳。

②少年鉄道員として鉄道省勤務。十五歳の時、中央沿線の山で山の洗礼をうける。以来、大菩薩嶺、甲斐駒、磐梯、吾妻、苗場、妙高など毎土曜は夜行に。鉄道省山岳部で富士山に五月に登る。スキーを始める。十九歳頃、一人で富士に何回も登り、『強力伝』の小宮山さんと三月の御中道を歩いたこともある。

一九三九（昭和十四）年、丸ビル一階にJTBの剛健徒歩旅行相談所が開設され、相談員になる。一九四一年二十七歳の時にJAC入会。塚本繁松氏の推薦による。召集を受け、ニューギニア戦場から生還、先ずは守屋山に登る。

参考のため、私のこれまでの遭難、遭難未遂経験を記す。

六十八歳の時。十月北岳で幕営。間ノ岳から塩見を目指す。同行は三十二歳の友人。私は完全装備を背負子で行く。三峰岳への稜線で転落、岩棚に引っ掛かる。頭部負傷、出血多量なるも止む。引き返し北岳で幕営、自力下山。後遺症なし。背負子がいけなかったか？

七十三歳の時。急性心不全か。二月、山スキーで野麦スキー場から小鉢盛山（二三七八メートル）に若い友人二名と登る。頂上直下で私のみ残ることに決め、彼等は三十分で戻るとのことで、ツェルトを張ったが、十

分に防寒対策もとらず、バーナーも無し。気温零下八度、風速一〇㍍くらい。結局彼等は九十分後に戻ったが、その頃私は脈をみると不整脈で、その乱れ方がひどい。二人に遅れながも無事下山。が、帰宅後深夜心臓部にしめつけられる感じ強く、病院へ行く。検査の結果は心不全とのことで、一週間くらい心臓に強い圧迫感があったが、間もなく完全に治癒。

七十歳の時。十一月、単独で後方羊蹄山に登る。山頂火口際で三㍍吹き飛ばされ岩に身体をぶつけ腰を打ち指を負傷する。

③ここ三年間の年間平均登山回数は二十七回、入山日数四十二日（低山も含む）。

主なものは、積雪期では藻琴山、御岳山八合目、戸隠山（登頂不能）、野伏岳、鈴鹿山系、伊吹山。無雪期ではトムラウシ山、音更山、石狩岳、燧岳、杓子岳、伊吹山北尾根、鈴鹿山系、御前山、恵那山、茶臼山、三峰山（三重県）、高千穂峰、韓国岳、阿蘇山など。

④二十年前、五十八歳の時、脚の丈夫なうちにと、北海道の山に集中することに決めた。以来、本州と違う深い静かな無人の山の崇高さに目覚める。七十回渡道。幌尻岳には七回登頂。六十三歳で北海道で山スキーを始め、六十九歳から七十五歳までに札幌、オホーツク等のスキーマラソン大会の二十五㌔レースに五回出場、寒さに負けない体力、気力をつくる。六十九歳で体力の低下を防ぐためにマラソンクラブに入会し、ジョギングを毎朝行うとともに各地のマラソン十㌔レースに出場、六十八歳の時健康マラソン七段の免許受ける。

この間、六十六歳の時、環境庁自然公園指導員を委嘱され、国立・国定公園をパトロール、主に東日本の山々を歩く。またこの頃から七十二歳まで長野県立山山岳総合センター主催の登山講習会に参加、夏山、冬山、春山、山スキー等八課程に十二回参加。修了。六十九歳でＪＡＣに復活入会。

⑤ツェルトによる幕営（積雪期を含め）に心掛ける。九一年は一年間に二十二ヵ所、三十五泊。東海自然歩道を毎月歩く。冬は鈴鹿山系スカイライン等で歩くスキーでピストン登降をする。七十七歳まではバスは必ず二停留所手前で乗降。堅く守る原則として、七階に住むがエレベーターは使わず階段を歩く。地下鉄のエスカレーターに乗らない。毎朝冷水タオルで全身摩擦をする。煙草、アルコールは青年期からやらない。コーヒーは一日二杯、緑茶は多量に飲む。

ここ三十年間、紳士靴ははかない。外出時はビブラム底の短靴か軽登山靴をはく。

食事については、戦後はずっと独居生活であり、外食せず自炊に徹している。時間節約のため主食はパンにして、以下の品を普通の人の倍の量を食べる。キャベツ、人参、たまねぎ、わかめ、納豆、大豆と昆布の煮もの、梅干し、干し魚、鯖の缶詰、卵、牛乳（多量に）、ピーナツ、バター、キャラメル。牛肉・豚肉は食べない。

⑥日帰り山行でもザックの底にツェルト（四五〇㌘）を入れてある。地図、磁石、高度計は常時持参。食料は多めに。日曜山行の時は金曜の夜は十分に寝る。

非常用として、インドメタシン入りバンテリン・クリーム、キャラメル（筋肉疲労回復用）、心臓用貼り薬（ただし使用したことはない）、バンドエイドを持参。

毎朝起床前に脈をはかっておく（現在毎分五十一）ほか、登高中に自分でたびたび

脈拍を調べる。なるべく心拍数が百二十前後で登るようにしている。

⑦登高時に、六十五歳以上の仲間がいる時は二十七分毎に三分くらいの休みをとる配慮が望ましい（多くは一時間歩いて十五分くらい休む）。高齢者登山といっても、宿で酒盛りを楽しむ会合が多いのではないか。早目に寝て、翌日暗いうちに出発して、ゆっくり登ればＪＡＣ会員ならば八十歳ぐらいでも山登りはできると思う。（東海支部）

港　叶

①一九一五（大正六）年十月生まれ、七十六歳です。私の年齢に対する概念は、現今においては百歳を目標にしていただきたい。その意味において、六十歳代は青年期、七十歳代は壮年期、八十歳代は実年期、九十歳代は熟年期、百歳に至ってから老年期です。七十、八十は鼻たれ小僧です。気分を若くもって、明るく元気に暮らしていきましょう。

②私の田舎には西日本一の伯耆大山があります。幼児から大山を眺めて生活してまいりました。その大山に登り始めたのが小学校五年生の時です。当時はバスもその他の乗り物もありませんでしたので、ただただ歩いて行くしかありません。

私の生家は、最近新聞紙上を賑わしている「上淀廃寺跡」の淀江町で、そこから大山までは約十五キロ、そこを八歳年長の先輩に連れられて、弁当を持って早朝から歩き続けて、夕方にやっと大山の宿坊に到着。泊まった宿坊は『暗夜行路』で有名な蓮浄院で、頂上はこの部落から眺めただけ。翌日の下山コースは大山口駅経由で、またまた歩き続けました。夕闇迫る頃やっと帰宅できました。この大山登山がきっかけで、山登りが病みつきとなり、小六から旧制米子中学の五年間も毎夏大山登山をやりました。

中三の時に初めて頂上登山を達成し、山頂からの眺めは日本一であると思いました。頂上の石室に一泊して夕焼けの俯瞰の景色はこれまた世界一であると感じました。

その後、早稲田の山岳部に入り、谷川岳を第一歩に、毎休暇の合宿で鍛えられました。就中、一九三九（昭和十四）年正月の台湾、新高山（玉山）の主峰北稜の初登攀に成功し、大感激を土産に神戸港に帰りました。

卒業と同時に兵役が待ちかまえており、兵役中は大阪の高射砲陣地の隊長を務めていたので、毎月の外泊休暇の三日間は田舎の家へ帰り、大山の日帰り往復や大山スキー場でのスキーを楽しみましたが、さすがに終戦の年にはそれもかないませんでした。

③七十歳に入ってからの山登りは、昔の仲間と五名で半世紀ぶりに新高山に阿里山経由で頂上まで登って帰りました。昔の現役時は八通関経由でした。この玉山登山が特筆すべき山登りで、その他では、昔の馬力が無くなりハイキング程度であり、大雪山、岩木山、蔵王、那須岳、石鎚山といった山です。

冬は大山の国際アルペン競技スキーのコースのスタートからゴールまでを休みながら滑って下っております。四～五年前までは毎年北海道の富良野とニセコのリフトの終点から下までを滑っておりました。長

い距離の滑走と高度差のあるコースが面白くてたまりませんでした。

⑤夏は家の前が海ですので海水浴、その他ジョギング、速歩。歩くことは約一時間から一時間半くらいを続けております。特に終末の仕上がりでは、百㍍競走の気分で年寄りの現有体力で疾走、終末体操でおしまいにします。その他、庭の鉄棒でのぶらさがり、竹刀の素振り、腕立て伏せ、腹筋のそり返り、両足でジャンプ、ゴルフクラブの素振り、首の前後左右と回転運動で肩のこりを防いでおります。とにかく要は体を動かすことを心掛け、何はともあれ歩くことが一番です。

特に山登りは、頂上からの高度差がそのまま気圧の変化差ですので、これに耐えることが体を鍛えることになります。また山で良い空気を腹いっぱい呼吸することも良い健康法の一つです。

⑥安全登山は、学生時代から心掛けております。いつでも、どこでも、山登りは真剣です。油断したことはありません。常に用心深い注意を持ち続けることです。

四季を通じて、山登りは気のゆるみが一番恐いことです。油断大敵です。何かあったら早目に引き返すことです。私も過去に三回の命拾いをしており、大いに教訓になってきております。

それに山を汚さないこと。ビニール袋は常にリュックの中に入れております。

⑦食べ物は常に栄養を考えて、特に齢をとってからは魚を多く摂り、鰯や鯖等の青魚が良いということです。肉は油身の少ないものをいただく様に心掛けております。年齢とともに骨がもろくなりますので、カルシウムの補強に小魚は骨ごと食べ、昆布やわかめ等の海藻類を摂るほか、野菜や果物でビタミンCを摂るよう心掛けております。昼食は普通にとり、夕食は腹七分目にしておくことも大切です。健康の維持に努め、いつまでも元気でありたいと願っております。元気であれば、山登りは続けられます。（山陰支部）

坂倉登喜子

山があるから生きてきた八十年

私の山歩きは幼い猟人日記から始まった。父親の趣味だった狩猟について歩き、犬と一緒に山野を駆け廻ったのは、大正時代で小学生の頃であった。

その頃は朝早くから日暮れまで歩き、山に耐える生活を父から学び、花をいつくしむ心を母から受けつぎ、父母の名前を一字ずつ貰って登って喜ぶ子と名付けられ、自然との出会いの喜びを、幼い頃から知ることができた。自然の美しさを眼で、自然の響きを耳で、自然の喜びを心で受けとめるようになったのは、絵を習い山の優れた本を読み文章を書いて、自然を見つめるようになってからであった。

私が山らしい山に登ったのは、暫く近江の琵琶湖のほとりに移り住んでいた頃、伊吹山に一九二四（大正十三）年初登、冬は三合目までスキーで登り、一台の短いスキーを交代で穿いて、滑り下りてきたのも楽しい思い出である。

そして一九二七（昭和二）年東京に戻り、日本電気に入社して職場山岳部に入り、男性たちと冬の谷川岳などへ登って、多くの厳しい登山の良き経験と、山の友情による尊い思い出を残した。

一九三五（昭和十）年頃から登山が盛ん

になり、年間登山回数も増えた頃、男性と競い合い一回差の年間五十四回で勝ち、賞品に登山講座一揃いを貰って喜んだ、山に熱中した時代があった。

その当時東京付近の登山コース実地踏査取材で、毎週のように山を歩き、何冊かの案内書の出版に協力、戦時中も休むことなく、代用食を持って、登り続けて終戦を迎えた。

戦後は再び日本交通公社に入社して、資料関係の仕事から後に山と仕事の両立ができた。

一九四七（昭和二十二）年故入沢文明、故山下一夫両氏の紹介で日本山岳会に入会して、各大学山岳部のＯＢの指導を受け、槍・穂高周辺の山を歩いた。入会と同時に出来た東京支部に即入部して集会、編集、婦人係役員を担当、四九年、諸先輩の協力で婦人部を纏め設立した。

女性登山の分野では、婦人部として国体登山部門でも女性役員として出動し、冬富士登山にも同行したり、東京都山岳連盟の婦人部担当役員としても活動し、感謝状を貰った。

ＪＡＣ婦人部も年々会員が増え、ある程度の仕事もまかせられるようになったので、一九五五（昭和三十）年、女性の初歩指導の重要性を考え、女性らしく登山を目指して、清く優しく強く生きるエーデルワイスをシンボルとして、私なりのエーデルワイス・クラブを創立して、日本山岳会に団体加入し講習会等に参加した。

以来三十七年間事故も無く続け、女性登山の向上と人間性の確立を計り、心豊かな女性の山岳会として、内外の登山活動を行った。

私はお茶の水体協内に日本山岳会のルームがあった頃、須田町の交通博物館に勤務していたので、務めが終わると体協坂の裏側の入口から登って毎日ルームに通い、入り浸りで会の仕事に熱中した。その後三水会やクラブイズムを語り合う土曜会に所属協力して久しいが、在籍四十五年間、日本山岳会の歴史と共に、歩んでこられたことを幸と思っている。

現在は八十周年記念山岳展に展示した資料を元にして、将来の山岳博物館設立を夢見て、前佐々会長を中心に「山岳博物館を考える会」を作り、そのメンバーが加わって資料委員会が発足し、貴重な山岳資料の蒐集を始めた。

やがてＪＡＣの完璧な山岳博物館が完成された時には、女性登山史と共に女性登山の歴史資料コーナーを作って、後世に残したいのが、私の永い間の夢であり念願なのである。

私はこうして日本山岳会に入会以来、女性登山の仕事を続けられたことを、心から喜びとして、今後も続けるつもりである。

さて私自身八十の坂を越え、既に歴史の中の人物ながら、日本山岳会の大先輩の皆様からの精神的な指導や、優れたリーダーの教えを受けて、山があるから生きてきたにしても、ＪＡＣで受けた恩にむくいるためにも、夢とする山岳博物館設立への仕事を、最後の奉仕として、協力して行きたいと思っている。

今日まで山に生きてこられたのは、多分に日本山岳会の諸先輩に出会って得た知識を、多くの後輩に与えられたことの、私の生き甲斐が、山に生きてこられた要因であると思う。

自分自身で楽しむ山ばかりではなく、自分で経験した知識を教えられる立場に立って、心豊かに自然に親しむ術を知った女性たちの喜ぶ姿を見て、私は今生き甲斐を感じ、次の時代に生きる女性に期待をかけている。

私は常に健康保持を心がけコンスタントに毎月三回位安全な登山を続け、目的の夢に向かってそれの実現に努力して、山仲間達と共に歩むことが、今の私の持ち続けた気力だろうか…。学生時代総てのスポーツで体力作りしたので、特にトレーニングはしていないが、毎月休みなく登って夏山や海外の山に備えている。今後は世界のエーデルワイス探訪を目指し、山と花があるから山に生きて、まだまだ夢の実現に向かって、生涯現役で花追い人生を続けて行けたらと思っている。

中高年女性に対する考えは、既に十年前位から当クラブの入会年齢層で察知できたので、初心者の基礎的指導を心がけることにした。中高年登山者は先ず山を知る勉強から始め、健康管理して趣味と目的を持ち、自己過信せず年に応じた安全登山を心がけて欲しい。

昨年、NHKラジオで「山があるから生きてきた」の放送をしたところ、全国から感激の便りがきて山に生きた幸を喜んだ。

①一九一〇（明治四十三）年、東京日本橋生れ。

②大正初期より登山を始め、伊吹山に初登後全国的に登山、一九四七年日本山岳会入会、一九四九年婦人部設立、一九五五年エーデルワイス・クラブ創立、会長。

③年間三十五回～四十回位。

④燕岳、常念岳、唐松岳、霞沢岳、北岳、白山、大山、石鎚山、小川山、瑞牆山、兜山。

海外ではペルー・アンデス、ヒマラヤ、インド、カナダ、ブータン、ヨーロッパ・アルプス毎年。

川崎　精雄

①八十五歳、一九〇七（明治四十）年生。

②中大山岳会（部）、日本登高会、日本山岳会、南会津山の会、その他幾つかの会に関係をもつ。最初夏の北アルプス、他の季節は一般の山というパターンだったが、上高地へ車で入れるようになった頃から、利根上流を含む上信越や会津など未開の山域に目を向け、特に積雪期を目指した。また意識的に単独行を多くした。

③月一回の場合もあり、五回のこともあるから平均二回半位か。悪沢岳、恵那山、斜里岳、トムラウシ、木曽駒の北の経ヶ岳（天幕使用）、鉢森山、仙ノ倉、皇海山、燧岳（風雨）、船形山、八幡平、至仏山（風雪）。他に十枚山、篠井山、笠取山、米山、七時雨山。南フランスとシャモニー二週間。

④禁煙、節酒など健康に留意、邪念を持たず、登山を続けたこと。

⑤必ず毎月登ると決めている。毎日一時間程度近くの善福寺川緑地公園を歩き、途中でラジオ体操程度の自己流体操をやる。（立ったまま腰を折り、掌を地面に着ける。膝の屈伸運動をやる）。

数日おきに公園内や近く住居地の階段（駅の階段より段差稍小）を五百段乃至千五百段上下する。また公園には「渡り歩く台」ともいうべきさまざまな形の段を持った子供用の施設が五個並んでいるので、これを往復渡り歩く。もう一つ低い鉄柵（上

部は細い平面）を何歩か渡ってみる。運動靴でなく古い軽登山靴（片方約六五〇㌘）だから渡りにくい。然し運動靴に比べて実戦的効果がある。

買物の使い走りや庭木の手入れをはじめ、家事に手を出し、出来るだけ体を動かす。頭脳の老化を防ぐため、若い頃からの俳句生活を続けている。

⑥老人の山、ということを真っ先に念頭に置いている。その一つに、何と言っても脚力が弱りバランスが悪くなっているので、岩場のある山はなるべく敬遠する。未登の山でも他人に迷惑が及ぶといけないので断念する。

その二に、天気予報が悪ければ躊躇なくやめる。老人の体は気温の変化に対応が難しいからだ。③のところで記した燧岳と至仏山の場合はどちらも熟知の山だし、確りした同行者もあったからである。

その三に、体調が変と感じたら直ちに中止する。老人は風邪でも発熱しないから注意が要る。つい先だっても越後の日本平山へ出発する間際にやめたことがある。若い頃風邪で声も出ないのに丹沢縦走をしたら全快したことを思い出したが。体力を考えて荷物を軽くしカメラなど持たないし、夜行日帰り登山もやらない。

その四に、七十歳頃から近郊の山といえども単独行動をやめた。若い仲間に同行をお願いしているし、悪場では確保して貰うこともある。これは老人として恥ずかしいとは思わない。

最後に、現在は近郊の山なら厳冬でも出かけるが、本格的な冬山は望めないし、行こうとも思わない。しかし軽アイゼンの春山ぐらいなら結構楽しんでいる。

⑦国内の山に関して一言すれば、ダムや道路のおかげで余りにも開け過ぎ登山の妙味が失われた。これ以上自然を損ねないようにするのが、山登りを好む者の責任と考える。

牧野　衛

一九〇六（明治三十九）年九月三十日生まれ、満八十六歳になる。

十八歳の夏、前橋市に住んでいた義兄に誘われて赤城山に登った。前橋を午前二時に出発赤城山の黒檜山に登り、帰宅は夜八時であった。勿論往復徒歩である。山麓で迎えた日の出は美しく今だに忘れない。

一九二六（大正十五）年の夏に学友と再び別のコースで赤城山に登った。これが私の登山を始めるきっかけになった。その後社会人になって職場の同僚たちと奥多摩、秩父、大菩薩、丹沢、箱根などの山歩きをしたが、勤務先が建設会社で、休日は僅か月二回、遠出は無理であったから、前夜発の徹夜で登り、休日をフルに使うことが多かった。一九四二（昭和十七）年、一九四三（同十八）年頃は戦争も烈しくなり、建設工事現場は資材の配給も滞り開店休業の状態が続いた。お蔭で暇も出来たので白馬岳、尾瀬、槍ヶ岳、奥秩父など遠くの山へ足を延ばした。その後空襲も烈しく、交通事情も悪化するばかりで山行どころではなかった。

戦後一九四七（昭和二十二）年一月霧の旅会に入会、会の山行には必ず参加し、会員の神谷恭さんとは個人山行を度々共にした。一九四八年日本山岳会に入会、同年十一月の富士山冬山講習に誘われたのがJACの行事の初参加となった。

一九五一年から十二年間、静岡で勤務したので地元の山の会にも入会して、主に南アルプスの山に登った。一九六九年定年退職してからは北海道はじめ九州、沖縄の山にも出掛けて、今日まで登り続けている。

ここ二、三年の山行は、一九八九年度の山行回数は二十四回、延べ日数四十六日、主な山は愛鷹山三回。奥美濃蕎麦粒山。黒法師岳。千枚、荒川三山、小河内岳、三伏峠までの縦走。

一九九〇年度山行回数十四回、延べ日数三十日、主な山は山上ヶ岳から前鬼までの大峯山奥駈コースの縦走。夜叉神峠から御座石鉱泉まで鳳凰三山縦走（単独）。黒四ダムから欅平までの黒部下の廊下（単独）。

一九九一年度山行回数二十一回、延べ日数五十四日、主な山は沖縄石垣島の於茂登岳、西表島浦内川沿いに島の縦断（単独）。沖縄本当与那覇岳。小川山、五郎山。蓮華岳、針ノ木岳、爺ヶ岳、鹿島槍ヶ岳。平ヶ岳。縞枯山から天狗岳までの北八ヶ岳縦走（単独）。天狗山、男山。

現在まで山登りが続けられたのは、永年病気をしたこともなく健康に恵まれたこと、第二に気の合った山友達に出会っていつでも気楽に山行が出来たことである。

現在私の住居は静岡県天竜川の河口に近い所で、高い所は天竜川の堤防と海岸の防波堤だけの平坦な農村地帯である。ここに移り住んで二十三年になる。毎朝七～八キロ歩くのを日課としていたが登り坂のないのがものたりなかった。一九八六年天竜川河口の海洋公園内に人工の山、十八メートル余の丘が造られ、後に国土地理院が四等三角点標石（点名竜洋富士）を設置して山の形も整い、町内の最高点になった。以来格好の訓練場として雨が降らないかぎり毎朝家から往復十キロ歩き、山には十回登ることを続けている。これは登山を続ける上でも、又健康を保つことにも大変役立っていると思う。

安全登山で心掛けていることは、昔から云われている無理をしないこと、迷ったら元に戻ることをモットーにしている。そして藪山では必ず目印の赤布を結び付け、縦走で戻らないときも万一を考え赤布を付けて登る。単独行のときは、腰に大きな音の出る鈴を下げて歩いているが、いつかも途中で出会った登山者に「熊でも出るんですか」などからかわれたこともあった。しかし岩場から落ちて動けなくなった人が、近くに落ちていた空缶を叩いて、通りがかりの登山者に助けられた例もある。用心にこしたことはない。木曽の藪山に入ったとき、釣人からこの山は熊が出ると注意されたので、蚊取線香を腰に下げて登った。身の安全を願って、良いことは何でも実行している。

南アルプス深南部の鶏冠山に登ったとき、南信濃村から頂上を往復したが、思ったより時間がかかり、下山の途中で日が暮れた。私たちは不用意にも懐中電灯を持って来ていなかったので、真暗やみの笹藪の中を足で踏跡を探りながら歩いていたが、ついにその踏跡も分からなくなった。そのとき連れの一人が、足のさわりが固いことからこっちだと、いわば獣的感覚で、はっきりした径を捜し当て、無事に下山したことがあった。藪山歩きでは獣的勘が必要になる場合が度々ある。この勘を養うためには、若い時から単独行をして、山のあらゆることを自分で体験して経験を積むことで

ある。私は若いときから度々単独行をしたが、幸い進退窮するような困難に遭遇したことはなかった。奥深い山中の一人寝で妖怪めく獣との出合いはあったが、里では昔ながらの人情の暖かさを度々受けて、今思い出しても感謝の気持ちで一杯である。

私は若い時代暇がなかったので、まだまだ登りたい山が沢山ある。体力の維持には細心の注意をしながら、人に迷惑をかけないように心掛けて、これからも山行を続けたいと願っている。（静岡支部）

浅野　初子

一九一九（大正八）年生まれ。スペイン風邪で乳幼児がバタバタ死んだ生き残りの七十三歳です。

一九三六（昭和十一）年、学校から、夏休みに北アルプス行がありました。ガイドが三人。白馬、八方の故大谷定雄氏と岩岳の福島忠雄氏、他。両家へは今も訪れています。

信濃大町―大沢―針ノ木小屋―平―五色ヶ原―立山―剱沢小屋（主人は源次郎でした）―剱岳―長次郎雪渓―雷鳥沢―室堂―松尾峠―常願寺川沿いに芦峅寺の先の千垣まで歩きました。

初めての山行なのに、毎日雨。太陽がのぞいたのは平の釣橋を渡った時だけでした。ガスで景色は見えず、前を歩く人のザックと、足もとの高山植物だけを見て歩きました。不完全な雨具のため、毎日お臍まで濡れて。でも、この山行ですっかり山のとりこになったのです。以来五十六年続けています。

戦前は伊吹山スキーにしても、近江長岡駅に夜中の二時に放り出され、スキーをかついで、一合目で日の出、頂上は正午、それから滑ったものでした。

私が山を始めた頃は、健康志向も無かったし、骨粗鬆症も知りませんでした。山歩きが健康につながる、なんて考えもしませんでした。むしろ、山故にけがしても、若死にしても良いと、私は好きな山へ行きました。それが、老いた今、山行かぬ周囲と比べて、背は曲がらず、膝は痛まず、歩ける、歩ける。うれしい結果になりました。

六十八歳の正月、主人と行った妙高・杉ノ原でスキーを飛ばしている時、突然現れた青年と衝突。右膝下骨折にもめげず、ギプスがとれるとすぐ、松葉杖で山行を始めました。山でけがしたのだから山で治してもらおう、リハビリは山でと。その時以来、山へ行く日がふえ、毎年、計九十日余り歩いています。

最近、骨の検査を受けました。二十歳の骨密度に比べ、七十歳平均は六二パーセントなのに、私は九六パーセントでした。山で運動が足り、紫外線を十分受けているおかげと思います。

学校を卒業後は、戦前の大阪の山行グループ・エーデルワイスに入り、終戦後は関西登高会で岩登りを習い、雪山に入りました。今ではお笑い草でしょうが、終戦前後に剱のチンネや、前穂Ⅳ峰の明大ルートなどをやりました。終戦直後の一九四六（昭和二十一）年暮れには、スキーにショベル、鍋釜、米・味噌・野菜、炭俵まで（勿論男性が）かついで立山に入りました。全山人なし。防風雪荒れ狂う一ノ越からの滑りで、小屋が見つからず、浄土の山腹に雪洞を掘って一夜を過ごしました。一九四八年正月には、神城から遠見尾根へ。バカ雪に進めず、小遠見の穴で五日間篭城したのも思

い出です。

三十歳過ぎて結婚。「山を続けさせてね」が結婚の条件でした。おしめの取れぬ内から、おんぶしての家族山行とスキーでした。

子どもの手が離れかけた一九七三（昭和四八）年四月、ＰＴＡの母親たちを誘って山へ行きました。私より十歳若い彼女たちは、戦中の学校時代を過ごしたので遊びを知りません。楽しい山行を知らそう、そして私自身もグループで楽しみたかった。「でんでん虫」と名付けました。昨日のハイキングで計四百六十八回。遭難がないのが自慢です。週一回、近くの六甲、脚を伸ばして丹波、播州、比良、曽爾、紀州。泊りがけで信州、中国、四国、九州、東北、スイスアルプスへも行きました。主婦二十人のグループです。山行参加は毎度十人前後。

私みたいな年よりが、四十～六十歳代の主婦十人余りを連れて北アルプスを歩く。第三者が見れば危なっかしいでしょう。でも、朝は早立ち、一日の行程は短く、荒天は無理せずビスタリーで歩いています。岩場では必ず声をかけます。「ええかっこせず、慎重に」。人の少ない時を選び、花を賞でつつ歩きます。

主人の休日には二人で行きます。登った山は北海道、屋久島、韓国の智異山。台湾の南湖大山、北大武山。ボルネオのキナバル。ブータンのチョモラリベースのトレッキング。ネパール・マナスルのトレッキング。トルコのアララット（ハイキャンプまで）。スイスのアイガーグレーシャー（スキー）。ゴルナーグラート（スキーとハイキング）。サンモリッツ（ハイキング）。アフリカのキリマンジャロ（キボハットまで）。ニュージーランドのミルフォード・トラック、など。

最近の主な山行は、主人と一九九〇年夏の塩見岳。一九九一年夏の餓鬼岳―唐沢岳―中房。同年五月のランタン谷。今年のゴールデンウィークには北九州の由布岳と阿蘇の日の尾峠―高岳―仙酔峡を放浪して来ました。でんでん虫では九〇年夏の鳥海山。針ノ木―蓮華―七倉。九一年夏の針ノ木―種池―冷―鹿島南北槍―大谷原。スキーは九〇年二月、三月の岩岳。九一年二月の遠見、青木湖。三月の黒姫、赤倉。

生まれつき弱い心臓、低血圧のハンディーを背負いながら、好きというだけで、よくまあ今日まで続けたものです。最近、体力は落ちました。年相応の山行を心がけています。山でそれらしき姿を見かけられたらお声をかけて下さい。（関西支部）

山田　二郎

一九三二（昭和七）年の春、小学校の遠足で奥多摩の御岳山に行ったのが初めての山登りであった。この時は八合目あたりで完全にバテてしまい〝生涯山登りなどすまい〟と心に誓った筈なのだが、いつどうして山狂いとなったか定かでない。ただ、中学一年頃から慶応山岳部にいた兄に付いて山を登るようになった。最初の山が何とこれまた一月の御岳山だったのは皮肉なことだが、新雪に粧われた山歩きのすがすがしさは今もって忘れられない。

中二の夏は愛鷹山縦走。三年の夏は兄と上高地で合流、徳沢を根拠地に奥穂高、大滝山などに日帰りの山登りを楽しんだ。山の楽しさが解るにつれ、兄に付いて行く山登りから自分の力で山に行くようになっ

た。五年生の夏には単独で清里から赤岳を経て夏沢峠までの縦走を試みたが、自分で計画した初めての単独行とて途中で何度か心細い思いをしながら何とか歩きおおせた喜びは大きかった。

慶応の予科に入るとすぐ山岳部に入り、夏の合宿、縦走を皮切りに学校の方は必要最低限の出席に止め、年間百日前後は山にいる学生生活であった。当時大先輩の槙、三田、早川の諸氏は雲の上の存在であったが、直接山岳部に強烈な影響を与えられた谷口現吉さんは中堅OBとして厳しい山登りを説かれたし、部のキャプテンは山本雄一郎氏、予科のチーフは加藤喜一郎さんといった錚々たる顔ぶれで、その後今日までの私の山登りの根幹ともなった数々の教訓を実地に学び取ることができたのは大変な幸運であったといえよう。

一九四三（昭和十八）年、在学中に学徒動員となり二年足らずのブランクの後、復員と同時に復学。空き腹を抱えながら日夜を忘れて部の再建に取り組んだ。ピッケルを抱えて冬の富士山に向かう汽車の中では山麓の開拓団と間違えられ、〝御苦労様〟と慰められたかと思えば、〝この食料難の時代に山登りとは〟と白い眼で見られたりと思い出は尽きない。

一九四九（昭和二十四）年には、戦後、関東学生山岳連盟で仲間となった大塚、村木などの諸兄と日本山岳会に入会。マナスル登山ではこれらの方々と戦後初の本格的ヒマラヤ遠征に加わることができた。その後一九六〇年には慶応義塾創立百年記念のヒマルチュリ登山隊を率いて初登頂に成功したことは忘れ難い。

最近自己の登山歴を調べて判ったことだがヒマルチュリ以降二十年間ほとんど山に登っていない。流石の山狂いも少しは気が引けて、会社の仕事に没頭したと見える。

ところがフトしたきっかけで登高会の旧い仲間たちとの小山行が復活、一九八〇年以降今日まで月平均一回程度、高度差千メートル前後の山行を続けている。学生時代には北、南アルプス、後立山などが限られた地域で何度も同じ所を登っているが、現在は北海道から九州まで幅広く歩くことで、また新しい山行の楽しさを味わっている。

最近のハイライトは一九八九（平成元）年夏のモンブラン登頂と、その翌年春に山岳会の山スキー同好会で富士山頂から大沢のスキー滑降を楽しんだ事だ。（去年は一九四〇年以来憧れ続けてきたナムチャバルワ登山が五十年ぶりに実現し、その総隊長を仰せ付かった訳だが、BC滞在中四三〇〇メートルのC1まで日帰りで行っただけだからハイライトと云うには少し恥ずかしい。）

ところが、〝会長さえ登れたのだから〟と、その後もモンブラン行きの中高年会員やら、富士山のスキーも参加者が大幅に増えたという。喜ばしいことと云うべきであろう。

考えてみると私の山登りも一九三三（昭和八）年以来六十年近く経ってしまった。両親から健康な身体を授けられたためか、私は今日まで山でヘバッて人に迷惑をかけた事がないことを良いことに、あまり熱心にトレーニングをした記憶がない。部のキャプテンの時も、〝トレーニングなど各自自主的に行うべきもので、時間があったら山の気象とか雪崩とか大自然相手のスポーツにふさわしい勉強をすべきだ〟という考えもあって、部員にマラソンだのラグ

ビーだの一般に行われている集団トレーニングを強制したことはない。自分なりに考案して自転車で走ること（数年前は毎朝十キロ程を三十分くらいで走っていた）などしたこともあるが、これで海外勤務中七十キロにも増えた体重が六十二～三キロに減ったことを良いことに、現在は日常できるだけ歩くこと、月一回程度の山行を続けることで体調を整えている。

結　語

大学の山岳部時代に教えられた重装主義の山登り（山ではアブノーマルなことが起こるのがノーマルと思わねばならないから、物、心のすべてにわたって最悪の事態に備えて準備を整えること）、仲間を大切にする山登り（春山の帰り、中ノ湯から沢渡へのバス道で隊のリーダーが隊員より先に歩いて来たことがあり、その山の検討会で〝後から来る隊員が途中で落石やスノーブロックでやられたら、お前はどうして隊長として責任をとるのか〟と部のキャプテンが鋭く叱責するのを見て、その時の隊長の行動をあまり気に留めていなかった私は、仲間を大切にすることの重要さを改めて思い知らされたことがある）は今や身にしみ込んで体の一部になっている。

また私は生来臆病なせいか、山では自信が無くなった時はあたり構わず引き返すことにしている。あまり格好は良くないがこれも永年山登りを続けて来られた秘訣かも知れない。

山登りでの失敗は死につながることを覚悟してかかることが必要だが、反面、山登りなど命がけでするものとも思っていない。

垣内　康時

①一九二〇（大正九）年生まれ、七十二歳。

②若い頃から近郊の山歩きをする。一九四〇（昭和十五年）に就職し、職場で山の会をつくる。後、大阪市登山部に入会。一九四三（昭和十八）年、白馬岳―黒部渓谷―欅平に降る。戦時中は大風呂敷にリュックを包み、北アルプスは槍ヶ岳、穂高岳、三俣蓮華、烏帽子、立山、剱岳など、また関西では、大峰、大台、台高山脈、高見山、鈴鹿方面を歩く。一九四八年、大峰山、吉野から前鬼奥駈けコースや、柏木―大台―伯母峰コースを、当時の越後支部長藤島氏に同行する。翌一九四九年日本山岳会に入会。その後も、同様の山行で、大半は単独行。一九七六年に退職し、健康状態に合わせて山行をしてきたが、単独者の宿泊の苦労や環境の変化を知り、テントなど十分な装備の持てない体力と健康状態を考え、最近では低山歩きと趣味を兼ねた山行に変わる。

③おおよそ六十回（一回平均一四～一八キロ、四～五時間の行程）。退職後、近郊の低山に変更してから、回数が徐々に増える。金剛・葛城方面、宇陀・室生方面、大和方面、鈴鹿霊仙山、那須ヶ原山、湖南の飯道山、高野山、大峰稲村ヶ岳―山上ヶ岳―吉野、大和鳥見山―貝ヶ平―戒場山。

④常に自分の体力と健康状態に合わせて、無理のない山やコースを選んで行動してきた。高齢になってからは、山の高低にこだわらず、山に登るというよりは山を歩くという考え方に変わり、愉しい山行のできるよう、趣味（スケッチ等）を兼ねるようになった。

⑤・山歩き前は不規則な日常生活はできるだけしないよう心がける。・食べ物の好き嫌いは無くすようにする。山行きを続けること。

⑥・健康状態に合わせたコースを選ぶ。・無理をしない。・装備は体裁より軽量で実用的なものにする。・一応の必要品（特に医薬品）は最少限持参する。・地図は五万分の一又は二万五千分の一の最新版と、あれば旧版を共に持参する。・最近の図書や案内書を読むように心がけ、常に情報を仕入れる。・テレホンカードが使えない電話もあるので、小銭を少々持参する。・帽子は野球帽のようなひさしのあるものを着用する。朝日より夕陽に向かうと、老眼鏡をかけている場合目測を誤りやすいので。・老眼鏡をかけるようになってからは、徒歩中、特に階段状の下りに注意している（＋二・〇〇くらいはまだよいが、＋二・五〇以上老眼度を増すと目測を誤る危険がある。遠近両用の眼鏡もあるが同様である）。・ステッキを持参する。また何か目立つ色のものを持参、又は身に付けている（赤帽等）。・手帳に簡単な記録とコース中に気付いたことを記しておく。帰宅後、その日の装備など、その状況を良好や快適、その日履いた靴の状況を、例えば足の指先が少し痛むなど、日記の末尾に記しておけば、後の参考となる。

⑦年寄って年々体力の衰えを知るようになり、無理な山行はできなくなるのに、一方中高年の山行が盛んになり、近郊の山々は平日、休日に関係なく人出が絶えない最近である。

若い頃学校やグループ等で山行きの経験のある人もいるが、職場を退職してからの人の方が多いようである。一度行ってみたかったとか、健康法の一つとしてなど、安易な考えで参加したり同行する。団体行動に参加しても指導者や付添いはいるが、貴方任せ的な気分で、行動には自己意識が先行しているように思える。規制されたところから開放されると、自己意識が急に強くなり、自分の健康状態によって団体行動の不自由さを覚え、徐々にグループや個人行動の山行きに変って行くことが多い。

山での危険は高低にかかわらず、何時、何処で起きるかわからない。中高年のよく歩く低山もコースを少し外すと危険で、最近の低山は新しい地図でも道がのっていないことが多く、一歩道を誤ると、倒木、伐採、雑草、土砂崩れなどで身動きできなくなるありさまである。車社会の時代となり、旧道が廃道化となっているところが多く、標示もなく、古い道標も朽ちたり倒れたりしている。

自分は自然が好きで山行きを続けているが、最近これらの状況にしばしば遭遇し、また道に迷っている人に出会うこともよくある。それ故に、静かな自然に浸り楽しもうとする人に少しでも、年寄りなりにできることをと、途中でみる標示や三角点標識周辺の倒木や雑草などを除去し、見易いようにし、時には迷ったハイカーの案内的なことを続けている。（関西支部）

——石坂　久忠

私の山登り

生まれた時は一九二一（大正十）年の一月だから当年とって辛酉七十一歳になる。小学生の頃より山に登った。特に高山への踏み入りは年中行事としての集団登山に参

加してからである。その集団登山とは、越中国（富山県）では、立山登拝をしないと一人前の男子でないとしていた時代であったから、一日も早く立山登拝を済ませることであった。小学生の分際で一人前の男子になろうとしたところに問題もあったであろう。その事があってか山に対する病み付きがでて、長く山行が続けられてきた。

その頃の唯一の頼りとなるものとしては勿論陸地測量部・現在の国土地理院発行の地図を読むより方法がなく、近くの山遠くの山を地図とともに歩いたし踏み跡を残してきた。

中国の学校に学んでいた時も泰山に登ったり、北京西方の近くの山へも登った。八達嶺の山々にも登り、万里の長城を上からも眺め、歴史の偉大な築造物にも接してきた。

ある時は、大学が休みになると故郷の山が恋しくなって剱や立山が眼前にちらつき、汽車と船の旅を続けて帰ったものである。

中国に葛洪という人がいた。紀元四世紀頃の人だというが、又の名は尸解仙といったという人物である。この人は名山に入るには、入山術を心得ていなければならないと、その一つには、飲食や動作を慎み清浄謹慎を守るべしと。このようなことは現代人に通じない点もあろうか、通ずる人も少なくないだろう。

日本人では青木北海という人は入山術について方法を述べ即ち禹歩の術がそれである。スロースロー、右左右左ではなくて右左右左の歩行である。要は体力を急速に消耗せずに登ることにあるのだが、老人達が階段を一段ずつ登るようなもので現代人には縁の遠いことかも知れないが。

敗戦で故郷に帰ったが山は動かずに天高く雲をいただいていたし、飛驒山脈の姿はそこにあった。地方の山も又それなりに尊いものであり美しい自然があって親しめるものだ。

ネパールやパミール、ブラジル等の山も又よい体験になった。高い山だから尊いものとは感じないし、山に対する心の清浄感があれば、山そのものを清くし自分の行動にも親しみを加えるものにしてくれる。パミールの山麓を歩いている時、中国人の古老に張騫の歩いたインドへの道を訪ねてみたら、あの山の中腹だと伝えられていると聞いたので、その道を辿ったこともあるが現在の風情は異なるとしても浮世の結び付きが何となく哀れにも感ずるのは凡人であろうか、その道の賢人は一心なので信念もあったであろう。その尊い信念と努力が成功への要点である。

山登りとは日本語である。登山となれば中国語になる。でも一般的に登山といっている現在ではあるが意義の取り方が異る。山はそこにあるから登るのだろうが登ったら降ることが定まりであるところに山登りの悦びがあり、動作が存在する。行為が生ずるところに方法が出てくるし編み出される。

急ぐ動作をすると欠点をさらけ出し失敗する。登仙のようであってはならない。この辺りに山登りの難しさがある。

近頃中高年登山者の事故多発が取りさだされている。悲しむべきことだ。その原因を考えてみると、より困難な山へ、雪のある山へ、孤独でない山へと不相応にも目標と違った選択をしてしまったからではない

だろうか。中高年ともなれば体力を考え、脳細胞の減少を考慮し、空を見ないで時計を見ながら時間に気がとられ焦るところに問題が生ずるようだ。山に入った時ぐらいは自然と共に一時を過ごす気分にもなれないものだろうかと思う。

二年前に薬師岳に登った。初夏の薬師岳は美しかった。でも心を傷めたのは幾つもあるが自然の痛み付けが一番悲しかった。それは道筋の荒廃である。一筋の道ではなく裸地が広がり無残な姿であった。山登り人口の算術級数か幾何学級数的な増加による災害であろうか。モラルの低下であろうか。歩き易いところへ、歩きやすいところへと踏み入る人間の悪い習性の結果だろうか、草地の裸地化が進んでいることだった。人間は勝手すぎはしないだろうか。狂った世の中であってはならないものを。経済が豊かになって倫理が乱れた近視なのか。

年に数回は自分の山を求めて山に入る。剱や立山は何回登ってもその時々によって山の魅力は違っているものだ。違った角度から山は迎えてくれる。故に無理をしない山登りが続けられて来た。

山に登る、山に行くとなると五体健康であるべきだが、もう一つ常に多面的に訓練された身体であってほしいことだ。

自分の家の前が早月川という川が流れている。波打際まで頭大、否、それ以上の丸石がある一面の川原である。万葉集にみる「はいつき川」がそれである。その川原が唯一の歩行ゲレンデである。堤防の石積垣を直登、直降、トラバースしたりして毎日のように歩いている。足腰のバランス、悪路でもリズミカルに歩き平衡感覚の乱れもなく飛石も時には飛んでみるが年波には勝てない時もないではない。

山登りに法定速度でもあったら馬鹿げたことになろうが山登りの魅力が生まれてくるような気にもなる。年老いた者の愚問と考え方かもしれない。然し世の中は目まぐるし過ぎるから山の事故も多くなる。山のとらえ方をもっと研究すべき時代であり、高さのみが山を山たるものにしなくて、その山のもつ自然を尊いものとして受け止める心を養うべきであろう。そうする心掛けによって自然の恩恵に接し、自然とのかかわりを理解し環境を守る信念が得られ、将来に向って持続的環境保全開発のアイデアも創生され、山岳保全の将来像が確立されよう。（富山支部）

石間　信夫

雨の日でも歩け

一週間も十日も山から遠ざかると、心身共にいらいらして次の休日まで間がもてないので、余程の大雨でもない限り必ず歩くことにしている。

場所は簡単な所を選び、興津川や由比川から塩の道を歩いて富士川の下流へ降ったのがしばしばである。

天然記念物の大榧のある旧村長のお宅へ上がりこんで昔話を聞いたり、身延詣りの石畳の路を歩いたりしたのはよい思い出である。

次によく歩いたのが茶どころ大井川や瀬戸川流域の山村である。細かい雨を石置き屋根の庇によけ、濃く淡く流れる霧の動きを眺めるのは、晴れた日には味わえない風情である。

当時は車道がなかったので村々を回る行商のおやじさんとよく出会い、戦争で片腕

を失ったことや身上話などしながら一緒に歩いた。

私の最初の勤務地が関西だったので京都の北山へよく出掛けた。この辺りは名所旧蹟が多いが晴れた休日には人出が多く落ち着かないので、矢張り雨の日に歩くことにした。

或る年の秋、花背峠の炭焼き小屋で雨をよけていると、山羊髭をつけた小柄な老人が現われ、俺は日本一の炭焼きだと傘をさして歩ける広い竈の中へ案内し、丸太はこうして割るものだと手拭で目かくしして大きなマサカリを振り下ろしたが、一打二打三打とも寸分たがわぬ同じ所へ打ちこんだのには全く驚かされた。帰りしな、お前は今時珍しい青年だ、下宿の火鉢にくべなさいと炭を沢山包んでくれた。

物の本によると、雨の日には山行を見合わせるようにと書いてある。至極く尤もではあるが天気は何時も微笑んでくれるとは限らない。日帰り山行でも夕立にあうこともあろうし、一週間ともなれば一日や二日は雨を覚悟しなければならないであろう。

或る年の二月、快晴の岩原スキー場から飯士山を目指した時、頂上へ出たとたん猛風雪に変わり、スキーの下手な私たちはルートを誤って岩壁から転落し危うく命を落すところであった。

数えて見ればこれに類したことは多々あるが、悪天候の時歩くことに馴れていれば、これ以上は無理、このくらいなら何とかしのげるという判断を下すことができるであろう。

私の山行は自然と二人切りになることが信条で単独行が多く、首題の記事を書く資格はないが、何かの参考になればと筆をとった次第である。

①七十七歳、一九一四（大正三）年生まれ。

②一九二五（大正十四）年小学五年の時父と兄に連れられて富士山へ登る。以後付近の山から南、北、中央アルプスへ範囲をひろげ、北は利尻岳、南は屋久島の山へ登る。海外の山と旅行八回。

③最近三年間の山行回数百九十回。

この間登った主な山※有明山（長野）失敗、※七ッ小屋山（群馬・新潟）、※笠無山（長野）、※北八ッ稲子岳（長野）、※大満寺山（島根・隠岐）と三徳山（鳥取）、※大明神山（山梨・笹子）、※海谷駒ヶ岳（新潟）と雨飾山、※猫魔ヶ岳（福島）と磐梯山、※八ヶ岳西岳（長野）と編笠山、※三峰山と子持山（群馬）、※無岳山（静岡、二一〇五メートルロボット山の仮称）、※森吉山（秋田）、※聖山と冠着山（長野）、大峠と源氏山（山中）、※城峰山（埼玉）、帯那山（山梨）、富士山のお中道吉田口—須走口間（山梨・静岡）（※印は新規の山）。

なお一九九二年七月三十一日現在の山行回数二千五百五十六回、登頂数二八〇〇メートル以上百座。

④健康であったこと。

⑤少なくとも十日に一回は歩くこと。

⑥小さな山でも地図と磁石を携えて現在地を確かめること。

⑦自然の懐に抱かれる気持で未知の所を歩くこと。（静岡支部）

西郷　正郎

中高年登山者の生き甲斐

今年（一九九二年）五月連休の富士山周辺は、風が荒れぎみと積雪が多い点を除け

ば、春の陽光を一杯に受けた楽しい春山であった。それにもかかわらず遭難者続出で、確認された五名の死者は四十歳から五十歳台の方々ばかりである。予想されていたとはいえ、私たちが想像していた以上に中高年の登山者が多くなってきていた。社会的に常識をわきまえている筈の人々の遭難が何故起るのか無視できないものを感じる。いずれ反省と対策が論議されることになろうが、集団の立場と個の立場とで意見がかみ合わずに、総論賛成、各論反対のような結論に終わらなければ幸いである。

ここでいま私は個の立場に立って登山者について語っていきたい。

最近はケーブルカー、航空路が発達し短時間で四／五千㍍の高度まで運んでくれる。その地点に降り立ち体調に異状がないからといってすぐ歩きがちだが、高年齢の肉体にその行動がいかに重く影響するか体験している高年登山家も多いことであろう。

一九二六（大正元）年生まれの私は昨年七十九歳で富士山のご中道上部（標高二六〇〇㍍くらい）に二回登った。そこで感じたことだが四年前宝永山付近を歩いたときとは違って非常に苦しいということである。上りになると五／六歩ごとに足をとめ深呼吸しないことには登れない。正にヒマラヤの高峻山岳なみである。高年となると僅か四年でこうも体に感ずる登山の難易度が違ってくるものだと自覚した。この自覚による行動の制御が必要と感じた。

私の登山は少年時代の生活環境の中で自然に育ったものである。小学生のころはボーイスカウトで山林の下刈りを手伝い、小学五年になると富士登山で頂上お鉢回りまでさせられた。中学では私の父が師範学校の教師をしていたのを幸いとして、いまでいう南アルプス深南部山中の小学校の宿直室に無料宿泊して歩く方法を覚えた。父はその宿直教員に礼状を出すのに忙しかったのではないかと、今は亡父にあやまりたい気持ちである。しかし私の山好きと民俗学への関心はこの時に育ったのである。

大学の学生生活は良き山岳会と山友達にめぐまれて、日本アルプスや上越の山の登山が多く、とくに北八ヶ岳は原書で読むヨーロッパ・アルプスの景観を思わせる山があることから、そこに山小屋を建てることを計画した。小屋は一九三六（昭和十一）年秋に完成し、山歩きの根城となった。

またこの時期は山岳書を乱読し文学的なものを好んで読んだ。そのなかでも大島亮吉氏の文章にひかれ、単調な道路を楽しく歩けることが登山家の資格のひとつであることを学んだ。それに共鳴し歩きに歩いたことが今日八十歳になってもまだ山を歩くことができる基礎になったのであろう。

海外の山は戦前から私の目標にあって、一九三九（昭和十四）年に出版した本のなかでもそれを書いたが、当時はもう戦争突入間じかく、その実行を推進できる情勢ではなかった。戦中、戦後を経て漸く六十歳を越えてから隔年、四回ヨーロッパを訪れアルプスをトレッキングして、山岳書を読んで長く頭の中に記憶されていたアルプスの景観を確認したにすぎなかった。勿論ヒマラヤには行かずじまいだった。

戦争中に空爆下の東京下町の工場で、地方から働きに出てきた女子工員の蒸し焼きになった数十名の死体を見た。その戦争の悲惨をしめす衝撃は私をうちのめし、この

精神的打撃からその後の山歩きに大きな変化が起り、孤独な山行が常態になった。

いまになってみると、私の長年の行動は三つの領域のなかで動いていたようである。生活の基盤となる経済的環境、登山家としての環境、もうひとつは文学者としての環境である。それぞれの領域のなかでは自由に行動できたのであるが、ひとつから別の領域に移るには非常に困難を感じた。それらの領域は当時の社会環境では互いに交流できない積み重なった層をなしていた。その束縛から逃れるため、私がしたことは二つの名前を持つことだった。私は登山と文学の領域では「千坂正郎」、経済生活では「西郷正郎」を使い分けそれで通した。したがって学校のクラス・メイトや山仲間は「チサカ」で通り、職場では「サイゴウ」といわれ「チサカ」と呼ばれることはなかった。都合が悪くなると逃げ込む場所をつねに用意していたことになる。一見卑怯なようだが大変に便利することもあった。

私は登山家の一生を次のように考えている。まず最初は情熱の山、この時代はただ山に登りたい一途で、他に考えることはなにもない個人的なビッククライムを成し遂げる可能性が多い時期である。続いて中年になり体力の低下を自覚し、若いときのように登山に情熱を燃やすことができなくなる時期が来る。登山の世界から脱落を心配する人は、登山の思想・理念の探究、価値観、登山史などに関心を持つ、それに熱中しているなかで生涯を終えることになればまずは幸せというべきである。

しかしさらに年齢が進み生活維持面の負担が軽くなると、無気力で心の空虚になる時期が訪れる。そして回想のなかにだけ生きることになる。これでは高年齢登山家にとってあまりにもさびしい。それをいかに充実した生き甲斐で埋めるかが重要になる。

優れた登山家であれば体力を僅か消費するだけで、「山の呼ぶ声」をききとり、「自然」と心の融合を試みるだろう。そうして「柔らかな緊張」のうちに生涯を終えることになる。

これが情熱の山―理念の山―情念の山と続く、私の理想の登山家の一生の経路である。

「自然の呼ぶ声」とは「山の呼ぶ声」「海の呼ぶ声」「大地の呼ぶ声」であり、個々人の血のなかに持っている伝統、民族性、遺伝、歴史などに支えられた「力」である。これを心の支えにし、現在の体力を自覚しその範囲内で山を歩く、それが中高年登山者の行くべき道であろう。（静岡支部）

―――――――

もある。私が山の虜になってしまったのも、自然がこよなく好きだからである。

私は一九一三年（大正二年）三月生れなので現在満七十九歳。孫も七人いる正真正銘のお爺さんである。過去を振り返ってみると、私のこれまでの人生は曲がりなりにも夢を追い続けて来たと云ってもよい。職業がら医学研究の面もそうであったが、特に山に関しては更に切実であった。先ず山に関しての第一の夢は、若い頃からその姿形に憧れていたマッターホルン（スイス・イタリア国境、四四七八㍍）に登る夢で、それなりに日頃のトレーニングを積み重ねていた。

さて、ヨーロッパアルプスは先ず一七八六年モン・ブランが初登頂されたのを切っ掛けに次々に登頂されたが、このマッターホルンだけは登攀不可能な「魔の山」として恐れられ、最後まで人を寄せつけなかった山なのである。ところが英国のウインパーが執念のもとに何回もこれに挑み続け、七回目にやっと初登頂したのである。一八六五年七月のことであった。

一九六一（昭和三十六）年、既に四十八歳になっていたが、初めて渡欧の機会に恵まれた私はかねての夢を果たすべく麓の町ツェルマットに着いて、街からこの山の岩壁を間近に仰ぎ見たとたん恐怖感に襲われてしまった。それほどこの山は他を威圧するように虚空にそそり立っていたのである。然し名ガイドのH・タウグワルダーと共にこの山頂に立ち得た時の感激は今だに忘れられない。それ以来アルプスの山に病みつきになり、渡欧の度に観光などそっちのけで登り続けた。そのうちアルプスだけでは飽き足らず、アフリカ、イラン、アイスランド、北極圏、ニュージーランド、メキシコ、南米、北米、パプアニューギニア、ボルネオ、中国、台湾、韓国の山々にも足を延ばし、塵も積もって本年夏で海外山岳登頂ピークの延べ数が百四十六に達した。

この中で最も数多く登った山は何と云っても私の恋人とも云えるマッターホルンで、過去十一回登ったことになる。一九七三年第五登目となったこの山では頂上で還暦を祝った。そしてこんな厳しい山はもうこれで打ち切り、と周囲の者に約束していたが、体力が衰えぬまま六十二歳の時こっそり第六登をやった。ところが麓のヘルンリ小屋から頂上まで一二〇〇㍍の岩壁登攀の時間が四時間二十分で、それまでより最も短かったのである。それに自信を得て一つの夢を抱くようになった。それは「七十歳の古稀祝いもこの山頂でしよう。しかも第十登目になるように」と云うものである。そのため日頃のトレーニングに一段と熱がはいったのである。人間は誰しも何か夢或いは目標を持つことが大切ではなかろうか。夢の無い人生は淋しいと云えよう。夢を持つことは人生をより豊かにし、生き甲斐あるものになると思う。但し、夢を抱いた以上その夢の実現のために弛まぬ精進を怠らぬことが肝要である。目的に向かって情熱を傾け、周到な準備を着実に続行して行けば、その積み重ねによって必ずやその夢は叶えられる、目的は達せられると私は思うのである。

実は私は四十歳頃は身長百六十㌢なのに体重八十㌔の肥満体で、坂道を登るのがきつかった。そこで一九五五（昭和三十）年の元旦から毎朝冷水摩擦と全身運動をやることにし、同時に食事の献立を徹底的に切

り替え、現在なおこれを続行しているが、体重も五十八キロ内外を維持し、とても調子が良い。満七十歳になって受けてみた体力、運動能力テスト（十種目）の結果二十乃至三十歳代と云う意外な結果が出て、我ながら驚いたのであった。そしてその年の夏、前記の夢が叶えられたのである。

この時点で海外の山の登頂ピークの延べ数が八十二になっていた。そこで又新しい夢を持つようになった。それはあと十八峰登って百にしよう。しかも百登目は最も好きで登り甲斐のあるマッターホルンで、と云う夢である。毎朝四十分のトレーニングの他、毎日一万歩以上の速歩や毎月二～三回の登山もそれまで通り続行し、四年前の八月遂にこれをやり遂げたのである。古稀を祝ってから五年後、体力は既に峠を越していたが頑張り通してやっと頂上に着いた時はかなり疲労していた。下山してガイド事務所で登山証明書を貰った時、事務所長はヘルンリ小屋から山頂を日帰り往復した中で貴方は正に最高年齢者だ、と云って右の親指を突き出して誉めてくれ、とても嬉しかった。

過去百四十六登頂の中、六十五歳の定年退職後に登った山が九十七峰あり、七十歳過ぎて登った山が七十峰あるが、その多くが三〇〇〇～五〇〇〇メートル級の山である。因みに昨年夏はアルプスの最高峰モン・ブラン（四八〇七メートル）にも登頂した。この年齢でこれらの山に登れたのも偏に日頃のトレーニングと独自の食事によって、若さを比較的長く維持出来た御蔭と思っている。「人は年を重ねるから老いるのではない。夢或いは理想を失った時に初めて老いが始まる」と云うサムエル・ウルマンの言葉は誠に味わうべき銘言であると思う。

さて私の独自のトレーニングと食事の内容の詳細は拙著「七十歳はまだ青春」（山と渓谷社）に述べているので御参考になり得ると思う。要するに毎朝の全身運動と冷水摩擦、それに速歩、階段登りなどである。駅で電車を待つ間もプラットホームに登る階段を上下して脚を鍛える。電車内でもなるべく座らずに踵を上げて爪立ったり、吊革を両手で持って体を持ち上げると脚や腕の筋肉が鍛えられる。その気になればトレーニングの場はどこにもあるわけで、これらを利用しないのは勿体ない。御互に長く若さを維持して息の長い登山を続けたいものである。（福岡支部）

松浦　勇次

一九一〇（明治四十三）年八月の生まれで八十二歳になる。登山を始めて六十二～三年が経つ。もっとも、最初は五年生の時に先生に連れられて夏休みに燕岳から槍ヶ岳へと、いわゆるアルプス銀座とやらを縦走したもので、草鞋に、雨具としては油紙という、装備などというものの無い時代であり、これはえらい所へ付いて来たものだと臍を噛んだが後の祭りであった。

ここ数年の山行は専ら一等三角点本点の山を踏むことに力を注いでいる。というのは、私もかなり年を喰ったものだから、二等、三等、四等までは手が回らない、否、足が回らないのが実情である。

一九九二年の前半は大津に家を新築のため山には御無沙汰してしまった。九一年は七月一日の岩手山の山開きに併せて出かけた。この時は京都山岳会から一名応援に来てくれ、二名で出かけた。滝沢村の馬返し

の新しい山小屋で一泊、翌日五十数名が安全祈願の後、山頂を目指した。

その前年、九〇年九月の八甲田山は単独、十月二十八日には京都山岳会創立七十周年記念祝賀会が開かれた。私はバッジ№二五であった。

その他のここ数年に登ったものは三本槍、前穂高、剣山、大崩山、宮浦岳などであるが、前穂を除く他の山は単独で、天幕持参もある。

今日まで元気に山登りを続けてこられた要因として考えられるのは、決して無理をしないことだと思う。八甲田山、早池峰、焼石岳、屏風岳、毛無山、高峰山、能郷白山は天候不良のため二度目又は三度目に成功した。一度で成功したものとそうでないものの対比を示せば三十対七となる。それは山に関しての事ばかりではなく、世の常の出来事すべてそうである。

ただ一度、大峰の正法寺谷付近で三メートルほど滑落して、一カ月入院治療した事がある。小雨の中の遡行で、当初気に掛けたとおり中止しておればよかった、と思った。（京都支部）

橋本　廣

私は一九二一（大正十）年生まれで今年七十歳。十年ほど前に学校の教員を辞めてからは勤めはない。この原稿を書くに当たって、最近の山登りの回数を調べてみたら、昨年は四十回で一昨年は四十九回だった。昨年の四十回の中には、一カ月のヒマラヤ写生旅行もふまれるので、山にいた日数はそれよりだいぶ多い。

登山といっても日帰りのものがほとんどで、一泊以上のものは年に六、七回もあろうか。またカンジキを履いての登山も、毎年七、八回はある。同年輩のものが山から足が遠のく中では、よく出かける方といえよう。

山登りを続けてこられた要因は、山の自然が好きなのと、健康であったことに尽きる。

私は特定の山岳会で研さんしたわけではない。永い間高校の教員として山岳部の指導に当たっていた関係で、卒業していった教え子たちに教えられることが多く、ある程度の登山技術が身についたといえよう。

老いぼれても山へ登ろうとは考えたことはなかった。しかし、いつまでも山へ登りたいという気持ちは若い頃からあった。山登りは辛く厳しい行為だから、登るだけの目的ではいずれ足が山から遠のく。登りながら楽しむ余技を持ちたいと考えて、今までいろいろのことをやってきた。鉄砲打ちは鉄砲屋を回っただけであきらめた。八ミリ映画、スライド映写、土いじり、山の写生そして山の紀行文の執筆など。いずれもある程度は山へ足を向けるのに役立ったといえる。しかし、今でも続けているのは絵と執筆だけ。あとは十年間ほどずつ続けてやめた。

絵の方は、昨年の「ヒマラヤ写生展」が、私の個展の三十四回目に当たる。今年はヨーロッパアルプスへ写生に出かけたので、来春までにはアルプス写生展をやりたいと思う。

執筆の方は、今年五月に出版した『北越の山歩き』が、私の山の著書の十一冊目に当たる。いつのまにやらたまってしまったという感じだ。主として地元の新聞に連載した山の記事を、一冊にまとめたもので、

そのうちの八冊は画文集である。著書はその都度日本山岳会へ寄贈してあるが、ずいぶん古いものもあるので、ルームの図書室にあるかどうか。参考までに、著名などを記させていただく。『山嶺抒情』一九六七年私家版、『越中の峠』一九七二年北日本新聞社刊、『北ボルネオの山旅』一九七三年新紀元社、『ヒマラヤをめざした越中人たち』一九七六年窓出版会、『山旅に描く』一九七九年窓出版会、『山旅の記念に』同年同会刊、『加越山行譜』一九八六年北国出版、『とやま35市町村の最高地点』一九八六年北日本新聞社、『山麓紀行』一九八七年能登印刷出版部、『とやま雪山あるき』同年桂書房、『北越の山歩き』一九九三年桂書房。

登ることのほかに、描くこと書くことなどの余技に助けられて、今まで山と付き合ってこれたし上記の本も出版できた。が、もう一つ山から足が遠ざからないでいる理由がある。それは、テーマのある山登りをしてきたことだと私は思う。体力、気力その他自分の能力にあったテーマを作って山へ登っていたからだと思う。ここ七、八年間の私の山登りのテーマは今年五月出版した拙著『北越の山歩き』の中に記してあるので、目次の一部を紹介させていただく。

「とやま一、二等三角点山あるき」「熊野川流域山歩き」「佐渡島一等三角点の旅」「飛騨へ日帰り山行記」「福井一等三角点の山旅」「越後の名山と北陸・関越自動車道」などである。

目的があるから、福井や飛騨の山へ通っても通いがいがあったし、県内七十五カ所の一・二等三角点の山へも登りがいがあった。私の在住する富山市に一番近い熊野川流域の、有名、無名の道のない山の藪をわけるのも張り合いがあった。また、私の古い著書の『越中の峠』『とやま35市町の最高地点』『山麓紀行』なども、テーマを持った山登りの所産といえる。

私は欲張りだから、今も幾つかの宿題を抱えている。それはいつか実を結ぶかもしれないし、陽の目を見ないで立ち消えになるかもしれない。いずれでもいい。怠惰な私を、山へ向かって叱咤激励してくれるテーマであればいいと思っている。

今西錦司の千五百山登山や、深田久弥の日本百名山の登山と執筆や、吉沢一郎のK2登山の総指揮や、最近の田中三郎の『六十歳からの日本三百名山』は、高齢者登山の鑑といっていい。その他高齢者のめざましい登山の例を幾つも聞いている。それからみると私のテーマなど取るに足りない。言えることは、今も山に足が向くのは、自分のテーマに追っかけられているからだといえると思う。

もちろん健康が総てに優先する。山へ登るために健康でありたい。そして、体力、気力にふさわしい山登りをしたいと心から思う。

ここまで書いて気がついたが、本特集企画の主旨は、近年激増しているといわれる中高年登山の安全対策とその情報提供が目的と思われるのに、私事についてのみ記してしまった。しかし考えてみると、高齢者の山の登り方と、青壮年者の山の登り方と異なるわけのものではない。男性登山と女性登山があるわけでもない。山登りの基本は、年齢、性別等で違わないはず。要は高齢者が高齢による体力、気力の減退を自覚することだけではないかと思う。

中高年者による真砂岳の大量遭難は、中高年だから無謀だったのではない。青壮年にとってもやはり無謀なのである。（富山支部）

（橋本廣氏の近著『北越の山歩き』は一九九二年五月、桂書房刊。桂新書6で価格は八二四円。）

宮原　利重

私は、一九〇八（明治四十一）年八月三日、信濃の国、四方山々に囲まれた上田盆地の西方、青木村田沢温泉に生まれ、当年八十四歳になります。

山の経験は少年時代に村内の千㍍程の山々を度々登っていたのが始まりでした。

二十歳の時、初めて三千㍍級の木曽駒ヶ岳へ木曽福島より登って藪原へ下山しました。その時の胸がわくわくした事を昨日の事のように思い浮かべます。次は、滋賀県の伊吹山であった。大勢で登りましたが余りむずかしい山ではなく楽に登れましたが、後に聞いた話では、青年の人たちが簡単な山としてかけ足で登って三合目辺りでへたばって登れなくなり下山したと聞き、山をあまくみてはいけないと感じました。今は自動車で山頂まで行けるとか。

四十五歳富士山に登山。六十歳南アルプス北岳へ、七十歳の時友人の百瀬一茂さんと前信濃支部長の奥原教永さんの紹介で、日本山岳会信濃支部会員として仲間入りさせて戴き嬉しくて山男になったような気がしました。七十三歳、ネパール国ポカラより一週間、山から山へと天幕生活をしながらトレッキングをしました。日中は大陸的気候で暑さが厳しく、夕方になると急に温度が下がり雹（ヒョウ）や霰が降り、気候の変化の厳しさに驚きました。夜は冬の登山服装で寝袋に入っての寝起きの生活でした。インドに近い山に入った時、ひと抱えふた抱えもある石楠花の大樹が真っ赤な大輪の花を咲かせて全山一面に咲き乱れ、遙か遠方にそびえ立つ雪につつまれた真っ白い山々との調和の美しさが今も瞳に残るヒトコマであります。

七十四歳、信濃支部主催の秋山行で南アルプス仙丈岳へ。雪山に経験のない私はこの時初めてカンジキを使用しました。風雪で山道が氷りつき、ひどい荒れで冬の山の恐ろしさを思い知らされました。

七十七歳、栂池より白馬大池を経て白馬岳山頂へ。翌日白馬鑓温泉から猿倉へ下山。今思えば白馬駅の受付で貴方の年齢では栂池より白馬岳登山をしてはいけないと注意されたのにもかかわらず無謀にも禁を犯し登山しましたが、これ程苦しかった登山は初めてであり強く反省しております。

なお、五十五歳から現在まで、信濃支部主催によるウェストン祭には、勤めで参加出来ない場合を除き、毎年前日島々宿で泊まり土曜日朝六時島々宿出発、岩魚留小屋を経て徳本峠を越え上高地へ下るコースに参加し、本年で二十四回になります。縦走コースでは燕岳より大天井岳、槍ヶ岳から上高地へのコース。湯俣より入山して三俣蓮華岳、雲ノ平へ、折り返し三俣蓮華小屋宿泊、双六岳、槍ヶ岳を経て上高地へ下山。蝶ヶ岳より常念岳、燕岳への縦走等があります。他に、木曽御岳登山、黒四ダムが完成されない時富山から入山、立山連峰縦走、黒四ダムが完成後孫たちと立山雄山へ登山、変わった山では、女人禁制の奈良県の大峰山等があります。

三俣蓮華岳から槍ヶ岳の縦走コースではこんな想い出があります。同宿の二十五、六歳の青年二人と私共は子供と二人で一緒に槍ヶ岳へ向かった時、兎と亀の競走ではないが、青年たちは急いで歩いて行っては腰をおろし休み、急いで歩いて行っては腰をおろして休んでおりました。一方私たちはゆっくりゆっくり歩いてリュックを背負ったまま休みながら登って行きました。結果は槍ヶ岳頂上に着いたのは私たちの方が一時間も早かったことです。山は急いで登るものではないことがよく判りました。

最近二～三年では、八十一歳の時一九八九年十月の山陰での日本山岳会全国支部懇談会で大山に登山、八十二歳、信濃支部主催による秋山行には木曽御岳山へ。八十三歳には一九九一年九月の立山天狗平での全国支部懇談会に参加し、立山雄山へ登山（雄山へ三回登行）。同年十月信濃支部主催による秋山登山。八ヶ岳天狗岳に登り現在に至っております。八ヶ岳へは六十歳頃硫黄岳―横岳―赤岳と縦走したことがありますが、東天狗岳は頂上まで大きな石の山で驚きました。

今思えば七十三歳のネパールへのトレッキングと今回の八十三歳の登山とは体力に多大なる相違があり、自分ながら驚いておりまして若い方々に迷惑をおかけしないよう心がけたいと思います。

私が今日まで元気で登山が出来ましたのは学校と勤務局を通し、片道二キロの坂道を毎日往復歩いて通学、通勤した賜物と思います。又どんな山へでも挑戦する勇気と心構えがあったからと自分では思っております。

健康については別に取り立てて申し上げることはございませんが、ＮＨＫのラジオ体操が始まった時から今日まで毎朝励行しておることと暇をみてなるべく歩くことに心掛けております。常日頃登山については高い山、低い山にかかわらず、登りも下りも同一歩調で急がず歩くことにしております。登山について日頃注意しておることは縦走の登山の場合は服装に注意して、防寒にセーター、雨具、下着類着替一揃えを持参することと食料はパン、握り飯（握る時水をつけないで梅漬の水で海苔を使わず握ると一週間位は保ちます）、小ビンのウイスキー、氷砂糖、チョコレート、夏蜜柑等少々とカメラの持参を忘れないようにしております。①高山植物等をとらないこと、②山は神聖であるから不浄のことはしないこと、③ゴミは持ち帰ること、④山に入る時は山の大神様によくお願いして登ることとしております。（信濃支部）

上岡　謙一

高齢化社会が進むにつれ高齢者のスポーツ人口が増えるのは明らか。したがって高年の登山人口もご多分にもれず増加の一途をたどり事故も多くなり社会問題として話題に上る様になって来た。私もその中の一人として特に今後は健康で安全な登山を目指し、気分と体力の調和を図り楽しい山行が出来ることを望みながら今までの山行を振り返って見ると、先ずは、小学校の遠足で近郊の九百メートルたらずの山に登ったのが始まりで、戦前九州の山に年間十回程度、ただ登っただけで記憶は皆無。

軍隊に入って一九四三年九月東部ニューギニア・ラエにて戦況悪く何れは此の地で玉砕と死を覚悟していたのに転進命令、

我々に生の執着が蘇ってくる。転進はスタンレイ山脈の枝尾根サラワケット山（四一〇〇㍍）を越えてマダンへ。航空部隊で行軍の経験はなく、夏服着のみ着のまま、別に雨外套、携帯天幕一枚、食糧は米を主に副食は圧搾口糧の中の梅ぼし、かつお、別に兵器弾薬等何とか立てる重量のものを身につけ、途中食糧の補給は無く、敵機を気にしながら夜間手探りの行軍、飢えと寒さに震えながらの山越え、一月近くかかって目的地に辿り着き、やっと生きのびた。その間多くの落伍者は不明のまま。スポーツでないこんな悲惨な登山行為は今後絶対にあってはならないと、私の生涯の記憶に止めています。

生あって復員、山以外に趣味のない私は、地元の「山の会」に入会し先輩の指導を受け岩登りに毎週の様に阿蘇高岳へ土曜日夜行、月曜朝帰宅出勤の繰返しを続ける熱の入れ様でした。食糧は満足するものは無く薩摩芋を飯盒につめての山行、よく体力がもったものだと感心しています。四八年秋、冬期鹿島槍東尾根登攀のため偵察行、同年十二月下旬に鹿島に入り一月上旬に登頂の目的は達したもののサブリーダーが夜間に荒沢に転落、積雪多く捜索出来ず、一人の犠牲者を出して心身共に大変な痛手を受けました。四九年九月、同行一人奥又白池にキャンプ、前穂東壁を携行品全てを付けて登攀、穂高小屋で泊り鹿島荒沢の遭難者捜索へ。遺体発見。九月二十五日、冬山の処理が終り一安心。同年十一月東京国体に参加、富士山へ。同年冬前穂の東壁を狙うも天候悪く断念。五〇年春四、五月の連休に上高地より西穂—北穂の縦走、途中誰にも会わず我々だけのすばらしい穂高。同年八月再度前穂東壁の冬期登攀を狙ってルート確認に行く。Ⅳ峰正面、東壁を登り滝谷第四尾根を通して帰福、この年あたりから穂高も登山者が多くなって来た。同年十二月末前年に続き冬期の前穂東壁へ、第二テラス下でビバークし登頂。五一年十二月末より富士山合宿、剣ヶ峰にテントを張り耐寒訓練一週間、五二年冬岳沢コブ尾根、初めてナイロンザイル使用。延びが多くて安心感なし。以後冬は上高地の小屋を利用し奥又白池、北穂、西穂と動いていました。最近は徳本、西穂山荘どまりで他の山に行くのが億劫になり同じ所で毎年同じ行動をして、今年まで続けています。

二十年程前から毎日曜・休日に早朝近郊の山（九〇〇㍍）に年間五十回ほど、又会の山行にも参加しておりこれが何よりの訓練で健康維持にもなり、今日まで元気に登山を続けてこられた要因だと思う。常時続けていると体調不良、雨天の時でも、無理を押してでも一回でも多く登りたい、回数を増やしたい、と義務感みたいなものが出ることがある。年齢の所以で自制心も働き気力だけはあっても無理の効かない体力に気付く。七一年政変前のアフガニスタン、インド、ネパールのトレッキングでタンボチェまで行くが写真を撮るのに走り回り高度障害にかかるが一日でおさまる。体力の限界かなと思う。八六年山仲間とスイス・アルプスのトレッキングで終りにモンブラン登頂。気力体力共にバテ気味五千㍍ぐらいが限界ではないかと感じる。九一年中国ウイグル自治区にあるムスターグ・アタのベースキャンプへ。トラックで三八〇〇㍍まで行けたので楽なトレッキングでした。

安全な山行を続けるには日頃の訓練もさ

ることながら、自己の体調を知り最低でも一日八時間は十分行動出来る体力を維持し、又生理的老化と共に老人病が潜んでいる可能性が充分にある。そこで登山活動に相当する運動負荷等のチェックを受けることが望ましい。

登山行為は自然と接する機会に恵まれている上に健康の維持、ストレスの解消等楽しみながら出来るので今年七十一歳だが体力の許す限り山登りを続けたいと願っています。（福岡支部）

羽根田二郎

①一九一七（大正六）年九月生まれ、七十五歳。

②十数年前のことだが、いままで全く山に登ったことのない私が偶然にも利尻山に登ることになったのである。私の古い学友と二人だけのこの山行は、私の山に対する無知と体力不足のため、ついに頂上をきわめることができなかった。

しかし、このことがきっかけとなって、それからの私は、いつの間にか山の虜になってしまったのである。その時の私は五十八歳であった。以来、私はひたむきに山の中に入っていった。はじめのうちは、ひとりで札幌周辺の自然歩道や低い山、冬は「歩くスキー」で身体を鍛えた。そしていつしか煙草もやめ、夜の街にも足を運ぶことを控えるようになった。

そのうちに私の親しい山仲間ばかりで、小さな山の会、「北山渓」をつくった。この「北山渓」のおかげで私のような老骨が到底望めないような大雪山、東大雪、十勝、日高、知床などの山域にまで足を踏み入れることができたのである。

七十歳で仕事をやめると、道外など遠くの山にも行けるようになった。私は、よき山の友にも恵まれたし、多くの優秀な山岳ガイドとも親しくなっていた。おかげで、山をはじめて十六年、その間、道内の山百七十座。日高の山の一部をのぞいて各山域の主なる山はほとんど登ることができた。道外の山も、四国、九州、南北アルプス、東北の山など四十六座。また六十九歳からはじめた山スキーでの登山も、八甲田山、岩木山を含めて三十峰の頂上を踏んだ。ヨーロッパ・アルプスの山旅にも参加し、もっとも登りやすいというブライトホルン（四一六五㍍）にも登攀した。

③一九九〇年（七十一～七十三歳）＝来馬岳、奥手稲山、春香山、白樺山、シャクナゲ岳、目国内岳（以上山スキーツーリング）、神威岳、烏帽子岳、黄金山、室蘭岳、カムイヌプリ、天狗岳（定山渓）、東ヌプカウシヌプリ、西ヌプカウシヌプリ、ペケレベツ岳、剣山、夕張岳、芦別岳、オロフレ山、上ホロカメットク山、十勝岳、美瑛岳、ベベツ岳、オプタテシケ山、トムラウシ山、化雲岳、天狗岳（白滝）、雌阿寒岳、斜里岳、南斜里岳、ピッシリ山、知床岳、雷電山、朝日岳、夕日岳、カニカン岳、雄鉾岳、小天狗岳（以上道内）、八甲田山（高田大岳、駒ヶ峰、猿倉岳）、岩木山（以上山スキーツーリング）、立山（雄山、大汝山、真砂山、別山）、剣御前、鳥海山、秋田駒ヶ岳、乳頭山、岩手山、早池峰など五十三座。六十一回、入山日数七十二日。

一九九一年（七十三～七十四歳）＝百松沢山、丹鳴岳、チセヌプリ、手稲ネオ・パラ、朝里岳、（以上山スキーツーリング）、野牛山、ピセナイ山、アポイ岳、沖里加山、

イルムケップ山、多峰古峰山、両古美山、恵山、駒ヶ岳、崕山、百松沢山（南峰）、旭岳、間宮岳、北鎮岳、桂月岳、石垣山、黒岳、比布岳、安足間岳、永山岳、漁岳、美瑛岳、十勝岳、十勝幌尻岳、ニペソツ山、天望山、白雲山、武佐岳（以上道内）、北岳、中白峰、間ノ岳、西農鳥岳、農鳥岳、涸沢岳、奥穂高岳、熊野岳、月山、西吾妻山、安達太良山など五十二座、五十八回。入山日数六十一日。

一九九二年（七十四歳）＝阿部山、四ッ峰、股下山、ニセコアンヌプリ、白老岳、阿女鱒岳、岩木山、八甲田山（高田大岳、猿倉岳）（以上山スキーツーリング）、円山、藻岩山、空沼岳、札幌岳など。

④⑤⑥私は数年来、軽い糖尿病のため毎回インスリンの注射を打っている身体であり、食事については老妻がなかなかやかましいので厳格にそれを守っている。毎朝欠かさず全身の乾布摩擦と腕立て伏せなど自己流の体操をやる。朝夕二回、四キロの道を八キロの鉄亜鈴を入れたザックを背負って歩く。おかげで快食、快通、快眠で難といえば糖尿病性網膜症で目が悪いだけである。札幌の西南部にある独立峰・手稲山は私のトレーニング登山の山である。今までに百二十回登っている。私が今日まで元気に山登りをつづけられたのは、第一にいい山の友、すばらしいリーダーにめぐまれたからだと思う。内助の功の老妻にも感謝している。もともと私は身体が至って丈夫な方であったし、それなりの努力もしてきたが、しかし、これらのことより何よりも、私の後半の人生は、山から多くの教訓を得たことだと思う。大自然の美しさ、力強さ、優しさ、きびしさ、偉大さに魅せられて私は老いて足腰が立たなくなるまで山に親しみたいと思うのである。私は七十歳を過ぎる頃から手稲山など特定の山をのぞいては、単独行はやらなくなった。グレードの高い山や渓は山岳ガイドと共に登る。それでも、おのずから体力や力量に制約がある。一回の山行回数は四泊五日（テント泊りは二泊三日）が限度。装備の重量は十五キロ以下と考えている。

⑦「人は、年を重ねるから老いるのではない。理想、あるいは夢を失ったときに、初めて老いがはじまる。」この言葉から、私は大きな励ましを受けるのだが所詮、肉体は確実に老化する。やがて手稲山にも登れないようになるだろう。その時には藻岩山に登り、円山にも登れなくなったら、地図上の山行を楽しみたいと思っている。（北海道支部）

一九九一年ナムチャバルワ峰合同登山

重廣恒夫

はじめに

ナムチャバルワ峰（七七八二㍍）は、ヒマラヤ山脈東端の北緯二九度三七分五一秒、東経九五度三分三一秒に位置する世界最高の未登峰である。チベットの南部、ヒマラヤ山脈の北側を西から東へほぼ真横に流れているのがヤル・ツァンポー河であり、横断山脈の手前でナムチャバルワを囲むように弧を描き、ギャラペリ峰の間を大ヒマラヤ山脈を分断して上流と平行にしかも反対方向に九六キロメートル流れてから再び南に向きを変えブラマプトラ河となってベンガル湾に注ぐ。ヤル・ツァンポーの河岸から原生林を経て四六〇〇㍍もそそり立つこの峰は、今にも飛び立たんとする大鷲を彷彿させる。

主峰から長大な尾根が西北西と東北東にそれぞれ派生しており、南側には鋭く切り立った稜が落ち、コルを隔ててナイプン峰（七〇四三㍍）に続いている。

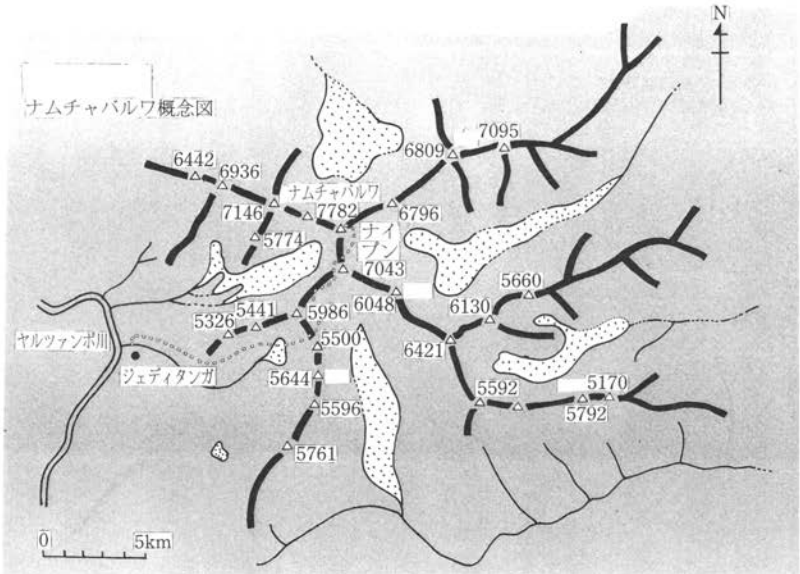
登攀史

一九一〇年、二〇年、四〇年の三度に亘り、英国登山隊が英領インドから接近したが、いずれの場合も気象条件が悪く、アプローチルートも見い出せなかった。

一九六〇年十二月、チベット登山隊により周辺調査が行われ、同隊はヤル・ツァンポー屈曲部の加拉（キャラ）まで入り、南稜を五〇〇〇㍍まで試登。

一九八二年三月下旬から五月中旬にかけて、中国登山協会隊が南稜、東稜、西稜、西壁にルートを探り、南稜上那木拉（ナムラ）峠に到達。同年、七月から十月、中国科学院により学術調査隊員二十八名、登山隊員十六名からなる調査隊が派遣された。

一九八三年三月から四月、西稜及び前衛ナイプン峰（七〇四三㍍）の西稜と南稜を試登し、四月二十一日、仁青平措（リンチンピンツー）、栄志義ら七名が登頂。同年、六月から九月にかけて、第三次大規模学術調査として、学術隊員など五十人の関係者が派遣された。



一九八四年三月から五月、中国からナムチャバルワ登山隊を派遣するが、主峰に至る南稜上部への下降ルートが見い出せず登頂を断念。

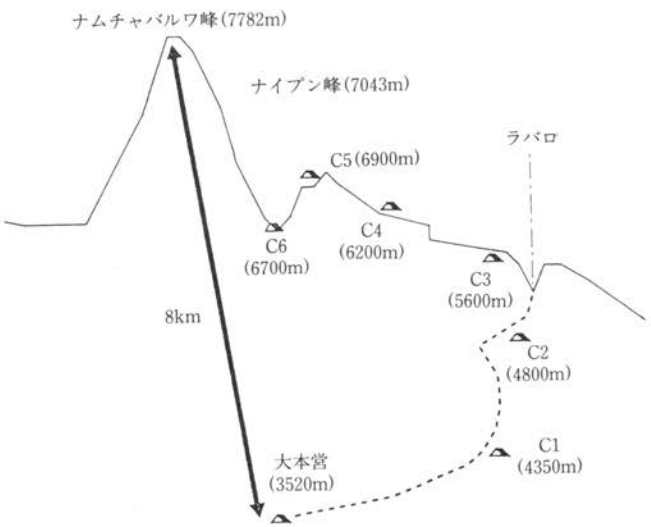
一九九〇年暑い夏の盛り、中華人民共和国国家体育運動委員会からナムチャバルワ峰登山の特別許可が降りた。思えば長い道のりであった。日本山岳会が初めてチベット側のチョモランマ峰遠征を実施して依頼、十年目に受け取った吉報であった。十月十一日には北京にて中国登山協会とナムチャバルワ峰偵察の打ち合わせが行われた。あわただしい準備の後、十一月十一日ラサに日中双方十名の隊員が集結した。十七日から二十三日にかけて西北西稜の支尾根の試登を行ったがいずれも取付きの氷河の状態の悪さ、岩の脆さ、そして西北西稜上の懸垂氷河の崩落により多発する雪崩のため危険性が大きいと判断、ナイプン峰のルート偵察に切り換えた。十一月二十五日、二十六日の二日間小型ジェット機による空からの偵察を実施した。

十二月四日、偵察隊はベース・キャンプを出発し、七日にはラバロを突破し、九日五六〇〇㍍にC3を建設、十一日にはいくつかのクレバスを避けてルートを延ばし、六九〇〇㍍のナイプン峰直下の氷の割れ目にナムチャバルワ峰との最低コルへの下降ルートを探し出す事が出来た。

短期間での偵察行動であったが、西面から南面にかけての概略を知る事が出来た。ナムチャバルワ峰は、東北東稜、西北西稜、南稜の三つの長大な尾根の頂点に位置し、いずれも末端は大きな絶壁か脆い岩の尾根になっている。

東面からのナムチャバルワ峰
The View of Namcha Barwa from East Side

キャンプ地概念図



それぞれの稜線に喰い込むルンゼや支尾根は急峻で雪崩の危険性が大きく、アルパインスタイル的な単独や少人数のスピード登山でないと、これを突破する事は難しい。しかもいずれの稜線に到達しても雪質が悪く、苛酷なラッセルが待ち受けている。従って比較的キャンプサイトの安定している南稜のルートが登頂の可能性が最も大きいと考えられる。最低コルへの降り口から主峰を眺めた限りでは、四五度から五〇度程の傾斜の岩稜とその右側に氷雪壁が拡がり、七四〇〇㍍から一〇〇㍍位の一番短い岩壁部分がルートとして採れそうである。途中にテントサイトを求める事は不可能だと思われるので、最低コルから標高差一一〇〇㍍を一気に登り切る技術と体力が要求される。山容・ルート的にはマッシャーブルムの北西壁に酷似している。又秋というシーズンは低温と強風が本隊の登山を大きく左右するだろうという事が予想出来た。

一九九一年の計画と実際

ナムチャバルワ峰の初登頂を成功させる為には、充分な人と物が必要である。すなわち適正な人員で適正な物資を最も経済的かつ効果的に配することである。今回も日本・中国・ネパールのチョモランマ三国友好登山と同様に日本側がタクティクスの立案、現場においては最前線で指揮をとる事となった。登山概要については以下の通りである。

一、登山ルート　ナイプン峰経由の南稜
二、登山時期　九月下旬～十一月下旬
三、登山方法　無酸素、極地法とアルパインスタイルの併用
四、登山隊員　日・中各国六名

日中双方が協力をして「成功」という二文字を獲得するための計画は、キャンプサイトの確保、物資の荷上げ、補強、とそれらの管理等の機能の充実を計らなければならない。また、このことが成功の必須条件であり、過去の記録、情報を収集・分析し、以下の基本的な計画を立案した。

・キャンプサイト（別図参照）
・行動予定

長期的な計画として以下の三期の目標を設定した。これとは別に気象の変化、隊員の体調等に合わせて、効率良く行動出来るように短期の予定を現地で作成した。

第一期　BC～ABC建設、ラバ口のルート工作、C3への荷上げ。
第二期　C3建設、C4・C5へのルート工作・建設、荷上げ。
第三期　C5建設、C6へのルート工作、荷上げ、登頂。

・装備その他

登山隊員用として四人用十張り、六人用十六張り、ツェルト二張りのゴアテックステント、及びスタッフ・ベースキャンプ用として四人用四張り、オーナーロッジ二張り、中国テント三張りを用意した。

登攀装備では、登攀用ザイル五〇㍍十本、フィックス用ロープ二五〇〇㍍、スノーバー四十本、各種ハーケン八十五本を用意した。

炊事具ではC1以上ではブタンガスを使用する事とし三十六台のバーナーと三十台のランタンを用意した。通信機器では一四四メガヘルツの小型無線機を各隊員が携行し、BCとC2には四五㍗と一〇㍗のモービル機を用意し、ラサとBCの通信に備えた。

ナムチャバルワ峰へのキャラバンルート

ラサから川蔵公路を四四〇キロメートル走り、林芝県の第二の都市八一鎮に到着する。途中標高五〇〇〇メートルの米拉を越えると乾燥したチベット高原とはうって変わり、緑濃い草原が続きヤクが草を喰み可憐な花が咲きほこっている。やがて広葉樹林、針葉樹林を見る様になる。

八一鎮からは民洋川沿いに南下しヤルツァンポー江の同嘎大橋を渡り米林県の県政所在地である米林とは反対に走り、派区へ向かうが道路事情は余り良くない。派区は海抜三一〇〇メートルありそこから先は山脈やヤルツァンポー沿いの簡易道路を走る。

一八キロメートル走った所で格嘎（キイカル）（三二一〇〇メートル）に到着する。派区、途中の峠、格嘎からナムチャバルワ峰の全貌を眺める事が出来る。

格嘎から先は山道となり加拉（ジャラ）への道の途中から右へ入り、しっかりした山道を約三時間で接地当嘎（ジェイタンガ）の村はずれに作られたベースキャンプに到着する。

ベースキャンプは標高三五二〇メートルのヒマラヤのベースキャンプとしては低い場所にあり、インド洋の湿った空気がヤルツァンポー江の渓谷沿いに北上し、ナムチャバルワに流入しているので、この地区の気候を湿潤・温暖で雨や雪の多いものにしている。

七月から九月の三ヵ月は降水量の最も多い時期でほとんど毎日雨か雪が降り、しかも雲が厚くナムチャバルワ峰の姿をほとんど見る事が出来ない。

ベースキャンプから接地当嘎の村のそばを通ってサルオガセの垂れ下がった原生林を進む。標高が四〇〇〇メートルを越えると大きなシャクナゲの林となり背の低い潅木があらわれて来ると標高四三五〇メートルのC1である。

C1からはゆるやかな傾斜の草地を辿りナイプン峰への支稜に続く小さな谷に入る。岩だらけの歩きにくい谷を右へトラバースし、ナイプン峰南稜から流れ出る氷河の左端にある台地に到着すると、ここが標高四八〇〇メートルのC2である。小さなカールの下の台地は十月中は水も流れ砂地の快適なキャンプサイトであるが十一月に入ると雪の上となり水も雪を溶かす以外なくなってくる。

C2から一段下り南稜南端から流れを出している氷河を左上の懸垂氷河の崩落に気をつけながらラバ口の取付きへと向かう。ラバ口

の岩壁基部は標高五〇八〇㍍あり、ここから岩と雪のミックス壁を五二〇〇㍍まで左から右へ回り込み3ピッチでラバロのトラバース地点に達する。トラバースは一五㍍程の短いものであるが標高差三五〇㍍の逆三角型のルンゼ全体の雪崩が集中する所であり緊張する。五二四〇㍍から五三八〇㍍のピナクルまでは不安定な深い雪のラッセルとなる。その後は傾斜の増した雪稜を4ピッチで南稜上に到達する。五六〇〇㍍のC3は目の前である。C3からは雪の長大な斜面がC5まで続く。雪は深く重い。

雪崩事故の状況について

十月十六日、標高五六〇〇㍍のC3より七時十分頃、日本人隊員三名、八時頃中国人隊員三名がC4予定地へ向け出発。ルート上は前日の降雪で深いラッセルなので、十時頃から五人（陳健軍登攀隊長は遅れていた）で交代でラッセルを行う。プラトー（六〇〇〇㍍前後）でC1梶田に交信、その後C4予定地へ向けてさらにラッセルを行った。

一九九〇年秋の試登の際のC4（六三五〇㍍）下のゆるいプラトー（高見登攀隊長の高度計では六一五〇㍍を示していた）。この付近でC4が出来ないか否か検討、C1よりC2に荷上中の重廣に報告した（この時、重廣はC2の手前におり、十三時十分頃か）。高見は空身でラッセルしていたので、五〇㍍程下った所にあるザックを取りに下った（この間、大西隊員から重廣へ交信、上部の偵察を行うとの報告。十三時十五分前後か）。元の場所に戻ったところ、大西隊員が偵察に行くと出発、そこから、昨年のC4付近は傾斜は四〇度前後であったが、大西隊員は早いスピードで登り、その後を木本隊員が続いた。

木本隊員はすぐに左へトラバース、高見登攀隊長はデポ地にて食事を摂っていた。その後高見登攀隊長はトレースを伝い二〇㍍程登ったが、デブリの山であり雪崩の発生を知った。雪崩の発生は十三時三十五分前後と思われる。大西隊員の姿は見えず、木本隊員がデブリの中から姿を現した。二〇㍍程流されていた。二人で付近を探し、十三時五十分大西隊員を発見。デブリの中から右手が出ていた。中国隊員も一緒になって掘り出した。大西隊員は雪面下七〇～八〇㌢㍍の所にあおむけで埋まっており、デポ地（六一五〇㍍）まで降ろし、人工呼吸を開始した。十四時二十分頃まで人工呼吸を行ったが、瞳孔が開き、脈もなかった。BCの小島ドクターに状況を報告、死亡を確認した。その後、テントにくるみ五八五〇㍍まで降ろし安置、C3に戻った。下りは風で朝のトレースも消え、歩行は困難であった。翌日C3下のラバロ降り口まで遺体を降ろし、翌十八日、ラバロからの収容作業を行いC2に安置した。

雪崩の規模は厚さ三〇～五〇㌢、幅一五〇㍍～二〇〇㍍、長さ八〇㍍（最長）、右手は五〇㍍位。標高六二五〇㍍付近であった。

頂上アタック

深い雪と強風に悩まされながらも予定の隊荷をC5に荷上げする事が出来た十一月十九日、第一次アタック隊は上部の風が止むのを待って、六七〇〇㍍のコルに第六キャンプを建設、さらに頂上直下の垂壁を七二三〇㍍までルート工作した。二十日、C6を出発した第一次登頂隊は頂上を目指して出発した。頂上直下の斜度六〇度近い雪壁は昨日のフィックスによって上部から支尾根となって伸びて

いる岩稜の基部に至り、岩稜の右側に出たが雪質が変わり、今にも雪崩そうな悪い積雪状態にルート工作は行き詰まった。

朝から小雪が舞う天気であり、C5からもアタック隊の行動を垣間見る事は出来なかったが、高見登攀隊長の「七三五〇㍍付近を登攀中、雪が降っている。ガスが濃く視界が悪い」それに続く「小さな雪崩が足元から起きる」との報告を受けては行動を続行する事は出来ない。雪崩は降雪によるものでは無いが、岩稜の側面、そして垂直の岩壁帯の直下という囲まれた地型が上部からの風成雪もあって安定していないのだろうと思われた。七三五〇㍍の地点に登攀具をデポしその日の行動を終了した。

二十一日は天気も思わしくなく、連日の行動でアタック隊も疲れているのでC6にて休養、C5から食料の補給を行った。

二十二日、午前四時二十分、C6を出発した日中各三人の第一次アタック隊は風も予想より弱く、満月がこうこうと照る中勇躍頂上へと向った。先日のアタックで到達したロックバンド基部より高見登攀隊長トップで右にトラバース、今日は天気も良くC5からもアタック隊の行動がビデオの超望遠レンズを通して手に取る様に解った。しかし岩壁帯の不安定な雪にアイゼンもスリップしがちで時間だけが経過していった。

そのうちにレンズを通して、登高中の隊員の周辺を雪が風で舞うのが見えた。ツェリン・ドルジェがトップに立った頃から稜線に雪が走る様になり、ロックバンドも荒れ狂う風雪に見え隠れする様になり、午後零時四十分、アタック隊を流雪が襲った。

それぞれがピッケルを雪面に打ち込み、フィックスにぶら下がりながら流される事だけは防いだが、ゴーグルやサングラスを何人かが飛ばされた。岩壁帯の各所から滝の様に雪が流れ、一方強風が雪を吹き上げた。午後一時過ぎ撤退を決定した。ほとんどが手足に軽い凍傷を負いC6に帰った。七四六〇㍍が最高到達点であった。

二十三日、足指の凍傷でツェリン・ドルジェ隊員とロズ隊員がC5の羅申隊員とシャオチミ隊員と交代しベースキャンプへと下った。食糧等の補給も行ったが、二十四日、登山の終結が決定された。登山隊員のみならずベースキャンプで待つ身にも長い六十日間であった。

天候について

チベット自治区気象局によるとナムチャバルワ峰はブラマプトラ河を遡る湿潤な空気に影響され、モンスーンの開始が早い。通常五月にモンスーンが始まり早い時は四月上旬に始まる時もある。秋は通常十月上旬に明けるが遅い時には十月下旬である。

ナムチャバルワ峰の登山時期は降水の状況から考えれば、秋の時期がベターだが、モンスーンが終わると風が強くなる。春から夏にかけて、チベット高原の北側で強烈な風が吹く。また、十月になると強風帯が北側から南側に移る。特にヤルツァンポーに沿って西南風が多く、十月下旬になるとさらに風が強くなる。十月から十一月にかけて二回くらいベンガル湾からのサイクロンの通過があり、一九九一年の秋は十一月上旬に一つサイクロンが通り過ぎた。サイクロンの通過時期は、雪の発生が多く流雪が多発する。

登山に有利な時期はモンスーンの終わった直後であり、太平洋高気圧が張り出してくる九月下旬（十五日以降）に登山を開始し、登

▲C3からのナムチャバルワ峰

Namcha Barwa(7782m)seen from Camp 3

▲ナムチャバルワ　C6からセラック帯へ

Ascent of Namcha Barwa from Camp 6

▲C2からのサガルマータ南西壁

South-West face of Sagarmatha

▲サガルマータ南西壁　C3～C4間の登攀

Ascending South-West face of Sagarmatha

▲トリボール　モムヒル稜の登り(C2～C3間)、後方はディスタギル・サール

Climbing of Mt. Trivor　Mt. Distaghil Sar (7885m) is seen behind

▲C3への登り(6400m地点)から見た主稜線とトリボール

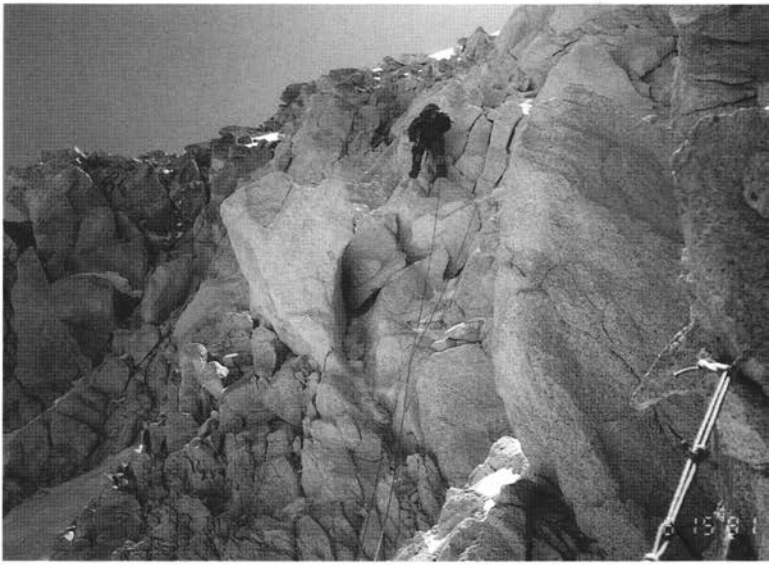
Mt. Trivor 7728m

▲コンコルディアからのブロードピーク

Broad Peak(8167m)

▲ティリッチミール　氷のクーロアールから岩壁へ（七五〇〇m付近）

▶ティリッチミール頂上直下の壁を登る



▲Tirich Mir 7708m

▲Climbing the last wall of the Summit of Tirich Mir

▲ツェンダカン西稜(左の稜線)
The west ridge of Mt. Tsendakang

▼ツェンダカン西稜5800m付近を登る
Climbing of Mt. Tsendakang

▲チョ・オユー峰全景

Cho-oyu8201m

▲スバシから望むムスターグ・アタ峰

Mt. Muztagata 7546m

頂時を十月上旬から十月中旬に持ってくるのが適当である。八月下旬から九月上旬にかけて好天気が続くことがあるが、この時期はチベットに高気圧が張り出しており、気温が高く登山活動から見ると有利ではない。ナムチャバルワ峰は五月になると南側にある強風帯が北側に位置し、この時期からモンスーンが始まり多くの雪が降り、春の時期には登頂のチャンスが非常に少ない。

去年は六月四日にモンスーンが始まったが、降水量はそれほど多くなく平年と変わらなかったが、風が非常に強い年であった。去年のナムチャバルワ地域については、知る限り正常な気象であった。ベンガル湾からのサイクロンが二回あったが、通常の年に比べると少ない回数である。北から南への強風帯の移動は十月下旬であり、十一月中旬から風が非常に強くなった。登山ルートが風が当る所となるので、このような風の状況から見ると、ナムチャバルワ峰を登るのは九月下旬から十月下旬が良いと思われる。

結果的には雪崩事故で十日間の停滞を余儀無くされ、十一月に入ってからは強風の為にルート工作、荷上げに支障を来すようになり、十一月初旬の第一次頂上アタックの予定は二十日までずれ込んでしまった。

まとめ

雪崩や流雪の危険性をさけて北面や西面から頂上に迫る事は現在のアプローチ事情からすると実現は難しい状況にある。今回のルートのうち最低コルから頂上へ続く左の岩稜は風も強く、時間がかかり過ぎる難点がある。

南壁部分の流雪も降雪直後及び強風がないかぎりそんなに規模は多くないと思われる。但し西北西稜から頂上付近に雪煙がたちはじめると風成雪による流雪が発生するのでBC・C5からの監視が必要である。

ナムチャバルワ峰の天候は変わり易いので、状況の悪い時はキャンプで待機し、良くなれば最短距離から出発すべきである。なぜなら、天気の変化のサイクルが短く、三、四日間好天が続けば良いほうである。従ってC2もしくはC3で待機をし、好天を予測しての数日に亘るアタックの方法では頂上に到達することは難しいと思われ、C6への補給を計画的に行い物資を確保し、ロックバンドを突破してからは、一気に頂上アタックすることが登頂の確率を高めるものと思われる。

登山隊の組織

[日本側]総顧問＝櫻内義雄・早川種三・宇都宮徳馬・小林與三次、名誉総隊長＝橋本龍太郎、総隊長＝山田二郎、副総隊長＝村木潤次郎、隊長＝重廣恒夫、登攀隊長＝高見和成、隊員＝木本哲・大西宏・山本篤・広瀬学、マネージャー兼通訳＝梶田正人、医師＝小島彰

[中国側]総顧問＝伍紹組・江村羅布、名誉総隊長＝史占春、総隊長＝洛桑達瓦、副総隊長＝王鳳桐、隊長＝サンジェ、登攀隊長＝陳建軍、隊員＝ジャブー、ツェリン・ドルジェ、ペンバザン、羅申、マネージャー＝張江援、通訳＝趙建軍

[註：本登山隊は日本山岳会海外登山基金、平成三年度助成金の割当てを受けて実施された]

群馬県冬期サガルマータ南西壁登攀

尾形好雄

群馬県山岳連盟は一九四一年の創立以来、国内の山岳はもとよりヒマラヤを始めとする世界の山々に足跡を印してきた。特にヒマラヤ登山では一九七一年春のダウラギリⅣ峰偵察、翌七二年春の本隊以来、一九八七年～八八年冬のアンナプルナⅠ峰南壁の世界初の岩壁ルートの冬期初登攀成功まで、偵察・本隊を合わせて七隊を派遣している。また、岳連加盟の山岳会独自の海外登山十四隊と会員の山岳連盟以外の登山隊へ、個人資格で参加したヒマラヤなどの海外登山八十七隊を合わせると、群馬岳連関係者の海外登山の合計は百八隊、という多きを数える。

岳連創立五十周年を記念して

これらの経験を踏まえ、群馬岳連では一九九一年～九二年の冬期に岳連創立五十周年記念事業の一つとして、世界最高峰・サガルマータ（八八四八メートル）の南西壁登攀が計画された。

この計画は、一九八四年の冬期アンナプルナⅠ峰南壁登山の準備中に「今の中学生や高校生が山登りを好きになり、ヒマラヤ登山を志したときに登れるように」、と十年先を展望して立てられた長期的な計画であった。

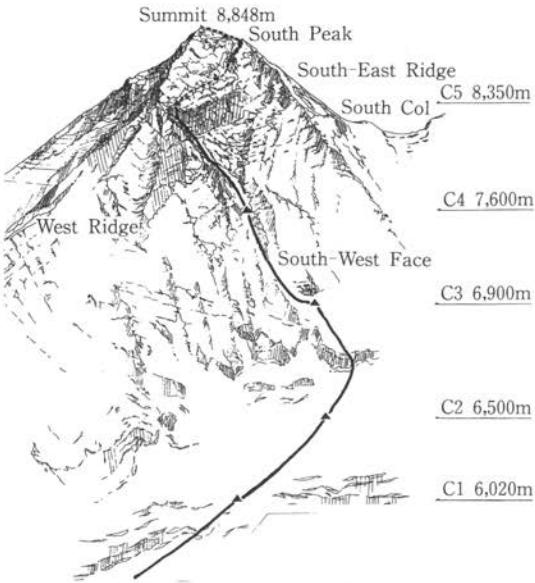
一九八〇年代に入って世界の登山界の頂点では冬期八千メートル峰登山が標榜されるようになり、果敢な挑戦が展開された。日本でも群馬岳連関係者に依ってサガルマータ、マナスル、アンナプルナⅠ峰などの冬期登頂がなされた。このように八〇年代に日本で冬期八千メートル峰登山を牽引してきたのは、唯一群馬岳連、と云っても過言でない。

しかし、この間には群馬の誇る、否、日本の誇る山田昇をはじめとする優秀な岳人が相次いで山に逝き、冬の南西壁計画を支えるべき中核メンバーを喪失した。「群馬モンロー主義」を唱え、七一年春のダウラギリⅣ峰偵察以来、群馬岳連を中心としたヒマラヤ登山の実践にこだわり続けてきた八木原圀明隊長もここに冬の南西壁を陥すためには外部からの隊員補充もやむなしの断を下され、日本ヒ

マラヤ協会（ＨＡＪ）会員の中から数名が補強されることになった。

そんな中でインド・チベット国境警察（ＩＴＢＰ）からＨＡＪへカンチェンジュンガ東壁の合同登山の申し入れがあった。冬のサガルマータ南西壁をスピーディーに登るには、秋に八千メートル峰登山を実行しておくことが必要か、と考えていた八木原隊長は、願ってもないチャンスとばかりにこのカンチ登山をサガルマータ南西壁登山のプレ登山と位置づけて実行されることになったのである。

こうして九〇年の秋、カンチの出発まで六ヵ月弱と云う短期間の中でカンチから冬期サガルマータ南西壁へのメンバーが集結した。



カンチ東面の登山については既報（本誌第八十六年）の通り、戦前ドイツ隊が果敢な死闘を展開した北東支稜に転進して登頂を果たし、メンバーの殆ども八千メートルラインを突破してプレ登山を無事終えた。

一方、カンチに参加しなかったメンバーもブロード・ピークやヌン峰に登頂しての参加で、隊員の殆どが高所登山のブランクのない状態で勇躍ネパールへと飛んだ。

隊員たちはネパール入りしてからもペリチェの裏山（五〇九九メートル）やポカルデ（五八〇八メートル）で積極的に順応訓練を行いながら、十一月十一日以降順次ベース・キャンプに入った。

近年、サガルマータには一シーズンに何隊もの登山隊が入山するようになり、アイス・フォールでは最初に登攀用具、人員等を投入した隊が、あとから入山した隊から通行料を徴収すると伝えられており、昨秋は一隊員につき三百ドル徴収されたと云う。

今冬は我々のほかに韓国からの二隊が通常ルートと南稜に挑むことになっており、カトマンズでの話し合いでアイス・フォールのルート工作は共同で行うことにし、登攀用具や人員等は折半で出し合うことにした。

登攀の開始

アイス・フォールのルート工作は第一陣がＢＣ入りした十一月十一日から開始し、十六日までの六日間で終了した。冬のアイス・フォール帯は、降雪が殆どないためテカテカの固い蒼氷で、雪が降らないせいか流動も激しく、アイス・フォール・シェルパを常時ルート整備に当てなければならなかった。

十一月二十日から隊員の六千㍍台の順化を図るためC1への荷上げを開始した。これは二十七日まで続けられ、この間、各自の体調を見ながら三～六回行い、最終的にC1への荷上げ所要時間は二時間半程まで縮まった。

この順応訓練で六千㍍台の順化を終えた我々は、BCで休養しながら十二月一日の冬期登山の幕開けを待った。

十二月一日、いよいよ冬期南西壁に向けて登山活動を開始する。先ず尾形パーティー（吉田、後藤）と名塚パーティー（佐藤、小西）がシェルパ九名と共にC1へ移動する。

C1（六〇二〇㍍）は、前と後に巨大なクレバスが口を開けているアイス・フォールの落口に設けた。

翌二日、尾形・名塚両パーティーとシェルパでC2（六五〇〇㍍）を建設。C2はウェスタン・クムが一段上った西稜寄りのモレーン・カバーされた氷河上で快適なキャンプ・サイトである。

南西壁基部の六七〇〇㍍付近に大きなシュルンドが口を開けているが、うまい具合に梯子を架ける必要もなく、難なく越えられた。シュルンドの上は傾斜三五度ほどの氷雪壁が続き、「軍艦岩」を目ざして直上する。二日、三日の両日でシュルンドの上に8ピッチ半ルートを延ばして軍艦岩に達し、五日C3（六九〇〇㍍）を建設した。

C3は軍艦岩の基部で、落石の危険は避けられる、と云われたが、長い登山期間中には何度か落石もあり、テントに穴をあけられた。当初C3にはボックス・テントを使用する予定であったが、氷壁にテラスを切ってドーム・テントを設営することができ、荷上げが軽減された。

C3から上のルートは、先ず軍艦岩の下を左に一五〇㍍トラバースしてから傾斜四〇度の氷雪壁を登る。固定ロープの支点にはスノーバーが利いてくれたので助かり、ルートは順調に延びた。

C3から8ピッチ上がると、七五年英国隊のC4跡地でボックス・テントの残骸が見苦しく雪壁にぶら下がっていた。

このC4跡地から二〇㍍中央部に向かってトラバースした後、傾斜四〇度の氷雪壁を直上する。5ピッチ延ばしてから中央の凹状部を2ピッチ左上し、さらに1ピッチ直上すると七〇年日本山岳会隊のC4跡地が現れる。ここも人工キャンプ台やボックス・テントのフレーム、シュラフ、酸素ボンベなどが粗大ゴミ化して無惨な姿をさらけだしていた。このキャンプ・サイトは二段になったジャンプ台のようなところで、南西壁のまっただ中では唯一のキャンプ・サイトのように思えるが、落石の集中砲火を浴びることを思うと、とてもテントを張る気にはなれない。

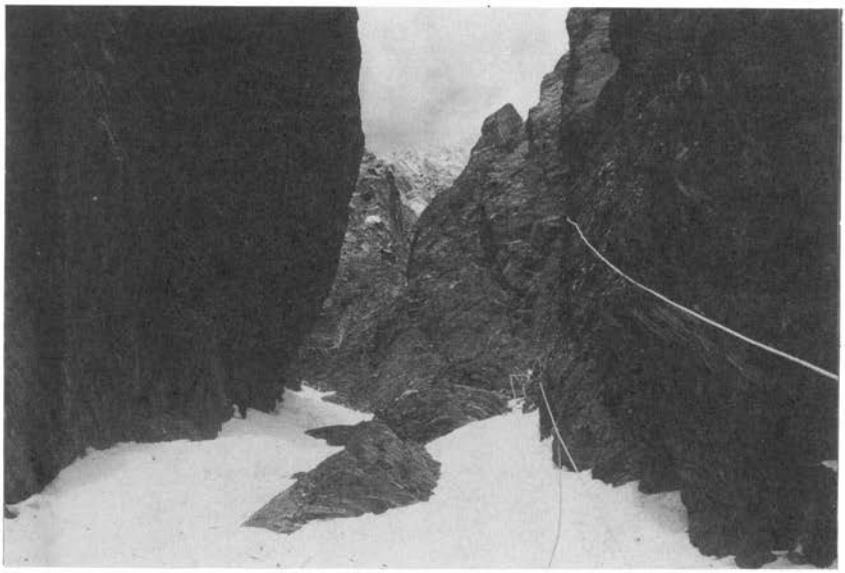
この先、何本かの朽ち果てた固定ロープに導かれながら、ほぼ中央部にルートを延ばし、八日C4キャンプ予定地（七六〇〇㍍）に到達した。結局、C3～C4間には五日から八日の4日間で23ピッチ半の固定ロープを張った。

ロック・バンドに迫る

十二月十一日、顕著な灰色のツルムの下にC4を建設した。C4は人工キャンプ台を設置した所にドーム・テントを設営した。

十一日目にしてC4を建設した我々は、いいよ南西壁の核心部、ロック・バンドへと迫った。

南西壁の八〇〇〇㍍の高みには、標高差三〇〇㍍に及ぶ黒々とし



ロック・バンドに喰い入る左クーロワール

Left side couloir of Sagarmatha South West face

た垂壁が立ちはだかっている。この圧倒的なロック・バンドの突破が南西壁攻略のキー・ポイントとなる。我々は七五年英国隊と同じく、ロック・バンドの左端に喰い込む左クーロワールへとルートを延ばした。

十一日から十四日までの四日間で名塚パーティーが17ピッチ、ルートを延ばし、クーロワールの入口へと肉薄した。

我々がロック・バンドの攻略に奮闘していた十三日の未明、韓国の通常ルート隊はサウス・コル直下のC4から隊員一名とシェルパ一名がアタッタを敢行したが、強風に阻まれて断念した。一方、南稜隊のほうは十三日の深夜から登頂を試みたが、やはり寒気と強風に追い返され、十四日の午後C2に敗退してきた。

十五日、名塚パーティーの最高到達点からさらに半ピッチほど登ると、深く削られたクーロワールに入る。クーロワールの幅は三〜四メートルで、両側は逃げ場のない岩壁が聳えている。途中にチョック・ストーンを持つクーロワール内には、さいわい雪が詰まっており、五〇度ぐらいの傾斜でせり上がっている。チョック・ストーン自体はほとんど雪に埋もれていて難なく越え、さらに1ピッチ延ばすとランペ（傾斜路）へ続く二五メートルほどの垂壁となる。ここは周りが岩壁に囲まれた円形劇場のような所で、井戸の底にいるような気分になる。垂壁には朽ち果てたロープの先にデッド・マンが結びついて垂れ下がっていた。十六日、ついにロック・バンドの核心部を突破してランペに上がる。

この日、尾形・後藤のパーティーは垂壁の基部に到着した後、酸素ボンベを下ろし、登攀具を身につけて、無酸素でこの難関に取り

かかった。つるつるの固い岩にアイゼンの爪を軋ませながらジリッ、ジリッと高度を勝ち取るスリリングな登攀は八三〇〇㍍と云う高所だけにしんどい登攀を強いられた。

この垂壁を越えるとグズグズの岩屑がのっかったランペが右上している。一歩踏み出すと落石が起こるような状態で神経を使う。チャンネル・ハーケンを二本叩き込んでロープを固定してからアブザイレンでセカンドの所へ戻り、酸素ボンベとロープ類を担いで再び登り返す。この高度で荷物を担いでの垂直のユマーリングは酸素を毎分三㍑にしても苦しい。

再びランペに這い上がってから、落石を起こさぬよう慎重にルートを延ばす。ランペは五〇㍍ほどで終わるが、ルートはその手前から三㍍ほどの垂壁を登って直上するようになる。強風がゴーゴーと唸り出したのを潮時に、この日はここまでにしてC4へと下降した。

十八日、橋本パーティー（田辺・小田）とシェルパ二名は、前回の最高到達点からさらに1ピッチ凹状壁にルートを延ばして英国隊のC6（八三五〇㍍）跡地に到達した。C6跡地には、雪壁にサミット・ボックス・テントの残骸が残り、そのそばには昨春の韓国隊のものと思われるソ連製の酸素ボンベなどがデポしてあった。

この雪壁ではとてもテントを設営することはできそうになく、四㍍ほど上に岬のように突き出した幅の狭いスノー・リブが出ていたので、そこをC5予定地とした。

この高度まで上がると南峰は、もはや指呼の間に望まれ、隣接するローツェがぐっと低く見えるようになる。

イエロー・バンドの下に断続する雪のバンドは、ところどころいやらしいスラブのトラバースを強いられそうだ。南峰へ続くクーロワールに入る手前のロック・ステップも赤茶けたスラブを見せ、苦労させられそうだ。

忍び寄る冬の魔手

ここまでは予想以上に順調だった。十二月中旬までに核心部のロック・バンドを突破できたのですっかり気をよくしてしまったが、サガルマータの機嫌がよかったのもこの頃までで、冬の魔手は直ぐそこまで忍び寄っていたのである。

二十一日、尾形パーティーが再度C5建設に向かったが、午後から天候が崩れだし、強風と寒気でテント・ポールがポキ、ポキと折れてしまって設営不能となり、やむなくC4へ撤退する。

翌日からついに冬の嵐が吹き荒れて行動不能となった。C2のテントが吹き飛ばされた二十五日、一時BCへ撤退することになった。

BCに下って五日間、風のおさまりを待ちながら休養した我々は三十一日から登山活動を再開した。

年も改まり、一月に入ってからは風に悩まされ、登っては成果もなく引き返すと云う状態が続いた。

それでも一月八日には、名塚・佐藤の両名によって待ちわびたC5が建設され、残す課題はイエロー・バンド約16ピッチの解決のみとなっていた。十五日、田辺、江塚の両名は、この残された課題を解決すべくC5入りしたが、強風に阻まれて南峰へのルート工作に踏みだせず、十七日には再びBCへの撤退を余儀なくされた。

最後のチャンスに賭けるべく、登山期間を二月十五日まで延長した上で、一月二十五日、あらためて上部への活動を再開した。登山

期間が二ヵ月近くに及んだため、アイス・フォール帯のルート変更はもとより、C1～C2間のクレバスも大きく口を開けるようになり、南西壁の雪も飛ばされて日増しに黒ずんだ岩肌が露出してきた。

二十九日に二名が再びC5に到達したが、翌日から荒れ狂う嵐にまたしても撤退を余儀なくされ、C2へ下る。

二月に入っても、西稜やサウス・コルを吹き上げる烈風の咆哮は止まず、いたずらに日数を食いつぶしていった。

絶え間ない烈風はシェルパたちの士気をもくじき、C5へのサポート拒否につながった。種々の要因を検討した我々は、ついに二月九日、登頂断念を決定した。

冬の南西壁は、取付点からロック・バンドの核心部までの約50ピッチのほとんどが、氷雪壁にルートを採ることができ、春のようにスラブ帯が現れたり、秋のように雪崩に脅かされることもなく、壁の状態としては最高のように思われた。

BCから僅か十六日と云う短期間でロック・バンドを突破できたのもそのせいであろう。それが何故登れなかったのかと云うと、いくつかの敗因があげられるが、やはりなんと云っても風であろう。強風がひとたびゴーゴーと咆哮すると我々は手も足もでなかった。冬の南西壁に立ち向かうのに寒さと風と落石は覚悟の上の筈であったが、不遜であった。BCから荷上げを開始して以来じつに八十三日間に及んだ長い登山であったが、その大半は、烈風のおさまりをひたすら待つ忍耐の日々であった。

（なお、この報告は八木原隊長が書く筈であったが、ネパールへ長期出張で不在のため、群馬岳連の部外者である私が不本意乍ら本登山隊の副隊長と云う立場から筆を取った。群馬岳連の冬期八千メートル登山の系譜については、「群馬岳連五十年誌」、「憧憬の白き壁」などを参照されたい。）

＜記録概要＞

隊の名称　群馬県冬期サガルマータ南西壁登山隊一九九一～九二年

活動期間　一九九一年十月～九二年二月

目　的　サガルマータ（八八四八メートル）南西壁の冬期初登攀

隊の構成　総隊長　＝星野光（59）、隊長＝八木原圀明（45）、副隊長＝尾形好雄（43）、登攀隊長＝名塚秀二（37）、隊員＝吉田秀樹（38）・橋本康弘（37）・木村文江（36）・田辺治（31）・江塚進介（30）・佐藤光由（30）・小西浩文（29）・小田隆三（29）・後藤文明（26）・星野龍史（24）・松崎宣行（24）・秋山剛（21）、医師＝吉村哲明（30）

行動概要　十月二日～二十日の間に四次にわたって日本出発。十月下旬からクーンブ地域に入って順応訓練。十一月十一日BC建設（五三五〇m）、十二月一日C1建設（六〇二〇m）、二日C2建設（六五〇〇m）、五日C3建設（六九〇〇m）、十一日C4建設（七六〇〇m）、十六日ロック・バンドの核心部突破、一月八日C5建設（八三五〇m）、十五日、二十九日とC5に上がるも烈風に阻まれてルート延びず、二月九日登頂断念を決定、十四日BC撤収。

報　告　「ヒマラヤ」（247号）、「山と渓谷」（92年5月号）、「岩と雪」（152号）、「冬期サガルマータ南西壁登山報告書」。

カラコルム・トリボール峰の登頂

大貫敏史

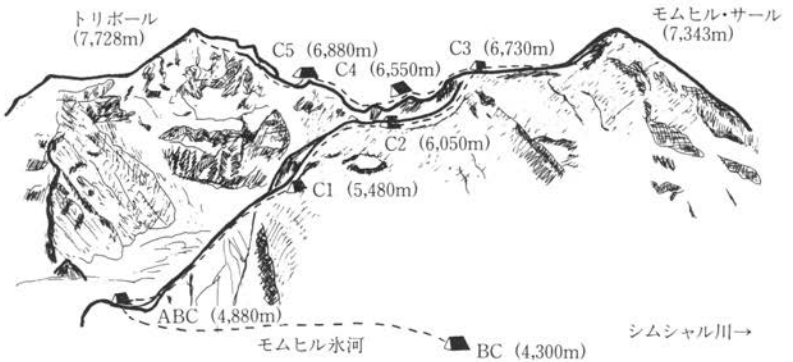
パンジャーブの平原からタルベラダム上流のインダス川を辿り、ナンガパルバットの麓タリチからギルギット川に沿って、ギルギット管区に入る。さらに、壮麗なラカポシを西から回り込むと、フンザを抜け実質的にパミールに移る。その境目に、幾多の高峰を擁する山脈、バトゥーラ・ヒスパー山群がある。ヒスパーの盟主は、ディスタギル・サール（七八八五メートル）である。クンヤン・キッシュやユクシン・ガルダン・サールといった難峰に囲まれ、男性的な風貌で我を張っている。その東側に、七〇〇〇メートルを上下する長い吊り尾根をへて、名前も山容も何処となく優しい女性的な姿を見せて対峙しているのが、トリボールである。

早稲田大学山岳部カラコルム登山隊は、一九九一年の七月から九月にかけて、トリボールの北面からの初登攀とモムヒル・サールの登頂を目指し遠征を行った。

七月六日に、先発隊三好・橋本チームが日本を発った。彼らは気温四〇度を越す灼熱の街・パキスタンのラワルピンディーで多くの仕事をこなしながら、本隊を待った。彼らの働きにより、十日後にパキスタンに着いた本隊は、大型バスの到着を待ってそれに乗り込むだけが、街でやる唯一のことであった。

ベースキャンプまで

カラコルム＝ハイウエーはパキスタンと中国の合同事業で一九八六年に完成された一大山岳道路である。灰色と茶色を混ぜた茫洋としたインダスの激流にそって、丸一日半バスに揺られて移動する。日本と比べると極端に緑の少ない、渇ききり荒れきった景色に、思う存分辟易するころ、北部地域の中心都市ギルギットに着く。ここで一泊。翌日、いよいよ現れたヒマラヤの白峰に心を奪われながら、さらに北部の村、パスーに着いた。ここで荷を下ろし、ここからはカラコルム＝ハイウエーを離れ、シムシャール川という大峡谷に沿ってキャラバンが始まる。シムシャール川を六〇キロメートルも入った奥



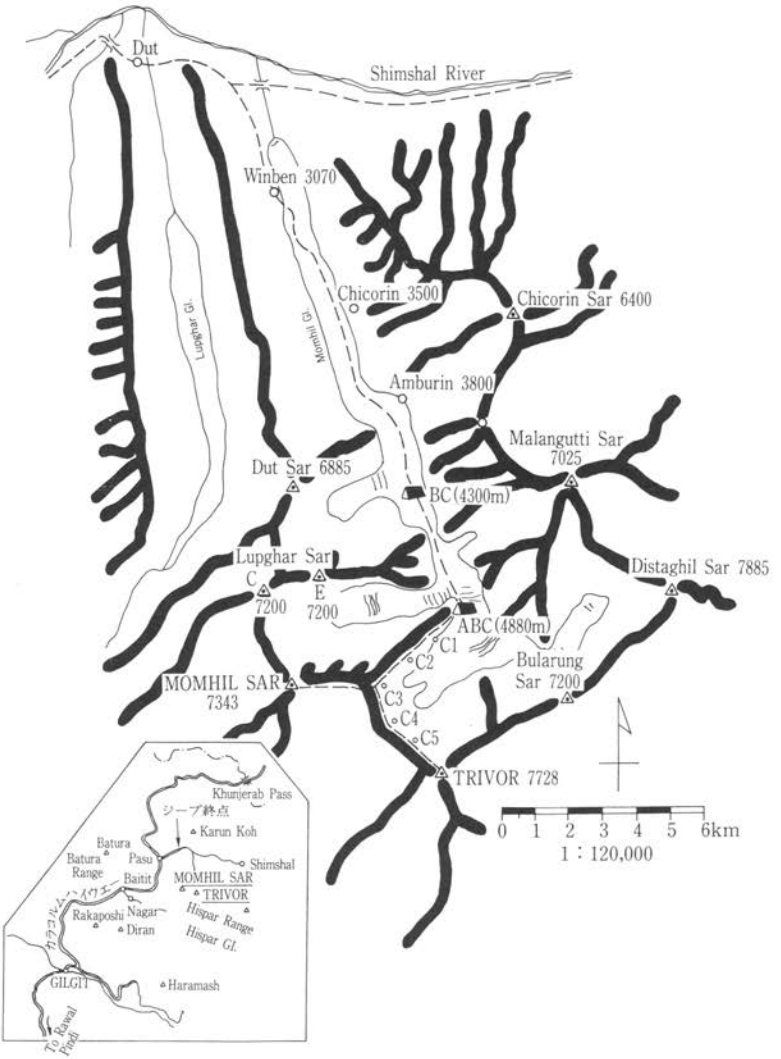
に、シムシャール村という人口千人ほどの山村がある。今回のポーターは、その標高三〇〇〇メートルの村で生まれ育った、屈強の村人たちに頼むことになった。

パスーからジープとトラクターでキャラバンの開始地点に向かう。ジープ終点には、シムシャールのポーターたち百余名が、思い思いに固まって暖をとりながら待っていた。峡谷を半日遡ると足が抜けそうな橋を渡る。ポーターたちは、二五キロ以上の荷を担ぎながら、その足は我々の二倍くらい速く歩き、しかも一歩踏み外せば一〇〇メートル下の濁流に吸い込まれそうな細い道でも危なげが無い。半日歩きシムシャール川と別れ、モムヒル谷に入る。その日の終点は、モムヒル氷河の末端であった。二日目は氷河の上の歩きにくいモレーン（岩屑の堆積）を歩き続ける。標高が三五〇〇メートルを越えると、我々日本人は薄い空気の影響で、ますます歩みが遅くなり、ポーターのスピードはさらに増す。この日は、チコリンという富士山の山頂と同高度の花の咲き匂う牧草地で泊まる。ここで始めてトリボールが、姿を現す。肩の張った巨大な氷のせり上がりである。薄い空気の影響はここら辺から激しくなる。大事をとってさらにここで一泊、この上の大地でもう一泊して、七月二十七日に待望のベースキャンプにテント村を建設した。標高四三〇〇メートル、モムヒル氷河の眩しい光に囲まれた場所である。低所ポーターとはここで別れる。これからは日本人隊員八名、高所ポーター三名、コック二名、と我々のお目付け役としてパキスタン政府がつけた連絡官（彼は軍人である）で一ヵ月半を過ごすことになる。

登攀活動開始

ベースキャンプから氷塔の中の複雑な道を五時間辿り、私たちの登攀ルートと計画している、トリボールとモムヒル・サール（七三四三メートル）とを繋ぐ稜線から一気に二二〇〇メートル落ちる、モムヒル稜の末端に着く。我々は特に梯子のようなものを用意してこなかったので、全てのクレバスは、決死のジャンプと冷や汗の迂回でかわした。日が経つにつれ飛んで越えていたクレバスが広がり、どうしても渡れなくなったが、ポーターたちの現場の知恵で、石を崩した積み石の橋が作られ、我々をクレバスのえじきから救った。モムヒル稜の末端に二〇〇メートルのモレーン丘があり、ここに前進ベースキャンプを設け、長大な尾根を登り切る足掛かりとした。ここから大変脆い急

概略図、登攀ルート図


Dut
Shimshal River
Winben 3070
Chicorin 3500
Chicorin Sar 6400
Lupghar Gl.
Momhil Gl.
Amburin 3800
Malangutti Sar
7025
Dut Sar 6885
BC(4300m)
Lupghar Sar
C
7200
E
7200
Distaghil Sar 7885
ABC(4880m)
C1
C2
Bularung
Sar 7200
MOMHIL SAR
7343
C3
C4
C5
TRIVOR 7728
0 1 2 3 4 5 6km
1 : 120,000
Khunjerab Pass
シープ終点
Karun Koh
Batura
Batura
Range
Pasu
Shimshal
Baitit
MOMHIL SAR
TRIVOR
Hispar Range
Hispar Gl.
Rakaposhi
Nagar
Diran
GILGIT
Haramash
To Rawal
Pindi

な岩尾根を五〇〇㍍ロープに頼って登る。岩尾根の頭から雪庇の張り出した雪稜が尾根の肩（五九〇〇㍍）まで続く。C1を雪稜途中の五四八〇㍍に設け、C2を肩の先の台地の上六五〇〇㍍に作った。C2に来ると目指すルートが一望のもとに視野に入る。主稜線のC3まで標高差七〇〇㍍、そこからは初登頂のノイスをして「二マイルの稜線」といわしめた長い長い稜線がトリボールまで続いている。はっきり言えばモムヒル稜は、モムヒル・サールを登るためのアプローチである。そう言い切ってもいいくらいこの稜線は、トリボールから遠く離れた場所に繋がっている。隊員は、体調もよく食欲も旺盛だが、食いつく紫外線だけらの太陽のもと、毎日続く荷上げと高度障害で、日に日に元気が失われてくる。C2から尾根は徐々に傾斜を増し、雪崩の危険の渦巻く広大な斜面を登る。最後に二〇〇㍍の氷雪壁をロープにすがって這い上がるとC3（六七三〇㍍）。

ここからトリボールまで六六八〇㍍峰、ノイスが命名した「双頭の塔」という二つのこぶを越えねばならない。まず二〇〇㍍大きく高度を下げ六五〇〇㍍のコルへ一気に降りる。六六八〇㍍峰は雪崩の出そうな斜面を、滑落に注意して越える。下りはザイルにぶら下がっての懸垂下降。下り切った所がC4（六五五〇㍍）。ここまで三週間かかった。一旦全員ベースキャンプに下って休養をとる必要があった。C3以上は、縦走なので逃げ道が無く、悪条件になると窮地に陥る。一挙に登頂し、速やかに下山し安全圏に戻らねばならない。

アタック

八月二十八日、ルート上の最大ポイント「双頭の塔」をルート工作。際どい雪壁・岩壁をロープ2ピッチで越える。さらに氷壁のトラバース3ピッチで難所を終える。

八月二十九日、大貫・遠藤のアタック隊と井沢・中間のサポート隊でC5の建設に向かう。トリボールへ延々と続く一二〇〇㍍の登りにかかり六八八〇㍍の氷塔の下に二人用テントを張る。天気が今一つ安定しないのが気懸かり。

八月三十日、午前三時半、アタック隊出発。一刻も早く山頂に達するため、月明かりのなか急斜面を急ぐ。頂上の雪庇に高所の雲がまとわりつき、虹色に輝いて見える。だんだんと風が強くなりガスにまかれブリザードになる。頂上稜線に抜けるルートがよく見えないまま、急峻なルンゼを力任せによじ登る。全く視界を絶たれた状態で、やっと頂上稜線の一角らしき所に出る。雪庇を踏み抜いてしまう危険を察知し、ツェルトに潜り込み長い待機。私は安全に帰れる可能性を熟慮し、隊長としてやむなく遠藤に下山を促した。しかし、遠藤は「ビバークしてでも行きたい」という。もう一度考える。一回降りてしまえば、もう二度と登頂のチャンスが失われてしまうのは、私が一番良く知っている。長い沈黙。自分たちの負うことになるリスクと登頂への激しい誘惑とがぶつかりあう。ふとツェルトから顔を出すと、願いが通じたのか晴れてくる。天候が安定している内に一気におとすのみ。午後一時五十分、細いリッジのどんずまりが最高点であった。ノイスのこの登山に関する著書「未知の山へ」を読むと、彼らは三十一年前の初登頂の際、手前の頂上で止まってしまったような記述があるが、我々は念のためもう一つ向こうに続く雪庇の上に立った。三十分ほどで慌ただしく写真を撮り、大急ぎ

C3～C4の稜線　中央がモムヒル・サール，左が双頭の塔．右から2番目のピーク右側がモムヒル稜
Mt.Trivor. The ridge from Camp 3 to Camp 4. Center is Mt.Momhil Sar

で下山を開始する。

救出！

ガスに巻かれ道を失いボロボロになって夕暮れ直前にC5に降り着く。疲労困憊したアタック隊がC5に戻るとC4に降りていなければならないサポート隊がC5にいる。何でも中間隊員の調子が悪く、井沢一人ではC4に降りるのが不安だったらしい。その夜は仕方なく四人で二人用テントに寝る。

しかし高所で無理をし、高い高度に泊まったつけがやってきた。夜十時頃からの中間の様子がおかしくなる。激しい咳と胸鳴り。肺水腫だ！　一刻の猶予もならなかった。中間が立てる内に少しでも高度を下げなければならなかった。症状の悪化は急速に進んでいるようであった。午前零時に全員が起き、脱水症状を防ぐため水を多量に作る。三時出発。中間の前後でアンザイレンしゆっくり下る。明るくなった午前七時に下のコルにつく。大貫は中間の看病。遠藤はC4の移動。井沢は酸素ボンベの回収に走る。同時にC2の三好・橋本で一挙にC3を越えC4方面への酸素の運搬を要請。BCへはヘリコプターを依頼する。この稜線上ではC3まで三つの山を越えねばならず、その状況下では短時間に下におろすのは到底無理と思われたからだ。三〇〇〇メートルしかC5から高度を下げられない。ヒマラヤの稜線上ではこれ以上の身動きは許されなかった。

願いが通じたのかコルについてから症状が安静に向かっているようだった。夕方、リレーによってようやく酸素ボンベがコルに届き大いに安心することになった。翌日にはヘリが来るはずであった。

しかしまたしても不運！　ポーターの伝令が戻ってきて言うに

は、スカルドゥ方面で事故がありヘリがふさがっているとのこと。翌日、翌々日と待てどもあらわれず。そうしている間に中間は大分回復してきて動けるようになってきた。とうとうしびれを切らしみんなでC3に戻ることになった。ヘリコプターが何故最後まで来なかったのか誰も知らない。

モムヒル・サールのアタックそして下山

長い稜線での行動がたたって多くの隊員に疲労の跡が隠せない。しかし下に降り休養してから再度アタックするには時間が足りなかった。九月五日にワンチャンスにかけ、アタック可能な六人でモムヒル・サールに向かう。C3から1時間半で取り付き、そこから急な東稜がいきなりせり上がっている。見るからに手ごわそうだ。三好・遠藤が先行しフィックス作業をする。二日前には三好・土沢の珍コンビで3ピッチほどフィックスロープが付けてある。遠藤はリッジをまわりこんだ氷のルンゼに挑んでいた。氷壁は固く長く、しかし彼の手元にはたった二本のアイス・スクリューがあるのみであった。時に高度は七〇〇〇㍍。過去数々の隊がこのリッジに取り付き敗退したが、その理由がよく理解できた。

翌六日、三好・土沢迷コンビにザイル回収を任せ、残りの隊員はBCへ下山。翌7日全員下山。登山は終わった。

私達の力を使い果たしたといえる登山であった。

〈記録概要〉

隊の名称　早稲田大学山岳部カラコルム登山隊一九九一年

活動期間　一九九一年七月六日～九月二十一日

目　的　パキスタン共和国カラコルム山脈ヒスパー山群、トリボール峰（七七二八㍍）の北面からの初登頂（通算第二登）、モムヒル・サール峰（七三四三㍍）の全員登頂

隊の構成　隊長＝大貫敏史(30)、副隊長＝三好雅彦(33)、隊員＝橋本守功(34)・中間英敏(31)・井沢正彦(28)・遠藤淳(27)・小林浩(21)・土沢信明(22)

行動概要

7・6　先発隊出発

7・16　本隊出国

7・27　BC集結

7・29　登攀活動・第一期開始、モムヒル稜末端のモレーン丘上まで全員で往復ABCとする（四八八〇㍍）

8・8　第二期開始

8・15　C3建設

8・19　第二期終了、BCにて完全休養

8・20　第三期（アタック）開始、この後悪天候、ポーター、隊員の故障続く

8・29　アタック隊（大貫・遠藤）C5（六八八〇㍍）入り、サポート隊（井沢・中間）C5往復、モムヒル隊C3往復

8・30　午後一時五十分トリボール登頂

9・5　モムヒル・サールアタック、三好・遠藤の先行、大貫・井沢・橋本・土沢の後続で東稜沿いにフィックス。七〇〇〇㍍付近で氷のルンゼに阻まれ撤退

9・7　BCキャンプ集結、登山活動終了

9・21　日本帰国

ブータン・ヒマラヤ ツェンダカンの初登頂

桜井文隆
吉永英明

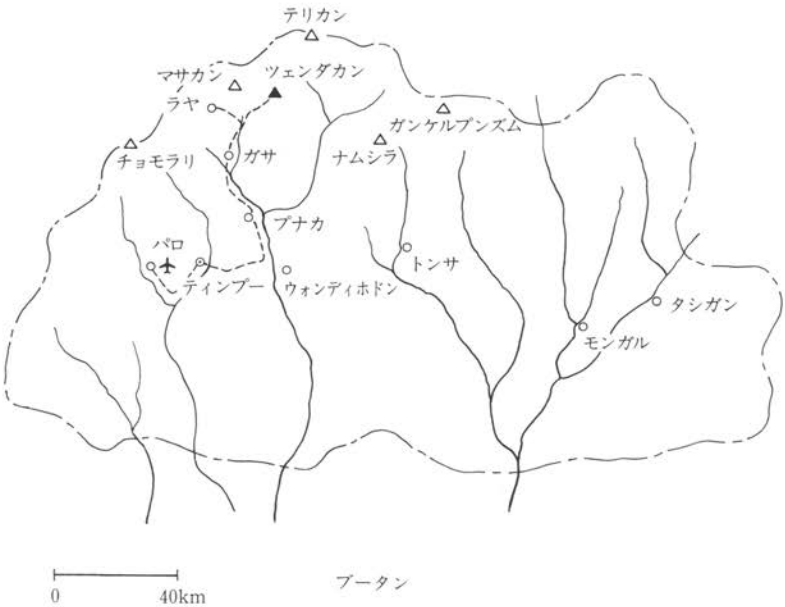
計画の始まり

千葉大学ヒマラヤ委員会が派遣したヒマラヤ遠征隊は、一九六三年の東ネパール・ヌンプール以来、今回のブータン・ヒマラヤ「ツェンダカン」で七回目を数え、第一回目以来、一貫して東部、湿潤ヒマラヤ地域に焦点を絞り登山と植生を中心とした学術調査を行ってきた。

一九八三年、ブータン・ヒマラヤの登山が解禁になり、一九八五年、ナムシラ峰の登山と別動隊による学術調査を行い、概ね当初の成果を得た。また、北部ルナナ地方の踏査を通じてブータンの登山事情も把握できたため、次回もブータン・ヒマラヤの未知の山域にと目を向けてきた。一九八六年以降、随時メンバーが入国してブータン当局に接触、未登峰の許可取得の可能性をうかがってきた。しかし、ブータン当局は、マサカン、ジェチュダケといった一部の高峰を除き主だった高峰は中国チベット自治区との国境線近くに位置するため許可しない姿勢を取り続け、一九八七年には最高峰ガンケルプンズムの登山も禁止となってしまった。

このような状況の中、一九八七年、一部のメンバーがブータンに入国、国境線よりやや南側に位置するツェンダカンの登山許可をさぐったが、許可取得の可能性がないため、取りあえず、ティンプー東方のドチュ・ラからの遠望で以前より注目していたツェンダカンの東側に位置していると思われる無名の高峰をツェンダカン東峰と呼んで許可の申請をしたところ、標高も位置も不明な無名峰のためか、ブータン当局よりトレッキング・ピーク扱いとしての登山許可が発給された。

一九九〇年には、植生、気象、地形等の学術調査隊が派遣され、ブータン中部を中心に幅広い踏査を行い、同時にツェンダカン東峰登山の確認も行ってきた。



ツェンダカン東峰　主峰は左の雲の中にある
East peak of Mt. Tsendakang, Main peak is coverd by the cloud

往路キャラバン

一九九一年十月一日、ネパール・カトマンズでの物資の調達と通関業務を行うため先発隊二名が出発、続いて十月八日、本隊三名がバンコック経由で出発し、十月九日、パロで合流後、ティンプーに入った。

翌日よりブータン観光公社との日程調整等を行ったところ、担当官からツェンダカン東峰でなくツェンダカン主峰の登山を了承するとの突然の発言がなされたため、とまどいながらも急遽、東峰から主峰への登山に切り換えた準備に入り、十月十二日、マイクロバスでティンプーを出発、古都プナカを経由してモ・チュー沿いの自動車道路終点、リンチュー村先より馬によるキャラバンを開始した。

タシタン、ゲンダムジを通過し、十月十四日、この地方の中心地である温泉地、ガサ着。ガンプーカンが間近に望め、店にはインド製のビールも売られていた。ここで馬の一部をヤクに交代したのち、モ・チュー沿いのバレ・ラ（三八〇〇メートル）を越え、コイナを通過して十月十六日、軍が駐屯するタクツイマカン着、谷奥にはマサカンが望めた。馬からヤクへの交代のための休養日には最奥の村、ラヤ村の見学に出向き、特徴のある竹皮のトンガリ帽子をかぶった女性を物珍しく見、水車の調査を行った。

十月十九日より後半のキャラバンを開始。ルナナ地方への街道ともなっているロドフ・チュー沿いを進み、十月二十日、ツェンダカン南西面に通じる支谷に入り、標高四七〇〇メートル地点にベース・キャンプを建設した。

ベース・キャンプから見るツェンダカンは、西稜、南稜、北稜、南西壁より形成され、西稜上部より南西方に支稜を有し、北稜に続く稜線上には当初目指していたツェンダカン東峰がそびえている。

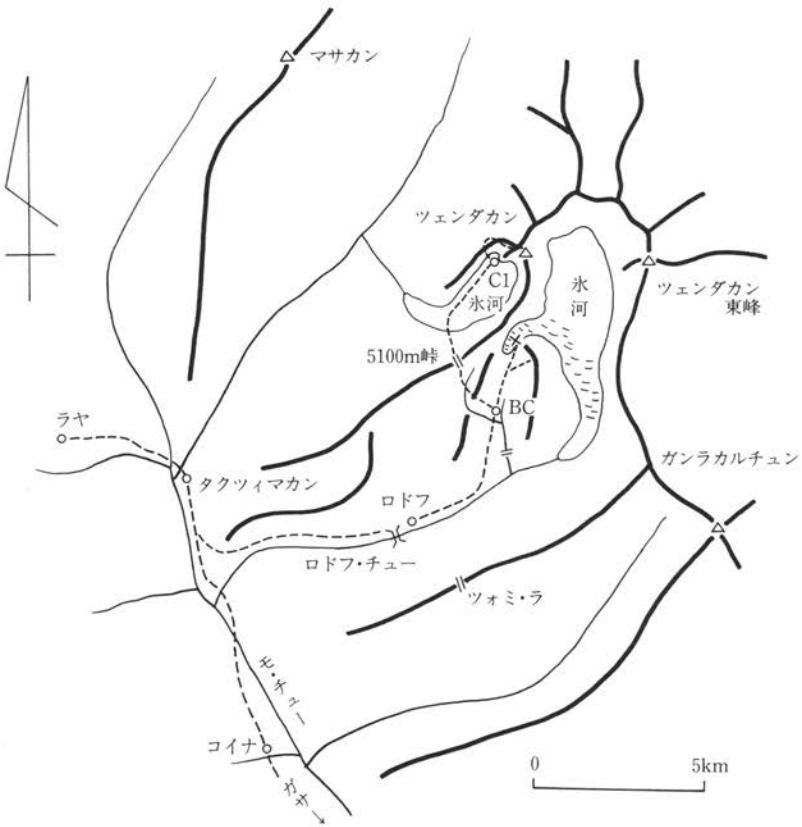
登山活動

十月二十二日、東峰との間に氷河を抱く東面より取り付くべく、ベース・キャンプ正面のアイスフォールにルート工作を開始したが、氷河の状態が悪く、大クレバスに行く手を阻まれて断念、十月二十七日より南稜の延長線上にある五一〇〇メートルのコルに進出して偵察したところ、西稜下部のルンゼに可能性のあるルートを発見した。西稜自体相当急峻なリッジであるが、南西壁もルートとしては不向きなことからこのルンゼに成否をかけることにした。

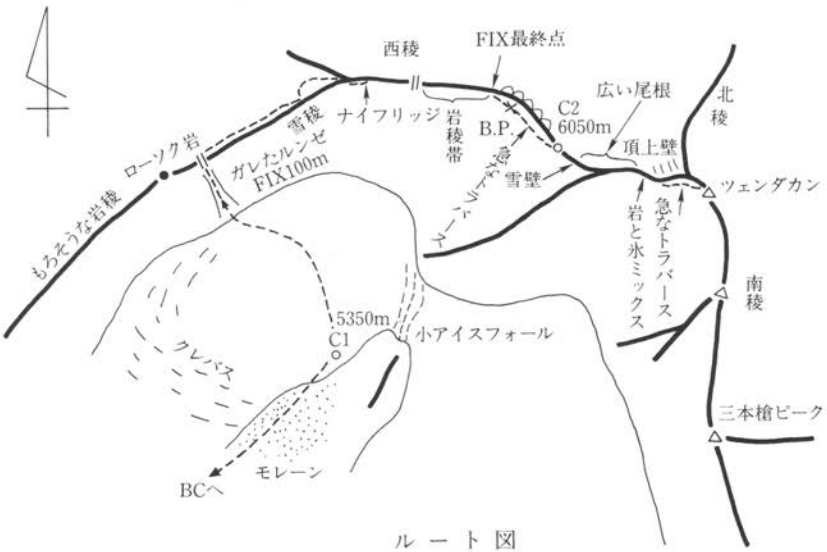
十月二十九日、南西支稜基部のプラトー手前にC1（五三五〇メートル）を建設、翌日、もろいルンゼにルート工作を行い、西稜上のコルに出ることができた。

十月三十日より西稜上に本格的なルート工作を開始、西稜は両側が切れ落ちた高度感満点のリッジで、約四五度の風化の進んだ岩まじりの雪壁が続く。五八〇〇メートル付近で用意してきたフィックスロープが尽きてしまった。東峰から主峰に急遽変わったことによる準備不足が露呈された形になってしまい悔まれた。フィックスロープが尽きたのちは、登攀用のもので補いつつナイフリッジにルートを延ばして行ったが、いよいよ食料も残り少なくなってきたため、十一月六日より一気にアタック体制に入ることにした。

十一月六日、三名にてC1を出発、フィックス終了点十七時着、


マサカン
ツェンダカン
C1
氷河
氷河
ツェンダカン
東峰
5100m峠
BC
ラヤ
タクツィマカン
ロドフ
ガンラカルチュン
ロドフ・チュー
ツォミ・ラ
モ・チュー
コイナ
ガヤ
0
5km

周辺概念図



ルート図

そのままナイフリッジを進み、二十二時雪壁途中にてビバーク。翌十一月七日、南西支稜とのジャンクション手前の小台地上にC2（六〇五〇㍍）を建設した。

十一月八日、C2より三名の隊員にてリッジの続く頂稜を進んだ。C2よりすぐアイスフォールになっており、クレバスを越すと雪壁が続くといった状態で頂上の肩に出た。頂上はすぐと思われたが、リッジ沿いの急な雪壁のトラバースが待っていた。3ピッチのトラバースを慎重に行いつつ目前の小岩峰を目指して直上し到達した所が頂上であった。十三時着。地図上は七〇〇〇㍍となっているが、高度計は六三一〇㍍を指していた。マサカン、ツェンダカン東峰が手に取るように望めた。

下降は二回の懸垂をまじえ、十七時C2に帰着した。十一月九日、C2からの下降を続け、二十時C1着。翌十日、BCに無事下山し、全員が合流した。

ルート選定に多くの時間をとられ、時間切れ寸前の登頂であった。ルートはおろか、山容さえも判然としないブータン・ヒマラヤならではの醍醐味といえるであろう。反面、当初、東峰を目指して準備していたため、フィックスロープ等の装備の面での見込み違いがあったことも最後まで苦労した一因であった。

帰路キャンプ

十一月十日、ベース・キャンプを撤収してロドフに下り、隊員による植生調査等をしながら往路を辿り、途中、ガサの温泉で休養をとったのち、十一月十六日夜遅くティンプーに帰着した。

前回、一九八五年のナムシラ峰遠征の際の帰路キャラバンは、ルナナ地方を横断するルートであったが、食料、荷物運搬用のヤクの調達等、ガイドの必死の奔走にもかかわらず住民の協力が全く得られず、荷物を捨てながらの空腹を抱えた脱出行であった。しかし、今回のモ・チュー沿いのルートは、幹線ともいえる街道沿いのせいか、食料も十分で、馬からヤクへの交代等も概ねスムーズに行われ、前回とは様変りの状況であった。

おわりに

山岳部O・B二名、現役三名という弱体な隊であり、また、一部に準備不足の面もあったが、ツェンダカンの初登頂とある程度の周辺地域の地形の解明ができた。

ティンプー帰着後、未登峰であったツェンダカン登山に関しブータン観光省を所管する商工省より若干のクレームがついた。しかし、ブラダン大臣の寛容な取り扱いと観光省スタッフの援助で事無きを得た。

大学山岳部は、近年、部員不足が顕著で十分な合宿さえもできない状態にある。従来から若干名の現役を必ず隊員に含めて遠征活動を行ってきたが、今回は三名の現役が参加し、しかも主導的な活躍をした。この余勢をかって一九九二年春には現役による初めてのヒマラヤ合宿も実現した。国内における訓練も必要であるが、ヒマラヤといった憧れを実現して行くのも、今後の魅力ある大学山岳部のひとつのあり方かも知れない。

未知の山域がまだまだ多く残るブータン・ヒマラヤは、ヒマラヤ登山の醍醐味を満喫させてくれる。一九八三年の登山解禁以来、約十年後の今日でも、この状態は少しも変わっていない。今後とも変わらずに残されて行くことを祈りたい。

＜記録概要＞

隊の名称　一九九一年千葉大学ブータン学術調査登山隊

活動期間　一九九一年十月～十二月

目　的　ツェンダカンの初登頂と周辺地域の踏査

隊の編成　総指揮＝中馬敏隆(62)、指揮＝吉永英明(49)、隊長＝桜井文隆(33)、隊員＝小玉裕志(25)・本間航介(23)・高橋良治(20)・朱宮丈晴(20)、ガイド＝カルマ・ドルジ

行動概要　十月十二日ティンプー発、同日リンチュー先よりキャラバン開始、二十日ツェンダカン南面四七〇〇メートルにベース・キャンプ建設、十一月八日西稜よりツェンダカン（七〇〇〇メートル）に初登頂、十日ベース・キャンプ撤収、往路を辿り十六日ティンプー帰着。

報告書　一九九二年に発行予定

ヒンズークシュの名峰ティリッチミール

―日本・パキスタン合同登山隊の記録―

須藤建志

日本山岳会京都支部は、一九九一年の七月から八月にかけてパキスタンのアドベンチュアーファンデーション（ＡＦＰ）との合同でヒンズークシュの最高峰ティリッチミール（七七〇八メートル）の登山を行った。

この登山は京都支部の五周年事業として行った初のヒマラヤ登山で、ＡＦＰも初めての本格的なヒマラヤ登山であった。

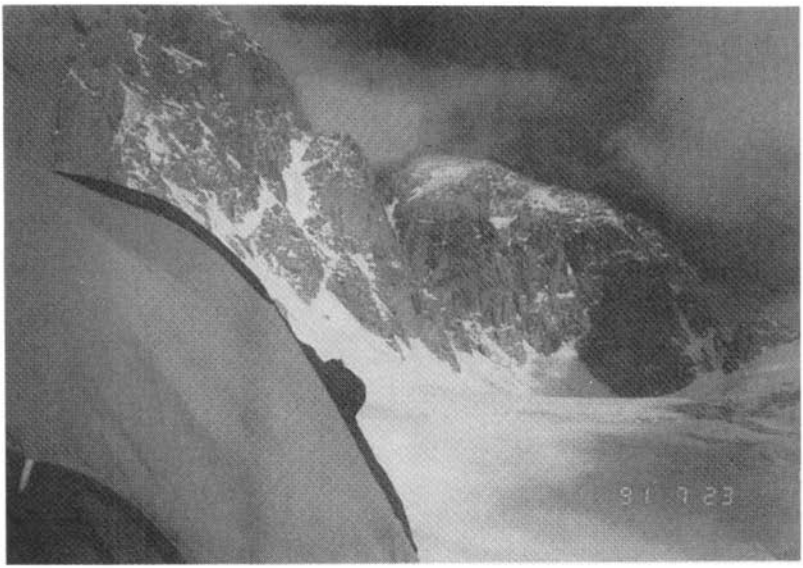
パキスタンには満足な登山装備は無く、ＡＦＰのメンバーにも本格的な登山の経験は無い。そこで日本から彼等の個人装備も含めた登山装備と上部での食糧を用意して行き、パキスタン側には宿泊と食事の世話、ベースキャンプでの食糧と装備を無料で準備してもらった。パキスタンの若手のヒマラヤ未経験者にはことさらに技術指導をするという方法ではなく、私たちと一緒に登山をする中で何かをつかみ取ってもらいたいと考えた。

登山ルートは北面のアッパーティリッチ氷河から登り、氷河上の六四〇〇メートルにＡＢＣを建設した後に、テントや食糧を担いで一気に登る方法とした。又、ヒンズークシュはモンスーンの影響を受けずに天気が安定しているので主峰の登頂を行った後に、西峰の各峰の登頂と縦走も試みるといった欲張った計画とした。

日本側隊員の出発は休暇が取りやすいように先発、後発と分け、後発は日本出発から帰国までを四十日間として、その間で理想的な高度順化を行って短期間で登頂することも目的とした。又、もう一つの目的として登山期間中の環境への配慮とゴミ処理を提案し、計画段階から担当者を決めて具体的な方法を検討して行った。

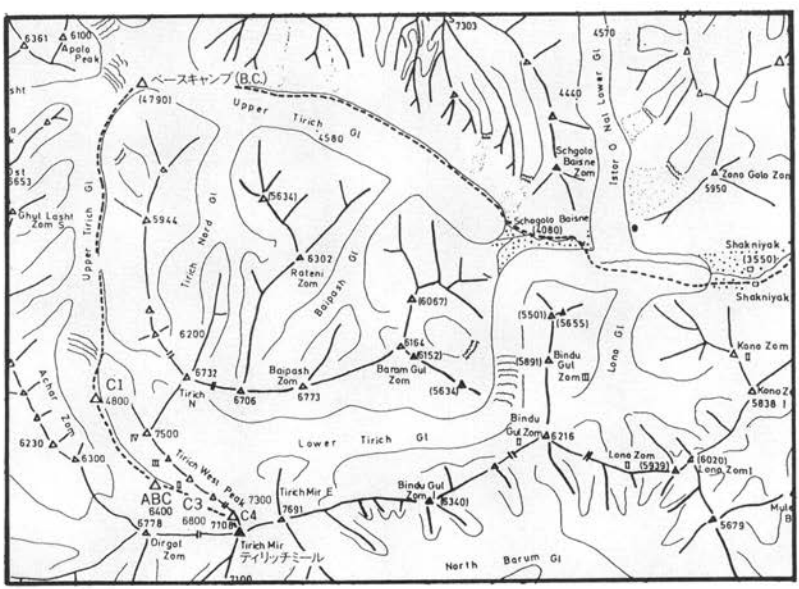
七月一日に斎藤支部長、須藤、堀江、船尾、小田、支部長に同行した山口の先発隊はＡＦＰのトレーニングセンターがある避暑地のアボッタバードに入りパキスタン側と初顔合わせをした。

メンバーは副隊長のサジャード、彼は京都在住で日本語が堪能である。アタ、彼は空軍のパイロットで彼だけが唯一のヒマラヤ経験



ABC（6400 m）からのティリッチミール（北面）

The North face of Tirich Mir from A.B.C.（6400 m）



者でナンガパルバット、ガッシャブルムⅡ、シアカンリに登っている。タリックは海軍の事務官で何度かのリエゾンオフィサーの経験がある。タイヤーブ、ナディーム、ファードはフランスの登山学校でのコーチは受けているがヒマラヤ登山は初めてである。アタはリエゾンオフィサーを、ファードは登山隊のドクターを兼ねている。

一カ月前に船便で送った隊荷がアボッタバードまで届いておらずやきもきしたが、四日にようやく届き七日にはチトラルに向けて出発することが出来た。

九日にティリッチゴルの上流の村、シャグラムまでジープで入りキャラバンを開始した。シャニョーク、ショゴロベースンと進み十二日にアッパーティリッチ氷河の屈曲点右岸の四八〇〇メートルにベース・キャンプを設けた。ベースは対岸にイストルオナールやノシャクが見える大変景色のよい所だったが周辺には過去の登山隊が残した空き缶が散乱していた。

ここから先のルートはアッパーティリッチ氷河の右岸をC1、ABCと進み、そこから氷河最奥のクーロアールから西峰とのコルに登り登頂するものである。二日間で荷上げの準備を済ませ、十五日から登山をスタートさせた。

C1は従来のキャンプ地を一つ飛ばして、西峰4峰からの尾根の末端まで持って行っただけに距離八キロメートル、高度差一〇〇〇メートルと非常に遠く最初の順応しきれないうちは大変しんどく、荷上げで登り着けない者もいたが次第に全員が登れるようになった。

十九日にABCを六三〇〇メートルに設け、先発二回のアタックと後発一回分の食糧・装備を荷上げして、六八〇〇メートルC3予定地まで偵察に登り一旦BCまで引き上げてアタック前の休養に入った。

七月二十日に日本を出発した後発の宮川、松田、百海（レラかい）は二十七日にはBCに到着して全員が揃った。

第一次アタック

先発隊は五日間の休養をとりアタックの鋭気を養ったが登山期間の少ない後発隊は休養をとる間もなく順化活動に入った。

三十日、膝の故障のサジャード、BCから上部へほとんど行動することの出来ないタリックを除く先発七名がアタックに出発する。

八月一日、C3を六八〇〇メートルの氷河の最奥のクレバスに建設する。ここまでのルートは技術的な問題は無く歩いて登ることが出来たが、ここからは高度差五〇〇メートル、六〇度ぐらいの氷のクーロアールになる。ここを15ピッチのフィックスでルートを開きC3で一日休養して四日に七三〇〇メートルのコルにC4を設ける。

この登りは、急傾斜に加えてC3を撤収したテント、アタックに必要な装備、食糧、個人装備と、各自二〇キロを越えるザックを担いでとなり、苦しい登攀となった。タイヤーブ、ナデーム、小田が遅れだし、小田は最後の2ピッチでほとんど動けなくなり迎えに出た堀江に助けられて夜の十時近くにやっとC4にたどり着いた。夜中には食べたものをもどすなど疲労していたが信じられないほどの回復力で翌日には全員でアタックに出発した。

C4からは稜線上の岩稜にルートを求めるが、行き詰まってしまう。岩稜の右は深く切れ落ちたルンゼでルートは無い。左へトラバースするが、上部の岩壁帯にはばまれてルートを見付けることが出来ない。このままルートを見付けられないでダラダラと全員が行動し

ていたのでは時間が掛かるばかりなので、前日BC入りの遅れた小田、高所経験の無いタイヤーブ、ナディームを一旦C4に帰すことにして残りの四人でそれぞれルートを探すことにした。三人はしばらく傾斜の無い所で休んでいたが、船尾が上部のクーロアールから岩稜を登ってルートを探るのにロープを持っているタイヤーブに確保するように声を掛けた。私は帰れと指示をしてあるタイヤーブがこの場で行動しているのを見ていやな予感がしたが、間もなく行き詰まって船尾が降り出したのでその予感に対処することなくその場を離れた。その直後、「タイヤーブが滑落した」と叫んでいる船尾の声が耳に入った。あわてて滑落地点が見える所まで戻ったが彼の姿を見付けることは出来なかった。タイヤーブは氷の三～四〇度の斜面を滑落して一気にロアーティリッチ氷河に落ちて行ったように思えた。

アタが滑落した方向をずっと見ていて四〇〇メートルほど下のクレバスを指差してあそこに落ちているという。私には見えないがスリップ痕がその下には無いという。

そのクレバスはC4から平行に二〇〇メートルほどトラバースした所に有り容易に歩いて行ける。全員でC4に戻りクレバスまでトラバースするとタイヤーブはクレバスにたたき付けられて止っていた。意識はしっかりしており全身を調べて見るが肋骨以外は大した怪我は無いようだ。だき抱えてC4に連れて帰りC4を撤収して全員でC3にタイヤーブを降ろすことにする。

15ピッチのクーロアールは確保しての下りとなり苦労するが無事C3に収容することが出来た。C3には順化行動中の宮川、百海もレスキューに上がっており彼等はシュラフ無しのビバークとなる。翌日再アタックの堀江、船尾、アタをABCに残し松田を加えた残り全員でタイヤーブをBCに収容することが出来た。

ABCに残った堀江パーティーは休養の後九日に一気にC4に登り十日にアタックに出る。

しかし頂上への岩稜を突破するルートが見付けられないのに加え、強風のためにアタの両足指が凍傷になりアタックを中止して下山する。

一方、タイヤーブと共にBCに戻ったメンバーは三日間の休養後十日に須藤、宮川、松田、小田、百海で最後のアタックに出発する。ここまでタイヤーブの滑落、アタの凍傷、ファードは尻に腫れ物ができ手術のために下山、サジャードは膝の故障、タリックはBCから上に登る体力が無いと、パキスタンメンバーはことごとく戦線から離脱しており、残るのはナディームただ一人だがタイヤーブの手痛い失敗もあり、まだ頂上へのルートの見通しもついていない所へ未経験の彼を連れて行くわけにはいかない。しかし今まで体調もよく荷上げ、タイヤーブのレスキューと、人一倍頑張って来た彼をアタックさせたいし、又彼をはずすことによってパキスタンメンバーは一人も登頂出来なくなり合同隊として非常にバランスを欠くことになるが、タイヤーブの二の舞いだけはしたくない。登山はまず個人の判断が優先されるべきだし、行けば登れる可能性の高い者をいわば隊長の権限というやつでアタックからはずすのは心苦しい。しかし彼はまだ二十四歳、これから経験を積めばいくらでもチャンスは有る。今回は涙をのんでもらうことにする。

第二次アタックへ

十二日に再びアタックに必要な食糧、装備を担ぎＡＢＣを出発する。Ｃ４への登りは順化行動期間の少ない後発メンバーには苦しい登りとなり、松田と百海、彼等と行動を共にした小田は夜の八時近くになってＣ４にたどり着く。宮川は登りの苦しくなった所で自らの個人装備であるシュラフをデポして夕方には上がって来ている。

十四日、宮川はマイナス二五度まで下がった寒いＣ４の夜をシュラフカバー一枚で耐えてまんじりともせず朝を迎える。今日十四日はパキスタンの独立記念日だ。下界では連日テレビで独立記念日に日・パ合同隊がティリッチミールに登頂する、と流しているらしい。かっこ良く登るには今日登頂したい。昨夜のＣ４入りの遅れから疲れの見える小田と百海を残し三人でアタックに出る。

先日の行き詰まった地点から左にトラバースして氷の傾面に入る。須藤リードで七ミリロープのフィックスを張りながら登ると岩稜上の小さな雪のプラトーに出た。登山期間の短い宮川と松田は順応不足のためスピードが上がらない。プラトーから左上ぎみに岩場を1ピッチ延ばして四時になり、明日再度アタックすることに決めてＣ４に帰る。

十五日、昨夜は宮川もぐっすり眠れたようだ。大統領のレセプション、帰国の日程も決まっている以上、今日が最後のアタックとなるだろう。今日は絶対に登るぞと心に決めて出発する。

三人では時間がかかるので宮川と二人でアタックに出る。昨日の最高到達点に十時までにと決めていたが十時ピッタリに到達して気をよくする。ここからⅢ級程度の岩登りを1ピッチ延ばして氷の狭いルンゼに入る。Ⅲ～Ⅳ級のミックスのルンゼを2ピッチ登り右の側壁を1ピッチで頂上の見える稜線に出た。

もうここからはロープはいらない。岩稜を一五〇メートルで雪のプラトーに出るとそこが頂上だった。今まで晴れていた空がガスに包まれて楽しみにしていたパノラマを見ることは出来ない。記念写真を撮りここまで来れなかった皆にみやげの石を拾い早々に下山にうつる。後発の宮川は五十歳という年齢にもかかわらずＢＣ到着後十九日目、しかもＣ４の寒い夜をシュラフカバーだけで二晩も耐えての登頂であった。

夕闇せまる頃Ｃ４に帰りつく。三人が暖かく迎えてくれた。

十六日朝起きると百海の様子がおかしい。一人で立ち上がることすら出来ないほど平衡感覚を失っている。かなり危険な状態の脳浮腫のようだ。朝食をとる時間もおしむようにＣ４を撤収してレスキューにかかる。Ｃ４からいきなり始まる15ピッチのフィックスを懸垂で降ろし、荷降ろしのために上がって来た堀江とナディームにＣ３で合流し、ＡＢＣも撤収してここで合流したサジャードとともに夜の九時までかかって六一〇〇メートルまで降りる。ここから先はヒドゥンクレバスが多く夜の行動は出来ない。ここにテントを張ることにする。一二〇〇メートル降ろしたおかげで翌日には百海の状態もかなり回復して暗くなる前に全員ＢＣに帰ることができた。

十八日に全員でＢＣに散乱している空き缶などのゴミを回収する。約八〇〇個の空き缶をつぶして持ち帰るようパッキングする。須藤とサジャードで旧Ｃ１跡地まで登り雪の下から出てきたゴミを拾い集めてクレバスに投棄する。

今回の登山をふり返った時、タイヤーブの滑落、アタの凍傷と、主峰のアタックに手こずって西峰への可能性という欲ばったプランは実行出来なかった。しかも全部持ち帰る計画であったにもかかわらず下山時に百海のレスキューでテント一張りと余剰食糧やフィックスザイルなど約七五キロを残置してしまった。そのことは、登山の成否は自分たちだけの問題で済むが、しかし残置した物は回収しない限り永久に残るものであり、ゴミ処理も含めて計画通り実行出来なかった今回の登山は失敗だったと言わざるをえない。

しかし日本人二人だけの登頂者だった合同登山を二度のレスキューや、BCでの他の登山隊のゴミの清掃などを通じて、民族性、文化、習慣、生活の違いを越えて、自然を愛しそのフィールドの中で登山を楽しむという共通点によって、ともすればお互いの国同士を意識しあう合同登山を、共通の目的意識を持って同じ登山を愛好する仲間として行えたことを嬉しく思っている。今回、友好登山の楽しみの一つを見付けたような気がする。

△記録概要▽

隊の名称　日本・パキスタン合同ティリッチミール登山隊

主　催　日本山岳会京都支部、アドベンチュアーファンデーション・パキスタン

活動期間　一九九一年七月一日～八月三十一日

目　的　ティリッチミール（七七〇八メートル）の登頂とその周辺山域での登山、ゴミの完全処理、持ち帰り

隊の構成　総顧問＝橋本龍太郎、［日本側メンバー］総隊長＝斎藤惇生（61）、副総隊長＝塚本珪一（60）、総隊長同行＝山口克（63）、隊長＝須藤建志（41）、隊員＝宮川清明（50）・松田謙介（48）・堀江良明（33）・小田佳子（32）・船尾修（30）・百海琢司（27）、［パキスタン側メンバー］副総隊長＝J・ナディール・カーン、副隊長＝サジャード・H・シャー（28）、隊員＝S・タリック・サディキ（50）・アタ・ウル・ハク（30）・S・ムハマッド・タイヤーブ（25）・M・ナディーム・カーン（24）・ファード・カーン（24）

行動概要

六月二十九日	先発隊日本出発
七月九日	チトラル～シャグラム（ジープ）
七月十二日	BC（四八〇〇メートル、アッパーティリッチGLの屈曲点）
七月十六日	C1建設（五八〇〇メートル）
七月十九日	C2建設（六四〇〇メートル）
七月三十日	第一回目アタック出発
八月一日	C3建設（六八〇〇メートル）
八月四日	C4建設（七三〇〇メートル）
八月五日	第一回アタック七四〇〇メートルまで
八月十日	第二回アタック七四五〇メートルまで
八月十四日	第三回アタック七五五〇メートルまで
八月十五日	第四回アタック、登頂　須藤、宮川

［註：本登山隊は日本山岳会海外登山基金平成三年度助成金の割当てを受けて実施されたものである］

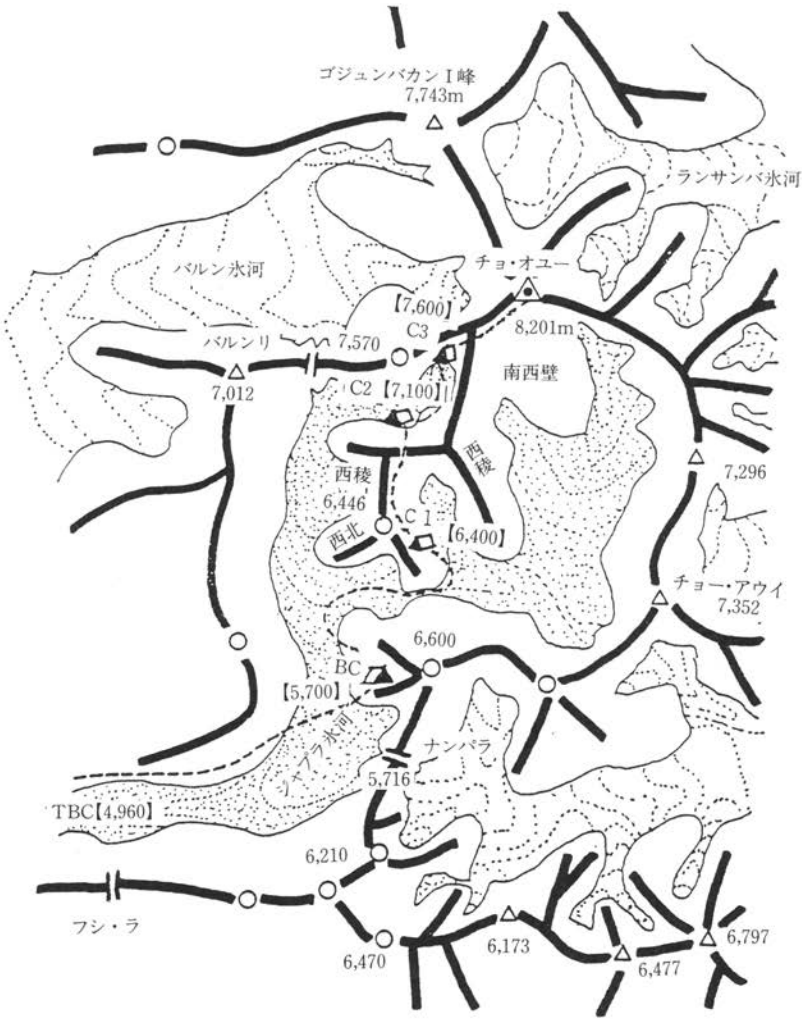
五十歳以上のチョ・オユー峰登頂

池田錦重

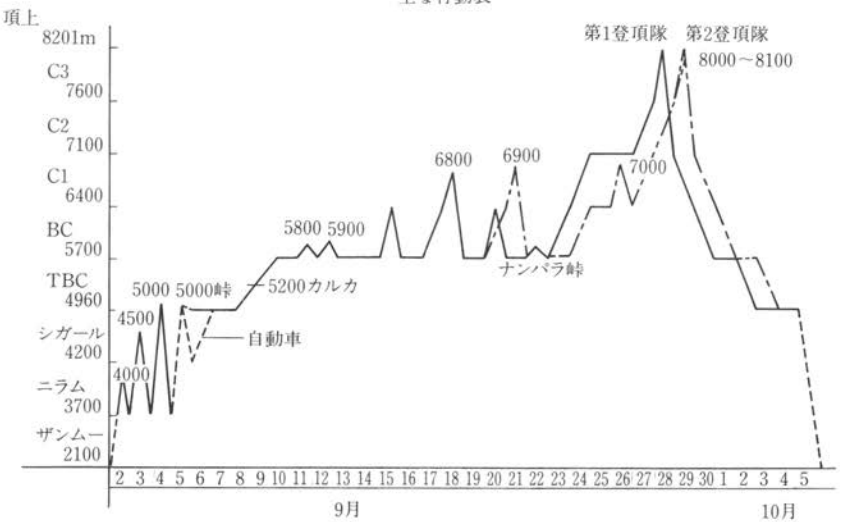
はじめに

いつだったか、秋の穂高・涸沢ヒュッテでの集まりの中で、五十歳を前にして、ヒマラヤに登ろうと突然誰かが云いだした。これが今回の山行のはじまりである。実際の計画に入ると体力・経験・高所への順化などで、多くの不安な問題があった。そこで、とりあえず一九八八年は五月のゴールデンウィークを利用して、アラスカ・マッキンレー峰に登ってみた。悪天候の中とはいえ、すばらしい二週間の氷河の旅と登頂であった。これで高さが大丈夫となれば、すぐ目指す山はチョ・オユー峰（八二〇一㍍）と決まっていた。我々の年齢で、技術を要する困難な登攀は無理だけれども、高さが八千㍍をこえ、登れそうな山と云えばチョ・オユー峰しかなかったし、若い頃、古い先輩を相手にチョ・オユーとも云い出せず、グレードをさげたヒマラヤ計画をだしつぶされ、暗澹とした気持ちで方向転換をはかってから既に三十年の歳月がたち、だいぶ回り道をしたあと、この山に辿りついたわけである。そんなことで、今度は八千㍍と云えども、あまり肩肘をはらず楽な気持ちで八千㍍の山旅を楽しみたいと考えた。隊員は仲間の呼びかけで、同じ関心を持った者が十五名集まった。計画は神崎君を隊長とし、遠藤女史をマネージャーに選んでから急ピッチに進みだした。隊員の中には登頂のほかに、チベット高原を旅できれば、ヒマラヤ山岳の写真を撮りたい、一輪のブルーポピーを見たいなど、様々な思いを持った中年の集まりだった。中国の登山許可は意外と簡単にとれたが、一番大切な登頂時期があわないため、再度とり直した。次の許可条件は香港隊を含めることであった。日程はそれぞれの仕事から三十五日間位とし、登山は一般ルートと呼ばれる西北西稜を中国側から登ることにした。登山にさいし案内と荷上げはネパールからラクパ・テンジンをサーダーとする十一名の経験豊かなシェルパを雇用し隊の運行をまかせた。

チョ・オユー中国側ルート図



主な行動表



行動

八月三十日朝、本隊は成田空港を出発、香港経由で、夜にはネパールの首都カトマンズに到着する。シェルパの歓迎を受けホテル・ヒマラヤに宿泊した。翌朝はカトマンズの町も見ずにマイクロバスとトラックで国境の町コダリにむけ出発、モンスーンとはいえ薄日のさす田園の中を車は走る。途中、ぽつねんと畑の中にたつ、ペンガラを塗った様な、美しい民家と段々畑にみとれる。だんだん両側の山岳が狭くなってくると道も怪しくなり、モンスーンでひき裂かれた道が出てきて往き止まりとなり、ここで車を降りる。ここから徒歩による大きな高巻きがまっていた。周辺には大勢のネパール人が集まって、すぐ我々の荷物は彼らの背に担がれて動きだした。まるで昔のマナスル登山の映画をみる様で懐しかった。夕方雨の中をコダリの木賃宿に入る。室内にはベットがあり、日本の山小屋よりはるかにましである。翌朝、通関をすませ国境の橋を渡り中国側の町ザンムー（二一〇〇㍍）のホテルに入る。九月二日、ホテルから二時間ほど歩いた所から中国の用意してくれたジープに乗りボーテ・コシ川に沿って緑濃い樹林とモンスーンで雄大な滝のかかる山道を走る。やがて樹林帯がなくなり、チベット特有の茶色の岩山と緑の草原が出てくると、最初の町ネーラム（三七〇〇㍍）だった。町は石と生レンガを積んだ二階建てのフラット屋根の建物が多く、この中の一軒の木賃宿に泊まる。宿はドイツ人の旅行者と相部屋である。我々はここで最初の高度順化のため三日間ほど滞在した。裏山はお花畑となり、エーデルワイスがいまが盛りと咲く中を、ゆっくりと順化のため登り、四、五千㍍の高度に汗を流した。裏山のモンスー

ンの雲の切れ間から、初めてのヒマラヤ、ガウリサンカール、シシャパンマをみて感激する。日本を出てわずか五日目であった。ここからアップ・ダウンの激しい荒涼たる草原を走る。ときたまヒツジの群れを連れたチベット人の牧人と、その白いテントをみる。やがて五千メートルの峠を越えるとチョモランマとチョ・オユーの登山口であるティンリー（四三〇〇メートル）の町に到着する。ここまでくるとモンスーンの重い雲はない。途中の小さな部落の周りには黄金色をした大麦の穂が、刈り入れを前に大きく波うっている。この日はシガールの手前のニュー・ティンリー（四二〇〇メートル）に建つチョモランマ・ホテルに泊まる。外観は立派だが、中に入れば水も湯も使えない不便なホテルである。これならばネーラムの木賃宿の方がましである。翌日ティンリーに戻りチョ・オユーへの道を辿る。車はジャブラ氷河の後退したモレーンの手前の右岸で止まる。ここがＴＢＣ（四九六〇メートル）である。ここには既に外国の登山隊の天幕が幾張りもあった。ここで一日を荷物の整理と休養にあてた。九月八日行動を開始、下からきたヤクと共にＢＣ建設のため出発、広い河原の中を流れる幾本もの川を渡渉したあと、ジャブラ氷河のモレーンの上についた道を辿り、途中、カルカ手前の水場で一泊したあと、ＢＣ（五七〇〇メートル）予定地に入った。ＢＣ周辺のモレーン上は過去の登山隊のキャンプ跡が沢山あり汚れている。既に入っている外国隊はおもいおもいの所にキャンプしている。我々は前年の学習院隊の跡にＢＣを設けた。ここからの景観はナンパラ峠の美くしく長い雪線と、六千メートルをこえる無名の山々が乱立し見事である。またチョ・オユー峰はここで初めて全容をみせ、我々を圧倒する様にせまってくる。天気は午前中はよいが、午後になると降雪がある。まだ我々にはヒマラヤを計る尺度が全然つかめない。現在のところ台湾隊だけがキャンプを高所に伸ばし、悪天候の中を頂上にせまっている。我々はここで後発隊をむかえ、荷の整理と高度順化のため軽い行動を開始し、シェルパたちは勝手知りたるモレーンの上をたどり、Ｃ１建設と荷上げに出発する。結局七日間のＢＣ滞在で六千メートルまでの順化をおえ、九月十七日から全員七千メートルの高度を獲得するため、Ｃ１にむかい行動する。はじめはジャブラ氷河のモレーン上を歩き、西北西稜につきあげるガラ場を登り、雪稜に出た所にあるＣ１（六四〇〇メートル）に入る。翌日は春の剱の稜線の様なところをたどると尾根は上部氷河に雪壁となって飲み込まれ、消える。上部氷河はそこで雪壁の左右にアイスフォールとなりわかれ落ちている。我々はこの雪壁を登り右手のアイスフォールの上に抜けるトンネル状になったアイスブロックまで登り下山した。シェルパたちは我々の行動とは別にＣ２（七一〇〇メートル）を建設し、荷上げに従事している。天気はこの頃より安定し、風の強い日もあるが、朝は気温がマイナス二〇度近くまで下がり、毎日快晴が続く様になる。外国隊も我々のシェルパの行動にあわせる様に動きだした。九月二十二日ＢＣに全隊員が集まり今後の相談をする。これ以上順化の為の行動は我々の体力を消耗し、天気もいつ崩れるかわからない事、シェルパの荷上げ能力と疲労を考え、登頂態勢に入る事にした。頂上への希望者を募った所、八名の隊員がおり、登頂隊を二隊にわける事にした。第一隊は調子の良い石川氏をリーダーに渡辺、根津の三名とし、第二隊は池田、遠藤、堀井、関、本間の五名で、体調をみながら第一隊に続いて登る事に

した。九月二十三日第一隊がBCを出発C1に入り、翌日アイスフォールの氷のトンネルを抜け、クレバス帯を右上手に登り、下から見ると西北西稜のコルにみえる手前の埋まったクレバスの段の所に張ったC2に入る。上部のルートを見ていると、ロックバンドのあたりから毎日表層雪崩が出ている。我々はこれをさけるためC2から雪崩発生地点の上部をロックバンドの切れ目にむかい小さな側稜とクーロアールをトラバースぎみに登り、ロープをフィックスした。二十五日は風で動けず、翌二十六日はシェルパだけで第一ロックバンドをこえ、第二ロックバンドの中間の急な雪面の中にある大岩の下にC3（七六〇〇㍍）を建設した。二十七日、第一隊は二名のシェルパと共にC3に入った。この夜は睡眠に酸素を使用、翌二十八日朝五時に酸素をつけ出発、石川、渡辺、根津、ニマ・テンバ、ミンマ・ノルブの五名は十一時に頂上に立った。リーダーの石川氏の言葉を借りると、「ティッチーの初登頂以来、この三十六年間に多くの人間がチョ・オユーの頂上にたった。そんなチョ・オユーにどうしたわけか、私は心から親しさと心安さを覚えた。最後のクーロアールのフィクッスを終え、ロックバンドを通過した。そこから上機嫌になる。足に仕事を任せ、頭は頂上についた時の事を考えていた。八千㍍のラインはとうにこえているのではないか、ドームもこした。ところどころ膝のあたりまで柔らかい雪の中にはまった。チョモランマが左手にだんだん大きく迫ってくる。それに頂上だけでなく、直下のロンブック氷河が黒々と一気にせり上がってくる。私たちは小一時間で一番奥まで進んだ。この頂上は富士山頂のお鉢を埋めたぐらいの大きなものだった。頂きが広すぎるためか、少しか感激が湧いてこない。私の生涯において、今ほど調子のよい時はない。」と云っている。第二隊は一日遅れで池田とペンパ・ノルブが登頂、遠藤、関が八千㍍のラインに達し、本間は第一ロックバンドまで、堀井は七千㍍ラインまでで、各自の判断に従い行動し下山した。このあと各キャンプを撤収し、十月三日TBCに下山した。五日には全員ラッサとカトマンズに分かれTBCを後にした。ティンリーからみたチョ・オユー峰の山容はチョモランマにおとらず大きかった。

後　記

今回の登山では希望者全員の登頂にならなかったが、五十歳をこえた四名の隊員と三名のシェルパが頂きに立ち、全員事故もなく、それぞれの目的を楽しみ、我々にとり初めての登山としては成功したと思っている。この理由は第一に天候に恵まれた事、第二に高所で睡眠、登頂、体調を崩した時、十分な酸素を使えた事、第三に優秀な十一名の我々の事を理解してくれるシェルパを雇用しえた事、第四は寄せ集めの隊ではあったが、一年間の準備期間を通し、お互いを知りえた事が隊員間の流れをスムーズにし、各隊員が各自の責任において、常にゆっくりと体調にあわせて行動した事である。以上であるが私たちはこの山行を通して中高年者でもまだまだ八千㍍の山々に新たな世界が拡ってゆくのを感じつつ帰ってきた。

＜記録概要＞

隊の名称　同人シルバータートル卓奥友峰登山隊一九九一年

活動期間　一九九一年八月～十月

目　的　チョ・オユー（八二〇一㍍）の登山

隊の構成

隊長＝神崎忠男(51)、隊員＝大城泰(56)・石川富康(55)堀井昌子(54)・遠藤京子(53)・渡辺玉枝(53)・池田錦重(53)・根津皖一(52)・本間堅一(51)・関孝治(51)・大山昇(51)・三浦充哲(50)・山平靖(50)・永田周子(43)・成田蔵人(36)以上日本人一五名。中国連絡官＝聶金庭、通訳＝甘衛平。ネパール人シェルパ・サーダー＝ラクパ・テンジン、ペンバ・ノルブ、ニマ・テンバ、ニマ・ドルジュ、アンダワ・タマン、バダアム・バァダー、ゴーテ・タマン、ミンマ・ノルブ、マンビー、ホバ・テンジン、コック＝アン・ノルブ。

行動概要

八月二十三日先発隊日本出発、三十日本隊出発、三十一日カトマンズ出発、九月五日TBC到着(四九六〇メートル)、九日BC建設(五七〇〇メートル)、九月十五日C1建設(六四〇〇メートル)二十一日C2建設(七一〇〇メートル)、二十七日C3建設(七六〇〇メートル)、九月二十八日第一登頂隊五名登頂、二十九日第二登頂隊二名登頂、十月三日TBC全員下山。

報告書

帰国報告会に「五十歳以上の卓奥友(チョ・オユー)峰(八二〇一メートル)登山隊の記録」と題して簡単なパンフレットを刊行している。

ほたるぶくろ

東京農大ブロード・ピーク登山隊一九九一の記録

佐藤正倫

一九八六年に中国崑崙山脈七一六七メートル峰登山を行ったのち、我々の志向は当然ヒマラヤへと向けられるようになった。チョ・オユーやナンガパルバット、チョモランマなどでメンバーの幾人かが高所登山の経験を得ることができるに到り、そして我々の目論みとしては、一九八九年、ナンガパルバットのラキオトピーク東南稜という長大な屋根より頂上を目指す期間、独自の登山を展開する中で、より多くの隊員が高所登山の本質を体験、理解し登頂する、それで大学創立百周年と重なる一九九一年にここ数年のひとつの結集としてもっとスケールの大きな登山を行なう、ということであった。しかし、思惑どおりには事は進まないもので、そのナンガパルバットでの事故と敗退、同年暮れの白馬岳での雪崩により主力メンバー二名を失った。我々にとっては致命的といえ、もはやそれをやるだけの隊を編成できなくなってしまったのである。とはいえ、少ないメンバーの中でもせっかく勢いづいた雰囲気を消してしまうのは惜しく、農大での八〇〇〇メートル峰はいまだ果たせないでいる。また何といっても大学から援助金が貰えそうだという吉報もあって、出掛けない手は無いとなった。

そこで持ち上がってきた計画が、ブロード・ピーク（八〇四七メートル）なのである。ルートは、一九五七年ヘルマン・ブール等が初登頂した時の西稜で、全員登頂を目標の大前提とした。登山期間は、バルトロ氷河のキャラバン日数を除いた実質登山日数として、六月初旬より八月初旬の六十日間とした。

隊構成は、隊長に早坂敬二郎（44）、隊員に八幡敏正（41）、小笠原岩雄（38）、佐藤正倫（27）、谷川太郎（24）、加藤和夫（62、OB会長）の六名で、加藤を除く五名が登攀隊員である。パキスタン人は、陸軍の連絡官一名、コック一名、キッチンボーイ一名の計三名で、総勢九名の隊となった。

精鋭であるわけがなく、体力や経験にも個人差がある五人が全員

登頂をしようとするならば、タクティクスは自然と極地法に近いものになる。上部キャンプのC1からC4までをそれぞれ固定し、基本的に五人一パーティーの同一行動で荷上げとルート工作を各キャンプごとに行う。休養は三、四日の行動に対して二日を大体の目安としたが、キャンプ間の移動が短時間で可能なこのルートでは上部での休養はできる限り避けて滞在日数も減らし、BCへ下りて休養を取るよう心掛けた。また各キャンプ建設後もBCへ下り、充分な休養をとることとした。フィックスト・ロープ等も持参し必要箇所には固定、C4において睡眠用酸素（AMP）を毎分〇・五リットル使用とした。

易しいと言われるこの山であるが、であるからこそ侮らずに不測の場合にも対応できるよう余裕あるタクティクスと装備、食糧を用意した。

ゴミに関しては、上部キャンプではなるべくBCへ荷下げを行ない、可燃物は焼却、不燃物は復路キャラバンでポーターを雇い、スカルドまで下ろすようにした。

＊　＊　＊

五月十四日、イスラマバード到着後、装備、食糧などの買い出し、ブリーフィング等手慣れた仕事をこなし、二十三日スカルドへ飛行機で移動する。ここでも生鮮食品やポーター支給分の食糧や燃料を購入して全ての隊荷を揃え、キャラバンに備え再梱包をする。しかし、多くなりがちな隊荷は今回も同様で、どう見ても隊の規模と不釣り合いなそれらの再梱包に炎天下、丸二日も費やしてしまった。

スカルドからジープ七台に荷物と共に分乗して実質キャラバン出発地であるホトに到着する。二十七日、雇用したポーター百八十人という大所帯を従えてキャラバン開始である。

アスコーレ、バルディマルと経由したのちバイユで一日休養となり、食糧、装備をポーターへ支給する。キャラバン自体はガッシャブルムⅡ峰のスイス隊、韓国隊と行動を共にし、沢山のトレッカーが行き交うまさにバルトロ街道であった。好天にも恵まれ腰までの徒渉をしたり研ぎ澄まされた岩峰群を間近に眺めては立ち止まり、驚嘆し、それは何とも素晴らしいものである。リリゴを少し過ぎたあたりで前方の彼方にやっとブロード・ピークを望むことができた。険しさこそないが、その迫力は完全に他を圧倒し鎮座している。

ガッシャブルム4峰を正面に見据えるコンコルディアを左に折れてゴドウィンオースチン氷河を、K2の懐を目指すかのように進み、六月四日BC（四九〇〇メートル）に到着する。ここまで全員体調は良好で順調といえよう。

二日間をBC建設と、いよいよ始まる登山の準備に当てる。すでに西稜では日本のイエティ同人隊が活動しており、ルート状況や彼らの固定したフィックスト・ロープ使用等について意見交換を行なう。

七日、ようやく登山開始である。まずBCから氷河を遡り良い所で中央モレーンに移り、さらにそれをしばらく遡ってから氷河を横断する。そして尾根を左へ回り込むようにガレ場を歩いて行くと取り付き点である。そこからフィックスト・ロープに導かれつつ所々氷雪の壁を登ると尾根の上のテント跡に出る。我々はさらに一時間、若干傾斜のきつくなった氷壁を登ってトラバースした所の尾根上を

C1（五七五〇㍍）とする。C1へは都合四回の荷上げを行い、BCで一日の休養の後C2建設のため、十四日C1へ入る。数日前やって来たパキスタン・ドイツ両陸軍合同隊とイエティ同人隊らと一緒の行動となり、四カ国語が飛び交う賑やかな登高となったが、狭いC1はとても窮屈でこの先のテント場が思いやられる。C1からC2は標高差約六〇〇㍍で三時間で行くことが可能である。C1より尾根右側のルンゼ状斜面を登って行き、顕著な岩の凹角を抜けて尾根に出るのだが、そこには雪が載っておらず岩屑で非常に歩きにくく、アイゼンをはずす程である。ここを二〇分程歩くときれいに整地してある六二五〇㍍のテント跡であるが、まだ行けるということでその上の六三五〇㍍をC2とし荷物をデポする。十五日から三日間荷上げを繰り返した十七日、C2に荷上げ後BCへ下る。それにしてもルート工作はC3近くまで済んでいるとのことで、我々はさながら歩荷登山に従事しそうな気配である。

天候は悪天へと変わり始め、BCでの三日間は間断なく降雪に見舞われた。しかし、我々の行動は好天周期とうまく一致し、最後まで悪天による停滞がなかったのは幸運であったといえる。またこの頃新たに東京スキー山岳会隊と国際隊もやって来て、ここブロード・ピークBCはにわかに国際キャンプの様相を呈してきた。

まだ悪天が明けきらない二十一日、C3目指してBCを出発。二十三日、C2の早朝、六〇〇〇㍍以上で最初の滞在とあってか皆一様に動きに冴えがないが、強風をついてC3へ向かう。岩稜と雪壁を過ぎるとゆるやかな雪稜となるのだが、過去の記録とは違って全面に氷が露出しており、下りを思うとロープなしでは怖いくらいである。稜が台地状になるあたりでルートは右に大きく迂回し、八〇㍍程の氷壁を登って西稜上に出る。そして易しい岩稜の上がC3（六九〇〇㍍）である。右に迂回する所から氷壁上部まで二五〇㍍のロープを固定する。二十四日も強風の中、C3への荷上げとルート整備を完了させる。そして、BCでの休養を終えた二十八日にBC発、三十日C3入り、七月一日と二日に最後の仕上げとしてC4建設へと向かう。C3周辺は寒気を伴った南西の風が相変わらず強く我々の行動を阻もうとするが、これが幸いしてか懸念されたラッセルは脛くらい。C3から3時間弱でセラック基部にある僅かな平坦地に達することができ、C4（七四五〇㍍）とする。翌日さらに七六〇〇㍍付近のセラック帯通過のルートを確保し、これでアタック態勢は万全に整ったことになる。三日はC3からBCへ一気に駆け下りる。

三日からまた悪天周期となり、BCでの我々は休養で好き勝手し放題であったが、我々と入れ替わってC3に入り虎視眈々と頂上を窺っていたイエティ同人隊は、C3からまったく動けずに結局諦めることになってしまった。フィックスト・ロープの恩恵を受け、一カ月余り友情を交わした彼らの不運の敗退は我々にとっても辛かった。

十日、彼等の分もという思いを秘め、快晴の中、満を持してBCを出発する。C2、C4と2日で登り、十二日、アタックの日を迎える。外はまだ夜明け前、満天の星空である。睡眠酸素のせいか、皆食欲もあって調子は良さそうだ。四時十分、ヘッドランプを付けテントを飛び出す。ルート工作をしておいたセラック帯を素早く抜

けると主峰と中央峰のコルへと続く斜面に出る。ラッセルはヒザ下でさほどではなく状態は良好、途中のクレバスにロープ二〇㍍を固定する。赤旗も立てながら行く。やはり山のスケールは大きく、喘ぎながら必死に登るがなかなかコルが近づかず、低酸素と闘いながら登高が続く。この頃よりBC方向の山々が雲に覆われようとしており悪天端の兆しが感じられた。雲上にはマッシャブルムの鋭い鷲頭が際立って見える。

徐々に傾斜はきつくなりコル直下に五〇㍍のロープを固定し、七時三十分コル着。激しいブリザードが痛いほど顔面を直撃する。コルからは頂上へと続く稜線、反対側には間近にそそり立つ中央峰、そして延々と白い峰々が横たわっているチベットが遠望できる。

コルから幾分細い稜線となり、残置ロープに七〇㍍のロープを結んで固定しながら慎重に進む。少しして稜線は広くなり左の中国側に雪屁が大きく張り出しており、雪は時々深くなる。チムニー状岩峰登りに五〇㍍ロープを固定して雪壁を登り続けると前峰に着く。

この頃より天候は一変しガスに包まれ視界が効かなくなり、風も猛烈に強くなる。ここからほぼ水平なガレ歩きとなってホワイトアウトの中、稜線の途中ではなかろうかという頂上に一一時二十分、最後はあっけなく登頂する。写真を撮影し、ビデオを撮っている間に後続の隊員も次々と登頂し、ここに全員登頂が成った。

所期の目的を達成したこの登山はもちろん成功ということになる。しかし今回のそれは単に八〇〇〇㍍峰に登るだけのための行為であって、もし現在の登山レベルと比較するとすれば何ら評価の対象にはならないのは当然であろう。そのことを特に意識したりはしないが登山を終わってみて物足りなさも感じたのは事実であった。キャラバンでは雪も寄せつけないガッシャブルム4峰西壁やマッシャブルムに驚き、BCでは毎日K2を仰がされた。

そして帰路立ち寄ったナンガパルバットでは、サンナビキ同人がルパール壁を登攀中であった。それらを見るにつけどうしても我々の登山はかすんでしまい、〝激しい山登りを〟と強く思うのである。

登山技術や装備、情報などあらゆる発達によって八〇〇〇㍍峰全山を登るのはさして困難ではなくなった感のある今、アルパインスタイルなどの登山形式にこだわり、より難しい山やルートを求めていくのは自然の成り行きであると思う。そしてそこには、経験によって裏付けされた真の実力が必要となる。それは易しいルートを登っているだけでは分からない、厳しい登攀を自らが繰り返し、経験することで得られるものであると思うし、またその本質を良く理解しなければならない。

この登山を契機に再出発をしようと新たな計画をしていた矢先である。一九九二年三月二十二日、隊長であった早坂が北アルプス大天井岳を縦走中、雪崩によって還らぬ人となった。

十年来の活動を推進してきたのは早坂であり、我々にとっては本当に大きな損失である。今、幾人かの先輩や友人を失い思うのは、時は確実に進んでいるのだという事である。

山登りは各個人の思い入れで成されるものである。良い意味で意志を継承して、また違った味のある活動をしていきたいものである。

福岡支部創立三十五周年シシャパンマ隊報告

日野悦郎

シシャパンマ峰遠征は成末洋介氏を中心に昨年正月過ぎより話が煮つまり計画が進んだ。ルートの候補として北東稜と南西壁があがり、どうするかということになったが全員登頂を前提に北東稜に決まる。

登山の方法として酸素ボンベを使わない、高所協力員なしとし、コックのみ一名ネパール人を雇うこととする。

シシャパンマ北東稜ルートはＡＢＣが五七〇〇㍍で、ここで登山活動最低限度の生活をしなければならないことから、国内で日常トレーニングの他に正月に富士山に登る。産業医大の低圧室で七〇〇〇㍍まで一週間に一回二カ月間の訓練を行う。もう一つの作戦はネパール側で六〇〇〇㍍のライトエキスペディションを組みその後チベットへはいる。

以上がシシャパンマ登頂作戦である。

三月二十二日と二十六日の二回にわたり隊員三人カトマンズ入りする。成末隊長は二十八日北京にはいり中国登山協会と事務的仕事を完了させ、連絡官、通訳をともなってチョモランマＢＣ近辺で高所順応をしネパール・チベット国境の町ザンムーでネパール側からはいる隊員三人と合流する段取りである。

高所順応のためアイランドピークへ

ネパール側ライトエキスペディションはいろいろリストアップしたが、早く、登りやすい山ということでアイランドピーク（六一六九㍍）に決める。

参考のためのアイランドピークの記録を書く。

ルクラ便が早朝一便、又は二便しか飛ばないためエージェントに交渉を頼み、少々割高だが日程には代えられず大型ヘリコプター相乗りチャーターに乗る。

三十日ルクラ着、ポーター二人、隊員三人でパクディンマ、ナムチェ、タンボチェ、ディンボチェと進み、四月三日パレシャヤ・ギャ

ブ（五〇〇〇㍍）に着きBC設営。

四日、五九〇〇㍍地点まで登りルートの下見をする。

五日、昨夜の雪が一転快晴となる。BCを七時二十分発ち最初は土の急斜面を登り岩場に出る。ルンゼの中を登り踏跡をたどって行くと上部キャンプ地に出る。ケルンに導かれせり出した岩場を右にまわりこみ、白い岩稜を登ると氷河に出る。すぐにクレバスがでてくるが左からまわりこみなおも登るとなだらかな広い雪の斜面にでる。氷塔をさけながら右からまわりこみ氷壁の下に着く。この一二〇㍍の壁は頂稜近くまで氷柱群となっているためこれをホールド、スタンスに使い稜線に出る。ここから右側の雪稜をたどり十二時四十分頂上に立つ。BCには十六時四十分帰着。高所順応がおくれていた宮崎、橋本がBCにはいる。

六日、宮崎、橋本一時三十分BC出発、ピークに直接登るが時間切れのため六〇五〇㍍で引き返す。BC着十二時、この日はそのままディンボチェまで下がる。

十日カトマンズ帰着。

十三日、チョモランマBCをチョ・オユーBCに変更し高所順応を果たした成末隊長とザンムーで合流、全隊員集結。聶金庭連絡官、金俊喜通訳、アン・バーブコックの総勢七人のメンバーがそろう。

十四日、チベットへつづく峡谷をへつった道を高度を上げ、ニェラムを越えシシャパンマをまわりこむように北面のBCに到着、明日にでも五七〇〇㍍のABCに向け出発する勢いだがヤクの到着がおくれ出発は十七日に延びる。

十八日、BCから二七㌔の道をヤボガンジェロ川に沿って二日がかりでヤク九頭、ヤク工三人、隊員四人でABCに到着。雪まじりの強風の中ABC建設。

コックのアン・バーブは体調が悪くBCにとどまる。

十九日、成末隊長、宮崎はヤボガンジェロ氷河左岸モレーン帯を五九〇〇㍍まで偵察。

二十日、全隊員で五九〇〇㍍まで荷上げ、C1予定地へつづく氷河を偵察。

二十三日、氷河を渡渉、C1予定地六四〇〇㍍雪原へは軽く着けそうだが雪のしまりが悪くラッセルに苦しみ、右側のピークから崩壊したブロックの中をぬって登る。クレバスが多く竹ざおで目じるしを立てながら高度を上げるが途中ガスがかかりどの位置にいるのかわからなくなり六二〇〇㍍地点に仮C1を設営し五九〇〇㍍のカルカに引き返す。

二十四日、仮C1を越え六四〇〇㍍の雪原にC1建設。直ぐ横には日本隊のテント跡、ゴミ類が放置されている。その上部にも日本隊のテント類が放置されている。

二十五日、C2予定地まで偵察、荷上げ。C1の雪原帯は広く、通過するのに一時間かかる。これより六九〇〇㍍のC2予定地まではクレバスが多く二カ所はザイルがいる。一つは裂け目の細いつながり部を渡る部分と、もう一つはスノーブリッジを衝撃をかけないで渡るのがあり、他は飛びこせる程度のクレバスである。C2予定地に荷上げ品をデポ、C1へ引き返す。

二十六日、全員でC2へ荷上げ、ラッセルは交代で行う。天候は悪くなるがテント二張り、食糧、燃料三日分を荷上げし、C2建設。

隊員みんな元気でこのまま前進し頂上アタックをかけようかと話がはずむが、相手が八〇〇〇㍍ということもあってＡＢＣで十分休養をとりアタックするのが最善ということで翌日ＡＢＣへ下る。

ＡＢＣではアン・バーブがカトマンズに下ったので通訳の金さんが上って来てくれ飲みもの、食事の世話をしてくれることになる。

ドイツ隊も入山しＡＢＣはにぎやかになる。天候は今一つで午後からはガスる日がつづきＡＢＣも降雪となる。

二十八日、もう一つのドイツ隊が入山、ＡＢＣを通り過ぎ五九〇〇㍍まであがる。

頂上アタックへ

五月一日、成末隊長の、今日からのアタックが唯一の登頂チャンスだから全力でがんばるようにの声のもとＡＢＣを出発する。

二日、Ｃ1着、たった五日の留守だがテントが埋りかけ傾いている。修復に時間がかかる。ドイツ隊がＣ1を直ぐ下に設営しアッという間にスキーで下降する。

三日、Ｃ2着、そのころよりガスがかかり風強く嵐となる。テントを吹き飛ばさんばかりの裂風でこの悪天候は翌日までつづく。

五日、天気回復、これよりシシャパンマ本峰と前衛峰との間にある廊下と言われる広い谷間を進む。この奥のどんづまり部より北東稜が始まるはずである。この廊下はあまり傾斜はないが雪面はラッセルにエネルギーを奪われるので氷結面を選びアイゼンをきかせ進む。なだらかな登りのため快適である。クレバスもなく高度さえなければ新人のアイゼンワークには適している。

この廊下のどんづまりから北東稜にルートをとろうと話が決まり全員で稜に取り付くが岩稜で浮石が多く、岩登りになり時間がかかり過ぎる。一旦もとに戻り廊下のどんづまりの手前に幅の広いクーロワールがあり、偵察にはいり残置された固定ロープを確認する。

最初の計画では北東稜七三〇〇㍍地点にＣ3をつくり、そこからアタックをかけることにしていたが、この地点での右往、左往は七三〇〇㍍までは時間切れで上がることができなくなってしまった。

七一〇〇㍍でのＣ3建設となったが成末隊長の七一〇〇㍍から頂上までの九〇〇㍍の高差のアタックは困難である、の言葉がひびいてくる。だか明日のアタックは決定する。

六日、五時三十分（北京時間）隊員全員で出発、昨日偵察のとき部分的に掘りおこした固定ロープを伝いながら急斜面を登る。かなり広いクーロワールだが上部は左側の岩稜を登り七三〇〇㍍の稜線に出る。ここから頂上までのルートでテントを張れるところがないか、さがすがむずかしい。風が強く平地がないようにおもわれる。

少し稜線を登ると見晴らしがよくなり頂上がすぐそこに見える。宮崎と頂上は直ぐそこだと話し合う。その上部にはボロボロになった残置テントが風ではためいている。

そこから最初の岩場が立ちはだかり、左側を巻くが雪のしまりが悪くひざまで埋りこむ。これからがきついラッセルのはじまりで、途中いいかげんいやになる。

雪面も不安定でこの斜面での雪崩の心配が頭をよぎる。成末隊長Ｃ3へ引き返す。

ラッセルの苦闘のすえ七七〇〇㍍にある巨大な三角ピナクル地点に着く。橋本が少しおくれだす。吐気を訴える。ここまで来たから

にはなんとか一緒に登りたいがあと三〇〇㍍登り、七一〇〇㍍のC3まで帰還できるか、昼からいつものように天候がくずれる恐れもある。橋本はここで持つことにきめる。

三角ピナクルから一〇〇㍍の岩場を登り高度を稼ぐ。主峰へはこの地点から左にトラバース気味に登り頂上に達するのだがこれ以上のラッセルには乗り気がせず、雪崩もこわいので、北東稜をこのまま突き上げ中央峰に登ることを宮崎と相談し決める。

頂上直下は斜面が急になり左へトラバース気味に登り十四時間四十分中央峰八〇〇八㍍に登頂。十四時五十分宮崎登頂、よろこびの握手をかわす。三十分頂上にとどまり下降にかかる。七七〇〇㍍地点で橋本がこの寒気の中ツェルトをかぶって持っていてくれ出迎えの祝福をもらう。十七時四十分C3に帰りつき成末隊長とがっちり握手をかわす。

〈記録概要〉

隊の名称　日本山岳会福岡支部創立35周年記念中国・チベットシシャパンマ登山隊'92

活動期間　一九九二年三月～五月

目　的　シシャパンマ峰（八〇一二㍍）北東稜からの登頂

隊の構成　隊長＝成末洋介（47）、隊員＝日野悦郎（51）・橋本昌典（34）・宮崎豊文（41）
連絡官・聶金庭（59）、
通訳・金俊喜（38）

行動概要　三月三十日ルクラ着。四月三日パレシャヤ・ギャブBC、四月五日アイランドピーク登頂、四月六日アイランドピーク二次隊アタック。四月十日カトマンズ。四月十三日ザンムー。四月十四日（五〇〇〇㍍）C1建設。四月十八日（五七〇〇㍍）ABC建設。四月二十四日（六四〇〇㍍）C1建設。四月二十六日（六九〇〇㍍）C2建設。五月五日（七一〇〇㍍）C3建設。五月六日中央峰（八〇〇八㍍）登頂。五月七日全員ABC帰着。五月八日BC着。五月十日ザンムー。五月十一日カトマンズ着。

青年部第二次海外登山

慕士塔格山（ムスターグ・アタ）登山の記録

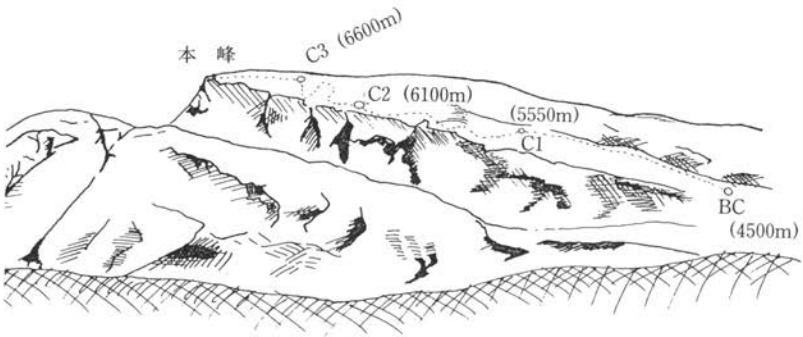
相馬　勉

＜隊の編成と出発まで＞

次世代を担う若手会員の育成と、長期的な展望の模索というスローガンを掲げ、青年部の海外高所登山三カ年計画は一九九〇年より始まった。初年度には、大谷亮隊長以下五名をソ連（現ＣＩＳ）領パミールに派遣し、登山隊は七〇〇〇㍍峰二座（レーニン峰、コルジェネフスカヤ峰）に登頂した。

この計画が発案された当初は、比較的短期間で七〇〇〇㍍級の高所経験が可能なところということで、パミール山域が念頭におかれていた。しかしその後のソ連国内の政治情勢の急変、また、同一地域で多年度にわたる登山活動に対する興味の持続への懸念等が生じ、他の地域でパミールに類似した山を探すことになった。三カ年計画ということで、夏に青年部の誰かが、どこかで高所登山をするであろうという意識はあったものの、いざ具体的な計画として議題にあげてみると、難問・難題が次から次へとでてきて、議論は紛糾した。曰く、「三カ年計画と銘打ったものの、三年も続ける意義がどこにあるのか」、また「今夏、高所登山をするにしても誰がいけるのか、青年部の若手メンバーの大部分は他の遠征隊への参加が決まっており、実際行けそうな人間は非常に限られている」、さらには「海外（高所）登山未経験者が大部分を占める隊が挑むには七〇〇〇㍍級の山は高すぎないか」云々と。様々な議論が出たものの、良い結論は出ず、結果として、前年度のパミール隊に休暇の都合がつかず参加できなかった相馬が隊長となり、計画およびその実施については相馬にすべて任せるという形で落ち着いた。山の選定については、相馬が自分の経験・趣味で「ムスターグ・アタ峰」と決めてしまい直ちに中国登山協会へ許可申請をした。

以後、二つの大きな原則をおいて隊員募集・準備と実際の行動に移った。ひとつは隊長以下すべての隊員は平等であるということ。これは、参加各個人はそれぞれ出身母体も違い、また参加目的、思



惑もそれぞれであり、寄せ集め隊という性格上、変な序列はひとつの大きな目的に向かって行動する場合、害にこそなれ、うまく作用することはあり得ないと思われた。またひとつは必要経費はすべて隊員の個人負担にするということ。外部から資金を貰うということで若い隊員に登山以外の面で余計な負担がかかり登山に専念できなくなったり、不必要な束縛感にとらわれないようにするためであった。このため準備段階で、特に装備、食糧の集荷段階で関係諸氏に多大な迷惑をかけることとなった。

今回の登山隊は有志が集まり自然発生的にできた登山隊とは異なり、まず、今夏誰かが、どこかで高所登山を行うということだけが先に決まっていた。「山」・「隊員」等々のパズルをひとつひとつ組み合わせるようにして、登山隊が徐々にできあがっていった。三月初旬、中国登山協会（ＣＭＡ）のメンバーの来日時に、今夏のムスターグ・アタ山の登山許可の取得の可否を打診したところ、今年からムスターグ・アタで登山祭（旧ソ連のパミールキャンプに類似）を行うので許可取得に関しては問題ないということであった。ただちに許可申請をＣＭＡにしたものの、正式な許可を貰ったのは四月下旬であった。許可申請した前後より隊員募集を始めたが、全隊員が決まったのは六月に入ってからであった。青年部主体というものの、集まった隊員は相馬を除き、全員が学生という結果になった。高所登山が初めてという者が多いうえに、登山経験も未熟と思われるものもいた。事前の地域研究では、ムスターグ・アタは特に技術的に困難なところはなく、ある程度の体力があり、高度順化をうまくこなせれば、頂上に到達できるものと思われた。事前の国内合宿

では、体力強化を主目的として五月連休より六月中旬にかけて、剱岳、谷川岳、富士山で都合三回山行をもった。寄せ集め隊ということもあり、各個人の都合がつかず、全員がそろって山行ができたのは、六月中旬に行った富士山での合宿だけであった。七月六日、七日の両日、成蹊大学より合宿所を借りて梱包作業を終え、七月二十一日、北京へと向かった。

＜登山活動＞

北京より空路ウルムチを経由し七月二十三日カシュガル入りをした。カシュガルに三日間滞在し、物資・食糧等の準備をし、また、現地カシュガル登山協会との最終打ち合わせを行い、二十六日、カシュガルを出発し、スバシ（三六五〇㍍）入りする。翌二十七日、スバシよりラクダ三頭に隊荷を積み込みＢＣ（四五〇〇㍍）へとキャラバンを始めた。ＢＣまでは数時間の行程であった。隊員六名、中国人連絡官一名、通訳一名と総勢八名の小規模な登山隊であり、隊荷は個人装備も含めて総重量五〇〇㌔以内に収まった。

登山活動は大きく三つのステージに分けられる。

第一ステージ　ＢＣ入りからＣ１建設まで

第二ステージ　Ｃ１～Ｃ３建設（六六〇〇㍍）と高度順化

第三ステージ　頂上アタック及びＢＣ撤収

計画段階では、全員登頂と頂上からのスキー滑降が第一の目標であった。ＢＣ入山時より不調者が続出し、特に田中は高度障害がひどくカシュガルまで降り、回復するまで一週間程、現地病院に入院する必要があった。ＢＣ入山時より当初のタクティクスを大きく変更せざるを得なかった。登山そのものは技術的に困難なところはほとんどなかったものの、安全第一とし、氷河の上（Ｃ１より上部の行動）は、アンザイレンするか、スキー装着を原則とした。また、単独行動は認めないこととした。

ＢＣ入山の翌日（七月二十八日）より、上部行動を開始した。ＢＣからＣ１（五五〇〇㍍）までは、ほとんどガラ場で、遊牧民の踏み跡が続いており全く問題なく登れる。所要時間は三～五時間程であった。二十九日ＢＣで全員休養の後、三十日Ｃ１を設営。Ｃ１の上部七～八〇〇㍍程セラック帯が続いており、その間をぬって行くような形で登る。セラックは安定しており、崩壊も激しくない。クレバスはところどころに見られるもののロープをフィックスする必要もなく、Ｃ１よりアンザイレンしてＣ２（六一〇〇㍍）まで登る。四～五時間の行程である。Ｃ２下部一五〇〇㍍付近より傾斜が緩くなり、大雪原がえんえんと続いて頂上に至っている。

八月六日、Ｃ２設営。Ｃ２付近より上部は、早朝を除いては雪がやわらかく、ツボ足だとヒザ下まで、場所によっては腰付近までのラッセルを強いられ、また、ヒドンクレバスも多少あるため、Ｃ２以上の行動はすべてスキー装着を原則とした。八月七日までに、Ｃ２への荷上げおよびＣ３予定地（六六〇〇㍍）までの偵察及び高度順化をし、八日は全員ＢＣに下り、頂上アタック前の休養日とする。

八月九日、第一次アタック隊石川・佐々木がＢＣ発Ｃ１入り。同日、田中・中里が荷上げを兼ねてアタック隊と共にＣ１入りする。十二日第一次アタック隊は、Ｃ３を十時三十分に出発し、十七時に頂上付近に到達したが、頂上周辺も大雪原でありどこが頂上か判然とせず、三十分程周辺を歩き回り、一番高いと思われるところに岩

峰をみつけ、そこを頂上と判断し、ケルンを積んでから下降を開始した。

第一次アタック隊は同日C2までスキーで下り、翌十三日BCに帰着。十三日にC3入りした第二次隊（相馬・田中）は、十四日十時三十分C3を出発、C3より三五〇メートル程登ったところで田中が不調を訴え動きも鈍くなったため登頂を断念しBCまで、その日のうちに下降した。これですべての登山活動は終了し、十八日BCを撤収し、カシュガルへと下山した。

＜おわりに＞

出身母体が違い、また、それぞれの思惑をもった人間が集まり、ひとつの目的に向かって、試行錯誤をくり返しながら準備を重ね、貴重で興味深い地域で登山を経験したということは、各参加隊員また青年部・学生部にとっても意義のあるものになったと思う。しかし登山の結果として、第一次アタック隊の二名しか頂上に立つことができなかった。このような結果に終わった一番大きな原因は隊員各個人の基礎的な登山能力の不足、特に体力不足があったと思われる。近年、海外登山は容易に行けるようになったものの、改めて高所登山の厳しさ、難しさを身にしみて感じさせられた登山であった。

＜記録概要＞

隊の名称　日本山岳会青年部慕士塔格山登山隊一九九一

活動期間　一九九一年七月二十一日～八月二十三日

目　的　慕士塔格山（七五四五メートル）の登頂と、頂上からのスキー滑降

隊の構成　隊長＝相馬　勉（31）、隊員＝石川慶英（24）・滝沢守生（22）・佐々木毅彦（23）・田中清隆（21）・中里雄一（20）

行動概要

七月二十一日	成田発→北京着
七月二十三日	北京→ウルムチ
七月二十四日	ウルムチ→カシュガル
七月二十六日	カシュガル→スバシ（三八〇〇m）
七月二十七日	スバシ→BC（四五〇〇m）建設
七月三十日	C1（五五〇〇m）建設
八月五日	C2（六一〇〇m）建設
八月七日	C3（六六〇〇m）までの荷上げ、順化終了
八月八日	全員BCで休養
八月九日	第一次アタック隊BC発
八月十二日	第一次アタック隊登頂
八月十四日	第二次アタック隊C3発、六九五〇メートルで登頂断念
八月十八日	BC撤収、カシュガル下山

（注）使用時間は北京標準時。記録の詳細については「第二次海外登山　日本山岳会慕士塔格山登山隊'91報告書」を参照。

関西学院大学山岳部七十年の歩み

出席者　橘　真琴　塩津正英
藤木高嶺　長井弘光
尾崎　進　三戸田一郎
日上耕司　高田英明

（本稿は一九九二年二月十四日開催の「第二十回山岳史懇談会」での話を関係者の校閲をへて収録したものである）

橘　真琴

関西学院大学山岳部は一九二〇年（大正九年）に設立されて以来七十余年になります。六甲山周辺の登山から始まって芦屋、仁川の岩場に親しみ、剱、穂高、鹿島槍を中心とする北アルプスの春夏秋冬の登山、さらに北千島、朝鮮、台湾の山への遠征からペルーアンデス、カナダ・ローガン、そしてヒマラヤへと活動の範囲を広げて参りましたが、一九六五年以降山岳部員の減少が続き少数精鋭による登山活動を強いられております。省みますと栄光と挫折が織り成し、誠に人の一生を思わせる歴史との感を深くしています。

私どもの歩んできた道を一通りお話しし、次いで時折の話題を提供しようと存じます。話し手が多いようですが、何分長い期間ですので分担を致しますので悪しからず御了承をお願いします。

長井弘光

本題を理解していただくために最初に関西学院について簡単に紹介させていただきます。

関西学院は一八八九年（明治二十二年）キリスト教主義による青年の教育を目指して、アメリカ南メソジスト監督教会の宣教師ウォルター・ラッセル・ランバスによって創設されました。当初は神戸にあったのですが一九二九年、現在の西宮に移転されました。六甲山の麓で緑濃い所、山岳部にとっては近くに仁川渓谷の岩場があり、クロスカントリーも出来ますので、日頃の練習には恵まれた環境にあります。

一九三二年大学昇格が認可され、現在神学部を含む七学部と中学部、高等部があります。スクールモットーは「MASTERY FOR SERVICE」―奉仕への練達―であり、校章は「三日月」―満月になるように向上を目指し、太陽の光をうけて夜を照らす―であります。校歌「空の翼」は作詩・北原白秋、作曲・山田耕作（OB）です。文化部門そして運動部門とも学生活動が盛んな校風があり、運動部のモットー"NOBLE STUBBORNESS"「気品の高い根性」または「上品な粘り」で、数多くの全国制覇を為しオリンピック選手を輩出しています。

さて本題に入ります。まず七十年の歴史を七つの時期に区分して話していきたいと考えています。

一　草創期（一九二〇年～一九二五年）

一九二〇（大正九）年十一月志保川ら四名によって発起され十二月学生大会において承認を受け正式に「関西学院高等部登山部」が創立されました。設立の目的は規則第一条によると「吾部は精神の向上、健康の増進を第一の目的となし並びに山岳趣味普及に尽力なすこと」とあり、関学山岳部二十年史で佐藤は「参加の動機は伝統的な自然愛好と青年らしいリクリエーションであった」と述べています。

右から長井弘光、橘真琴、塩津正英、藤木高嶺、尾崎進、日上耕司、三戸田一郎の各氏

第一回登山として金剛・葛城山縦走が行われ、引き続き六甲山の登山が行われています。一九二二年に山岳部と改称し本格的活動に入っています。組織として、当時は個人主義社会で個人の主観で行動するのが学生自治の基本概念であり、チーフリーダーの必要はないとされ、部長も名誉部長を教授中より推薦し、功労のあった先輩を顧問とし部員の中よりマネージャー一名、幹事若干名を選出して自主的に運営しておりました。ただ山行が一般学生の募集で行われていたことから部員を確定するのは難しかったようです。

登山活動としては学校が摩耶山の山麓に位置するところから六甲山、摩耶山、神戸アルプス、須磨アルプス等が縦走あるいはルートをかえて登られ、一カ月一～二回、参加者は五～八名、一九二四年には例会山行として行われるようになった。興味ある記録として「応援登山」があります。野球や相撲の応援に行く前に登山してから応援に行き、終ってからさらにキャンプをしている。そのキャンプも盛んで阪神間の砂浜の他、淡路島や琵琶湖へも出かけています。

日本アルプスへは夏期休暇に一般学生を募集して（朝日新聞など一般新聞社に通告して募集記事を掲載してもらい、帰着時には無事帰着と報道されていた）の遠征が行われており、その計画は相当広範囲で一九二二年九班、二三年八班、二四年三班、二五年七班の計画があり、白馬岳、立山、槍ヶ岳、後立山縦走、燕―常念、立山―針ノ木岳等のコースで登られています。朝鮮・金剛山、富士山登山や先輩宅に宿泊しながら東海道徒歩旅行も実施しています。新卒者の月給が三十円程度の時朝鮮・金剛山への費用が五十円、二三年の五～七日間の日程で三十～四十円と記録され登山費用は昔から高くついたようです。

登山のほかスキー、スケートも平行して行われ、二三年十二月にスケート倶楽部が発足し、二五年十二月関温泉に初めて「スキー遠征隊」が出立しています。翌二六年には朝日新聞主催「第一回関西学生スキー

選手権大会」が伊吹山において開催され、本日出席の橘会長他三名が出場しています。当時ストックは市販しておらず、選手が手造りでつくっており、橘会長はストック造りが上手で他の仲間のためにもよく作らされたと話されています。

登山の啓蒙活動としては学院内での写真展、講演会、座談会を開催しています。二二年六月榎谷徹蔵氏「日本アルプスの挿話」、牧伊三郎氏「日本アルプス現況施設」、手塚順一郎氏「レンズよりみたる日本アルプス（幻燈）」が学院中央講堂で開催され、学生三十銭、一般五十銭の聴講料をとって六百名を集めており、翌二三年七月藤木九三氏「立山より針ノ木越」榎谷徹蔵氏「日本アルプスの深雪状況」、矢沢米三郎氏「日本アルプスの学術的価値」の他にハーモニカ及び関西学院オーケストラの演奏もあったためか聴衆千六百名弱と人気があったようです。藤木九三氏にはその後山岳部として指導を受け顧問をお願いしていました。

二　アルピニズム前期（一九二六年～一九三二年）

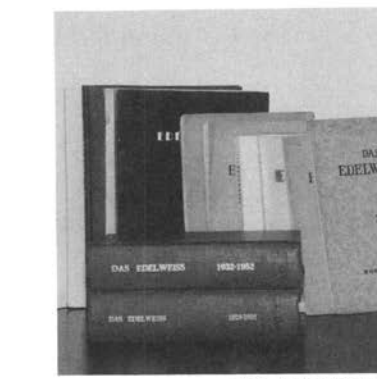
啓蒙の時期を経て活動も分化し、次の段階へ展開する模索の時期でありました。この時期の観念について佐藤は「広義におけるSPORTいわばPLAYの概念であった」と述べています。

一九二八（昭和三）年山岳部内の組織として登山A部、登山B部（ピクニック的登山）、山岳スキー部、山地露営部、ロッククライミング部、スキー倶楽部、スケート倶楽部を設けそれぞれ好むところにより所属を分けることになりました。また学外組織として二七年二月関西学生スキー連盟結成に、そして二九年関西学生山岳連盟結成に参加しています。

登山活動としてはロッククライミングへの取り組みが二六年四月RCC・藤木九三氏、直木重一郎氏の指導で始まり芦屋、道場、仁川の岩場で練習を積みました。二九年学院が神戸から西宮の上ヶ原に移転すると学院から徒歩十分程のところにある仁川渓谷の岩場がホームゲレンデとなり今日に至っています。日本アルプスでの岩登りへの取り組みは二九年七月前穂高岳北尾根（浅川、寺元）と剱岳八ッ峰（高須賀、石黒）に始まりました。登山対象の山も北アルプスから南アルプス、中央アルプス、八ヶ岳、白山、御岳、北海道等へ広がり、北アルプスでもコースが多様化しました。また近畿の山も鈴鹿の山、大台ヶ原、比良山、吉野山等が夏だけでなく春、秋にも登られるようになりましたが冬はまだスキーが中心でした。

登山形式もこの時期に変化がみられ、部員を主体として今日につながる定着合宿の方式が取り入れられました。一九三〇年夏、剱岳真砂沢への集中登山（二～三人の班に分けそれぞれ別々のコースから真砂沢へ集結して合宿に入るといった方式）が行われ、三一年夏は穂高岳涸沢、三二年夏は剱沢二股への集中登山が行われた。この間の注目すべき記録としては笠ヶ岳穴毛谷（土居、竹内、大原）、白萩川遡行剱岳（山中、田中、塩津）、岩井谷―薬師岳―剱岳（竹内、藤田、吉岡）がある。積雪期登山は二八年三月乗鞍岳（石黒）が初めてであるが三一年三月に白馬岳主稜初登攀（秋山、田中＝神戸商大）。同パーティーは、同年十二月に富士山五合目でテントを試用し快適なものだと報告しています。

六甲山を中心とする近郊の登山は例会山行として定着し、岩登りを含めて月二回おこなわれ、一九二六年から例会毎にリーダーが決められるようになった。キャンプは芦屋等で例会を兼ねて実施された他、二七年夏淡路島、比良山麓でのキャンプ、富士五湖巡り、二八年夏には大山登山を含む山陰ツアーキャンピングが行われた。



六甲・DAS EDELWISS

またスキーは一九二五年に続き翌年も関温泉で合宿、燕、赤倉へ回りクリスチャニアやテレマークのコーチを受けている。その後関温泉の他二九～三〇年は菅平、二九年には猿倉で白馬登山を兼ねた合宿も行われています。三一年熊の湯合宿の他近郊でのツアーも行っています。また三一年一月神鍋山における関西学生スキー選手権大会では優勝（秋山、小野垣、松本、三戸）している。三二年これまでの合宿を改革し山に重点をおいたスキー合宿になった。細野・黒菱のゲレンデで部員をスキーのレベル毎にクラス分けしてそれぞれコーチをつけて練習し、その後猿倉・白馬組、唐松組、乗鞍組に分かれ登山とスキーツアーを実施しています。

機関誌として一九二八（昭和三）年一月「六甲」創刊号を発行、内容は論説、紀行、随筆、年報で構成されています。二号からは"DAS EDELWEISS"と改題され現在十六号まで発行されています。別に「会報」が一九六三年三月から一九七八年の三十一号まで出ていますが、現在休刊中です。また部員を対象に「時報」が一九三三年十二月から並行して発行されるようになったが一九六三年九月以後は合宿毎の報告書にその内容を盛り込むことになっています。

三　アルピニズム後期Ⅰ（一九三三年～一九三七年）

学院各運動部の活動も全般に活発でありそれに刺激され、また大学昇格も一九三二（昭和七）年に認可され、高揚した雰囲気に包まれていたこの時期はスポーツアルピニズムの高次なる発現のための意欲的な試みが実施されています。それまでの日曜登山という形を脱皮して、毎日のトレーニングによる個人の技術向上が意識的に取り上げられ、ヒマラヤの研究も始められた。

組織・運営面ではまずチーフ・リーダーを選出しチーフ・リーダーとマネージャーの下にその諮問機関として「リーダー会」が置かれた。それは一～二の英雄的登山家を輩出せしむるより部員全体が総体的円満なる動きを見せるという方針に基づいて作られた。部内の組織も会計係、学連係、道具係、書籍係、庶務係、写真係に分け、別に大学担当委員と予科担当委員が置かれま

した。一九三三年にスキー、スケート倶楽部を廃止、三五年七月関西学院山岳会を発足し、会長に本日出席の橘真琴が選出され、五十六年間今日までその職を務めています。仁川渓谷で毎日トレーニングが開始され、登山技術の研究会や合宿計画の準備会が開催されて知識の向上が計られました。

山行としては夏山では集中登山―定着合宿方式が確立され、合宿も夏山、春山、秋山、冬山とシーズン毎に実施するようになりました。夏の合宿は剱岳真砂沢と穂高岳涸沢で交互に行われ合宿前に二～四名よりなる四～九班のパーティーが十五日前後の山行で合宿地へ集合し全員合宿に入った。合宿では岩登りが主体であったが合宿後も数パーティーに分かれ縦走などが行われました。対象の山も拡大され北千島や利尻山、屋久島へも行っており、これまで登った山も従来と違うバリエーションが選ばれるようになりました。この時期の夏の主な記録を挙げると剱岳チンネ（塩津、田中、西村、中川）、鹿島槍岳中央ルンゼ（塩津、西村、松本、鷲池）、北岳バットレス第五尾根（陸田、真辺）、剱岳剱尾根上半部（陸田、大橋）、屏風岩第二ルンゼ（田中、西村、真辺）等があります。

積雪期は剱岳西面を対象に三年間取り組んでいますが、別に栂池と遠見尾根で一般学生を含むスキー合宿も行われ、鹿島槍岳の北壁、大山の北壁も取り上げられました。遠見小屋の建設については小屋主下川氏の要請に応じ場所の選定と資金援助をしたことから同小屋の一室を専用使用できることになっていました。剱岳西面は天候に恵まれず三年目にようやく成果をあげています。一九三四年三月、十二月そして三五年三月ともに早月屋根途中で撤退していますが、三五年十二月早月尾根にACを設置して剱岳頂上に達し、翌三六年三～四月白萩川にBCを設置して小窓尾根―三ノ窓（森田、箕輪）、三ノ窓AC―チンネ正面初登攀（塩津、鷲池）、剱尾根試登（西村、真辺）と一応の成果をみたので三七年三月は鹿島槍カクネ里に転じたが浪高生遭難救助のため合宿は中止されました。十二月はハイキャンプ研究をテーマに再び早月尾根に入ったのですがキワラ平で不測の遭難事故により山本、中谷の二名を失い合宿は中止となりました。創立以来初めての遭難でありその衝撃は大きいものでした。

四　アルピニズム後期Ⅱ（一九三八年～一九四四年）

学生だけで意欲的な山行に取り組んで着々と成果をあげてきましたが遭難事故のショックは大きく一つの転機を迎えました。一方時流は戦争へと傾き登山そのものも問われる時代となったがしかし遭難からの立直りは早くヒマラヤを目指しより徹底したアルピニズムが追求された。二十年史に佐藤は「ここにおいて我らは研究に、準備に、交渉に、実践的には異人種人夫の使用に、距離感の縮少に、国外遠征の段階となるべき国内遠征を主義として掲げそしてまた登高の永遠的問題たる軽装備及び食料、気象の登山科学、それと連関してスノーホールの研究あらゆる至難の登頂の鍵を握るスポーツアルピニズム的テクニックの修練そしてこれらを裏付けるものは『学生山岳部集団』としての全体性である」と述べている。

戦争が深刻化していよいよ学徒出陣の現実となる中でかえって山行は情熱的に、よ

り困難を求め意欲的に行われた。戦時体制が強化されるに従い学生の自治組織は軍事体制に組み込まれていった。一九四一（昭和十六）年学生会運動部山岳部から報国団鍛練部山岳班に、更に四三年に鍛練部戦技訓練科行軍山岳班と改称するに及び、班長は原田教授に替わり配属将校（中尉）が就任しています。文部省学徒体育実施要領では山岳班は最重点的位置に置かれ「戦技としての登山行軍と一般学生の錬成指導が使命」とされました。しかし四三年七月に関西学生山岳連盟は解散し十月には学徒出陣の大命が下り部員の大半が同年十二月入営し残留部員は四名になりました。

会報

早月屋根に二人の部員を失った後の春山は遠見尾根でスキー合宿、夏は白馬・杓子岳より白馬岳―祖母谷温泉―三田平―剱岳―三田平ＢＣ（八ッ峰等）―白萩川―馬場島のコースで合宿、冬は遠見小屋をベースに五竜岳に登っているがその際雪洞の研究を行いテントを使用しない山行に自信を得ている。四〇年春山で杓子岳東壁（Ａ尾根）積雪期初登攀の際にはＡＣに雪洞を利用している（浅野、小倉、永野）。引き続き四一年の大商大との合同登山となった春山〔毛勝―猫又―剱縦走〕でも雪洞利用を試みています。

夏山合宿は四〇年穂高岳への集中登山が行われたが翌四一年は二パーティー出発後文部省より戦時体制下の規制の通達が出され、合宿は中止された。この時井原はヒマラヤを想定し〔西宮の関西学院から剱岳頂上まで徒歩による登山―二十四日間〕を成し遂げている。四二年は休暇の減少で剱岳（真砂沢及び三ノ窓）のみになったが、この期間寸暇を惜しむかのように山行と登攀が行われている。注目される登攀記録としては四〇年七月鹿島槍岳北壁中央ルンゼ初登攀（岡田、東仲）、四二年五月鹿島槍岳荒沢奥壁北股中央ルート（井上、山本）、七月剱岳チンネ頭直下のフェース中央完登、チンネ京大ルート左のクラック（Ｄクラック）完登、チンネ左端クラックより稜線完登、八ッ峰六峰長次郎側フェース完登がある。その他春秋を含め岩登りを中心に剱岳、穂高岳（前穂北尾根四峰奥又白中央）、鹿島槍岳（荒沢）、北岳バットレス、北鎌尾根、八ヶ岳、御在所岳等に積極的に取り組んでいる。

三九年イラン遠征が為替管理法の施行により直前に中止になったため急拠台湾へ向かい、シンカン山、ハインサ山を登っている。続いて四〇年朝鮮冠帽峰および白頭山に登るとともに民族学的調査を行い「登山と民族学研究」に纏めている。

積雪期は四一年春早月尾根から剱岳を目指したが天候不良で計画半ばに終った。この時以降重点は鹿島槍岳を中心とする後立山のポーラーメソッドによる登山計画に移っている。四二年春鹿島槍岳東尾根から唐松岳への縦走が行われ、冬はポーラーメソッドによる八方尾根から白馬岳への計画が実行されたが天候不良のため不帰Ⅰ峰最低鞍部までで終った。この計画は戦後「後立山国境線極地法登山計画」に発展することになる。四三年春鹿島槍岳信州側トラバース（遠見尾根―カクネ里―天狗尾根―荒沢―東尾根）に成功し、引き続き直ちに白馬岳から針ノ木岳の後立山全山縦走（井上、小山）を行いこれも成功している。

戦時体制下における山岳部の役割として一般学生の指導が指示されているが具体的行動としては剱岳「大学予科学練部体育班錬成登山」が行われ、コースは弘法―乗越小屋―剱岳頂上―早月尾根―馬場島であった。また十一月「戦技登山研究会」（大日本体育会行軍山岳部会）が穂高岳を舞台に陸軍大野少将統監の下に実施され、これには岩登りに特段の実績をもつ井上が全国学生山岳界を代表して唯一人参加している。しかしこのようなひたむきな登山も十二月入営決定により練習を停止し部活動は富士山の出陣壮行登山をもって事実上の休部に入った。

五　戦後復興期（一九四五年～一九五六年）

終戦後復員してきたOBの指導をうけ戦前のレベルへの復活がはかられたが、装備もなく食料も乏しく資金に窮していた当時は山へ行くには幾多の困難があった。

その中で一九四五（昭和二十）年、四六年冬と春に八方尾根と遠見尾根を中心にOB・学生合同の合宿が行われた。四八年春・夏とも鹿島槍岳を中心に置いて活動した。この時鹿島槍中央ルンゼの第三登（永野、井上、山本、片山、植田）がなされた。秋には富士山で冬山技術講習会が日本山岳会主催で行われ関西学連のメンバーとして植田、片山他四名が参加している。

四九年春ポーラーメソッドによる後立山縦走計画がOB・学生合同で実行された。この計画は戦前から意図された計画で栂池から鹿島槍岳へ至るものであるが、鹿島槍頂上へはキレットからカクネ里へ下り、北壁正面ルンゼを登りまた白馬岳へ戻る計画になっていた。天候不良のため日程が遅延し唐松岳ACから正面ルンゼ登攀を放棄して鹿島槍岳北槍頂上に達したもののACに戻ることができず北股を下ってしまい失敗に終った。

五〇年以降もOB・学生合同の登山が夏は剱岳、冬は白馬と遠見尾根を中心に行われたがだんだんと学生主体になっていった。五四年三月信州側より富山側への黒部横断〔遠見尾根―五竜岳―東谷尾根―仙人ダム―雲切尾根―池の平―小窓―三ノ窓―剱岳頂上―早月尾根―馬場島〕に成功したのに引き続き、再びポーラーメソッドによる後立山縦走計画が取り上げられた。五五年春はアクシデントで失敗したが翌五六年春に白馬岳―鹿島槍岳南槍往復に成功した。戦前考えていたポーラーと雪洞による山行を大成した時期といえるでしょう。

この様な実績が六一年、OBと合同のペルー・アンデスや六四年学生だけのローガン遠征へと発展しました。バリエーションが中心となり、岩も夏から厳冬期へといよ

いよ尖鋭化していく「戦後最盛期（一九五七年～一九六四年）」と部員減少の「昭和後期以降（一九六五年～一九九二年）」は時間の都合で省略させていただきます。

塩津正英

私は山岳部に一九三二（昭和七）年入部

時報

しています。その前年末山岳部主催の熊の湯スキー合宿に一般参加しましたが、合宿が始まるとリーダーから毎日渋峠の往復を命ぜられました。年が明けて一月神鍋山における関西学生スキー大会に突然出場を言い渡され技術の未熟な私は恥ずかしい成績でしたが先輩たちの頑張りでチームとしては高岡高商に次いで二位でした。前年は優勝していましたが。その夏剱岳に連れて行かれたのが私のアルプス初経験でした。その後は後立山、剱を中心に山行を重ねていますが中でも一番心をひかれたのは鹿島のカクネ里でした。

三四年七月穂高涸沢の合宿の前にかねて着目していましたカクネ中央ルンゼの登攀を試みました。ルンゼを登りつめ最終の段階で正面の壁側にトラバースして、あとワンピッチという所で墜落、再度試みましたがまたも墜落。その瞬間から意識がなくなり無意識のまま元の位置に戻り、リュックから補助ザイルを出し、四名全員を二重にアンザイレンし、懐中電灯を取り出したあたりから意識が戻ったものの何故そこにいるのか、その間何が起こったのか解からずセカンドの者に聞いてやっと納得しました。間もなく夜となって雨も降りはじめハーケンにすがったまま一行は夜を明かし翌朝懸垂を繰り返しベースに戻ったのが鮮明に思い出されます。その後四〇年、後輩の岡田、東仲両君が初完登を果たしてくれました。このルンゼの積雪期登攀のため三七年三月白岳沢下部にベースを設け、登攀を開始しましたが他校生の遭難救助作業でこの計画は中止せざるを得なくなりました。

戦後になって一九四九年春、栂池から白馬、唐松、鹿島とキャンプをのばし鹿島キレットからカクネに下降、念願のルンゼを登って往路を栂池に引き帰えすというOB・学生混成パーティーによる計画で私もサポート隊員として参加しましたが、天候不順による日数不足でアタック隊はルンゼ登攀を試みることなく鹿島槍から下山という結果になり私のカクネへのこだわりも終りました。

次に一九三五年七月から八月にかけ北千島の幌莚（パラムシル）、占守（シュムシュ）に行きました。幌莚で荒川岳に登った時頂上附近でガスにまか

れ、磁石を見ると考えていた方角と全然違う方向を指している。驚いてそのまま足を踏み出すと磁石の針がクルリと回ってしまう。どうしたことか困惑しましたが磁石に頼らずなんとか下山することができました。後で地図をみると右下隅に「局所磁気あり注意を要す」と記されてあり納得しました。船舶航海用の海図を持参しており、参謀本部発行のものは手にはいりませんでした。

占守島では片岡湾から半日がかりで別飛（べつとび）に行き、別所さん宅を訪ね、一夜の宿をお願いしました。突然のことでしたが快く承諾して下さりお爺さんの部屋をあけて泊めて下さいました。その部屋は三畳くらいの部屋でしたが熊の毛皮を敷き詰めた暖かい部屋でした。食事も家のすぐ前で海に注ぐ小川から獲った鮭を料理して暖かいもてなしをうけ、翌朝は付近の先住民の遺跡を案内して下さいました。その時別所さんの家族は佐吉爺さんと息子の二郎蔵さんに最近東京から来られたお嫁さんの三人暮らしでした。明治の開拓以来ずっとそこで暮らしておられる様子でしたが占守の年間気温観測表を見せていただいたところ最低でも確か零下四～五度と案外に寒くないのは意外でした。

その後神戸に帰って二～三カ月後に別所様からお手紙でお爺さんの写真があればほしいとのことでキャビネ判に伸ばして送りましたところ、千島開拓団の一員としての功績をもつ先日お世話になったお爺さんが亡くなったとのことで驚かされました。

この写真についてもう一つの思い出があります。一九七七年元日本山岳会会長佐々保雄氏が編纂された別所二郎蔵さんの手記『わが北千島記』（講談社発行）の「父母のこと」の記事の中に私が送った佐吉翁の写真が載っていたのです。この本で別所さんが戦後千島から引揚げ、根室に牧場を経営され一九七六年六十九歳で亡くなられたことを知りました。また当時持参した海図がなくなったので一昨日神戸で買い求めたところ、発行者は不明ですが地名はロシア語で注釈は英語、地名や山名は書きこみは少ないがパラムシル、シュムシュ、オネコタン等の島の名前はそのまま踏襲されています。以前になかった道路が少し記入され、幌莚島のオホーツク海側の航行を禁止するとありました。

藤木高嶺

一九四六（昭和二十一）年大学予科に入りました。先輩は軍隊から復員した憲兵、陸軍や海軍中尉など軍隊調でした。練習をさぼってはなぐられ、岩登りでなぐられ、練兵場（グランドのことをそのようにいっていた）を走らされ、走らされたままで忘れられていたなどかなり無茶苦茶な訓練でした。ただ一人片山全平先輩（日本山岳会元図書委員）のみが味方をしてくれましたが惜しい人を早くなくしたものです。私より齢で二つ、学年で一年上でした。

関学は裏山に仁川渓谷の岩場があり歩いて十分、放課後毎日岩登りの練習をしていました。他の学校に比べて恵まれており休日に練習に行く必要はない。毎日やるものだから技術も上達して曲芸師、アクロバットなどといわれました。そして日曜、祭日は六甲山等で高校生を指導していました。

夏は剱合宿ばかり。剱沢か二俣でテントを張って二～三週間岩登り合宿、終って針

ノ木や槍、穂高へ縦走していた。冬は鹿島槍に集中、四年間遠見、白岳、五竜ばかりでした。そして雪洞を重視した。当時装備のない時代でしたが父親がフランス、スイス、イギリスから持ち帰った羽毛のシュラフがありお互いに貸し借りしながら山に行ったものです。

神戸大が北鎌尾根をやる時に、借りていった人が表層雪崩で亡くなり、そのシュラフに入れて荼毘に付され、そのシュラフの代りに返してくれたシュラフを持参した関学生（山岳部員でない）が同志社大と共に山行して滑落死。また返してくれたシュラフを持参した同志社大生が冬の鹿島槍で雪崩にあって四人が死亡する遭難にまきこまれ、彼は六月にそのシュラフに入ったままで見つけ出されました。自分は三日早く出発してキレット小屋で彼等が来るのを待っていたのです。二度あることは三度有る、と「岳人」に書いたところ二度と借りに来る者がなくなりほっとしました。

一九四九年全後立山を極地法でやろうと考え、全行程を雪洞を使って現役六人とOBを含めた十二名で栂池にベースを置いた。そして白馬山頂C1—天狗のコルC2—五竜岳C3—キレットからカクネに下って鹿島北壁を登って同じルートで戻るという壮大なものでした。アタック隊を待ちながら十七日間天狗のコルでそれも一週間分の食料を食いのばし一人一食十粒の米を煎って、数えながら食べて茶をのんで腹をふくらませた。トランシーバーがない時代で連絡がとれなかったのですが、アタック隊の二人は凍傷で戻れず冷沢から下山していたのです。好天を見はからって帰途についた自分達三人は蓮華のコルに来た時下から登って来る大勢の人たちをみてどこのパーティーかなど話していたところ、なんと自分たちの捜索隊であった。新聞では顔写真入りで遭難かと報道され大さわぎになっていました。

お蔭様で朝日新聞社の入社試験の面接では、この話題でもちきりになりたすかりましたが、このようになんとか縦走は成功しましたが極地法では失敗でした。その後もう一度失敗の後、一九五六年に成功しました。

ヒマラヤ文献目録とその周辺

薬師義美

きょうの話は大森久雄さんから頼まれましたが、これまでいろいろと書いてきましたので、どうしようかと迷ったのが正直なところです。お手元に資料が二種類あると思います。一つは『書誌索引展望』（第八巻二号、一九八四年五月）に書いたものでこれをご覧になれば、きょうお話しすることがほとんど書いてあります。これを読むようなことになるかもしれませんが、ご勘弁いただきたいと思います。もう一つ、印刷のものやら手書きのものが混ざっている各種文献目録資料があります。これについてはあとでお話いたします。

ＧＪとの出会い

私がやっておりますのは、すべて道楽ごとでして、その最初は『Geographical Journal』に出会ったことがきっかけだったんです。と申しますのは、望月達夫さんが訳されたロングスタッフの『わが山の生涯』に、ＧＪという文献の引用が随所に出てくるわけです。ＧＪとはいったい何だろうか。『Geographical Journal』というのはわかっていたんですが。

私は山に行くのに都合のいいところというので大学は地理学科を選びました。そして、院生で残るころですが、研究室にそのＧＪが第一巻（一八九三年）から揃いのセットで購入されたんです。ブルーの表紙でひと山ありました。ＧＪの実物はこれか、と目次を見ていきますと、ウォルター・ウェストンのジャパニーズ・アルプスもありますし、南極、北極、ヒマラヤはもちろん、いろいろな報告が入っているわけです。感激性の私は途端にのぼせあがってしまいました。一九五〇年ぐらいまで、ざっと六十年分のＧＪが、製本のしてないバラでひと山ありました。それを見ているうちに、ひとつヒマラヤ関係の索引をつくろうと考えたわけです。

それで、ピックアップして最初につくりあげたのがこの『Index…』です。これを、そのころヒマラヤの研究をなさっている方々に、厚かましくもお送りしました。これを出したのは一九五九年で、一七頁の薄っぺらいものです。ザラ半紙を使っていますから、お送りしたものはかなり変色していると思います。ともかく、そうしましたら、ずいぶん反響がありました。深田久弥さん、諏訪多栄蔵さん、望月達夫さん、吉沢一郎さんもそうだったと思います。八〇部がすぐに出てしまい、増刷もしました。

さらに改訂し、もう一度見直したものがブルーの表紙の『Selected Index…』、これが翌一九六〇年です。全体で五二頁、これも最初百部つくりましたが、あとで増刷し

ています。

これでいちおう終わりました。研究室ではいつでも見られるんですが、しかし自分の手元にも置きたいと思い、かなり費用をかけて、関係箇所を全部マイクロフィルムに撮りました。そのあと、しばらくしましたら、GJのバックナンバーが残っていると広告が出ました。そこで、ロンドンに手紙を書き、ヒマラヤ関係の号を取り寄せました。それでマイクロフィルムは川喜田二郎先生の研究室に譲りました。

いろいろ調べますと、当然RGS（英国王立地理学協会）からインデックスが出ているわけです。現在までに九巻出ていますが、これは一昨年、ようやく全巻手に入りました。ともあれ、GJはこれでおしまいということにしました。

次に、『Himalayan Journal』はヒマラヤに欠かせないものです。ところが、そのころも戦前の号を手に入れるのは大変でした。山岳会のルームが御茶の水の時代にお伺いしたところ、ちょうど丸善から戦前のものが一四巻ほど揃いで入ったところでした。まだ図書ナンバーなど押してなかったのを見せていただきました。また、GJの索引のおかげで、深田さんの松原のお宅にも、諏訪多栄蔵さんの紹介で伺いました。この前後に、諏訪多さんと一緒にHJの総目次と索引をつくりました。そのころ、HJにはインデックスがありませんでした。いま図書室から出していただいたのが第一巻です。きちんと表紙もつけてあって、この表紙が値打ちがあるのです。中にはそれをのけて、本文だけ製本という場合もあるようですけれども。この『Contents and Index to the Himalayan Journal』も二百部つくり、これもたいへん反響がありました。のちにヒマラヤンクラブがボンベイに移ってから、似たようなものを出しております。

もう一つ、『Alpine Journal』がありますが、索引は整っていましたから、雑誌はこれで終わりということになりました。

ところで、諏訪多さんや深田さんのお宅に出入りしているうちに、雑誌よりも単行本が一番だと思うようになりました。もちろん、雑誌に報告を書いても本にしない人もあります。でも、本になっていれば、それが最高のものでしょう。深田さんのお宅にお伺いするたびに、蔵書が増えていきます。最後には細長い、深田さん自称「ウナギの寝床」の九山山房ができました。深田さんの本を見ていますと、自分の手元にないことがいちばん悔しい。だれがいつ、どんな本を出しているか、持たざるもののなんとかでカード化していきました。そのうち、自分自身に火がつき、ヒマラヤに行ったりして、カードはロッカーに放り込んだままになっていたんですが、かなりたまっていました。

諏訪多さんのところにお伺いしていたら、ドイツで『Himalaja Bibliographie』という小さなパンフレットが出ている。これはウィリー・メルクルが主に編集したもので、諏訪多さんのところにありました。これをもとに諏訪多さんは戦前の『探検』という雑誌に四回、M項まで詳しく解説されています。ドイツの文献が中心ですが、日本のものも含めて詳しく紹介されております。雑誌は廃刊になり、完結しませんでしたが、それも見せてもらいました。また深田さんのところで実物の本もたくさん拝見して、そのカードを随分ためたわけです。

『ヒマラヤ関係図書目録』のこと

深田さんがお亡くなりになる前に、カードを一つの本にしてほしいと、行くたびに言われておりました。お邪魔するときは、事前にご連絡するんですが、連絡すると、原稿は先に仕上げて、てぐすね引いてお待ちいただいたという感じです。亡くなった志げ子夫人には、「薬師さんが来ると、早く原稿を仕上げて待っているので、『岳人』がたいへん喜ぶんです」と言われました。朝からでも一杯やりながら、本などの話です。私にすれば自分の父親ぐらいの年齢の差がありましたけれども、「カードを目録にしてほしいな」といつも言われていたんです。

一九六二年ごろ、寝袋を借りて九山山房に泊まりこんで調べたこともあります。そのころは、まだ、一冊の本にまとめようという気はなくて、自分のカードというつもりでした。ところが一九七一年三月に深田さんが急にお亡くなりになり、大変なことだ、墓前に捧げなければならないということで、さっそく単行本化を計画しました。しかし、出版会社に二、三あたったんですが、どこもダメでした。

しかたがない、自分でやろうというので、できあがったのがこの『ヒマラヤ関係図書目録』（一九七二年）です。誤植もずいぶんあります。たとえば目次のところで、「Bibliograpy」と「h」が抜けています。これは全部、自分でタイプを叩きました。ドイツ語、フランス語が出てきますので、それにも使えるように、タイプライターも改造しました。和文の部分は写植です。中に翻訳書が出てきますし、後半は半分が英文、半分が和文になっています。英文の部分は私が打ち込み、和文の部分はあとでプロに写植で貼り込んでもらいました。そのころは、まだワープロがなかったので、ずいぶん手間取りました。

これをつくりあげるのに十カ月ほどかかりました。昼間は本職がありますから、家に帰ってから夜なべ仕事で叩くわけです。しかも私のタイプライターはインチキで、人指し指が中心ですから、終わるころには腱鞘炎で指が曲がらなくなりました。そのころには、布のリボンではなくプラスチックリボンが出ていましたので、それを使いました。

これは赤字になってもしかたがない、深田さんのためにとつくりあげたわけです。まことに道楽ですが、五百部つくりました。何十万円かの赤字になってもと思っていましたところ、事前に『岳人』などに紹介してもらっていましたから、予約注文もかなりありました。先ほど、時間があって神田の古本屋を回っていましたら、ほとんど新本で一冊出ていたので、買い取ってきました。はさんだ別紙にはたしかに私の字で「カンデヒウンチュリの登頂おめでとうございます」と書いてあり、さらに「予約金をいただいたのですが、送料共三千五百円で不足五百円ですから、ついでの折に五百円送って下さい」と書いてあります。それで、なおさら自分のところに返してもらおうというわけで買い取ってきましたが、四千五百円でした。

これは外国へも送りました。外国に売れようが国内で売れようが、ペイできればいいわけですけれども、国内の山の関係の方々からずいぶん注文をいただき、国内で

だいたい黒字になりました。公立の図書館や大学図書館からも注文があるであろうとひそかに期待したんですが、国内の図書館関係ではたった一つでした。話に聞きますと、大学関係が五百、公立の図書館もそれくらいあるだろうと期待したのが、たった一つだけだったのです。

ところが、驚いたのは、国外からの反響が非常に大きかったんです。いきなりアメリカの国会図書館から直接来ました。それから、オーストラリアの大学からも来ました。しかるべき山の関係には送ったんですけれども、どこでどう調べるのか。もちろんわが国の国会図書館には一部寄贈し、国会図書館のニュースには出してくれていました。それが海外にも出ているとすれば、それを見て言ってきたんだろうと思うんですが。HJの『Contents and Index…』についても、インド大使館から照会があり、上京の折に直接届けたことがあります。

この目録が出たところ、何人かの方から、リストで訂正、追加の連絡を受けました。特にアメリカのニコラス・クリンチさん、イタリアのフォスコ・マライーニさん、イギリスのルイス・ボームさんなどから、抜けているよ、間違いがあるよという指摘を受けました。私のミスタッチでずいぶん誤植があるのは当然なんです。そうこうしているうちに、半年あまりで五百部全部出てしまいました。

これが完成したときに、深田さんのお宅で関係者の方にお祝いしてもらったことは、今でも忘れません。望月さん、小林義正さん、諏訪多栄蔵さん、高橋照さん、山崎安治さんなど十人ほどで、色紙に寄せ書きをしてもらいました。七三年二月四日です。そのとき九山山房をのぞきましたら、空っぽでした。あのときは涙が出るほど悲しく、思いも複雑でした。しばらくして奥さんも亡くなられ、洋書は国会図書館に入って、やれやれというようなことです。一時期、東京から京都に、深田さんの本を薬師が買い取るというわさ話が聞こえてきました。金も場所もありませんから、とんでもない話です。

ともかく国会図書館に納まって、その特別展示会がありました。私も日帰りで国会図書館へ見に行きました。その会場で、吉沢一郎さんにばったり会いました。それについては、『岳人』に書いたことがあります。

『ヒマラヤ文献目録』

これで一応終わりまして、こういうことはもう二度とやるまいと思いました。タイプを打ち始めて全部発送するまで、一年ちょっとかかったでしょうか。それと経済的にどうなるかという心配、指が腱鞘炎になったということもありまして、やめたんです。カードの補充も全くしないで、これでおしまいということにしていました。

私の近くに新河端病院というのがありまして、そこの院長が皆さんご存じの斎藤惇生さんで、わが家の主治医でもあるんです。そこに堀内章雄さんが来て、私に会いたいと電話がかかってきました。家に来てもらって話をしているうちに、ある出版社からこの本の改訂版を出そうという話があるけれども、と言われました。私は、ああいうしんどいことは二度とやるまいと思っていたんですが、だんだんその気になりまして、ではまたやろうかと、性懲りもなく始めることになりました。

『目録』を出してからは外国の古本屋からいろいろカタログが来ておりました。それには『目録』に載っていないものがたくさんありましたから、まずそれからのピックアップ、また新刊は雑誌類の書評、紹介からのピックアップを始めました。これもかなり年月がかかりました。

そうやって、基本データを集めている途中で、どうも会社の状態がよくないので、原稿を入れても本にならないかもしれない、どうするかという話になりました。それはしかたがない。しかし、原稿はかなりできていましたので、私は白水社の当時の編集長藤原一晃さんと親しくしていましたから、藤原さんに出してもらえないかと尋ねたわけです。すると、それではやろうと本気になってもらいました。その結果がこの『ヒマラヤ文献目録』で、ずいぶん立派な本にしていただいたんです。

この原稿は全部手書きでした。と申しますのは、勤めの空き時間をフルに利用するには、タイプライターを打っていたのでは家と学校と二台いりますし、どうしても時間がかかりますので、全部手書きにしました。それがほとんどできあがるところで、話を白水社に持っていき、第二版ができあがったわけです。

最初は千部印刷しました。一万九千円とたいへん高い本です。白水社も採算が取れるかどうか、実績五百部があったとはいえ、おそらく薄氷を踏む思いではなかったかと思います。これが出たのが一九八四年の一月ですから、最初のものを出してから十年ぐらいたっているわけです。

これは国内向けが七百、外国向けが三百です。両者の違いは、国内向けは裏に奥付けがついていますが、外国向けにはついていません。ほかは全部一緒です。これも四、五年のうちにだいたい出たようです。千部が出たところで、本の形にせずに、印刷して紙だけ寝かしておいた二百部を製本して追加しました。現在のところ、あと十部ぐらいしか残ってないようで、この種のものとしてはよく出たようです。

ただ、これも図書館関係にはたいへん出が悪いようです。この間も新聞を見ていましたら、図書館の予算が非常に少ないとありました。こういう高い本になりますと、買いにくいんでしょう。しかし、レファレンスとして絶対に置いてほしい本だと思います。

この『文献目録』はパッと見たら立派なものだなとなるんですが、誤植はご勘弁いただくとしても、私の基本カードのミスがあります。そして、何人かの方から、今度も、誤植、追加の連絡を受けました。イタリアのマライーニさんからもいただきました。マライーニさんとは、いちばん最近では一昨年の十二月、テレビの取材でお見えになったときに、京都で会いました。京都の日本文化研究所に嘱託で半年ぐらいお見えになっているときには、日本山岳会京都支部の総会にお呼びして、講演してもらったこともあります。もちろんそれ以前から文通はありましたし、イタリア語のこういう文献が抜けているよと、ズラッとリストで教えてもらいました。

また、カリフォルニアのクリンチさんからも、リストを送ってきました。あの方の世界中の山関係の蔵書は約二万冊だそうです。今このルームは一万ちょっとでしょうか。個人のライブラリーでは、たぶん世界

一ではないかと思います。クリンチさんのところにある新しいもの、あるいは私のもので抜けているものについて、カードのコピーや自分でタイプした分厚いリストを送ってきました。また、亡くなりましたが、スウェーデン生まれでスイスに帰化していたアンデルス・ボリンダーさんが、旧体制下の東ヨーロッパのクライマーと交流があり、そこからの情報もたくさんいただいていました。

それから、三年前にはスペインの山岳資料情報センターのチーフ、J・パイトゥビさんから、スペイン語の文献の追加として、五十七ページほどの冊子を送ってきました。

"Not in YAKUSHI"

白水社版の原稿をつくり始めてから、ぼつぼつ十年たちます。私はそういう気持ちは毛頭なかったんですが、あちこちからいろいろ資料、訂正のリストを送りつけられますと、何かしなければいけない。ご存じの方もおありと思うんですが、外国の山関係の本屋さんは、YAKUSHI・ナンバー・R01を見なさいとか明示している。ところが、私のにないのは、「Not in YAKUSHI」と書いてある。そういうのが数軒、イタリア、イギリスなどにあります。そうしますと、私の目録に載っていない本があるというのはシャクですから、そういうのも入れて何とかしたい。

カードだけは、その後サボらずにつくっています。白水社版のあと、約四千枚あります。この本で四千点ぐらいですから、簡単にいいますと分量が倍になります。そうなると、分厚くなりますし、価格も一万九千円では収まりがつきません。もう一つ、これは全部コンピュータ写植ですが、元のフロッピーが残っていないんです。だから、再版というわけにはいかない。大改訂となると、また一からやり直すことになるわけです。

ついこの間、また道楽ごとでデシデリの『チベットの報告』を出しましたが、去年の八月、平凡社へ打ち合わせに来ました。そのとき、ついでに白水社に寄りました。かつて編集長だった藤原さんは、前社長がお亡くなりになって、今は社長さんです。私としては都合がいいかなと思いまして、大改訂をやろうではないですか、分量はざっと倍になりますと話をしましたら、かつては編集で自分の道楽もできたけれども、社長になると、そう勝手なことはできない、ちょっと待ってくれということで、ペンディングになっています。

ただ、藤原さん自身も色気がないわけではないし、しかも一応これは成功したわけですので、柳の下の何とかになるようにというわけで、見本刷りをつくってくれました。欧文、和文で三、四ページの見本刷りができています。ページ数はやはり倍になります。価格も倍になりそうです。それにゴーサインが出るかどうか、皆さん方のご声援で、大丈夫ですよと言いたいんですけれど……。

この本は、保存を考えて中性紙を使っています。ご覧になればおわかりのように、ずいぶん抜けているところもあります。発行地はわかっていても出版社がわからない、あるいはページ数がわからない、いろいろあります。そういうのを見ると、私は気が滅入ってくるんですが、補充できるも

のは補充して、もう少しきちっとしたものにしたいと思っています。

それから、これで七百六十ページありますので、倍になりますと辞書みたいに分厚いものになるわけです。それで、欧文と和書と分けたらどうだろうと言っているんですが、営業政策上、分けますと国内では英文のものがあまり出ないだろう、国外では和文のものが出ないだろうということで、また一冊になるのではないかと思ってます。

これはすべて私の道楽ごとなんですが、世の中にはいろいろ道楽をやる人がいます。もちろん研究機関もありますし、山岳会もあります。つい先ほどルームの図書室から借り出して、スイス山岳会の蔵書目録を拝見しましたら、非常に分厚いものでした。私は、そういうものも全部参考資料にします。

文献目録あれこれ

今日のもう一つの資料は現在次のための作業に入っている、その一部を抜粋したものです。その原稿はいま約二百枚作成し、C項目までいっております。今日のは文献目録関係だけで、しかもその中からセレクトしてあります。

以下にその中のさらに重要と思えるものをご説明します。イギリスのアルパイン・クラブも立派な蔵書目録（注1）を出していて、ルームの図書室にも入っております。

アショフ（注2）のものは、重いのできょうは持ってきておりませんが、昨年末に発行されました。これはヒマラヤやチベットのドイツ語関係のものが収まっています。まだ全部のチェックは終わっていませんが、ドイツ語のものではこれが絶対必要だろうと思います。値段が二二〇スイスフランです。私はアショフという人と最近情報交換を始めたところで、文通でしか知らないんですが、これは非常に利用価値が高いので、ぜひルームに一冊備えていただきたいと思います。英語からドイツ語への翻訳も入っています。そういうものについては、ただし書きが入っていて、原著もわかるようになっています。

目録類では、フランスの国立科学研究センターがネパール関係の目録（注3）を続けて出しています。まだ完結していないようです。フランス語を中心にして非常に利用価値の高いものです。ネパールの研究には絶対に必要だろうと思います。

変わったものでは、アタール・チャンドがチベットのもの（注4）を出しております。

次はドイツのヒマラヤ遠征隊、メルクルが主に編集したもの（注5）で先ほどご紹介したとおりです。今から見たら大したことはないんですが、当時としてはこれが唯一のヒマラヤ関係の文献目録だと思います。三、四年前にヨーロッパの古本屋のカタログに出ておりました。非常に珍しいと思いますが、私の手元には、諏訪多さんから譲っていただいたものがあります。

中国で出されたもの（注6）は編集を急いだためか、中身をチェックしますとたいへん雑です。一つの本がメインタイトルとサブタイトルと二つに分かれて、二冊の本のようになっていたりします。でも目録の類をつくろうという、私の一つのきっかけになったのが、この目録でした。

日本でも優れた目録が出されているのは、ご存じのとおりです。たとえば日本ネ

パール協会のネパール研究ガイドの目録（注7）。金子民雄さんが編集されたヘディンの目録（注8）。これはヘディンのものに関しては世界で最高のものだろうと思っています。ただ、残念なのは本文が日本語なので、外国では通用しにくいというらみはありますが。変わったところでは、深田さんの蔵書目録（注9）です。これを拝見していますと、もし深田さんがまだご存命でしたら、いろいろな珍しい本がさらに加わっていたのではないかと思っています。

『チベット研究文献目録』（注10）は、成田から出ているんですが、ずいぶん分量の多い目録です。登山や探検のほうは手薄ですが、チベットの仏教を研究される方にとっては、これは絶対に必要だろうと思います。日本人の今枝さんは名前しか存じませんが、ブータンにおいでではないかと思います。

『イギリスとチベット』（注11）はマーシャルという人の編集で、オーストラリアから出ているものです。この目録は、ほとんどすべてに内容紹介があります。そして、探検も非常に詳しく入っています。これもヒマラヤ、チベットを研究するには、絶対に必要なものと思います。一九七七年ですので、ちょっと古いですが、白水社版の目録の補遺の二、小文字のbで入っているのはすべてそうです。私は大学に手紙を書いて、直接取り寄せました。

山に関しては、ニートの目録（注12）が二つあります。最初、W. R. Neate と Jill Neate がどういう関係かなと思っていたんですが、聞くところによりますと、性転換をしたんだそうです。W・Rというのは男性だったそうで、女性に性転換してジルとなったそうです。去年の三月に京大学士山岳会の梅里雪山の合同慰霊祭のときに、クリンチさんがやってきました。二晩ほどお付き合いし、主に山の本の話をしたんですけれども、その中で性転換したという話を聞きました。この人も整理番号に私と同じようにアルファベットと数字をつけるやり方を採用しました。

最近、中国からも二、三出ております。『シルクロード文献目録』（注13）は蘭州大学から出ております。実物はまだ見ておりませんが、中国関係書を扱う本屋のアナウンスメントで見ました。『青海文献目録』（注14）は手元にあります。中国もこういうものを少しずつまとめているようです。

もうひとつの『チベット研究文献目録』（注15）は貞兼さんの編集で、私は一度カトマンズでお会いしたと思います。これは、山関係は少ないんですが、チベット、ヒマラヤにはたいへん役立つものだろうと思います。

変わったところではシャッパートの『シッキム』（注16）で、タイプ印刷ですが、ハワイのホノルルでの刊行です。東京は駒込の東洋文庫にもわりと古いものがたくさんあります。私も何度か訪ねて、いくつか見せてもらいました。『日本における中央アジア関係研究文献目録』（注17）は膨大な目録です。これはまだあるのではないかと思います。

次のワリコー、これはインドのものですが、ジャンム、カシミール、ラダークの特異な文献目録（注18）です。

さて、最終的に私の目録第三版はどうなるのか、あとしばらくで結論が出るとは思うんですけれども、もしダメな場合には、

また自分でワープロを叩こうかと思っていますが、そうなると時間がかかります。ただ、私の同僚にワープロ使いが何人もいますから、原稿を渡して、協力させようかとも考えています。その前に白水社版のような立派なかたちにしたいと思って、決定を持つという昨今です。

タイトルは、最初のは『ヒマラヤ関係図書目録』、白水社版は『ヒマラヤ文献目録』です。私は最初のタイトルにしたかったんですけれども、白水社の営業政策に一部妥協したところがあります。ご存じのように、文献といいますと単行本だけではなく、雑誌の論文など全部ひっくるめてが文献でしょうから……。私の場合には単行本だけですので、ちょっと使いたくないという気がしていたんですが、分量もうんと増えていますし、目をつぶったという具合です。また次も、こういうことになると思います。ただ、分量が倍になりますので、大増補改訂ということになるんでしょうか。ともあれ、また道楽根性で仕事を始めつつあるというところです。

先ほど水野勉さんから、山書の会がお出しになった山岳関係の和書の目録をいただきました。いただいたばかりで、中身は見ていないんですが、当然次の目録の中に紹介させていただきます。最近のようにたくさん遠征隊が出たり、いろんな報告が出てきますと、とても全部を一人でフォローできるものではありません。だから山書の会の場合は何人かで手分けしておやりになったのだろうと思うんです。私自身も一人でやれるはずは毛頭ないんですが、ただ、行き掛かり上、道楽根性でやっております。

書評や紹介の中で、中国語とロシア語があったら完璧になるのではないかとありますが、私はロシア語がダメでして、そのへんは田村俊介さんあたりにお願いしたほうがいいんじゃないかと思います。中国語については、先ほども申しましたように、向こうの図書館関係の蔵書目録みたいなものがぽつぽつ出ておりますし、新しいところは新刊の案内—私は東方書店という中国専門店が出しています『東方』の目録でピックアップするんですが、最初から中国書を入れていませんから、途中から入れると変なことになると、やってはおりません。

ヨーロッパの古本屋では、特に親しいのはイギリスとドイツの数店、イタリアは一店で、ご存じのリブレリア・アルピナのマリオ・ミンガルディとガストンのルイス・ボーム、付き合いはもう二十年近いんですけれども、まだ会ったことはないです。それからスイスは三軒ほど、チューリヒのM・ヘンスは来春に訪日します。現在、欧米の約三十ほどの古本屋からカタログが送られてきます。

私の二十五年来の友人で、イギリスのジャック・ベーンズという人が山の古本屋をやっています。一昨年も来日しまして、今年の夏にも来たいと言っております。一昨年は槍・穂高に一緒に合宿に行き、今年来たら立山・剱に一緒に行く予定です。住んでいるところはノース・ウェールズですから、わりと古書の値段が安いのです。ロンドンに近いほど値段が高く、とても手が出ないような値段です。

あと、イギリスでも山好きの人が始めた本屋が二、三軒あります。途中でやめてしまうのももちろんありまして、ピタッと目録が来なくなる。アメリカですと、シアト

ルにあったのが、二、三年前からピタッと止まりました。たぶんやめたのだろうと思います。

カタログが来ますと、新刊も古本も全部カード化します。私としては一カ所に注文したほうがいいんですけれども、つないでおかないといけないものですから、一冊、二冊とバラバラに注文します。そうしないと次から送ってこないものですから。そうしますと、送金の手数料がちょっと高くつくんです。

わが家はラビットハウスですから、置き場に困ります。だから、このごろはうんとしぼっておりますし、この間の東京のような地震がもしあったら二階が落ちる危険性もありますので、三、四年ごとに処分します。せっかく仕入れても、タイトルにごまかされて買ってしまうような場合もありますし、できるだけ定評のあるものにしぼっておりますが、なにしろサラリーマンでバブルとは関係ないものですから、どうしようもないです。ただ、全部をカード化して、自分の蔵書のごとくに考えておこう。せめてそんなことでお茶を濁しております。

私がやりますのはすべて道楽ごとです。道楽の話をするのは本当に恐縮なんですけれども、こんなところでご勘弁いただいてよろしゅうございましょうか。もし、ご質問なりお話がありましたら、承りたいと思います。

〈司会〉（山本良三・図書委員会担当理事）ありがとうございました。それでは、いい機会ですから、この際、薬師さんにお聞きしたいという方がおられましたら、どうぞおっしゃってください。

〈質問〉ぼくはこの十年ぐらいたいへん不勉強で、こういうものからだいぶ遠ざかってしまったんだけれども、あなたがつくられた白水社版の目録に匹敵するような、今あなたがおっしゃったロシア語と中国語のものはない。だけれども、そのほかのものはほとんど入っておって、しかも日本の文献も網羅されている。これだけのものが世界にほかに今あるんですか。

〈薬師〉この目録のようなものがですか。こういうかたちでは、ないんじゃないでしょうか。先ほど申しましたような、アルパイン・クラブのいわゆる蔵書目録、スイス山岳会の蔵書目録はありますが。

〈質問〉それらは各地の山の文献が入っているわけですから、ヒマラヤとか中央アジアのものとしては、世界で薬師さんのものしかないんじゃないですか。

〈薬師〉単行本に関してはそう思います。

〈質問〉東欧、チェコスロバキアとかポーランドあたりでは、ロシア語で書いているのもあるかもしれないし、英語のも出ているかもしれませんが、そのあたりは網羅されているんですか。

〈薬師〉私の知る範囲では、ほとんど網羅しています。ただブルガリアでしょうか、キリル文字を使うのは。あそこは入ってないと思います。最近、ソ連のエベレストの報告書が何冊か出ていますが、ああいうのはローマナイズして、新しいカードには収録しています。

かつてスイスのボリンダーさんは、チョコレートを送って、それのお返しに東欧の山の本をもらうという、バーター取り引きをしていたようです。ボリンダーさんは器用な人だったらしくて、奥さんと二人合わ

せてヨーロッパの言葉を八、九カ国語をやったそうです。それで東ヨーロッパにたくさんの友達がいるので、たいてい二部取り寄せて、一部を私のところに送ってくれたんです。もちろん私もバーターで日本の、特に英文サマリーの付いているものをまた送る、ということで付き合いがありました。残念ながら亡くなってしまいましたが、アル中だったようですね。

ご存じだろうと思いますが、ドイツのフランクフルトにハンス・ディーター・グロィルという人がいまして、本職はドイツ航空のルフトハンザです。この人の奥さんが片手間に山の本屋をやっており、主に新本ですが、カタログを送ってきます。彼女はタイ人で、もと看護婦さんです。一九七〇年代のはじめ、ボリンダーの紹介でそのグロイル夫妻が私の家に来たんです。ところがその後、二人は仲違いしました。というのは、アルコールを控えなさいと忠告したら、ボリンダーがヘソを曲げて、関係がおかしくなったというわけです。私は第三者ですので、両方とも付き合っていました。両方から悪口が入ってきて大変だったんですが。グロイル一家は昨夏も来日しました。

『岩と雪』にちょっと書いたんですけれども、晩ご飯を食べて、たぶんそれはアルコールが入っていてのあとだろうと思うんですが、自宅のプールに水があると思って飛び込んだら、水がなかった。奥さんがおかしいと思って庭を探したら、プールに倒れており、救急車を呼んだけれどもすでに遅かったんです。六十四歳でした。

また脱線しますが、その方の蔵書が三千余冊あって、最初、日本で買い取ってくれるところはないだろうかと、奥さんから私のところに話がありました。バブルで景気のよいころでしたから、日本だったらどこか買ってくれるところもあるだろうというわけです。それで二、三当たったんですが、ダメでした。

結局、日本へは来ないで、ロンドンのハンシャンタン（寒山堂）という、同じスウェーデン人のやっている本屋に買い取ってもらったそうです。そこから、カリフォルニアのジョン・ボイルという人がほとんど買い取りました。すいぶん古いですが、ボリンダー夫妻がピエロ・ギリオーネなどと一緒にアンデスに行っていまして、アンデスの本とヒマラヤ関係がほとんどです。奥さんの意向では一括して買い取ってほしいということだったんですけれども、それがダメで、六、七割はジョン・ボイルが買い取りました。

去年の五月の連休明けに、三浦雄一郎さんの「マウンテン・サミット」を聞きにくるということを口実にして、わが家へやってきました。それでいろいろ聞きましたところ、ダブるものもありますので、一部は寒山堂からロンドンのグリゴア・テイラーという女性の本屋へ流れました。それが一冊のカタログとなって、高い値段をつけて出されました。

一生懸命コレクションしたものが、あとでバラバラになるというのは、遺族の方にするとたいへん悲しいことだったろうと思います。ベレナ・ボリンダー夫人とは、今でもクリスマスカードのやりとりをしておりますが、この方はもともとスイスの生まれの人のようです。

そんなことで、私自身は古本屋さんだとかいろんな人と付き合いがありますけれど

も、会っていない人がずいぶん多いんです。

〈質問〉ヒマラヤ関係は別にして、中央アジアといった場合に、西のほう、昔のソ連領の中央アジアが、山がないからかもしれませんけれど、ちょっと手薄ですね。

〈薬師〉おっしゃるとおりです。それとソ連領のほうは早くに鉄道なんかが入って、探検の時代が早くに終わったという感じがあるでしょう。それがあるんです。

〈質問〉そうですね。一八七二年か、八〇年ぐらいまでですかね、ロシア軍が入るまでしょうからね。

[追記]

その後、白水社は第三版（増補改訂）の刊行を決定し、九四年一月に出版の予定である。

（注1）The Alpine Club ; Alpine Club Library Catalogue : Volume One, 1982.

（注2）J. C. Aschoff ; Tibet, Nepal und der Kurturraum des Himalaya. Zürich, 1991.

（注3）Bibliographie du Népal. Paris, 1969～.

（注4）A. Chand ; Tibet : Past and Present 1660-1981. New Delhi, 1982.

（注5）Himalaja Bibliographie (1801-1933). München, 1934.

（注6）徐近之編『青康蔵高原及毗連地区・西文文献目録』（北京、一九五八年）

（注7）『ネパール研究ガイド・解説と文献目録』（日外アソシエーツ、一九八四年）

（注8）『ヘディン著書目録』（日本山書の会、一九八一年）

（注9）『国立国会図書館所蔵・深田久弥旧蔵書目録』（一九七六年）

（注10）Kulφy & Imaeda ; Bibliography of Tibetan Studies. Narita, 1986.

（注11）J. G. Marshall ; Britain and Tibet 1765-1947. La Trobe Univ., 1977.

（注12）W. R. Neate ; Mountaineering and its Literature. Cumbria, 1978.

Jill Neate ; Mountaineering Literature. Seattle, 1986.

（注13）『絲綢之路文献叙録』（蘭州大学、一九九〇年）

（注14）青海省図書館編『館蔵・青海文献目録』（西寧、一九八八年）

（注15）『チベット研究文献目録（日本文・中国文）一八七七年～一九七七年』（亜細亜大学アジア研究所、一九八二年）

（注16）L. G. Schappert ; Sikkim 1800-1968. Honolulu, 1968.

（注17）ユネスコ東アジア文化研究センター編、二巻、一九八八～八九年

（注18）K. Warikoo ; Jammu, Kashmir and Ladakh. New Delhi, 1976.

（本稿は一九九二年三月三日、日本山岳会において開催された第二十三回「山岳図書を語る夕」における講演を編集担当が整理し、講師の校閲をへて掲載したものである）

図書紹介

『西堀榮三郎選集』

悠々社　一九九一年刊行　四六判
全三巻・各三五〇〇円、別巻四五〇〇円
（各巻三五〇～四〇〇頁、別巻四五〇頁）

西堀さんの登山・探検に関する著書としてまとまったものでは、一般に良く知られている南極探検についての『南極越冬記』（一九五八年、岩波新書）があるだけで、大部分が共著や雑誌への執筆、講演記録などにまとめられたものが主となっていた。

西堀さんが亡くなられてから、生前に公刊された単行本以外に遺された文章と、各界から寄せられた追悼文を合わせて文集の出版が企画され、ここに『西堀榮三郎選集』として第一巻「人生は探検なり」（西堀榮三郎自伝）、第二巻「未知なる山・未知なる極地」、第三巻「技術の創造力と品質管理」、別巻「人生にロマンを求めて」（西堀榮三郎追悼）の四冊が刊行された。この選集は、西堀さんの開拓精神にあふれた考え方、登山家としての位置づけなどを知る上の好著というべきものであろう。西堀さんの幅広い経歴から、この選集をとりまとめた編者も次のような多岐にわたっている。唐津一（東海大学開発技術研究所教授）、北村泰一（九州大学理学部教授）、堂本暁子（参議員議員）、原田明（株式会社オーケン社長）、本多勝一（ジャーナリスト）、山田二郎（日本山岳会会長）の諸氏である。

この選集の各巻内容を紹介する前に、編集委員名で「刊行のことば―人間・西堀榮三郎」が書かれているので、それを再掲載させてもらうことにする。

「世間的には第一次南極地域観測越冬隊長として最も広く知られた西堀榮三郎氏ですが、その活動は登山界・探検界はもちろん品質管理から原子力関連にいたるまで、まことに壮大なひろがりの、かつ先端をきりひらいてきた巨人でした。

しかし、たとえば品質管理と探検といった全くかけはなれたかにみえる分野も、西堀氏の頭や人格のなかでは何の矛盾もなく統一されているばかりか、基本的には同じ根っこから派生し、開花した結果にほかなりません。

それは、ひらたく言えば『石橋をたたけば渡れない』とか『出る杭をのばす』といった西堀流の名言にみられるように、真の意味で

の探検的精神です。植村直己などの冒険家を心から愛し、支援したのも当然でした。

品質管理の世界で、西堀流三現主義といわれたモットーがあります。

①まず現場へ行く、②現物を前にして考える、③現実的な解決――これらは実は探検を実行するときの基本的心得でもありましょう。たとえば③にしても、理想的でなくても今すぐに手をうてる方法を選ばなければ前へ進めないのです。

こうして少年時代から死ぬまで『創意工夫の人生』を歩んだ西堀氏の世界を、すでに西堀氏の著書として刊行されたものを除いて収録しました。探検的精神に乏しい日本社会に示唆するところは大きいと確信します。」

第一巻「人生は探検なり」（西堀榮三郎自伝）は、編集者が自伝の流れをつくるために、各種の資料を整理して、「山そして友との出会い」「自然探究への旅立ち」「山城三〇山跋渉と技術への興味」「自由主義のもとで」「大学生活と登山」「研究と山と」「研究に没頭」「ヒマラヤをめざして」「技術に生きる」「技術の現場にて」「品質管理普及活動」「マナスル登山許可の取りつけ」「実現した南極越冬の夢」「越冬隊前史」「氷の中の一年」「新しい原子炉への情熱」「安全な原子炉をめざして」「原子力船『むつ』の建造」「憧れのヒマラヤへ」「ヤルン・カン遠征隊長」「チョモランマ登山隊総隊長」「技術と大自然」「私をかりたててきたもの」「『技士道』への道」「水平線のかなた」というように、西堀さんの人生が多岐にわたっていることを証明するような見出しで、まとめている。

この中で、西堀さんが商家に生まれ、科学者への道を歩んだもととなった親の話が書かれている（第一巻七頁）。

「私は思うのだが、子どもはみなロマンを追い求める心をもっている。が、普通の親は、そういう火を片っぱしから消して歩いているのではないだろうか。私の父は、それをしなかった。それどころかむしろ積極的に、私のやることを理解しようと努力し、後押ししてくれた。おかげで私は、今になっても『ロマンを追う心』だけは、普通の少年以上にもっていると自負している。

子どもは本来、放っておいても一人で歩くものである。たとえば私は、生キズの絶えることのないほど、よく怪我ばかりしていたが、そのおかげで体に早い回復力と抵抗力ができ、今日の健康を保っているのである。

それだけに、私は、一般の親が、子どものロマンを追う心の火を消して歩くことに、大きな不満を覚える。親の役割は、子どもにとって後押しをしてやるぐらいでちょうどよい。つまり、子どもが無意識にやっていることがあれば、『意識を呼び起こす』手段を教えてやるだけでよいと思う。」

西堀さんが、南極探検を意識したのは、十一歳のとき、白瀬中尉の「南極探検報告会」に行き、南極の映画（活動写真）や白瀬中尉の話を聞いたことが発端であり、少年の夢が実現できたのは運に恵まれている、といえる。

また「私をかりたててきたもの」の中で、「自分の歩んできた道をふり返ってみると、私の探究心をかりたててきた原動力は一体なんだったのだろうかと、今さらながら思う。世のためか、人のため

か、それとも約束や義務、忠誠心といったような社会的な要素が働いたためか。それらもたしかに原動力のひとつだったと言えるだろう。しかし、単なる使命感だけでなく、その根底には生活があった。子どもたちの行く末、隣人たちとの付き合いを含めた、自分の生活を営むというような動機、自分の探究心を満足させたい気持、社会的な要請など、数々の動機が混合されて、私の探究は長続きしてきたのだと思う。

南極、ヒマラヤ、そして未知の原子力の世界へと、私は自分の探究心を満足させることに熱中してきたが、それができ得た背景を考えると、社会から受けた恩恵、特に組織や機関から受けた有形無形の恩恵が非常に大きい。それらの恩に対して、今、私は恩返しをしなくてはと思う。それは生涯をかけてのプロジェトクである。」と書かれているように、西堀さんの人生観がでている言葉であろう。

第二巻、「未知なる山・未知なる極地」には、京都北山から、ヒマラヤ、南極越冬へ、探検的人生のすべてが収録されている。「雪山讃歌」を作詩したころなどの話、編集委員による「西堀榮三郎登山概史」、「スキー論」などや「友を語る」では、植村直己、加藤保男、村井米子などの追悼文などがある。「解説」として「西堀榮三郎における登山と探検」が本多勝一と大内尚樹の両氏によって書かれている。

第三巻「技術の創造力と品質管理」には、西堀さんの技術者としての、発想、行動、品質管理の草分けについて語られた文章がまとめられている。この中でも、チームワークとリーダーシップ、「異質の協力」については遠征などの参考となる考え方であろう。

別巻、「人生にロマンを求めて」は、西堀さんと接触のあった各方面の方々による追悼文を主体として、西堀さんの姿が浮彫りになる文章でまとめられている。

（高遠　宏）

松永敏郎著

『空にただよう峰』

アポロスポーツ　一九九一年刊
B5版五一九ページ、四〇〇〇円

本の題名は優にやさしい。何か幻想的な物語りを想像される方もあろうが、著者の意図するところは逆である。自然の厳しさ、恐ろしさ、それでもなお逃れられない魅力を、そして卑小な人間がどうしても自然である山には勝てないのだという果敢なさを訴えようとしているのではなかろうか。私の推測はこの本の後半にあるヘイズ南峰南稜の登攀記録を読めば納得して頂けるだろう。以下私ごとを含めて少し戦後の日本山岳会のことにふれ

たい。一九五〇年頃から一九七〇年頃まで、山岳会は若い登山者の育成に力を尽くした時期があった。学生登山界を中心として海外登山の推進と国内の登山者層の充実に努めたのである。私はそんな雰囲気の中で育った一人であるが、松永さんはその時代後半からの友人である。一九六〇年代に入ると私は身すぎ世すぎの勤め人になり下って、時々講習会のお手伝いにお茶を濁す程度であったが、何時も真面目なリーダーとしてヘッポコ連中に綱のさばき方や確保の仕方なんかを教えておられたのを覚えている。

その後私は東京を離れていわゆる登山界とは縁が薄くなっていったが、山登りの仕方も随分変わった。チーム、集団の力に頼る登山よりも個人の力を表に出す登山、ヒマラヤも極地法的、包囲的な登り方から少数精鋭のアルパインスタイルの時代になり、日本山岳会の権威も薄れてしまった。その中で一人黙々と自分なりの登山に精進された成果として刊行されたこの本を見る時、昔の仲間としては無条件で拍手喝采を送りたい思いである。巻末の初出一覧を見ても分る通り記述の大半は一九六〇年代後半から一九八〇年代までで、人間として円熟した時期に登山の変遷を見つめながら積み重ねた体験と関わった事件を踏まえた論説、研究的な試論、紀行、短歌からなっている。順を追って内容を簡単に紹介しよう。

「季節へのいざない」…夏秋冬に分けた文章に初心者が山へ入った時の心構え、準備や行動、リーダーとの関係などが巧みに説明されている。

「新しい展開のために」…戦後の装備の歴史、露営、確保論、危急時対策について豊富な経験と調査研究、提案がなされている。

「二つの事件の教訓」…あまり例のない富士山頂での肺水腫による死亡事故、雪崩による遭難及び事後処理など、著者の後輩の人たちの関わった痛ましい事件についての検討論説で、前章とこの部分が本書の中では重要な位置を占めている。ここまでの論説の中で若干気になる個所があった。決して本来の価値を損なう程のものではないが友達甲斐にのべさせて頂きたい。六五ページ、通気性防水布に風を伴った雨が吹きつけて、水が浸みこみ易い現象をのべているが、ここに使われた浸透圧という言葉は既に化学用語として定義が確立している（半透膜を介して溶液と溶媒が接した場合、溶媒粒子の溶液への移動を規定する用語）。従って意図は分かるがこの場合は不適当ではないかと思われる。二〇四ページ、肺水腫の原因に対する考察として、悪天候に際して起こった急激な相対湿度の増大に着目して、「富士山においても寒冷の空気中に多量の水分を貯留することは当然大気中の酸素分圧の低下を生じ肺胞内に取り入れられる酸素量に著しい減少を招く危険があったと考えるのは大きな誤りになるであろうか」、又この相対湿度の上昇を水分の増大に結びつけることについは二一〇ページに低温度下での六〇数パーセントの数値は「専門家に聴いたところ、やはり特に高い数値とは言えないと教えられた」と記されており特に相対湿度の上昇のみに固執している訳ではなさそうだが、議論としてはもう少し明解にしてもらいたいところである。相対湿度はH＝水蒸気圧／当該温度の飽和水蒸気圧×100(%)で示されるが低温の飽和水蒸気圧は著しく低下するのが常識である。たとえば表1に示す通りである。従って氷点下二〇度前後の飽和水蒸気圧は一㎜Hg程度であり、関係湿度が上昇しても水蒸

表1　気温と飽和蒸気圧との関係

温度　℃	−14	−10	−5	0	5	10	15	20	30
飽和蒸気圧　mmHg	1,361	1,950	3,013	4,579	6,542	9,208	12,788	17,536	31,827

改訂3版化学便覧基礎編Ⅱ　表8−13，表8−14より抜粋

気量が著しく増大するとは云えないのではないか。一九九二年理科年表・気84（274）富士山頂気候表から一～三月の蒸気圧と相対湿度を引用すると表2の通りで、この状況が分かる筈である。いわゆる高温多湿はあるが低温多湿は考えにくいのではないかと思う。しかし山頂の内院において強風と濃霧が存在したことは事実であり、その霧をどんな風に考えたらよいのか、ここにも問題がありそうである。温度から見て水滴とは考えにくいから水蒸気が直接昇華した氷の微粒子なのだろうが、空気と氷の微粒子が混在して若干相対湿度が上がったとしても氷の微粒子と酸素窒素の分子との相関関係が分からなければ酸素分圧の低下に結びつける訳にはいかない。むしろ氷の微粒子の混在した空気が肺にどのような刺激を与えるのであろうか、天幕の中までこのような外部の状況が影響するのであろうか、気になる点が色々ある。極めて興味があり重要な現象に関する問題提起と考えられるのでもう少し正確慎重に議論を進めて頂きたいと願うのである。

表2

月	1	2	3
蒸気圧 mb	0.9	1.0	1.3
相対湿度%	51	55	59

後半は「風と霧の匂いを愛す」…著者の心に刻まれた登攀と山行を誰に遠慮気がねもなく思いのままに記された十二編はまさにこの本の白眉とも云える。

最後の章…「蒼天飛雲」（短歌）については国学院の御出身であるから釋迢空、折口信夫大先生の流れに連らなる方かとも想像するが私には歯が立たない。ただ冒頭の歌

「見はるかす針の木岳の真穂高（まほだか）み
　　富士空にあり浮くが如くに」

ここにも「空にただよう峰」が出てくるのが印象に残った。ヘイズ南峰とは別の意味ではあるが著者の山に対する憧憬の思いが窺えるのである。ともかく、幅広い視野を持つこの本はすぐに役に立つというハウ・ツー物ではないが、山登りについてもう一度考えを新たにするという意味で貴重な本である。最近急増したと聞く中高年の登山愛好家の方々に是非読んで頂きたい本の一つと考えている。

（村木潤次郎）

『日本旅行日記』

アーネスト・サトウ著　庄田元男訳

平凡社（東洋文庫）全二巻一九九二年一月、六月刊

新書判　三一六ページ（二七八一円）、三三四ページ（二八八四円）

十九世紀半ばから二十世紀初めにかけての日本における外国人の

活動に対する関心がこの十年間に大きな高まりを見せた。多くの翻訳が発表された。古書目録でも対外交渉史が一分野として扱われるようになった。これはたぶん比較文明論の立場から日本を知ろうとしている現われであろう。アーネスト・サトウの業績や著作についての研究が最近なされるようになったのも、そのような流れの一つである。サトウの日記を資料として萩原延寿氏が『遠い崖・サトウ日記抄』を書き、長岡祥三氏が『アーネスト・サトウ公使日記』を訳し、庄田元男氏が『日本旅行日記』を訳したがこれはサトウの日記が新資料だったからであろう。

萩原氏はサトウの日記を全般的に扱い、長岡氏は外交官としての公式な活動を明らかにするものとして扱い、庄田氏は登山、旅行の領域で扱っているのが特徴であるが、テーマはやはり日本とヨーロッパあるいはイギリスということである。このテーマは何も日本だけが扱っているわけではなく、英国でも一九九一年に日本協会創立百年を記念して Britain and Japan 1859-1991 Themes and Personalities という研究論文集が発行されている。

さて、紹介書に戻ろう。サトウは中国・日本に向かうべく英国を出発した一八六一年の十八歳の時から八十六歳で死亡する二年ほど前まで日記を書きつづけ、厖大な日記を残し、それが英国国立公文書館に所蔵されている。そのコピーが横浜開港資料館にあり、訳者はそれを利用して、この『日本旅行日記』を編集翻訳したのであるが、筆者自身も他の人の日記や手紙のコピーを見る機会があるが、日記そのものが判読が困難なのに、そのコピーとなると更に読みにくくなる。訳者の苦労が察しられる。

訳者は厖大な日記の中から、旅行と登山に関する部分をえらんで訳出し、十九章に分けて発表したのが、『日本旅行日記』二巻である。第一巻が主として登山を扱い、第二巻が旅行を扱ったといってよいが、明確には分けられない。登山史の上からは第一巻の針ノ木峠（一八七八年）、八ヶ岳連峰の赤岳試登（一八八〇年と一八八一年）、農鳥・間ノ岳登頂（一八八一年）などが重要である。サトウの登山活動については訳者がすでに『異人たちの日本アルプス』（一九九〇年）の中で紹介しているが、それまではほとんど知られていなかった事である。山崎安治氏の『日本登山史』（一九八六年）でも安川茂雄氏の『近代日本登山史』（一九七六年）でも、針ノ木峠越えを記録しているにすぎない。従って、訳者がサトウの登山事蹟を初めて日本に紹介したといっていいだろう。

また、山旅の面から見ても、驚くべきほど日本の山地を歩き廻っている。第一巻では、道志、大菩薩峠、御獄、志賀坂峠、戸隠、飯縄山、金峰山など、第二巻では、古峰原、石裂山、戦場ヶ原、浅間山、日光白根山、庚申山、女峰山、富士山、丹沢、雁坂峠、赤城山などが扱われている。一八七〇年代から一八八〇年代にかけてこれほど日本の山を歩いた外国人は他にはいない。ガウランドやミルンやラインなどの名が知られていたのに、サトウの名が登山史にほとんど出てこなかったのがふしぎなくらいだ。たぶん、これはサトウがホーズとともにまとめた『中央部・北部日本旅行案内』の中で、協力してもらった人びとの名を挙げているが、自分の名を情報提供者として挙げるわけにいかなったせいであろう。今から考えると当然なことだが、『中央部・北部日本旅行案内』の記述の大部分はサ

トウ自身が足で確かめた情報によるものだったのである。

登山史をはなれても、サトウの記述は詳細であり、広範囲である。好奇心が旺盛で、何でも見てやろうとあらゆる事象に鋭い観察眼を向けている。サトウの目を通して読者は百年以上前の日本を思いやることができる。その点でも、この訳書の発行はありがたい。

前にも述べたように訳者の苦労はたいへんなものであったろう。特に、神道や仏教関係の言葉の翻訳は、多くの参照文献の調査が必要だったであろうし、地理的記述を現在の地図と照合しながら訳さねばならない苦心など察するに余りある。そして、厖大な訳注は訳者の研究熱心さを示している。更に、関係の図版を古い文献からえらんで挿入しているが、これなども見る方は楽しいが、えらんだ訳者の苦労はたいへんなのである。

そういう訳者の苦労を知りながら、読んで気になるのは、文意がわかりにくい個所があちこちで見られることである。訳者も編集担当者もうっかりされたのであろうが、日本語として意味が通じるようになっていないと文章というものは読みにくいものだ。折角の訳者の苦労がこれらの不明瞭な個所によってそのまま読者に伝わらない。よく注意すれば防げたであろう内容だけに残念である。

そういう点はありながらも、登山史研究者ばかりでなく、明治初期の日本の姿を知ろうとする者にとってはたいへん有用な文献である。

（水野　勉）

J・C・アショフ編、ドイツ語だけの文献目録――『チベット・ネパール・ヒマラヤ文化圏』

文献目録の類は、しかるべき図書館、研究機関などが編集し、作成、公刊するのが一般的であろう。労力、時間、情報網、そして最後は刊行の費用（採算性）が問題となるからである。しかし、たまには有徳の士が編纂する場合もある。ここに紹介する目録はその最たるものといえようか。

編者のユルゲン・アショフ博士は現在、ドイツのウルム大学の副学長で、専門は神経学と精神病学の医学者。ベルリンに一九三八年に生まれた。私信によれば、一九七四年から毎年のようにヒマラヤ地域に出かけているけれど、いわゆる登山家ではなく、旅好きの、トレッカーとしてのものである。写真もよくし、すでにヒマラヤに関する本（"Inner wieder Himalaya", 1985）と、西チベットのグゲ王国の古都ツァパランについての二書（"Tsaparang : Tibet grosses Geheimnis", 1987 と "Tsaparang : Königsstadt in West-tibet", 1989）を公刊している。

そして今回は病が嵩じ、とうとう文献目録の作成にまで至ったという。それでも彼は飽き足らず、ファブリ出版（Fabri Verlag）という出版社を作り、一九八九年のギオルギの『チベット入門』（Alphabetum Tibetanum）のドイツ語訳（一七六八年）の復刻を

手はじめに、チベット関係の本を出しはじめた。ヒマラヤ、チベットへのその傾倒振りは、尋常のものではないようである。こうなると、本職の方はどうなっているのかと、他人事ながら、いささか気にもなってくる。

さて、本目録は総ページ四七七頁の堂々たる大冊である。古くは一六二七年のアントニオ・アンドラーデの、グゲ王国での伝道報告から、一九九〇年までの最新の、ドイツ語で書かれた単行本、雑誌論文、報告書など、総計二一三一点が収録され、それらは著作者のアルファベット順に並べられている。そのすべてにドイツ語で解説がつけられており、英語や仏語などからの翻訳書の場合には、その解説文の冒頭に原著名などが掲げられている。巻末には時代別（一八〇〇年以前と一九世紀）、地域別（西チベットと西部ヒマラヤ、ネパール、シッキムとブータン）、分野別（地理・地質、動植物、旅行、写真集など）の索引がつく。これは一見便利そうだが、自分には最初から順に目を通すことのほうが楽しかった。

文献目録は古書目録と違って、書影もなく、ただ文字の羅列だから、退屈至極なものである。長年の探究書が見つかれば、目も輝くのだが…。しかし、ここで私が楽しかったというのは、自分の目録（白水社、一九八四年）で不十分だったドイツ語関係のものが、これによってほとんど充足されることになったからである。

そしてすぐに気付いたのは、純然たる登山の報告がほとんどないことであった。一世を風靡したヒマラヤの大登山家パウル・バウアーのものがひとつも入っていないし、ヒマラヤニストの大家G・O・ディーレンフルトのものは『バルトロ』（Baltoro：Ein Himalaya-Buch, 1939）だけ。また、戦後のドイツのヒマラヤ遠征の領袖K・M・ヘルリヒコッファーはひとつもなく、時代の寵児だったR・メスナーは、エベレストの単独登頂記など、三点しか入っていない。

他方、私には関心のうすい、チベット仏教に関する宗教書、教理書が数多く収録され、また、シュラーギントワイト三兄弟の著作は『インド及び高地アジアの旅』（"Reisen in Indien und Hochasien", 4 Bde., 1869-1880）をはじめとして、三〇点も網羅されている。

このような、登山に対する冷遇などに不満を並べ、嘆いてみても、これが編者アショフ博士の姿勢、方針であれば、他からとやかくいう筋のものでもない。これもひとつの行き方だと思う。第一、自分自身がそうであるからだ。私はアショフ博士を土台にして、さらに自分のものを作りあげるだけである。それが日の目を見るのは、九四年の春になろう。

ともあれ、専門外の道楽ごととして、これほどのものを単独で編集し、公刊できたことに拍手を送り、心から敬意を表したい。そして、学術調査、研究者にはもとよりのこと、奥行きの深い登山を展開しようと考えるものには、必携の手引書、基本的な目録となる。

Jürgen C. Aschoff ; Tibet, Nepal und der Kulturraum des Himalaya (mit Ladakh, Sikkim und Bhutan). Dietikon, Swiss, Garuda-verlag, 1992. 23.6×16.3, 477p. (SFr. 220/DM 245)

（薬師義美）

会報『山』図書紹介一覧―一九九一年度―

●四月号（五五一号）

神戸山岳会編『神戸山岳会会報』創立五十周年記念号（神戸山岳会）

京都大学ヒマラヤ研究会編『ヒマラヤ学誌』第一号（京都大学ヒマラヤ研究会）

●五月号（五五二号）

林正敏著『鳥学を支えた岳人』（信濃毎日新聞社）

山下喜一郎著『北アルプスのこなし方』（森林書房）

佐瀬稔著『ヒマラヤを駆け抜けた男　山田昇の青春譜』（東京新聞出版局）

小倉董子著『山歩き讃歌　人と自然に魅せられて』（共同通信社）

坂倉登喜子・小川清美共著『関東周辺　山と地酒の旅』（新潮社）

貝塚爽平著『富士山はなぜそこにあるのか』（丸善）

酒井昭市著『飛騨の山々　ヤブ山編』（ナカニシヤ出版）

●六月号（五五三号）

日本山岳会東九州支部編『登山ガイド・大分百山』（日本山岳会東九州支部）

日本山岳会三水会創立十五周年記念誌編集委員会編『三水会十五年の歩み』（日本山岳会三水会）

布川欣一著『山道具が語る日本登山史』（山と渓谷社）

福田由利子編『女子登攀クラブの二十年　一九六九～一九九〇』（女子登攀クラブ）

毎日新聞社前橋支局編『尾瀬　その風の中に』（あさを社）

京都山岳会実行委員会編『京都山岳（創立七十周年記念号）』

藤本一美著『山岳ノート』（私家版）

スコット著『スコット南極探検日誌』（ドルフインプレス）

京都山岳会新青峰登山隊編『崑崙の秘峰　新青峰』

●八月号（五五五号）

奥田博・伊藤繁著『東北スキー一〇〇コース』（山と渓谷社）

筑木力著『山と自然と人間を愛して』（ほおずき書籍）

横浜山岳会編『創立六十周年記念誌』（横浜山岳会）

西川一三著『秘境西域八年の潜行』（中央公論社）

佐藤芝明著『山と神と民俗と信仰　丹沢・桂川・足柄』（丸の内出版）

田中三郎著『六十歳からの日本三百名山』（東京新聞出版局）

●九月号（五五六号）

風見武秀著『カメラ片手に地球を駆ける』（山と渓谷社）

上村幹雄著『片雲往来ＰＡＲＴⅢ［第二部］語らいの山々』（私家版）

一九九〇年南極大陸横断国際探検隊日本事務局刊『南極大陸横断国際探検隊』

●十月号（五五七号）

広島三郎著『山が楽しくなる地形と地学』（山と渓谷社）

国土地理院刊『日本の山岳標高―一〇〇三山―』

●十一月号（五五八号）

Ｊ・シンプソン著『死のクレバス　アンデス氷壁の遭難』（岩波書店）

富山県自然保護協会、日本山岳会富山支部『ブータン王国自然調査団報告』（非売品）

日本ヒマラヤ協会刊『中国登山の手引』
日本山岳会東海支部編『名古屋からの山なみ—東山スカイタワー基点—』（日本山岳会東海支部）
山里寿男著『すぐに役立つ「山の絵の描き方」スケッチから油絵まで』（東京新聞出版局）
牧潤一著『初心者の為の「淡彩・山の描き方」』（日貿出版社）

●十二月号（五五九号）

VIRGINIA SEISER and ROBET LOCKERBY 著 "Mountainerring and Mountain Club Serials：a Guide to English Language Titles"
ジャン＝ルイ・エチエンヌ著『南極大陸横断—国際チーム二一九日間の記録—』（早川書房）
『西堀榮三郎選集』全三巻・別巻（悠々社）
小野有五・大森弘一郎『神々のみた氷河期への旅』（丸善）
下関山岳会編『稜線』六十年史（非売品）

●一月号（五六〇号）

「東海支部報」No1～No45覆刻合本（日本山岳会東海支部）
ASCENT-the Mountaineering Experience in world and imageedited

二月号（五六一号）

日本ヒマラヤ協会監修『ヒマラヤへの挑戦』1～3（アテネ書房）
とよた・時著『いらすと　丹沢・山ものがたり』（山と渓谷社）
山本朋三郎著『南アルプス—山の歴史—』（非売品）
PEAKS AND PASSES OF THE GARHWAL HIMALAYA

●三月号（五六二号）

串田孫一・田中清光編『山の詩集』（築摩書房）
藤田健次郎著『ひとり歩きの金剛山』（山と渓谷社）
静岡の百山研究会編『静岡の百山』（明文出版社）

追悼

早川種三氏（一八九七～一九九一）

昨年（一九九一年）十一月に早川さんが亡くなった。誠に残念とも何とも云うべき言葉を知らない。心から哀悼の意を表すると共に多年の御厚配に対し深く感謝申し上げる次第である。

私は早川種さんとは一九二三（大正十二）年三月五色温泉でのスキー合宿で一緒になってから親しくして頂き、七十年にわたる山によって結ばれた永い交友である。思い巡らせばそれからそれへと数々の想い出が走馬燈のように脳裡に浮ぶ。

早川さんが山岳部に入ったのは割合に遅く一九二〇（大正九）年のことで、初めての山は江木盛雄リーダーで登った五月の雲取山である。そして一度山の味を覚えるとまるで憑かれたように山に熱中していった。早川さんには型破りの自伝『私の履歴書　青春八十年』（日本経済新聞社一九八一年四月発行）があり、その中に「山に憑かれて」と云う一文がある。その中から一部書き抜いて見よう。

「登山はスポーツといっても負けることは死を意味する。それだけに真剣になる。真剣になればなるほど山の怖さと美しさがわかり、惹き込まれていく。私は学業にはさっぱり身を入れなかったが、山については『命』がかかっているので、仲間と一緒に熱心に研究した」「しかしいくら知識があっても、危険を避けるには細心の注意と的確な判断力、そして勇敢な決断が必要だ」「私は体だけでなく、精神も山できたえられた。さらに貴重なことは山ですばらしい友を得たことである」「国内の山では信州だけでなく北海道、東北の山にも登った。だがいちばんよくいったのはやはり北アルプス、それも穂高である。私はいろんな山に登るより季節を変えて一つの山にいくのが好きだ。春、夏、秋、冬、季節によって山はまるで表情を変える。その刻々、時々に変化する自然はすばらしく、それにふれるのが楽しい。こうしてすっかり山のとりことなり、ひどい時は一年のうち二百八十日間ぐらい山にこもっていた」

登高行の年報を見ても早川さんはよく穂高に行っている。涸沢の岩小舎がお気に入りで何回も入っている。登高行五年の岩小舎についての三田さんや大島さんの名文はいずれも早川さんと一緒の時のことである。また積雪期初の槍・穂高にも槙さんや大島さんたちと登っている。正に早川さんは部が積雪期登山や岩登りを本格的に始めた頃の主役の一人であった。そして一九二五（大正十四）年のアルバータ遠征には選ばれて隊員の一人となった。この時ベースキャンプから私たち若い後輩宛に手紙を貰ったが、種さんの全く気取らない、おおらかな人柄が偲ばれるので登高行にものっているが再録してみる。

「出発前色々御世話になりました。御蔭様でアルバータも登る事を得ました。カッパ（渡辺三郎）宛の手紙を三、四通出しておいたから見て呉れないか、それに色々な事を書いておいた。豊辺宛にと

デン公（斉藤長寿郎）宛に写真も四、五枚づつ送っておいたから見に行け。こまかい事はヘルマキの新聞への通信を御覧のことと思うから己公は書かない。只己公はヘルマキや其他の人々のお蔭でやっとアルバータやウーレーに登った事だけ書く。例によって己公の登り方はすこぶる乱暴だ。併し身体が大きいから時々役に立つこともある。明日スタットフィールドに行く予定、この山は全山氷で南（即ちコロンビアアイスフィールド）の方から来れば簡単に登れそうだが北側は全部崖とハンギンググレッチャーで、明日の登路はこれを登る予定。己公はアイステクニックをよく知らないからモロキンだ。己公達が連れているガイド三人の中、ヘッドガイドのフーラーと云うのは四十五歳で、ゼネラルブルースとチベットにも行った事があり、フィンチなんかともずい分歩いている者だ。そしてアマターとフィンスターラホーンの東尾根のファーストアッセントをやったレコードを持っている者で、流石全てがあざやかなもんだ。己公は一生懸命アイステクニックを習っている。ザイルの用い方、ステップの切り方を教わっている。少し覚えたがクレバスやセラックの猛烈なのに会うと未だ自信はない。併しスタットフィールドに行く時は全部氷河だから其時確信の出るまで一生懸命覚えるつもり。一人一人手紙を出さないから部員連中によろしく。無事元気で頑張ってると御伝言下さい。

七月三十一日ベースキャンプにて　種三。」

私は一九二四年の夏、剱、薬師、笠をとおって上高地に入り、清水屋の小舎で種さんや豊辺さん達と一緒になった事がある。五、六日岩魚釣り等をして楽しく過ごしたが、その或る日、涸沢の岩小舎へ連れてってやると云われて出掛けたが、前穂の稜線近くで猛烈な雷雨にやられ、ピッケルを遠くに置いて岩蔭にひそんでいたがなかなか止みそうもないので引き返した事を思い出す。スキーでは五色や関で何回か一緒に滑ったが種さんのスキーは強引でなかなか上手だった。ルームでの種さんはいつも気易く付き合って呉れて全く気のおけない頼もしい先輩であった。そして当時既に後年の大成を予感させるようなスケールの大きな独特の風格を感じとったのは私ばかりではあるまい。後日紀屋が出来た当初は種さんはじめヘルマキ（槙　有恒）、大先（田村静一）、久ちゃん（佐藤久一朗）等先輩達が揃っていたので、まるで登高会のルームみたいな感じで何かあるとよく訪ねたものである。

最後にお会いしたのは昨年の春、守屋君と慶應病院にお訪ねした時である。その時青木君から預かった一九二九（昭和四）年二月早川さんが槙さんたちと富士山へ行った時の写真を持っていったが大変喜んで頂いた。若き日の山を想い出されたのであろう。感慨深げな様子であった。ご冥福をお祈りして筆を擱く。

（内田勇三＝登高会会員）

略　歴

一八九七（明治三十）年六月六日　現仙台市において早川智寛の三男として出生

一九一五（大正四）年四月　慶応義塾大学理財科予科入学

一九二〇（大正九）年五月　慶応山岳会（現山岳部）入会

一九二二（大正十一）年三月より槍ヶ岳、立山、白馬岳、穂高岳な

どでのスキー登山を行う
一九二五（大正十四）年三月慶応義塾大学理財科卒業、日本山岳会入会（会員番号九二三）
一九二五（大正十四）年六月～七月　アルバータ遠征隊参加、初登頂
一九三〇（昭和五）年　東京建鉄（現日本建鉄）入社
一九五三（昭和二十八）年以降　日本山岳会のマナスル遠征をはじめ数多くの海外遠征の裏方として財政面で多大の貢献をする。また植村直己の探検も支援
一九六二（昭和三十七）年　慶応義塾評議員
一九六四（昭和三十九）年以降　日本特殊鋼をはじめ佐藤造機、興人など数多くの会社再建に手腕を振るう
一九六七（昭和四十二）年八月　連合三田会副会長
一九七一（昭和四十六）年十一月　勲二等瑞宝章受賞
一九七三（昭和四十八）年　日本山岳会名誉会員
一九七六（昭和五十一）年　三田体育会会長
一九八四（昭和五十九）年　慶応義塾評議員会議長
一九九一（平成三）年十一月十日　呼吸不全のため東京において死去、享年九十四歳

（山田二郎）

国分勘兵衛氏（一九〇七～一九九一）

早川さんに続いて国分君が亡くなったのは一月遅れて一九九一（平成三）年の十二月であった。全く思いもかけぬ訃報で唯々驚くばかりである。先日守屋君が国貫は我々にとっては空気みたいなものだねと云っていたが正にその通りで、もう会えないと思うと何ともやりきれない想いで一杯である。いつでも何処でも彼と一緒にいると何かホッとする感じで、全く気のおけない大切な仲間を失った淋しさをしみじみ痛感する昨今である。

国貫（普通部時代の愛称で私たちもいつも親しみを込めてこう呼んでいた）と山岳部で初めて会ったのは関温泉のスキー合宿で一九二二（大正十一）年三月のことである。そして最後に会ったのも同じ関温泉の朝日屋で、昨年五月彼が珍しく参加した登高会有志の旅の時で何か宿縁を感じる。笹ヶ峰牧場から廻って来て、関見峠の展望台のような処でお互いに何十年振りかの関温泉を眺めながらあれこれ話し合ったことが昨日のことのように思い出される。その後私は少々体調を崩し会うことがなかったが見舞いの電話を貰ったのが彼の声の聞き納めとなった。

国貫は一九二二（大正十一）年普通部二年の時から部に入ったので部員生活は随分長い。三月の関温泉スキー合宿から始まり、初めての山はその七月田中三晴リーダーで浜口たちと燕、常念、槍に登

り、上高地では清水屋の小舎に数日滞在、その間前穂高に登っている。以後一九三〇（昭和五）年に卒業する迄毎年南北アルプスから東北の山々まで幅ひろく歩いている。積雪期の山は一九二五（大正十四）年三月斉藤たちと登った槍、南岳、西穂高が最初で、一九二六年三月には私も一緒で奥穂高、北穂高に登った。一九二七（昭和二）年三月には東北朝日岳に浜口たちと行き、大朝日から鳥原山まで登っている。一九二八年一月北岳、間ノ岳、農鳥岳、三月赤石岳、悪沢岳、聖岳、一九二九年一月塩見岳と当時の部としてはいずれも積雪期初めての登頂に成功した。そしてその詳細を登高行七年に「積雪期に於ける南アルプス登山」として報告している。同年三月は立山、剱へ登り、三〇年一月には小太郎尾根から北岳を狙ったがこの時不幸にして竹馬の友であり、最も信頼した山の仲間でもあった野村実君を板状雪崩のため失った。無念とも何とも云いようもない想いであったろう。察するに余りある。

一九三〇（昭和五）年三月卒業すると直ぐ翌年の一月にかけて欧州各国からアメリカを一廻りして来た。その間七月から九月にかけてスイスに遊び、グロースシュレックホルン、エンゲルヘルナー、マッターホルン、ワイスホルン、モンブラン等を登って来た。松方さんの紹介で槙さん所縁（ゆかり）のブラバントを連れてアルプスの氷雪と岩を存分に楽しんで来た。この時の「アルプス紀行」は登高行八年にのっている。

国貫は本当に友達づきあいのいい男で、特に山の仲間、学校の仲間の集まりには多忙の中をよく都合をつけて出ていた。我々同世代の山仲間十数人で卒業後も疎遠にならないようにと毎月の様に集って会食していたが、国貫の出席率は抜群で彼の長い応召中も軍務の合間を見てはよく出てきてくれた。一九四二（昭和十七）年六月のことだが山仲間数名で箱根のいつもの仲間の宿へ集ったことがあった。この時のことを斉貞こと斉藤貞一君が大体次のように書き残している。

「七時過ぎにやっと俵石閣に到着する。それから一服して風呂に入ろうとすると国分さん（当時中尉で応召中）に東京から電話だと云う。何事かと皆一寸驚く。被服本廠から公用だと云うので国分兄は東京へ急報で電話を申込む。その返事によると明後日までに広島へ行き、それから中支まで荷物の宰領に行けとの命令である。今日の昼までそんな話がないのに急にやって来るのだから軍隊は大変である。つまり明日出発して三週間ばかり内地と別れるわけで夕食は国分兄の送別会となった。食後いろいろ話がはずんだが中でも国分兄の小鳥の鳴声を聞く趣味は意外だった。翌朝国分兄が小鳥の声を聞くため四時半頃床を出て行くのを見て成程本物だと思った。六時五十五分の通勤バスで東京へ帰る国分兄を皆で宿の門前まで見送る。元気で恙なく大任をはたして帰られんこと祈る。」

国貫の思い出はそれからそれへと脳裡に浮かんできてきりがない。最近と云ってももう十数年前になるが、国貫の主唱で登高会ヒマラヤ遠足と称してネパールへ出掛け、二週間程起居を共にした時のことは最も楽しい思い出の一つである。お蔭で西はダウラギリから東はカンチまでネパールヒマラヤの高峰を総て目近かに眺めることが出来て、国貫が会報に書いている通り「念願をはたした」喜びは忘れることが出来ない。この旅へ出掛ける前、足馴らしに少しで

も高い処へと思って国分夫妻、守屋と四人で富士の七合目の上まで登ったことがあった。快晴で八合目以上は新雪に輝き、麓の紅葉も見事だった。この時のことがネパールの旅と二重写しで思い出される。

国分君が登高会の幹事長を引き受けてくれたのは一九七一（昭和四十六）年のことで、早川さんが佐藤造機再建の仕事で山陰の方へ出掛けることが多くなった為その後を頼まれたのであった。以来二十年の長い間会の為に一方ならぬ御盡力を頂き誠に感謝に堪えぬ次第である。心から本当に御苦労様でしたと申し上げたい。

（内田勇三＝登高会会員）

略　歴

一九〇七（明治四十）年七月十五日　東京都港区高輪にて出生
一九二〇（大正九）年四月　慶応義塾普通部入学、普通部時代より慶応山岳部に属し、夏には燕岳、槍ヶ岳、剱岳などに登り、冬には関温泉、五色温泉でのスキー講習に参加。
一九二四（大正十三）年四月　慶応義塾大学経済学部予科入学、大学時代を通じ南北アルプスはもちろん東北、中部地方の山々を幅広く登る。特に南アルプスの山々を愛し、夏冬を問わず数多くの記録を残す
一九二八（昭和三）年四月　山岳部幹事となる
一九三〇（昭和五）年三月　慶応義塾大学経済学部卒業、合名会社国分商店入社
一九三〇（昭和五）年七月～九月　海外遊学の傍らマッターホルンをはじめかずかの峰を踏破
一九三一（昭和六）年十月　日本山岳会入会（会員番号一三三八）
一九六八（昭和四十三）年十月藍綬褒章受章
一九七一（昭和四十六）年十二月　登高会幹事長
一九七六（昭和五十一）年十月　慶応山岳部創立六十年記念ネパール遠足に参加
一九七七（昭和五十二）年十一月　勲三等瑞宝賞受章
一九八一（昭和五十六）年十二月　日本山岳会永年会員
一九九一（平成三）年十二月十三日　心不全のため死去、享年八十四歳

（山田二郎）

早川種三、国分勘兵衛両氏の追悼文に就いて

両氏の所属する登高会の一員としての小生に山岳編集担当理事より然るべき執筆者選択に就いて依頼がありました。早川さんは当会の名誉会員であり、国分さんも永年会員として、夫々山岳会に多大の貢献をされた方ではありますが、何分ご高齢でもあり、また現存する会員の方で特別にご昵懇の方も思い当たらぬまま、登高会会員として両氏とは殊に親しかった登高会幹事の内田勇三氏が登高会会報宛に執筆されたものを、同氏のご了解を得て掲載させて頂いた。

早川、国分両氏共、実業界でのご活動が余りにお忙しかったこともあって、山岳会の役職等で実務に携わったことは殆ど無かっ

たが、当会のマナスル遠征以来、或いは資金面で、或いは遠征隊の食料調達などでは、数知れぬ登山隊がお世話になったし、会員の中には個人的にも何かとご指導に預った方々も数多いことと思われる。

両氏の追悼文転載に就き快くご承諾賜った内田勇三氏に心よりお礼申し上げると共に、早川、国分両先輩のご冥福をお祈り申し上げ度い。

（山田二郎）

谷口　現吉氏（一九一〇～一九九二）

一月二十一日谷口現吉君が急逝した。山田二郎君から第一報で危篤、第二報で遂に、とのことであったが私は信じられず、一日中ぼさっとしていたようだ。と言うのは前夜九時頃大して用もないのに、大町の彼の家に電話し、彼の生の声を聞いたばかりだったからだ。「風邪ひいてねてる。これでおれも人並になったよ」「なに言っているんだ。早く寝ろよ。じゃ、また」が最後の会話で、奥様も聞いておられたはず。そして十数時間後にはこの知らせだったから驚きなんてものではなかった。

思えば谷口君と私は単なる山仲間以上だった。私の最高の山登りはいつも彼が一緒だったし、谷口君も力いっぱいの山はいつも一緒だったと五十年たっても六十年たってもまだそんなこと言い合って懐しんでいたからだ。実際二人だけの山でも、三月の剱八ッ峰、夏の北海道、秋の穂高、二月の八ヶ岳縦走などあるし、他に誰か加わって三人とか四人の厳しい登山もかなり多い（『登高行』九号参照）。

谷口君が山に燃えていたその頃、三田幸夫先輩の「冬のロータンパスとクル渓谷」が『登高行』八号に載ったが、その通信欄に一九三〇年八月インドの三田さんから山岳部宛の長文のすごくエキサイティングな手紙があった。即ち「……日本の山でも充分な準備をして天幕を上へ進め……一万尺付近の雪中露営を数日間続けたならば恐らく驚くべき新しい経験と知識を得られるでしょう。別山乗越、一ノ越、五色ヶ原、槍の鎌尾根、穂高主峰間の鞍部等皆面白いと思われる……』と言うのだ。更にこの手紙にはヒマラヤの事情から外国の登山隊のことなどまで書いてあり、その頃内地の山に行き詰まりを感じていた私たちには強烈な教示であり、以後谷口君と私は更に親密に結ばれ山へ精進して行った。この手紙が彼をして開眼せしめたと告白している。

特にヒマラヤを想定しての一九三三（昭和八）年三月の剱平蔵谷頭、長次郎谷頭の雪中露営（七名、二十八日間）から八ッ峰、源次郎尾根、小窓、早月等の剱岳周辺の踏破や十二月の槍ヶ岳、大喰岳雪中露営（七名、二十一日間）から北鎌尾根二九〇七㍍独標点往復など谷口君と私のコンビで計画された。そして槍の穂先きにもっと高くて険しい北鎌ピークでも聳えていればいいのにと語り合った。この時は穂高縦走こそ出来なかったが、三〇〇〇㍍の雪稜上に七日間もテントを張り続けたことは貴重な体験であった。

ここで私は卒業。谷口・小森宮章正のコンビで春は北穂高露営、

冬は奥穂高頂上直下涸沢側になんとかテントを張り、テント設営の場所に自信をつけた。そしてそこで風と寒気と戦いながら四泊し、これで雪中露営も一段落を告げた。その間雪洞研究も重ね、愈々本番のヒマラヤだったのに時局悪化、谷口君は入隊、応召を重ね、満州黒竜江へと飛んで行った。

ここで彼に関するトピックスを紹介したい。一九三二（昭和七）年三月、剱八ッ峰の初登攀を目指した時、同じ目的の他の大学パーティーと別山乗越小屋で一緒になった。それから六日間風雪が続き両パーティーとも停滞、七日目に漸く晴れ上がった。そして他の大学のパーティーは早速飛び出して行ったが、初登攀を目指してやって来ていながら剱沢や長次郎谷の雪崩を考慮「荒天数日の後だ。尾根以外は歩けぬ日である。はやる心を抑えて雄山を往復」した。と『登高行』九号記録三七頁にあるのを見て、山崎安治氏が山日記の雪崩の項でこの行動を絶讃している。もっとも幸運にもその翌日八ッ峰の五峰から八峰までの初登攀はこちらで成しとげ得たが。

また第一次マナスル隊で、谷口君子飼いの加藤喜一郎、山田二郎の二人が初めてのヒマラヤにも拘らず、プラトー下の七三五〇メートルに一時間で二人用の雪洞を掘り一夜を明かした。そして登頂をねらったが、翌日は悪天のため下降を余儀なくされた。しかし、その時の感想を「内地の山のような気がする、家に帰ったようだ」と三田隊長に報告、大変満足された。そして帰国後、谷口君に内地でしっかりやっておけば、ヒマラヤでも雪洞はアットホームだとそれまでの一連の雪中露営、雪洞生活の研究成果を実証したと報告、彼を自分のことのように喜ばせた事は有名な話。

それから第二次マナスル隊では堀田隊長の下、副隊長として谷口君は参加したが、サマの部落での強引な入山拒否に会い、急遽ガネッシュヒマールに目標を変えたが登頂出来なかった。しかしその時のメンバー辰沼広吉、加藤喜一郎、山田二郎、松沢幸雄など立派な後輩を育て得て満足していた。他のメンバーでも村山雅美、村木潤次郎、大塚博美、日下田実、松田雄一氏らと、ヒマラヤ遠征ではなかなかむずかしい面のある協調性も誠にスムーズに行っていたのも彼にそんな面が自然に身に備わっていたからに相違ない。

その後慶応山岳部のヒマルチュリ初登頂成功があったが、隊長山田以下宮下秀樹、田辺寿、中沢公正、大森弘一郎らみんな谷口君の薫陶を直接受けた者揃いだったことも付け加えたい。

実際彼は人に頼まれればなんでも引き受けるタイプの男だった。終戦直後、松方三郎さんからの呼びかけで日本山岳会の急速な復興を指示された時など、彼は就職の必要も特になかったせいもあったろうが当時卒先お茶の水の事務所に勤務みたいに毎日顔を出していた。

その頃は食料難、交通難だったにも拘らず、各大学の学生達を大勢集め、天幕をかついで近郊の山へ出かけたり、冬の富士山へ登ったり、関東学生山岳連盟を組織化したりして、登山技術向上を、堀田彌一氏らと共に献身的に行動した。その頃の学生たちが現在山岳会の主脳部に大勢いるのだが、確かに谷口君は日本山岳会戦後復興の大功労者の一人であった。

また学生の時など、丁度その頃慶応の一部が日吉に移った時で、山岳部員を野放しにはしておけぬと三田と日吉を殆ど毎日往復、そ

の接触を計ったが、これなども谷口君にして初めて出来ることであった。

谷口君が大町に移り住んでから、大町山岳博物館運営に情熱を注ぎ、展示資料に槙有恒さん、三田幸夫さんの用具や初期のヒマラヤ遠征の装備など借用陳列し、次いで図書の集収に奔走中であった。

また彼は五年前から大町で全日本シルバースキー競技大会を始めた。勿論大町市発展のためなんだが、彼の人柄と顔の広さで、朝日新聞社に主催になってもらったり、文部省、厚生省にも協力者として応援してもらうなど着々基盤を固め、五回目大会では念願の長野県スキー連盟の公認競技としての資格も獲得し、愈々二月開催を期待していた矢先だっただけにさぞ残念だったと思う。彼のためにもこのシルバースキー大会の発展を心から祈りたい。

最後に思い出として付け加えたいが、昭和六十年の秋、谷口君と彼の奥様、私と私の家内とで山眺めの旅をした。途中までポーターとして私の娘をつれて行ったが先ず上高地に一泊、中ノ湯から中尾へ、ゴンドラで西穂高展望台へ。その日天気よく皆初めて穂高の裏側を楽しんだ。高山から鉄道で富山、藤橋からケーブルやバスで室堂。昔重いルックを背負い、ラッセルで苦しんだ弥陀ヶ原、大日岳から早月・剱岳を眺めながらミクリガ池で寝ころんでいた。あとはトンネルで黒部へ、そして大町へ出たのだが「ラウンド北アルプス」と名づけたこの家族山行をいつも話し合っていたが、思えば長いつき合いであった。

日本山岳会の年次晩餐会で、皇太子殿下の隣りの「穂高」テーブルに前回も今回も谷口君と隣同志の席を与えられ、四方山話から長岡と大町は近い、ちょいちょい遊びに来いよと誘われたが、その十二月七日が最後の日になってしまいなんとも悲しい。

（金山淳二）

思い起こすままに

一月十七日は登高会幹事長で日本山岳会永年会員でもあった国分勘兵衛氏の社葬が午後一時から行われることになっていた。

その日の朝、電話に出た家内が「大町の谷口さんからです」と云う。出ると、「ア、二郎か、今日の国分さんの社葬にはおまいりに行く予定にしていたんだが、少し風邪気味なので欠席する。皆には前から行くと云っていたので待たせても悪いし、社長の章一氏にも世話になっているから、お悔やみ申し上げようと思っていたので、君からも宜しく申し上げて欲しい」とのことであった。何時もと変わらぬ調子で、それから僅か半日後が永遠のお別れになろうなどとは思いも及ばぬことであった。二十二日の密葬には私共夫婦のほか松田副会長ご夫妻もわざわざ参列頂いた。

谷口さんとのお付き合いは、一九四〇（昭和十五）年に私が慶応の予科に入学してからだから、半世紀余のことで、この間、山岳部員、登高会員、日本山岳会員としてご指導頂いたほか、就職、仕事、私生活にまでわたって兄弟のように過ごさせて頂いた。

谷口さんとのお付き合いは慶応の予科入学以来ではあるが、実際には新入部員と一まわりも年齢の異なる先輩とでは直接お話をするようなことはなかった。直接お話をするようになったのは一九四二

（昭和十七）年春に私が部のチーフリーダーとなってからで、戦争も敗色濃く、山行の食料、装備も入手難、世には時代に迎合した「行軍登山」が横行し、冬山に参加する部員が上野駅で市民から「この戦時中に山やスキーとは何事だ」と暴行を受けることもあった時代であったから、チーフを仰せ付かった私は部の運営についに物心両面で思い悩むことが多かった。

相談しようにも上級生は卒業と同時に兵役に服して、その多くは海外の戦地に送られる状態であったが、幸い谷口さんは一九四二年の初めには召集解除となり、北満から帰還されていたので、私が学徒動員のため、ルームを閉鎖するに至るまで随分お世話になった。部の整理を終え、十二月の入営を目前に行った送別富士登山、暗い戦況とは裏腹に美しかった秋晴れの山は忘れ難く、この時も谷口さんはご一緒して下さった。

戦争も終り、大学に帰って山岳部を復活、一九四七年に卒業するまでの部の運営は、多くの仲間を戦場に失い、生き残った者たちも戦災その他で山の道具もなく、更に「一千万人の餓死者が出る」と云った時代背景の中では山岳部運営の前途はともすればその望みも挫けがちであった。

そんな中、綱町の剣道場の片隅に割り当てられた鰻の寝床のようなルーム（と云うより物置）にも、よく立ち寄られて話を聞いて頂いた。当時谷口さんは大磯の別荘に疎開中であったので、夏と云わず、冬と云わず駅からの長い道を歩いて話を聞いて頂きにお邪魔したことは回数も思い出せない程であった。

戦後、松方三郎さんの呼び掛けに応じ、日本山岳会の再興、中でも学生山岳部に対する谷口さんの情熱は大変なもので、その影響は今日に及ぶ数多くの業績につながっている。中でも戦後の混乱の中、一九四六年秋に万世橋の交通博物館講堂で行われた登山講習会は大学山岳部運営に苦しむ現役学生に計り知れぬ希望と自信を甦らせる結果となった。この催しの中心は谷口さんのほか堀田彌一、藤井運平、浜野正男、関根吉郎、今村正二、林和夫等各大学山岳部の若手ＯＢで、特に堀田、谷口両氏はそのまとめ役としての役割を演ぜられ、またこれと前後して関東学生山岳連盟の再建ではその中心として努力された。

この間の事情は谷口さんの遺稿集「至高」に詳しい。

今日、日本山岳会の中核として活躍して居られる村木潤次郎、大塚博美、藤平正夫、松田雄一の諸兄もこの頃谷口さんの熱情にふれ、その薫陶にあずかった仲間達であることを思うと、その影響力の大きさを今更のように感銘せざるを得ない。

ご葬儀に際しての弔辞でもふれたが、まかり間違えば「死ぬこともある」山登りを志す者として当然乍ら、登山は勿論生活態度すべてに亘って「いい加減」ですますことを自らも戒め、また後輩たちにも求められるご性格、自分の後に続く若者たちにもより良い登山人生を全うさせようと願う強い熱意と面倒見の良さの二つがもたらす結果、ご指導をうける後輩の中には「谷口さんは常により高き、より難きを求める完璧なスポーツ登山のみを偏重され、またそれを後輩にも求められる方」と云った誤解をした者もあったようだ。今はもうそんな誤解をしている者はいないと思うのだが、谷口さんはよく私に「二郎、お前は図々しいから何でも思った通りに云えるの

だが、若い学生たちに自分の云っていることが本当に正しく理解されていないんではないかと思うと恐ろしくなることがあるんだ。そんな時は余程言葉を選ばなくてはと思ったり、物を云うのを躊躇したりしてね」と云って居られた。

想い出す儘に取り留めもなく書いてしまった。「二郎の奴、本当は未だ俺のことが判っていないな」と、お叱りを受けそうな気もするが、まさか今更瞑土から現われて怒られることもないだろう。

謹んでご冥福をお祈りし度い。

なお、谷口さんのご指導を受けた登高会員数人が世話人となって、ご遺族とも相談し乍ら谷口現吉遺稿集「至高」を発行している。小生の拙い追悼文などより、これを通読されれば谷口さんの実像がより鮮明に捉えられる筈である。是非ご一読をおすすめし度い。

（山田二郎）

略　歴

一九一〇（明治四十三）年九月十七日　谷口辞三郎次男として東京品川において出生
一九二八（昭和三）年三月　東京府立第八中学校（現東京都立小山台高校）卒業
一九二九（昭和四）年四月　慶応義塾体育会山岳部入部
一九三二（昭和七）年三月　剱岳八ッ峰積雪期初登攀
一九三五（昭和十）年一月　慶応山岳部として積雪期高所露営技術を確立
一九三六（昭和十一）年三月　慶応義塾大学法学部卒業、日本山岳会入会（会員番号一六三六）
一九四六（昭和二十一）年～一九五三年　日本山岳会常務理事
一九四七（昭和二十二）年九月　関東学生山岳連盟を設立し、大学山岳部の再建に尽力
一九四八（昭和二十三）年　西村工業販売㈱代表取締役
一九四九（昭和二十四）年　佐倉飼料㈱代表取締役
一九五三（昭和二十八）年　五月　日本山岳会評議員
一九五四（昭和二十九）年　日本山岳会第二次マナスル登山隊副隊長
一九八二（昭和五十七）年　㈳日本弘道会（会祖西村茂樹）評議員
一九八五（昭和六十）年　日本山岳会名誉会員
一九八六（昭和六十一）年　大町スキー場代表取締役
一九八八（昭和六十三）年　大町市シルバー・スキー大会実行委員長
一九八九（平成元）年　大町市立山岳博物館顧問
一九九二（平成四）年一月二十一日　肺水腫のため大町市において死去。享年八十一歳

（山田二郎）

山田　二一郎氏（一九〇五～一九九二）

日本山岳会の会員名簿に、同姓同名が何組あるか調べたこともないが、山田二郎はたしかに二名並んでいる。会員番号三四七三山田二郎は、当然のこと現在第一線で活躍中の会長さんで追悼などもっての外の話である。あとの一人の山田二郎が当追悼文の主山田さん、一九三〇年四月入会、会員番号一一七六、関西支部、出生は一九〇五（明治三十八）年二月、生家は和歌山の老舗綿布問屋吉兵衛の次男と聞く。

和歌山中学時代は水泳に熱中して、部の幹部として活躍、極東大会の日本代表にもなろうかといった猛者だったらしい。

早稲田に進んでからは、体調を考えてか、黄金時代を誇っていた水泳部には行かずに、山岳部に籍をおくことになった。

当時の早大山岳部は、船田三郎というすぐれた指導者の流れを汲んで、厳冬の山に情熱を傾け研究に余念がなかった。その具体的な現われが、大正末期から昭和初期にかけての「大沢小舎生活」である。一九二四（大正十三）年から翌一月に第一回が行われ、その後毎冬第二回、第三回と継続して、着実に成果を挙げてきた。記録によると、第四回大沢小舎生活は、一九二七（昭和二）年十二月二十七日第一隊リーダー近藤正の下十一名、次いで第二隊三名三十日入山の予定で、単に山頂に立つだけでなく、スキー地図の作製、雪崩の研究など課題としていた。

山田さんは、第四回大沢小舎生活の第一隊として参加した。だが、十二月三十日スキー訓練中に突如としておきた篭川谷赤石沢からの雪崩のために、一瞬にして大惨事となり、四名（家村、山本、関、上原）の若い部員の死去という結果になってしまった。全員埋没、山田さんはやっとのこと掘り出されて一生を得たのである。

その時のことを追憶してこう語っている。物凄い土用波に巻き込まれて、突き倒され、大きな苦痛を感じながら無二無三に押し飛ばされた。雪崩は止まった。心臓が沸騰している。呼吸が出来ない。頭が張り烈けるようだ。死！死！やられた。一生懸命もがいていた時、頭の上の雪が除かれて空中に手が出た。しめた、助かった。暗黒の世界から光明の世界へ。誰かが飛びついて来て掘りだしてくれた。

この針ノ木遭難は、日本登山界の大事件であるのみならず、大晦日の街角に号外まで飛びだす社会問題になってしまった。部は勿論のこと、生き残った七名にとっても大へんなショックだった。おそらく人生観を三六〇度変えるほどのものだったにちがいない。

早大山岳部は、針ノ木遭難の大きな打撃をうけて混乱状態だったと思う。反省、批判、乗り越えなければならない壁、山積していた。社会的圧力もあったであろう。こういう時に最も必要とする前向きの姿勢を失わなかったのは幸いであった。当面の処理は勿論のこと、部の立て直しのために一丸となって事にあたる。部はそれだけの力を持っていた。その意味では充実していたといって過言でない。

部室はいつも沸きあがっていた。アルピニズム論議も華やかだっ

た。山田さんは、こんな部屋の渦の中で、際立った存在だった。太い眉毛をピクつかせながら論陣を張る姿は、イキイキしていた。口グセのように「俺は教室よりも部室にいる方が勉強になる」と言った言葉は、部で育つ若者の風潮でもあった。

この風潮は、単に特定の大学山岳部に限られたものではなかった。学生登山者は、こうした流れの上に育ち、力をつけてきた。学生登山者は如何にあるべきか、こうした論は部の内に外に活潑に行われ、引いては、他の大学と手をたずさえて、同志的結合という形をとるに至った。学生達はよく動いた。足に、手に、口に、山に関する限り若き情熱を傾けた。日本山岳会はこれでよいのか、集る度に話は盛りあがった。すぐに頭に浮かぶのが、商大の磯野計蔵さん、日大の初見一雄さん、明治の小沢利一郎さん、法政の大木長蔵さん、立教の水越誠一さん、ほかにも多勢の方の力があったのだが、早稲田ではいつも、山田さん、渡辺公平さんなど、皆んな若くて元気溢れていた。日本山岳会の大御所大先輩の方々のところへは皆で押しかけたものだ。新聞社にもよく行った。

こうして、関東学生登山聯盟は生まれた。一九二九（昭和四）年十一月二十一日早稲田大学大隈講堂で発会式挙行、「岳聯報告」第一号にあるように、関東一円山形、福島を含めて大学、高校二十八校が勢揃いしたのだから壮観だった。敢えて言うならば、日本登山界に大きな新しい方向づけをしたのであった。そして、関東に呼応して、関西学生登山聯盟も結成された。残念なことに、いろいろの事情から数年後に解消されたのであるが、学生登山者の存在は明確に世に問うことが出来た。

山田さんは、社会人として新聞界で身を立てることになった。

一九三三（昭和八）年五月大阪朝日新聞社入社。途中五年間の軍務応召を除いては、一九六三（昭和三十八）年二月まで三十年間通信部、整理部の畑で一筋に新聞人として生きてきた山田さん、正直一本槍で通されたときいて、なるほどと理解できる。

朝日新聞大阪本社編集局では、「ヤマダテンノウ」で通っていたという。紙面造りの鬼とも言われたらしい。若い社員たちは、山田さんの目と雷を盗んでデスクの後を通りぬけたという。原稿の組み変えは毎度のことで、工場に流したニュースの組み直しには、平身低頭、それほど厳しい姿勢は一貫して変わらなかったようである。ある人の話、金沢支局長時代に、そのある人が、入社して二年経って、金沢勤務を命ぜられた時、赴任を前にして、「金沢か、ヤマダ天皇のところだな。きついぞ」と何人かの人に言われたとか。覚悟を決めて赴任しましたと、実感がこもっている。さて、「お蔭様で新聞人に育てて貰いました」とは真のこもた後日談である。非を非といって一生を通せた山田さん、山田イズムはここでも輝いていたようだ。

新聞を離れてからは、嘱望されて、神戸の辰己商会という海運業界の会社に席を置くことになり、社史の編さんやら会長の伝記やらやりあげて十数年、なかなか辞めさせて貰えないとゲチの出る日があった。

その頃から、口には出さぬが身体の調子が悪くなったようで、楽しみにしていた山歩きも出来ずに日を過ごしていた。奥様との約束の秋の上高地行も果たせなかったかも知れぬ。「俺が死んだら骨は

山に埋めてくれ」と。ジョウダンに「針ノ木の方がいいぢゃないか。皆んなが待っているから」と三年前に京都に訪ねた時の話、「そうだな」とうなずいていた姿が想い出される。

篭川谷の新緑は鮮やかだった。埋もれた友をさがして何日か過ごした大沢小舎で、たき火を囲みながら、「山はいいネ」とポツリと一言。

針ノ木遭難生き残りの最後の一人、山田さん、もしかしたら皆んな揃ったところで「吹雪はやみて」の合唱をしているかも知れぬ。

（長島春雄）

進藤　波男氏（一九一三～一九九一）

進藤波男さんが、突然の事故で七十八歳の生涯をとじたのは去年のことであった。

進藤さんは、三水会の創設当時からの会員で、日本山岳会の入会も一九四〇（昭和十五）年と早く、途中休会がなかったなら、永年会員になれる番号で、一八六三番であった。進藤さんは、一九一三（大正二）年九月二十日、群馬県桐生の旧家に生まれ、その土地の小学校を卒業すると、単身上京した。向学心に燃えた少年は、当時東京でも入学がむずかしいといわれた、東京府立工芸学校に入学、機械方面の勉強に精を出した。

卒業後、千葉県市川市のある軍関係の工場に就職した。軍の特別な関係があったために軍隊に入隊することなく、大砲、砲弾の研究に没頭した。その間、山好きな進藤さんは、自ら、エーデルワイスという山の会を作り、友達と共に北アルプス、南アルプス、秩父、多摩の山々に登ったとのことを奥様から聞くことができた。

エーデルワイスという山の会は、坂倉登喜子さんの会だけだと思っていた私はびっくりした。当時日本山岳会に入会したので、五十年も過ぎている番号にも驚いた。

私が進藤さんと知り合ったのは、三水会のできた一九七五年頃でした。ほりの深い、日本人ばなれをした風貌で、登山の服装も一種独特のものでした。特に親しくつき合うようになったのは、「ポシス」という歩く会を作ったので、色々と指導をしてくれないかと相談をうけてからであった。一番初めの行事として行ったのは、夜間三十キロのコースを歩くことでした。参加者五十名、コースは西武線の仏子の駅から飯能を通り有間小屋まででした。心配した行事も無事全員到着、ほっと胸をなでおろした思いでがあります。進藤さんはその時、参加者全員に自らデザインをした、きれいなバッチを進呈した。その後何回か行ったが、道路、その他の都合でとりやめることになったことは残念でした。

その後進藤さんは、家の中で歩く機械を作ることに没頭して、NHKのテレビ放送に出演できる機械を考案をした。又教育大の阿久津先生や、早稲田大学の窪田先生との交流を深め体育器具の開発に努力したが、製品となるまでにはいたらなかった。人との交際も、旧海軍の山の会「梓会」の人々や、奥武蔵研究会の人々、面白い人では、スペインダンスの人々などあり、多才の人でもあった。又、

心身の鍛練のために、古武道の三條流を学びその研究のために森のある所に家を移転して、心身の修業に励み、人生修業のために色々な研究をした面白い人であったが、中途で故人になられたのは残念でなりません。

三水会行事にも積極的に参加され、係も引き受け他の人にない独特な考え、行動を三水会の人々に見せてくれた。そして色々と啓蒙もしてくれた貴重な人であった。

深く哀悼の意を表して筆をおく。

（中　保）

佐藤　金一　氏（一九一三～一九九一）

佐藤氏は一九一三（大正二）年わが国有数の豪雪地で知られる守門山の山麓の栃尾市で生まれる。まわりを山で囲まれ、刈谷田川に沿って家並みがつづく機屋町で、越後の小京都とも呼ばれ、長岡まで通う軽便鉄道が当時唯一の文化を運ぶ役割を果たしていた。織物産地の土地柄、文化活動が盛んで、一九二五年アルバータの登山から帰国された槙有恒氏の講演会が開かれ、これに感動して登山にのめり込むことになったという。その後町の植物学者稲田豊八氏の指導で自然観察、近代登山術の手ほどきをうけ、本格的な山登りを始める。一九三一（昭和六）年七月機屋の若旦那衆と登山集団「アパル会」を結成、登山活動に弾みがつく。第二次大戦で多くの機屋が統廃合され軍需工場に転換した。ここで街の織物工場主の鈴木倉市郎氏と出合うことになる。鈴木氏は人も知る文化人で、自ら絵筆もよく執られ、機業人としての力量、洞察力高く、戦後は鈴木氏の片腕となって、織物業の再建に取り組み、幾多の危機を好機にとらえ、テキスタイルの一貫生産に挑戦しつつ、封建性の強い産地にあって、〝鈴倉に学べ〟の声が公然と起こり始めるまでの、当地第一級の企業に育て挙げた陰の功労者の一人で、そのパワーは登山で学んだ知識と人脈と体力だと常に口にされていた。一九四七（昭和二十二）年日本山岳会に入会され、支部活動の中心となって行動され職務多忙でも山の義理を欠くことのない人で、趣味としての山を追いつづけることに何のためらいもなく、自分の信念として正しい道を迷うことなく、山男としての誇りと自信を常に持って居られた。ホームグランドの守門岳、浅草岳をはじめ、六十里越え、八十里越えから会津に至る山々の地域研究と開拓は、地元の山一筋の佐藤氏の地味な人柄を物語る。戦後の守門岳平石川源流、会津朝日岳小戸沢、毛猛山塊のルート開拓、早春の中ノ岳から平ヶ岳の縦走の記録などは、この方面への入山者への助言、指導に大きな力となった。

また、県内の登山者講習会の講師や、日本山岳会越後支部創立二十周年記念県境踏査登山の実行委員、第十四回飯豊国体の役員など、陣頭に立って行動され、それ等の記録は支部機関誌『越後山岳』や数々の山岳雑誌に、紀行、随筆、案内文としてロマン溢れる文章を残されて居る。これが縁で同地を訪れる人々も多く、自ら案内を買って出られていた。

故高松宮様、日高信六郎、神谷恭、野口末延、中村謙、深田久弥、

中西悟堂氏等々日本山岳会の重鎮を案内し、多くの地方会員に交流の場を橋渡しされた。飾り気のない朴とつな佐藤さんは、不思議な誰もが真似の出来ない魅力の持ち主で、山で風景・植物など鮮やかにスケッチして、見る人をうならせたり、道々でのウンチクあるお話や、軽妙洒脱の語り口での栃尾小話は、聞く人をして疲れを忘れさせ、博識で多芸多才の人であり、リーダーとして細かい思いやりのある人でした。日本山岳会越後支部の機関誌『越後山岳』第一号の一九三七（昭和十二）年三月守門岳から浅草岳に行かれた紀行文に、「大岳から網張場へはスキーのまま降れます」「急斜面ですから気をつけねばなりません」「鋸グラの尾根は急峻な凹凸がひどくて、五味沢へのルートとしては適当でありません」など、随所にかゆいところに手の届くような思いやりある文章が見られ、遭難防止と、楽しい登山を常に念頭に置いた、佐藤さんらしい紀行文を残して居られる。おおらかで逞しい岳人、これは佐藤さんにピッタリの表現であろう。一九七六（昭和五十一）年支部結成三十周年記念に藤島玄氏を隊長に、ネパールを元気に旅行し、世界最高峰のエベレストを望見して感動され、菩提樹の下でマチャプチャレをスケッチされた姿が、今も目に浮かんではなれない。一九八三（昭和五十八）年脳梗塞で倒れられ、ご家族の手厚い看護で小康を得られ、近くの古城趾を散歩されると伺い、山仲間と安堵していたところ、昨年十二月六日心不全によりご逝去された。十二月七日の密葬、十二月十三日社葬が栃尾市の善昌寺でしめやかに営まれた。百基を越す境内一杯の供花の中央に、ヒマラヤ山行の最後に撮られた、満ち足りた喜びを満面に湛えた遺影にお別れする参列者は五百余名に及んだ。正面にかざられた市長の供花と並んで、山岳会の生花が飾られ、産業人佐藤と山岳人佐藤の最後を飾るにふさわしい告別式でありました。山岳会員の多くが生前の数々の山歴に敬意を表し、冥福を心からお祈りしてお別れをした。

戒名　機倉院慈徹岳堂居士位

略　歴

一九一三（大正二）年九月二十三日　栃尾市原で出生
一九三一（昭和六）年　アルパ会を創立発会
一九四六（昭和二十一）年　日本山岳会に入会（会員番号二五〇五）
一九四八（昭和二十三）年一月　鈴倉織物に入社
一九六八（昭和四十三）年十二月　栃尾市山岳遭難対策協議会設立に尽力
一九七二（昭和四十七）年七月　㈱鈴倉織物専務取締役
一九九一（平成三）年十二月六日　心不全により逝去、享年七十九歳

（室賀輝男）

泉　隆次郎氏（一九一二～一九九一）

泉隆次郎さんが亡くなったのは、一九九一（平成三）年十二月二十九日、年の瀬もおしせまった日であった。

三年程前、体調をくずし、阪大病院に入院、手術を受けたが、その後回復し、泉さんが大手術を受けたことなど知らないで、付き合っていた人も、多かったのではなかろうか。惜しい人を亡くしたものである。

泉さんは、一九三一（昭和六）年、大阪商科大学（現、大阪市立大学）予科に入学して、間もなく山岳部に入り、それから山登りがはじまった。私より四年先輩、私が入学した時は、既に泉さんが、チーフリーダーになった年であった。それから亡くなるまで、六十年近い、おそろしく長い泉さんと私とのお付き合いが、始まったことになる。

しかし、思いおこして見ると、お互いに現役部員として、一緒に山へ行ったのは一年半にすぎず、想い出に残るのは、一九三六（昭和十一）年の春の剱、早月尾根、夏の台湾遠征と冬の大阪薬専（現、大阪薬大）との富士山合同登山など、数えるほどである。今想いおこすと、不思議なような気もする。

卒業後の泉さんは、後輩の指導に当る一方、関西の山仲間との幅広い付合いが始まっていた。もう亡くなった人ばかりになるが、西岡一雄さん、北條理一さん、新村正一さん、前田光雄さんなど、又、エーデルワイスのお嬢さん（?）方等多方面に及んでいた。ひましに戦時色が濃くなって来た頃、堂島の関西支部ルームと、向かいの好日山荘とが、たまり場になっていたように思う。

戦争中の応召、又戦後数年間の愛知県の元疎開地でのお仕事が一段落し、大阪へもどって来る頃、戦争中のブランクを克服しつつあった大阪市大山岳部、山岳会の再建に、すばらしいリーダーシップを発揮することになる。

不幸、一九六一年のランタン・リルンで、遭難事故をおこした時には、救援に現地へ赴き、それ以後、最後まで大阪市大山岳会の「顔」であり、「活力の源泉」であった。市大の若い人から、「泉さんはこわい」とか、「泉さんに叱られた」とかいろいろ話はよく耳にするが、泉さんに「しごかれた」という言葉は聞いたことがない。厳しいが、実におおらかな、明るい、すばらしいリーダーシップの持ち主であったと思う。

後年、仲西政一郎さんとの永年のお付き合いから、近畿山岳愛好会の副会長、会長もつとめて、新しい沢山の若い山のお友達も出来ていたようである。

泉さんは会社、役所など、色々と勤務をかわられたが、最後のお仕事は、一九八〇（昭和五十五）年、全国にさきがけて作られた財団法人大阪腎臓バンクの設立であった。大阪腎臓バンクの専務理事として、亡くなる直前まで、医学に素人の泉さんが、脳死や臓器移植の問題と正面から取り組んで、仕事に熱中しておられた姿には、本当に頭が下がる思いをしたものである。凡て泉さんの人間愛から出たものであろう。

又、生前一人で、四国八十八ケ所の巡礼やインド・ネパールの仏跡巡拝もやり、仏教経典もよく学んでいた、熱心な仏教信者でもあった泉さん、今は西方浄土で、沢山の山友達と共に、われわれを見つめていて下さると思う。

ご冥福をお祈りいたします。

略歴

一九一二（大正元）年七月三十日　大阪市難波区桜川町にて生まれる
一九三一（昭和六）年　大阪府立豊中中学校より大阪商科大学予科に入学
一九三七（昭和十二）年　大阪商科大学卒業と同時に菊田石油株式会社に役員として入社
一九四一（昭和十六）年より一九四五年まで太平洋戦争に応召
一九四六（昭和二十一）年　愛知県北設楽郡田口町にて旭産業株式会社を設立、役員として製材業を営む
一九四九（昭和二十四）年　日本山岳会入会（会員番号三二四三）
一九五五（昭和三十）年　三徳商事株式会社に復帰（菊田石油株式会社組織変更のため）
一九六七（昭和四十二）年　吹田市役所企画部長として招聘され就職
一九七五（昭和五十）年　同上　依願退職
一九七九（昭和五十四）年　財団法人大阪腎臓バンクの設立業務に当る
一九八〇（昭和五十五）年　財団法人大阪腎臓バンク設立、専務理事としてその運営に当る
一九九一（平成三）年十二月二十九日没。享年七十九歳

（大橋秀一郎）

徳永芳雄氏（一九〇八～一九九一）

徳永芳雄兄が昨年九月四日に亡くなられたが、最近はお会いする機会もなく年賀のご挨拶だけで済ましていた。

小生は兄を「徳さん」と愛称していたが、別に「大ナッショ」という渾名を持っていた。それは彼の人柄から来たものである。あの温厚、飄々とした風情にはもうお目にかかれない。

されば、徳永さんが生前に残した北海道の山登りの一端をここに記して追悼・追憶を述べさせて頂こう。

一・徳永さんと札幌第二中学校徒歩旅行部のこと。

兄が中学校に入った頃、健脚団という部があって身体を鍛練していたが、当時最上級生であった坂本直行（故人）と共に徒歩旅行部と改称し、主として札幌西郊の山々を跋渉して回っていた。当時はスキー登山はまだ普及しておらず、専ら春の堅雪時と夏秋の沢登りに徹していたものだ。

小生は彼より一年後に中学に入学し共に山を歩き、彼が四年から北大予科に入学した頃、先輩の坂本直行が主導し兄と小生に徳さんの弟の正雄君とが協力し、当時中学としては画期的な山岳旅行部部報『ヌタック』を第二号まで発行したが、彼には大いに健筆を揮って頂いたものだ。

二・徳さんと北大山岳部のこと。

兄が一九二六（大正十五）年北大予科に入学した時、桜星会旅行部と称するものがあったので、彼はそれに入部し本格的に北海道山岳登山の開拓に参加したのであるが、その頃、伊藤秀五郎（故人）、山口健児等先輩が主体となって北大山岳部が発足した。

当時冬期登山の訓練は、ニセコ連峰の中枢にある青山温泉に合宿してスキー登山術の習練に努めていたが、彼は中野征紀（故人）、渡辺千尚と同じ班員として行動したのであった。

後年彼よりたち遅れて、小生が北大予科に入学した時には、冬山合宿は十勝岳吹上温泉（終戦直前閉鎖解体されて現在は存在しない）に移り、小生等金光正次（故人）と共に登山スキー術を鍛えられたものである。徳さんは別班の班長であったが、痩せぎすの細長い脚にゲートルを膝下まで巻きつけ、スキーの両杖をやや前方に併行して立たせかげんに捧げ持って滑って来る彼の姿が彷彿として眼前に浮かぶ想いがする。

彼は日高山脈登山の先鞭をつけた一人であり、また中央高地登山の開拓者でもあった。登山報告会でそれ等の魅力を訥々と語り尽くしていたことも忘れ難く、小生が日高登山の虜となる原因ともなった。

三、徳さんとグブラーさんのこと。

グブラーさんは北大予科の独逸語の教師であった。山好きの武骨者であったが、無口で取り付きが悪く山岳部とも縁を持たなかったが、当時同僚のハンス・コーラーさんと造ったヘルヴェチア・ヒュッテ建設の際に、徳さんは何かの切っ掛けでか手伝いをするようになり、備品等の運搬にも助力したのであった。

また一九二八（昭和三）年十二月にグブラーさんと同道して、台湾の次高山登山を行ったり、当時の南樺太旅行にも案内役となったりした。

彼が卒業後縁あって台北大学に勤務し、終戦後も台湾の復興に貢献したことは特記しなければならない。

兄の日本山岳会入会は台湾から東京へ引き揚げて来てからであると思われるが、その後の登山生活に就いては小生は知り得ない。

以上徳さんの若き頃を追想して追悼の縁（よすが）とする。

略　歴

一九〇八（明治四十一）年十月十日生まれ。
元東京教育大学教授、植物病理学専攻
一九五六（昭和三十一）年二月　日本山岳会入会（会員番号四三四三）
一九九一（平成三）年九月四日　心筋梗塞により保谷市の自宅で逝去、八十三歳

（相川　修）

［編者註］文中に出てくる北大山岳部関係の伊藤秀五郎氏については『山岳』七一・七二年の、中野征紀氏については同七三年の、坂本直行氏については同七七年の、金光正次氏については同八一年の追悼欄にそれぞれ記述がある。

阿達　憲氏（一九三〇～一九九二）

謹んで故阿達憲陸将閣下のご霊前にお別れの言葉を申し上げます。

日本アルパイン・スキー兵協会（ＪＡＳＡ）会長であり、キスカ会名誉会長である藤井一美陸将閣下の強い要請によって、阿達憲様は、ＪＡＳＡ副会長に就任されました。早速、副会長は、一九九〇年六月二日、三日、ドイツ国山岳部隊アルプス基地であるミッテンワルトで開催された第五回国際山岳兵連盟総会（ＩＦＭＳ・ＲＥＵＮＩＯＮ）およびドイツ山岳部隊七十五周年記念式典にＪＡＳＡ代表として参加され、国際交流・親善に尽力されました。

このミッテンワルトＩＦＭＳ総会の席上、世界各国が注視し、具体的な行動を実行しつつあった中東危機問題に関する日本政府の微妙な対応と政治的背景について、多くの時間を費やして説明されました。

同時期に、イタリア国アルプスの登山基地であるメラノで開催された国際電子技術者会議へ阿達様は、日本電気株式会社（ＮＥＣ）技師長として参加されておられました。この会議で、前ドイツ連邦会議総長フォン・ハッセル博士に会われました。

阿達様がＩＦＭＳの話題を出されたところ、はからずも、同博士は「私は、一九一〇年、高田連隊で、日本陸軍へ最初にスキーを伝習したセオドル・フォン・レルヒ大尉（当時オーストリア国）の甥である」といわれて、お互いに改めて、感激の握手をされた。

一九九〇年十一月二十六日、東京・丸の内ホテルにおいて、藤井ＪＡＳＡ会長と阿達副会長の両名は、防衛庁スキークラブ名誉会長、同指導員会会長、全日本スキー連盟指導員である柴田繁陸将補を私に紹介してくださいました。この会議では一九九八年長野冬季五輪開催誘致運動、および、輪番制で、日本において、国際山岳兵連盟総会開催についての態勢づくりについて、真剣に討議されました。

ところが、藤井一美会長は、その一カ月後、十二月二十四日急逝されました。以後、阿達憲陸将は、藤井会長の遺志をついで、ＪＡＳＡ会長代行（Acting President）として、国際交流・親善に尽力してくださった。

一九九一年四月二十九日、阿達様は、外務省参与に任ぜられ、化学兵器の専門家として、国際連合のイラク大量破壊兵器解体特別委員会の化学兵器グループのメンバーに就任されました。ニューヨークの国連本部、ジュネーブの国連軍縮会議、それに技師長として日本電気株式会社への技術報告など、文字通りグローバルな活動を続けておられました。

この多忙な中で、一九九一年九月六日からイタリア国ボルザノ（イタリア山岳部隊アルプス基地）で開催される第六回国際山岳兵連盟総会にたいして、ＩＦＭＳ事務総長ジャン・ミンスタ氏（フランス国シャモニー在）と連絡をとって「ＪＡＳＡの組織の現況、日本からは遠距離であり、中東情勢が不安定であるため、イタリア国ボルザノへ派遣するＪＡＳＡ代表団結成が困難である実情」を報告して

いただきました。当時阿達様は、ジュネーブにおいて国連軍縮会議に参加されていた。

さて、一九九一年八月十四日のお盆休みには、一時帰国の貴重な時間をさいて、柴田陸将補と連絡をとられて私と、東京・丸の内ホテルで会合をもちました。この席上、阿達様は「外務省参与」という資格での国連を中心とした外交官活動は、無給、単身赴任であり、ニューヨーク、ジュネーブ、中近東方面への出張旅費だけは後払い支給の冷遇である。日本電気株式会社からの給与支給にたいして、技師長として技術報告は欠かせなく「全く多忙を極めている…」と超過密、過労の日常生活の実情をしみじみと語られた。これが、阿達ＪＡＳＡ副会長との最後の会合になろうとは…。

一九九二年三月九日、柴田繁様から「阿達憲陸将は、八日午後十一時、心不全のため、六十二歳の働き盛りの身で、永眠された」ことを知らされた。三月十一日、板橋の宗仙寺での葬儀は、外務省、陸上自衛隊の高官連、日本電気株式会社を中心とした世界最高級の技術者の方々、登山関係者の花環に囲まれ、生前の阿達憲陸将のグローバルな幅広い活動が眼前に蘇った。

阿達様の残された偉業は永く各方面の方々にとって忘れ得ぬことであろう。

お別れに際し、限り無い哀悼の誠を捧げますとともに、ひたすらご冥福をお祈り申し上げ、ご霊前に追悼の辞を捧げます。　合掌

（春日部　薫＝ＪＡＳＡ事務局長）

略　歴

一九三〇（昭和五）年一月二十九日生まれ。横浜工専化学工業科を卒業後、一九五二（昭和二十七）年自衛隊に入隊。スキー、登山には入隊後すぐ赴任した青森市浪館の第九混成団時代に親しんだ

一九五六（昭和三十一）年七月　日本山岳会入会（会員番号四四〇七）。以後札幌在住時代には北海道支部の山行に参加するなど本会会員と山行を共にする

一九七一（昭和四十六）年　外務省に出向し、ジュネーブ軍縮会議で技術面から交渉をサポートした

一九七九（昭和五十四）年八月　核、化学、生物兵器に対する防護を研究する陸上自衛隊化学学校校長に就任

一九八三（昭和五十八）年七月　西部方面総監部幕僚長

一九八五（昭和六十）年七月　防衛庁技術本部技術開発官

一九八六（昭和六十一）年八月　陸将にて防衛庁を退官。日本電気㈱に技師長として招かれる

一九八七（昭和六十二）年　日本アルパイン・スキー兵協会（ＪＡＳＡ）設立とともに副会長となる

一九九〇（平成二）年六月　ドイツ、ミッテンワルト市で開催された第五回国際山岳兵連盟（ＩＦＭＳ）総会に日本代表として出席

一九九一（平成三）年四月　外務省参与に任命され、国連特別委員会委員となる。この委員会は国連安保理決議に基づいて設置された委員会で、イラクの大量破壊兵器の廃棄に関する業務が行われ、阿達委員は化学兵器作業グループに

所属、ニューヨーク、ジュネーブ等に出張を繰り返し、一九九一年五月、六月、十月、十二月および九二年二月の計五回の特別委員会の会合等に出席、多忙を極めた

一九九二（平成四）年三月八日　ニューヨークから帰国直後、急性心不全のため急逝。行年六十二歳

生前、本会の企業募金等にも気持ちよく紹介の労をとられ協力をされたことも、感謝をこめて付記しておきたい。

（松田雄一）

［編者註］筆者の春日部薫氏は中京山岳会特別会員で、もとキスカ島守備隊の通訳官であった。一九八五年五月、キスカ島に無血上陸した米国第八七山岳歩兵連隊所属の登山家でもあったシャーマン・スミス氏から一通の書簡が本会佐々会長宛届いた。この手紙には、スミス軍曹が地下壕の入口で入手した日章旗に「祈武運長久、贈春日部薫君、中京山岳会」として同会員の名前が見られ、これから察するとキスカ島には強力な日本の山岳部隊がいたのではないか、是非春日部氏に会いたいというものだった。

こうして当会の橋渡しが縁でスミス軍曹が来日、春日部氏と対面、幸いに春日部氏はアメリカ生まれの英語の出来る通訳官であったことも幸いし、旧日本軍には山岳兵部隊はなかったが、このキスカ守備隊を山岳兵部隊とみなし（この部隊には本会名誉会員、望月達夫氏もおられた）日本アルパイン・スキー兵協会（ＪＡＳＡ）が設立され、国際山岳兵連盟（ＩＦＭＳ）への加盟が認められ、阿達憲氏はその会長代行として、国際山岳兵連盟総会の日本開催のため心を砕かれ、日本には山岳師団、山岳部隊といった受け皿のない困難な状況をおして準備をすすめようとしていた直前の急逝であった。追悼文の内容がややＪＡＳＡ中心となっているのは、このためでご了承願いたい。

川端信治氏（一九〇七～一九九二）

川端信治氏は一九二七年（昭和二年）静岡県立静岡工業学校電気科卒業以来、一貫して電気供給の会社の技術者として生涯を全うされた。一九四五年の日本の敗戦は灯火管制下の暗く不自由な生活からの解放でもあった。日本の復興には電力は総てのエネルギーであり、電力会社はその供給には火力発電、水力発電で賄った。天竜川、大井川を管内に持つ中部電力は敗戦にひしゃげられた日本の工業力の発展のため、巨大なダムをつくり発電力を増大させていった。山奥に作る発電ダム建設は資材・作業員輸送のため、戦前には考えられなかった軌道や立派な作業道路が作られた。

南アルプス南部の山々は、主として戦前には山梨県、長野県から入山しており、太平洋側の静岡市から南アルプスに登れることが出来るのを知っている人はあまり無かった。中部電力では戦後、直ちに大井川に次々と発電ダムを建設していった。ダムの完成後はこれ

追　悼

OBITUARY

名誉会員

早　川　種　三氏

HAYAKAWA Tanezō
(Hon. Mem.)
(1897～1991)

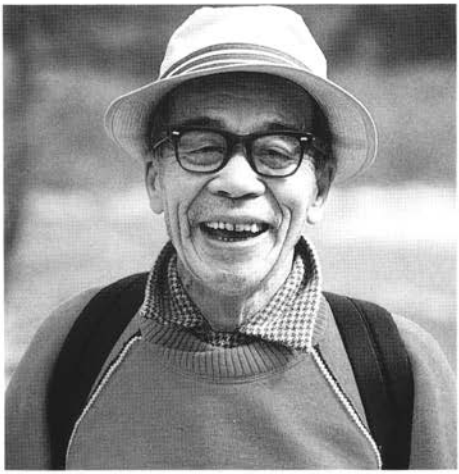
名誉会員

谷　口　現　吉氏

TANIGUCHI Genkichi
(Hon. Mem.)
(1910～1992)

山　田　二　郎氏
YAMADA Jirō
(1905～1992)

国　分　勘兵衛氏
KOKUBU Kanbei
(1907～1991)



泉　　隆次郎氏
IZUMI Ryūjirō
(1912～1991)

佐　藤　金　一氏
SATŌ Kinichi
(1913～1991)

酒　井　昭　市氏
SAKAI Shōichi
(1927～1991)

徳　永　芳　雄氏
TOKUNAGA Yoshio
(1908～1991)

川　端　信　治氏
KAWABATA Shinji
(1907～1992)

阿　達　　憲氏
ADACHI Ken
(1930～1992)

早　坂　敬二郎氏
HAYASAKA Keijirō
(1946～1992)

佐　藤　敏　彦氏
SATO Toshihiko
(1933～1992)

大　西　　宏氏
ŌNISHI Hiroshi
(1962～1991)

長谷川　恒　男氏
HASEGAWA Tsuneo
(1947～1991)

らの交通手段は一般にも次第に解放され、利用できるようになった。南アルプスが戦後、静岡市から登られる様になったのは、中部電力の大井川発電ダム建設の付随的な偉大な結果である。戦後の南アルプス登山は南アルプル南部の開拓登山史といってもよい。大井川の二軒小屋までの林道の開通によって日本全国の登山愛好者たちは、南アルプス南部の登山の入山か下山には大井川のコースを取るようになっていった。戦前は勿論のこと、戦後も静岡よりの林道が無かった頃は二軒小屋までは四日、早くて三日掛かっていた。これが井川林道の完成開通によって乗用車で四、五時間で行けるようになった。事の善し悪しは別として、南アルプス登山が日時的に短縮され、多くの登山愛好者たちの登山意欲を掻き立てる事となった。

この様に南アルプスの戦後の開拓期に中部電力では井川ダム建設に伴う発電所建設を引き続き行った。発電所建設とともに送電線敷設の工事が同時着工されていった。長期にわたる送電線敷設工事のため、多くの作業員宿舎が建設された。その内の一つ、口坂本から大日峠を越えて井川本村までの物資輸送の長いケーブルの中間点に、保守点検の大日峠管理小屋が作られてあった。井川ダムの発電事業が開始され、不要になった作業員小屋や物資輸送のケーブルも井川林道の開通で取壊し撤去された。しかし、大日峠中間地点のこの管理小屋は、当時、中部電力配電課工事係長であり、中部電力山岳部部長であった川端氏の努力で、取壊し撤去せずに中部電力山岳部の山小屋として改造され、多くの部外者の山岳愛好家にも、広く開放された。当時としては南アルプス南部の山に、民間での山小屋の第一号であった。

今は大井川鉄道の井川線として運行されている、ジーゼル軌道は井川ダム建設時に中部電力の発電ダム建設のための物質・要員の運搬手段であった。従って部外者は原則として利用できなかった。エンジンと愛称されていたジーゼル機関車に、県内の山男たちは千頭、井川間をほぼ一時間で走るノンストップの「エンジン」乗車の便宣を、川端氏、同氏の部下の鈴木正平氏から世話してもらっていたものであった。戦後、南アルプス南部登山の展開に地道な貢献者としての川端氏の存在は大きい。

略　歴

一九〇七（明治四十年）七月十一日静岡県清水市に生まれる
一九六一（昭和三十六年）十二月日本山岳会に入会（会員番号五三二五）し、静岡支部役員等を歴任。一九八九年六月より死去まで静岡支部顧問として活躍
一九九二（平成四年）三月二十六日没。享年八十五歳　諡名俊峰信鑑居士

（山本朋三郎）

熊谷太三郎氏（一九〇六～一九九二）

熊谷さんの山の著書『郷土の山々』（一九六二年五月発行）、『続

郷土の山々』（没後に刊行）を見ていくと、同氏の登山は青年時代の一九二〇年からの八年間（中でも後半の三年）と、一九四五（昭和二十）年から一九六二年までとなった福井市長時代との、二つの期間に分かれている。

もちろん、熊谷さんは参議院議員に当選してからも山を忘れたことはなく、それ以降に出版された幾冊かの『歌集』（同氏はアララギ派の優れた歌人でもあった）には、特にふるさとの山の歌が、多く数えられるが、実際に山に脚を向けられることは、少なくなっていた。

年譜によれば、同氏の登山は一九二〇年、中学二年の八月の木曽御岳から始まっている。この時期は年一回のペースで浅間山、白馬岳、槍ヶ岳と登山は続くのだが、福井中学時代に熊谷さんが打ちこんでいたのは、むしろ野球部であったと思われる。当時の福井中学は県大会優勝の実力で、同氏のポジションはセカンドであった（のちに熊谷組の野球部が盛んになるのも、野球少年だった同氏の影響が大きかったろうと考えられる）。それが、第一高等学校に進学した熊谷さんが、福井中学の三年先輩であった深田久弥氏と出逢うことによって、一度に山に向かい始めるのである。

一九九一年の十二月に、同氏の歌集『汽車の旅』の出版記念会でお会いすると、「今度『福井から見える山々』を改めて出版したいとおもっています」と、話された。そこで、「それはそれは、期待していますよ」といったのだったが、熊谷さんは、

「期待されても困ります」

と、どこか恥ずかしそうな顔になった。福井の山が本当に好きでなければ、あのような表情にはならない。

『福井から見える山々』は、一九五五（昭和三十）年に福井市長時代の同氏の随想集として出版された、「たちあがる街から」に、巻末付録の様子で併載された。この付録がなかなかの名品なのである。それもそのはずで、同文のはしがきによると、熊谷さんが「福井から見える山々」のスケッチ図を作ることを思いたったのは、まだ京都大学の学生であった一九二八年ごろ、というから恐れ入る。私などは、かけ出しという気分になる。

そして、戦争による中断などもあったが、ついに三度目の試みで、スケッチは一応の完成となったのだった。熊谷さんは、

—ありていに言うと、ここまで仕上げるのには、少なからず労力と時間とを要し、その上殆ど無駄に等しい経済的消耗をも重ねたが、自分の好きなことをするためだから、少しも苦痛でなく、却って満足であった。

と、書いている。まことによく理解できる心境だ。

その上、熊谷さんの仕事振りは実に詳細にわたるのである。かねて不明の山頂を、どうしても確かめたいときは、中学野球時代のエースでやはり山に転向していた泰氏としめし合せ、指定時刻に一方は山頂で大きな旗を振り、市長は、市役所三階に陣取って、天体望遠鏡（私費で購入）でそれを確認するという念の入れようであった。

したがって、『福井から見える山々』には、実に幽かな山頂も、全て登録されている。私など、これまでにも山名を調べ文書を書くおりに、ずい分参考にさせてもらった。そのことはお会いした時、何度か伝えてはきたのだが、熊谷さんはやはり恥ずかしそうに、

「いやいや」
というばかりであった。
また、一九五六（昭和三十一）年四月からお亡くなりになるまで、県山岳連盟会長に就かれている。福井開催の国民体育大会や山岳連盟の海外登山では、色いろな点で、お世話になっているはずだ。
現在、日本中のあらゆる都市で、俄かに再開発というかけ声が起こって、街のスカイラインは日に日に変わりつつある。それが福井市では、熊谷さんにいわせると「殆ど無駄に等しい労力と時間」によって、今は消滅した市役所望楼から見た、昭和二十年代のスカイラインが、後世に残されることになったのだった。熊谷氏の本業であった建設業に思いを寄せると、いささか皮肉の感はまぬがれえないのでもあるが。
しかし、歌人熊谷さんの文章には、簡潔なリズムがあり、遠くに続く山やまを眺めて、次第に吸いよせられる気持ちになっていった遠い昔を、手もとに引き寄せる魅力が秘められている。
このことは、時間があれば、ビルの窓辺に立ち、汽車の窓に顔を近づけて、ふるさとの山なみに目を遊ばせてきた、熊谷さんの日常を暗示してもいるのだろう。やはり、山好き人生を歩み続けたひとの一人といえるのだ。
熊谷太三郎氏は一九六三年一月日本山岳会入会（会員番号五五一九、紹介者は深田久弥・今西錦二両氏）。

（増永迪男）

酒井昭市氏（一九二七～一九九一）

私が酒井先生と同行したのは、主に大病されたあとだった。
大手術後、始めて大黒山登山のため、お宅に迎えに伺ったとき、いつもそうであったが、玄関で両ひざをついて丁寧に迎えて下さるそのやつれられたお姿を拝見したときは、非常にショックであり驚きであった。
でも再び登れるようになったことを非常に喜んでおられた。
私の場合、小学生だった子どもも一緒だったので小学生の子でも登れる山ということで登る山を選んで下さった。そして子どもたちには、「君たちはしあわせだね。こうやってお母さんに山に連れていっていただけるから…」とよく話して下さり、大変かわいがって下さった。
途中、車内での話はつきることなく今となってはとてもいい思い出となり学ぶことも多かった。雪山をスキーでかけ降りた話、富士山での登山研修中参加者の一人を死なせてしまい、しばらくの間山から遠ざかった話、教員時代、朝早く学校に行き教室で登校する生徒を迎えた話、管理教育の強化での苦労話など、すべて過去となったことを懐かしむようなお話をしみじみと聞いたものだ。又山に登る心掛けとして、メモをしっかりとること、山にはバナナの皮一つ捨ててはいけないこと、朝早立ちをすること、降水確率一〇％であっ

ても無理をしないこと、その他いろいろなことを説明を加えながら丁寧に教えて下さった。

また自分の生きた証しとして何かを残していきたいとよく話されたが、それが何冊かの山の本の出版であった。特に農山村に生きて、生涯日の目にあたることのなかった古老たちに関心を持たれ、雑誌や新聞の記事にされることがあった。そこに先生のやさしい人柄を感じた。その取材の折には事前に依頼してあったこともありその土地の人たちは丁重に迎えて下さり先生の取材も真剣であった。じゃがたいもを御馳走になったり、わさび漬けをお土産に頂いたり、あちこちで人の心のあたたかさにふれた。

「夕べは一睡もしていません」「食べ物を受け付けずぜんぶもどしてしまいました」「熱が三十八度ありました」…こんな言葉を車中で何度聞いたことか。しかし登る脚どりは確かであった。これを執念というのだろうか。道中や頂上でお地蔵さんや、お社などあるときはいつも手を合わせられた。その真剣さにつられて私も手を合わせる習慣がついた。再び山に登れるようになったことへの感謝と生き長らえることを祈って拝まれたのだろうか。

先生はいつも、苦労して登った山ほどいつまでも心に残るものだとおっしゃっていた。熊の気配を感じて、うら声を出したり笛をふいて登った猫峠、今は廃道となり背たけよりはるかに高いヤブをかき分け、泣きわめく娘を連れて登った鉄嶺峠、二メートルほどある雪の上をすべり落ちる危険を心配しながら登り、頂上近くでキラキラ輝く樹氷をみた毘沙門岳、けもの道を歩きいのししのぬた場を見つけた笙ケ岳など今となっては大変よい思いでとなり先生と一緒だからこそできたのだと感謝している。

最後の山行となったのは、一九九一年の成人式の日、雪の中を登った岩村Ⅰであった。このときとその前の十二月二日登った天瀑山とでは、先生は今までにない弱い脚どりで、私が先導することになったが、後ろを振り返ると、そこに、一生懸命歩いておられる先生の大変痛々しい姿があった。岩村Ⅰでは思わぬカモシカに出あい、そのカモシカといっしょに記念写真をとっていただいた。カモシカについての話も豊富であった。そして雪の中から三角点を捜すのに行きつ戻りつしながらやっとの思いで捜し出し喜び合ったが、これが先生との最後の山行きになるとは夢にも思わなかった。

この山の帰り、次に登る山の約束をして別れたのだった。しかし、それが果たせぬまま入院され、ついに永眠された。一九九一年三月二十八日。

先生の奥様と学校で同僚であったことがご縁で先生に同行させて頂けたことを幸運に思い、生前に先生から学んだことを胸に、これからも登り続けていきたいと思っている。

先生がお亡くなりになったあとで、ご自宅には山関係者、友人、読者、教え子たちが尋ねられたり、お手紙を送って下さったりしているが、その中から先生の友人の玉井武博氏の詠まれた短歌をご紹介してこの拙い追悼文の結びとしたい。

山男逝く

君逝くを　朝の厨の新聞に
惚けてしばし　春寒の雨

頂きの指呼も危ぶみ　崖降りし
　山の勇者よ　病床に逝く
登頂記の稿をベッドに　喘ぎいし
　君在りし日を　まぶたに焼く
　山萌ゆ
病みてなお飛騨ヤブ谷の　攀じ道を
　探りし君の　逝きて山萌ゆ
雑踏の孤独わびいし　君なれば
　山萌え初めし　谷に眠らん
ゆくりなく　書店の棚に君の籍
「飛騨の山山」墓標のごとく

（藤田純江＝大垣山岳協会会員）

略　歴

一九二七年　岐阜市に生まれる
一九四七年　岐阜師範学校卒業
一九六二年　岐阜県山岳連盟常任理事
一九六八年　日本山岳会入会、会員番号六四一九
一九六九年　岐阜県山岳連盟副理事長。後に相談役
一九七〇年　日本山岳協会理事。文部省登山研修所講師
一九八四年　これまでの三十七年間岐阜県内の中学校に勤務、やがて起った校内暴力の嵐に対して管理教育強化の情勢の下で、教務主任、生活指導を担当し、苦悩、苦闘の結果健康を害し、定年まで二年残して依願退職
一九九一年三月二十八日　逝去

主な著書

一九七五年　岐阜県山岳連盟編『岐阜百山』を岐阜日日新聞社から出版。東濃・飛騨山系を分担執筆
一九八八年　『飛騨の山　美濃の山』を山と渓谷社から出版
一九九〇年　『飛騨の山山（ヤブ山編）』をナカニシヤ出版から出版
一九九二年　遺稿『飛騨の山山（国境編）』をナカニシヤ出版から出版

（酒井さんは日本山岳会岐阜支部の会員であり、著書からも分かるように飛騨、美濃の山に情熱を傾けてこられた方であるが、本会支部会員と山行を共にされたことは少なかったようである。そこで酒井さんが『飛騨の山山（国境編）』のあとがきの謝辞に挙げておられる藤田純江氏にお願いしたのが本稿である）

（松井辰彌）

佐藤敏彦氏（一九三三～一九九二）

「今日はチャグチャグ馬っ子祭りです。久しぶりの五月晴れで大

にぎわいをみせております。もし和賀岳に来られるとしましたら何時頃になりますか？　うちの部員で行き度い者がおります。幕営する様でしたら同行させますが、テントも用意させます。（後略）」と書かれた敏彦君からの古い便りが出てきた。消印を見ると昭和四十六年六月十七日で、住所は月が丘三―二一―一〇、盛岡医大の助教授だったころのものである。

敏彦君を知って、まだ二、三年ぐらいしかたっていなかったと思うが、面倒見のよい彼は、私が和賀岳へ行きたいのを聞知して、こんな便りを寄越してくれた。実際に行ったのは翌年の六月で、川崎精雄、山田哲郎両氏が同行したが、彼の配下の山岳部員に厄介になった。憶い出にのこる好い山登りだったが、既に書いたことがあるので、ここには省く。

敏彦君は、あまり長い手紙は書かなかったが、そのかわり夜おそく電話をくれることが屢々あった。誘われて初めて北上山地の山へ行ったのは、多分一九八二（昭和五十七）年四月の朝島山、大麻部（おおまぶ）山、石上山が最初だったが、それが大変気に入ったので、以後何回か彼の誘いにのって北上の山々を訪れた。牧野衛さん、川崎さんや織田沢美知子さんと一緒のときもあったし、今西錦司さんが行かれたとき同行したこともあった。紀子夫人が殆どの場合一緒で、よいアシスタント振りを発揮していた。

そんなわけで、後年敏彦君が中心になって纏めあげた『かぬか平の山々』に載っている山の四分の一ぐらいは登ったことになりそうだが、偏えに彼のお蔭という他はない。

そのなかで今でも忘れられないのは、今西さんが『遠野物語』に出てくるマヨイガの白見山へどうしても登りたいと云われるので、出かけたときだが、昔の切あけなどまったく判らなくなって、酷い笹藪に化していたため、何人かで木鎌や鉈を使って道造りをしながら登ったことだ。これを敏彦君は今錦参道と名づけ、その後に登った時のことを面白く書いている（前掲書74～76頁）。

遠島山へ行ったのは一九八九（昭和六十四）年十月で、敏彦君と同行した最後の山になった。私の家内が一九八七（昭和六十二）年春に大病をして以来、あまり遠出ができなくなったせいで、昨年十二月に永眠した時は、早速懇ろな慰めの電話を貰った。しかし、後から敏彦君の入院時をきいたら、それから僅か三箇月ぐらいだったようだ。私は、彼が入院したことなど露知らなかったので、四月二十三日の深夜、電話で彼の遠逝を知らされた時は、実のところまったく驚いた。内科医で医博の肩書をもつ紀子夫人は、普通の奥さんが味わう何倍かの口惜しさに堪えられた筈と思い、私の心は二重の悲しさに深く沈んだ。

敏彦君は故郷の安積高校から一九五八（昭和三十三）年に日大歯学部を卒業したが、山へ行く傍らボクシングにも励んだようだ。日大医科の先輩で、山が好きだった田村豊幸氏の誘いで、できて間もない南会津山の会へ入ったのも同年四月だった。そして一九六五年に盛岡へ移るまで、田村氏と男鹿岳、三倉・大倉山、木ノ俣川遡行をやり、更に大白森、小白森、大戸岳、額取山、会津駒、小野岳、美女峠など、まだ未開の会津の山々や阿武隈の山々を精力的に歩いた。野口冬人氏との共著『阿武隈と水郷』は、こうした結果できあがった。

一九六五年に盛岡の岩手医大歯学部に移り、間もなく本会に入会し、一九七一年アフガニスタン、一九七五年にカラコルムに出かけたが（『山岳』七十一・七十二年参照）、その後、本会の岩手支部長を笠原潤二郎氏から引き継ぎ、一九七九年に開業医となったことなどは略歴に詳しい。

一九六五年から亡くなるまでの二十数年間は、主として北上山地の、それまで登山者に顧みられなかった数多くの山々を、マイカーを使って徹底的に踏査した。それには岩手支部の会員が多く協力したが、その結果が『かぬか平の山々』となって結実した。（彼の計画には『続・かぬか平の山々』の編著があったことを後から聞いた）。

敏彦君は、また山村民俗に深い関心をよせ、現地での聞き書きなどを数多くつくった。山行の途次、僻村の民家を訪ねたり、営林署に勤める人の寂しい家や、牛番小屋を訪ねる彼の姿を屢々目撃した。何よりも孤村の人たちへの温かい愛情が、そこに迸り出ていた。おそらく僻地診療なども時々やっていたのであろう。一九八二（昭和五十七）年に遠野市で開いた日本民俗学会が無事終了した後、一人で物見山に登り、紅葉とアキアカネの大群に出合ったときの叙述（前掲書51頁）は、読者に忘れがたい印象を与える。

また、民俗ばかりでなく、極寒地の山岳に見られる構造土などにも興味をもって研究し、小雨降る安家森では、その実体を現地でわれわれに熱心に説明してくれたことも、今に忘れがたい。

晩年にやった仕事の一つとして、西川一三氏『秘境西域八年の潜行』上中下巻（中公文庫）の刊行（一九九〇年十月～九一年一月）に尽力したことを加えねばなるまい。

早池峯は平假名のへの字形をしていると云われるが、見る方向によっては槍のように尖っていたり、金字塔であったりする。それを見るのが敏彦君の北上の山々へゆく楽しみの一つだったようだ。彼の手引きで私も、実地にそれを何度か経験した。あまりにも早く逝きすぎた彼の霊は、いま北上の碧落にあって、まだそれを追い求めているように思えてならない

略　歴

一九三三（昭和八）年六月三十日、郡山市に誕生
一九五二（昭和二十七）年　安積高校卒業
一九五八（昭和三十三）年　日本大学歯学部卒業。日東紡績病院勤務。四月、南会津山の会入会
一九六五（昭和四十）年　岩手医大歯学部勤務、医学博士
一九七〇（昭和四十五）年四月　日本山岳会入会（会員番号六九三五、紹介者は伊藤彌十郎、安藤治）
一九七一（昭和四十六）年六～八月　アフガニスタン岩手医大医療踏査隊に参加
一九七二（昭和四十七）年　岩手医大歯学部講師をへて助教授
一九七五（昭和五十）年六～八月　日本山岳会岩手支部カラコルム、マルビッティン登山隊副隊長
一九七七（昭和五十二）年より日本山岳会岩手支部長
一九七九（昭和五十四）年八月　盛岡市茶畑に神農歯科医院開業
一九八二（昭和五十七）年　遠野市において日本民俗学会開催
一九九二（平成四）年四月二十三日　胃ガンのため死去。六月六日、

盛岡で「敏彦を語る会」が多くの友人たちによって行われた

他に日本民俗学会会員、山岳修験学会会員、岩手民俗の会理事長、岩手県文化財保護審議委員会第四部会長、日本民俗音楽学会東北北海道地区理事（同初代岩手支部長）、日本ヒンズー・クシュ、カラコルム会議会員

著書・編書

『郡山市周辺のハイキング』編著・一九六三（昭和三十八）年三月郡山市役所観光課。

『阿武隈と水郷』野口冬人氏と共著・マウンテンガイド、一九六五（昭和四十）年四月山と渓谷社。

『日本山岳地図集成』編著・一九七五（昭和五十）年四月学習研究社。

『岩手の民俗散歩』金野静一氏と編著・一九八四（昭和五十九）年五月熊谷印刷出版部。

『かぬか平の山々』編著並に監修・一九八八（昭和六十三）年四月現代旅行研究所。

『四季の民俗散歩』編集代表・一九八八（昭和六十三）年十二月熊谷印刷出版部。

『全国虎舞考』編著・一九九二（平成四）年三月釜石市地域活性化プロジェクト推進本部。

（望月達夫）

早坂敬二郎氏（一九四六～一九九二）

早坂は山形県羽黒山の宿坊（大進坊）の次男として生まれている。少年の頃は多少早熟でツッ張りだったらしい。それも山形県立鶴岡南高校に進学し、山岳部に入部することにより、山に熱中する少年と変わっていったようである。当時の山岳部顧問の木村先生、先輩、同級生諸氏との出会いが、そうさせたのではないかと思われる。そして、この鶴岡南高校で出合った人たちこそ、その後も彼を最も理解してくれた人たちであった。また、彼を語るうえでご両親の深い愛情と理解が終生あったことを見逃すことはできないだろう。

彼は農大山岳部時代、海外での合宿ということに取り憑かれ奔走していた。しかし、夢に見た海外合宿ということを成し得なかったことも一因してか、卒業と同時にインドへ旅立って行った。

キシュトワール山群のブラマー峰（六四一六㍍）に先輩の甲田氏とその友人二人と共に挑戦する為であった。この山行は彼自身にとっては何の激しい行動もないまま終わりを告げたようである。翌年、私たちとこの山域の最高峰シックルムーン（六五七四㍍）に挑むことになるのだが、この山行もルート選定の過ちと登山日数の関係で登頂には至らなかった。

一九七〇年のブラマー登山が終わると、彼はネパールへ入り、当時入域困難であったカンチェンジュンガ周辺の旅をしている。目的

は今も未踏峰として残るトゥインズ（現在名ギミゲラチュリ、七三五〇メートル）を自分の目で確かめたかったのであろう。「トゥインズへ続けることのできる山行を」というのが、当時の我々の目標だったことからすれば当然であったろう。トゥインズは、一九六三年農大隊（宮沢憲隊長以下五名）が挑み、七〇〇〇メートル地点に最終キャンプを設営しながら断念せざる得なかった山なのである。

トゥインズは彼の「心の支え」でもあったし、最も登りたい山のひとつであったに違いない。

ふたつの山行の失敗とネパール滞在中に肝炎を患ったことで、この時期彼は落ち込んでいたようだ。

それを払拭する為か、病が癒えるとともに今度は南米に転じている。チンボラソ（六三一〇メートル）、コトパキシ（五八九七メートル）、ワスカラン（六七六八メートル）、アコンカグア（六九六〇メートル）と登っている。チンボラソは、一九七一年に山岳部々員が立案し実践したその登山において、還らぬ人となった後輩の死を悼む山行であったろう。ワスカランでは頂上直下まで達しながら他の日本人パーティーの救助を優先させ登頂を諦めている。このふたつの山行は、彼のやさしさと心の広さの一端を感じずにはいられない。また、アコンカグアでは二十時間近いアタックで凍傷を負い足指一本を切断という幸苦も舐めている。

しかし彼はネパール、インドでもそうであったように、この旅においても多くの友人を得ることになった。人柄だけでは説明できない魅力が備わっていたからだったといえよう。

農大山岳部監督に就いてからは、数々の失敗を踏まえた指導は厳しいものであり、時間の許す限り学生と山行を共にしていた。その指導によって多くの後輩が育ち、山岳会諸氏の温かい支援もあって機も熟したとし、一九八六年中国崑崙山脈最高峰（七一六七メートル峰）の登山へと発展していった。崑崙では若い隊員を巧みにリードし、長年培ってきた彼流のタクティクスで全員登頂を果たしている。じっくりと取り組み、キメの細かさ細心さが彼の身上といっても良いだろう。その前年、日本山岳会の中国登山隊に農大より馬場哲也、小林新二を送り出し、自らは黄河源流隊の副隊長として参加、多くの会員諸氏と交流を深め楽しい旅を味わったようである。

そして崑崙の三年後、一九八九年には、これまでの登山を一歩進めた長大なラキオトピーク東南稜からナンガパルバット登頂を目標に出掛けている。これは彼の「農大の山登り」の実践であった。後輩が育ったこの時期に実行したのだろう。その心情を「ナンガパルバット一九八九」報告書にこう書いている。

「農大の山登りとはチームで行う登山を基本とする。個々人の創造性がある一定の方向性のもとに編成、組織されると、単なる個人の集合体を超えた有機体となる。そして、チームの目的遂行の過程で各々が自ら創造性を高めて実践すれば、その相乗効果によって限りない可能性をひらくことができる。それが我々の山登りの基本姿勢である。」

しかし、これもヒマラヤでは珍しい落雷事故による馬場哲也君の落命という悲運もあり登頂断念となった。さらにその年の暮れ、白馬岳で中嶋真也君を失い、彼の悲しみはいかばかりであったろう。だが、高みへの情熱は尽きることなく、それはブロード・ピーク（八

〇四七㍍）という形で結実する。後日、隊員のひとりが「こんなに簡単に八千㍍峰に登れるとは思わなかった」と述懐している。彼も農大山岳会々長を含めた隊のリーダーとして、無事成功を素直に喜んでいた。

昨年アコンカグアへ一緒に出掛けた折、「オジサン達を連れて来るのに丁度いい山だナー」といっていた。新たに気心の知れた仲間との山登りを考えているようであった。

今年（一九九二年）は五月中旬よりガッシャブルムⅡへ行く予定であった。「六十歳まで山登りを続けたい」ともアコンカグア登山中もらしていた。また、「金を貯めておけよ」などとも私にいっていたので、ガッシャブルム後の計画はすでに描かれていた様である。多分それはエベレストであり、トウインズからのカンチェンジュンガ登頂であったろうと私は考えている。

多くの先輩、後輩、友人たちの懸命な捜索が続いた七十五日間、特に若手OB、学生たちの行動は連日であった。彼らに「仕事の方は大丈夫か」と気遣うと、「いや、早坂さんの方が大事ですから」という一言であった。

略　歴

一九四六年　八月六日山形県にて出生
一九六二年　山形県立鶴岡南高校入学、同校山岳部入部
一九六六年　東京農業大学農学部農業工学科入学、農友会山岳部入部
一九七〇年　同学卒業
一九七一年　インドヒマラヤ・ブラマーⅠ峰
　　インドヒマラヤ・シックルムーン
一九七四年　日本山岳会入会　会員番号七八二四
一九七五年　ペルーアンデス・ボンゴス北峰登頂、ワスカラン、チンボラソ登頂
　　アルゼンチンアンデス・アコンカグア登頂
一九七六年　㈱デパック設立
一九七七年　キリマンジャロ登頂
一九七八年　キナバル登頂
一九七九年　チンボラソ登頂、コトパクシ登頂、農友会山岳部監督就任
一九八二年　雪岳山
一九八五年　日本山岳会中国黄河源流隊参加
一九八六年　東京農業大学中国崑崙山脈最高峰七一六七㍍峰登山隊々長として登頂
一九八七年　日本山岳会青年部、学生部担当理事就任
　　ナンガパルバット・ルパール壁中央側稜、キリマンジャロ登頂
一九八九年　東京農業大学ナンガパルバット登山隊々長
一九九〇年　ナムチャバルワ偵察
一九九一年　東京農業大学ブロード・ピーク登山隊々長、登頂
一九九二年　一月アコンカグア登頂
　　三月二十二日　北アルプス大天井岳頂上付近を硫黄尾根より縦走中、雪崩によって逝去。享年四十五歳

西岡　京治氏（一九三三～一九九二）

（原　康博）

西岡京治（ケイジ）君は一九三三（昭和八）年二月十四日、当時の京城（ケイジョウ）、今のソウルで生まれた。彼が大陸育ちであったことは、意味深長かもしれない。なぜなら、大陸育ちの日本人には、なかなか雄勁な人材が多く、彼の一生はまさにそうだったからである。しかし京城帝国大学医学部教授の父君辰蔵氏の長男として生まれた彼は、勿論第二次世界大戦後の日本で大部分の学歴をすごした。一九五六年に大阪府立大学農学部の遺伝育種学教室を卒業したことは、当時教授だった中尾佐助さん（マナスル登山の偵察隊及び第一次登山隊の隊員）との深い因縁の始まりであった。

その中尾さんの推薦で、西岡君は一九五八年の私がリーダーを勤めた「西北ネパール学術探検隊」の隊員になった。この隊の行動ぶりは私の著で「鳥葬の国」として出版されたが、それを御覧頂くと彼の登山から学術にわたる活動ぶり、更にチベット人たちに好かれた人柄がかなり沢山のべられている（一九六〇年刊だが、一九九二年また講談社学術文庫として再版）。彼が野生大麦まで発見したことは、師の中尾さんも「しまった。先手をとられた」と叫んだ程で、故木原均博士にも喜んで頂いた。ここに西岡君の物事のやりっぷりの面目も躍如としている。

この遠征の帰途、私がヒマラヤ山村への技術協力を示唆したのに対し、彼はもうすこし登山と探検をやりたいと答えた。その言葉通り一九六二年には東北ネパールのヌプチュー峰初登頂を含む学術探検隊（中尾佐助隊長）に、副隊長として参加。その前年に結婚した里子夫人とのハネムーンにもなった。隊の解散後も二人で半年間チベット人地帯に滞在している。その結果、「ヒマラヤはもう登山や探検の時代ではない。私はブータンへ技術協力で入る」といって、帰途シッキムにブータンハウスを訪ね、ブータンの要路者と交渉を始めた。ここに、あくまでも一流のパイオニアワークを志す、彼の面目が端的に現われている。

そのブータン入りが実現したのは、一九六四年の春。当時のブータンの皇太后、皇后、その姉君ターシー・ドルジェさんなどは皆西岡君を気に入っていたが、インド政府の暗黙の抵抗をのりこえるのは大変だった。私の関係した範囲では、当時の駐カルカッタ総領事東郷文彦さん、京都大学生物誌研究会々長の芦田譲治教授、および私の三人は、スクラムを組んで応援団を勤めた。西岡君には、このように、応援したくなる人間的魅力が大いにあった。その後も西岡農場が数十年に一度という大洪水でやられて再起の資金が必要となった時、時の総理・故佐藤栄作さんと外務省と私とが応援に動いたのも、彼の人間的魅力と一点の私心もない堂々たる仕事ぶりに惚れこんだからだった。

ブータン入りに際して彼に助言したことのひとつは、最初の一年間は技術協力などせず、国内を広く歩けということだった。彼は「私

もそう思う」といって夫妻でこれを実行したことである。これは、いうべくしてなかなか実行できないことである。だがこのような徹底した現場の実態把握こそ、その後の草の根元からの、住民と共に推進する彼の技術協力の真骨頂であった。ブータン政府のトップたちが「私たちの望むところをピタリと先取りして進めてゆく」と舌を巻いた由である。

彼が全くブータンの身になって農業指導をしたことは、去る大阪の花の万博の時、ヒマラヤの名花メコノプシス（青いケシ）の花が永い会期中いつもブータン館に届いたことでも判る。背後に彼の手配がなければ、到底こんな芸当はできなかったろう。

こうして第二年度から始まったパロ県ボンデ村のモデル農場は、着々と実績をあげ、民衆に親しまれつつ根を下ろしていった。現地で間にあう技術ならそれを生かす。不足ならアッサムヒマラヤの奥地にまでもでかけて、ミタン牛を沢山導入する。日本の進んだ農業技術であろうがハイテクであろうが、それがブータンの大地と農民にふさわしいものなら、何でも積極的に取り入れる。これ見よがしの技術のための技術という思想には決して溺れない。

彼の数かずの実績のうち、中部ブータンのシェムガン県総合開発計画の責任者として実施・推進にあたったことは、最も本懐だったろう。そこは焼畑耕作民地帯だった。その彼らが参画意欲をもって自分らの村づくりに立ちあがるようにするため、彼が私に語ったところによれば、何と数十カ村に、各村に泊りこみで語りあいに出むいたのである。計画は完全な成功であった。

ブータン政府が彼に与えた栄誉のうち、恐らく最も誇らしいのは、外国人にも与え得る最高の称号「ダショー」が一九八〇年に国王から与えられたことである。

そろそろブータンから引きあげ、日本を拠点に、全ヒマラヤ山域の保全と活性化に大所高所から指導をしてもらいたい。そう思って西岡御夫婦と語りあったのが、今年の一月だった。まさかこんな幕切れになるとはと、無念である。夫人のお話しでは、歯から細菌が入り、めぐりめぐっての腎不全とか。

国王は国葬を決定し、三月二十三日から三日間通夜が行われ、全ブータンの県知事をはじめ三千人がお別れを告げた由。ビデオで見ると、沿道に並んで見送った五千人以上の庶民まで、心から彼の死を悼んでくださった空気が、よく判る。

彼のやったことの意義を、単に後進国ブータンへの先進国からの恩恵的援助のように見做しては誤りである。環境破壊・資源濫費・心や人の和の荒廃でゆきづまった今日の文明が、「もうひとつの文明」への路線変更を模索している今日、それに向けパイオニア的挑戦を実践したのが彼にとってのブータンなのである。西岡君よ、もって瞑すべし。

（川喜田二郎）

［編者註］元会員西岡京治氏は一九五八年入会、会員番号四六五五。紹介者は田辺主計、加藤泰安。『山岳』五十四年（一九五九年）に川喜田二郎、並河治両氏と三人で「西北ネパールの山旅（一九五八）―ムクト・ヒマール、カンジロバ・ヒマール付近―」を執筆している。

長谷川恒男氏（一九四七～一九九一）

契り一秒、離別一生。この世は誰もが不如帰。（メメント・モリ、藤原新也著）

長谷川恒男がカラコルムのウルタルⅡ（七三八八メートル）で、九一年十月十日に鬼籍に入って早一年を迎えようとしている。

月報の『山』や商業誌に、色々の方々が追悼文を執筆されているので、同じ様な文章を書いても仕方ないと思う。「素晴らしい人だった」「いい人だった」等という通り一遍のことを書く気も更々ない。ある意味では追悼文にはならないかもしれないことをお断わりしておきたい。

アルプス三大北壁冬期単独登攀の輝かしい記録と、その後の一連のヒマラヤ、カラコルム山行のギャップはあまりにも大きい。それを「不運だった」と言うだけで片付けられるだろうか。

確かに現代のヒマラヤ登山は、単に頂きに立つというだけでなく、登山のスタイル・質・内容を問われる時代である。だが、八五年ガッシャーブルム4峰西壁を登攀（頂上には立っていない）したW・クルティカは「頂上に立ってこそこのクライミングは全きものとなる」と記している。

「困難を追求したから、ヒマラヤ・カラコルムでの頂上には恵まれなかった」という見方もあるが、八三年のダウラギリ1峰、八五年のチョモランマは、通常のシーズン、通常のルート、通常の登山スタイルである。八四年のナンガパルバット南西稜にしても、この山のノーマル・ルートとなった西面ディアミール壁キンスホーファー・ルート程ではないにしても、数登はされているルートである。

ヒマラヤ・カラコルムの頂きに立てなかった理由・原因は他にあるのではないだろうか。

私への批判を覚悟で敢えて言わしていただくならば、①山（ルート）の選択、②組織（隊の構成）、③戦術の問題ではないかと思う。①と②は当然関連している。個々に詳細を述べることは、与えられた文章タイトルと趣旨が異なるので省きます。

そして、ウルタルⅡ峰での遭難を考える時、意識と実際のギャップが大きかったのではないだろうか。というのは、三大北壁を登攀した頃のような国内での登攀（冬期）を行っていなかったと思います（私の思い違いかもしれませんが）。ガイドとして数多くの山行をしてはいても、個人としてのシビアな登攀・トレーニングはしていなかったのではないでしょうか。ガイド山行が忙しすぎたということもあると思いますが。そこに、前述したように、意識と実際のギャップが生じていたのではないかと思います。もちろん経験の蓄積を否定するものではありません。

「自分が登ろうと思うからいけないんだ。山が機嫌がいい時に登らせてもらうんだ。いつもの口ぐせがふっと口から出そうになった。」（『北壁に舞う』）

現在はこの言葉が空しく思われます。個人的にも、そして組織（社

団法人日本アルパインガイド協会）としても、失ったものはあまりにも大きい。

批判的なことばかり書きましたが、私の本意は他にあります。

アディオス・アミーゴ。さらば岳友よ。二十代前半頃の、星と嵐同人の仲間は、ある者は鬼籍に入り、他は登攀から去り、二人だけが残っていた。そして昨年の事故で、ついに私一人となってしまった。登攀者として、ガイドとして、輝かしい足跡を語り継ぐためにも、生き続け、登攀続けなければならないと思っている。

略　歴

一九四七年十二月八日神奈川県愛甲郡愛甲町に生まれる。六三年㈱日本コロムビアに入社。神奈川県立神奈川工業高校卒業。十五歳から登山を始める。六九年から明星山の岩壁に四本の新ルートを開拓したのをはじめ、冬期登攀をつぎつぎに行い実力を養う。七一年退社後、（社）日本アルパインガイド協会公認のガイドとして活動を始める。

七三年第Ⅱ次RCC主催のエベレスト登山隊隊員として初の海外登山を体験し標高八三〇〇メートルに到達。七五年谷川岳一ノ倉沢に残された最後の冬期末踏ルート・滝沢第二スラブを単独初登攀。

アルパインガイドとして四季を通じて活動しながら、七七年から七九年にかけてヨーロッパアルプス三大北壁の冬期単独登攀を達成。八一年アコンカグア南壁の冬期単独初登攀に成功。その後チョモランマをはじめとするヒマラヤでの困難な登攀に挑みつづけ、九一年十月十日パキスタン・ウルタルⅡ峰登山中、雪崩により死亡。享年四十三歳。日本山岳会には七八年入会、会員番号八四六七。

登山年譜

一九七三年　エベレスト
一九七七年　マッターホルン北壁シュミットルート冬期単独登攀
一九七八年　アイガー北壁冬期単独初登攀
一九七九年　グランドジョラス北壁ウォーカー稜冬期単独初登攀
一九八〇年　アコンカグア北面ノーマルルート冬期単独初登攀
一九八一年　アコンカグア南壁フランスルート冬期単独初登攀
一九八二年　パタゴニア・フィッツロイ北東壁新ルート試登
一九八三年　ダウラギリ1峰北東稜
一九八四年　ナンガパルバット南西稜
　　ナンガパルバット中央側稜単独
一九八五年　チョモランマ北東稜
一九八七～八八年　チョモランマ北東クーロワール（冬期）
一九八八年　チョモランマ北東クーロワール（冬期）
一九九〇年　パキスタン・ウルタルⅡ峰南西壁
一九九一年　ウルタルⅡ峰南西壁

著書に『北壁に舞う』（集英社）、『岩壁よおはよう』（中央公論社）、『北壁からのメッセージ』（民衆社）、『山に向かいて』（福武書店）他、記録フィルムに『北壁に舞う』（一九七九年）、『ウータンと十二人の仲間・八ヶ岳編』（一九八二年）などがある。

（松本正城）

大西　宏氏（一九六二～一九九一）

彼、大西宏との出会いは、いまからちょうど十年前の一九八二（昭和五十七）年四月にさかのぼる。明大和泉校舎中庭の山岳部新人勧誘の出店に、「やっぱり入部したいんですけど」と例の調子で彼はやってきた。当時、明大山岳部に入るために、明大に入学した私は、上級生がたった四人という部員の少なさに愕然とし、半ば危機感とともに、一年生ながら新人勧誘の手伝いをしていたのだった。

「何だか変なのが来たな」。これが正直な私の彼への第一印象であった。しかし一週間、二週間と部生活を共にするにつれて、一年生時競走部長距離部門にいたという彼の脚力は群を抜いており、我々一年生はもとより、怖い怖い上級生までも、彼に一目おくようになった。こうして、二年生ながら山岳部では一年生の同期として始まった山岳部の四年間は、楽しいことより辛いことの方が圧倒的に多かったが、今から思い起こすといくつもの印象深いでき事がある。その中で一つを選ぶとすれば、やはり四年生時の、日本山岳会学生部マラソン大会初優勝だろうか。

当時の学生部マラソン大会は、早稲田が断然強く、前年上智に敗れるまで十連霸を成し遂げていた。そんな中、我が部は、一年生の時から、何とかそれを阻もうと、毎年のトレーニングの年度目標にマラソン大会優勝を挙げていた。一年時四位、二年時三位、そして三年時二位と、毎年一つずつ順位を挙げていき、ついに四年時、一区六位の出遅れを、二区大西の快走で一挙にトップに出て、猛追する早稲田を二十五秒差で振り切り、念願の初優勝を果たすことができた。ちょうどこの年は、私自身が学生部の委員長を務めており、その面目を保つことができたと同時に、部員の退部問題等で、いまひとつ盛り上がりに欠けた部内を活性化させる意味でも大きな意義があった。そしてこのときばかりは、いつも渋い顔をしていたコーチ陣も、心から喜んでくれた覚えがある。

ところで、後に我々が活動する舞台となったヒマラヤについては、二人とも一年生の時から、それを常に目標に山登りを行ってきた。大西は、四年生の時、ＪＡＣカカサイジモンガ隊に参加し、学生ながら抜群の強さで登頂を果たし帰国したが、何やら少しもの足りなさを感じているようであった。私は私で、ただ先を越された思いで、どこかへ行くチャンスはないものかと方々あたってみたが、結局何のあてもないまま、卒業を迎えてしまった。

こうなっては仕方がない、とりあえず就職するか、ということで、お互い中途半ぱな気持ちのまま、それぞれ採用通知の来ていた会社に入社した。

皮肉なことに、半年ほどして、明大で久し振りに遠征を出そうという話が、若手ＯＢの間から出て、大西と私も当然のことながらそれに加わった。しかしいざ動き出してみると、仕事上の都合や家庭の事情等で、メンバーが次々と欠け、しかも、当初の目標であったブロード・ピークの許可がおりず、第二希望のラカポシになり、隊そのものが危うくなってきた。そこで隊の実現に大きな力となった

のが、大西の他人まかせではなく、行くなら自分でなんとかするという姿勢であり、それに引きずられた私と、隊長の山本宗彦さんの三人で八七年五月何とか出発にこぎつけた。結果は、残念ながら、七月三日、主峰にはほど遠い東峰に達したところで断念となったが、力を出し切った、さわやかな後味の残るすばらしい登山であった。

この登山を契機に、三国チョモランマ、南米、北極点、エベレスト、マカルーと立てつづけに遠征をこなし、成果をあげた大西の次の目標はナムチャバルワだった。南極という別の計画も同時進行しており、当初は迷っているふしもあったが、いったんやると決めてからは、準備に雑務に大車輪の活躍で、隊にはなくてはならない存在になった。そして、登山が始まってからは、常に先頭に立ち、彼が頂上に立つことを誰もが疑わなかったが、十月十六日のあの雪崩が全てを無にしてしまった。

二十九年と五カ月、強烈な個性を放ち、常に周囲の人々に影響を与え続けた魂が、こんなにもはかないものかと、無常と無念さを同時に味わった気持ちは、一年たった今も変わらない。ただ、彼と過ごした貴重な時を思い起こすにつけ、私自身、いかに多くのことを彼から学んだか、そして、その彼に何らかの部分で寄与し得たことを、今は誇りに思う。

人生を太く激しく生きた大西よ、さようなら、安らかに。

（大西宏氏は一九八七年入会、会員番号一〇一三一）

（山本　篤）

会報「山」追悼文一覧

- **一九九一年八月号（五五五号）**
  追悼　元会員畠中善弥氏（穴田雪江）
- **一九九一年十月号（五五七号）**
  文蔵追悼（藤平正夫）
- **一九九一年十一月号（五五八号）**
  「海外の山」長谷川恒男の死（江本嘉伸）
- **一九九一年十二月号（五五九号）**
  追悼　大西君、安らかに（橋本　清）
  訃報　周百鍊氏逝く（A・O）
- **一九九二年一月号（五六〇号）**
  追悼　長谷川恒男君のこと（湯浅道男）
  追悼　大西宏氏の冥福を祈って（ロバート・スワン）
  ナムチャバルワに逝きし大西宏氏を悼む（宇都木慎一）
- **一九九二年二月号（五六一号）**
  追悼　早川種三先輩の死を悼む（田辺寿）
- **一九九二年三月号（五六二号）**
  訃報　熊谷太三郎氏
  追悼　谷口現吉名誉会員（山田二郎）
- **一九九二年五月号（五六四号）**
  ヘンダーソン夫人を偲んで（村山雅美）
  訃報　阿達憲氏、西岡京治氏

支部だより

北海道支部

平成三年度の事業計画は総会の決議に基づき役員二十二名担当のもとに左記のように実施された。集会は（全国集会参加を含む）

一、五月十四日　支部委員会（十名）
一、五月十八日　支部長会議・総会（一名）
一、五月三十一日　支部委員会（十二名）
一、五月三十一日　支部総会（三十三名）
一、六月二十六日　支部委員会（十七名）
一、十月十九日　観月会（おぼこ荘にて、三十三名）
一、十二月七日　支部長会議（一名）
一、十二月七日　年次晩餐会（七名）
一、十二月十四日　支部忘年会（四十八名）
一、四年二月二十二～二十三日全国支部事務局担当者会議（二名）
一、三月三十日　支部委員会（十名）

山行は春夏秋冬各期一回とサブ山行一回の五回計画通り実施する。

一、サブ山行　六月一日～二日　雷電山（山菜採取、十五名）
一、春期　六月二十二日～二十三日　羊蹄山（清掃登山、九名）
一、夏期　九月六日～十一日　岩手山、秋田駒ヶ岳、鳥海山、栗駒山（十六名）
一、秋期　十月十九日～二十日　雄鉾岳（三十三名）
一、冬期　四年二月八日～十一日　ニセコアンヌプリ周辺（三十七名）

山行五回延べ百十名、総会・忘年会延べ八十一名の参加を見る。その他編集委員の努力で支部会報『ヌプリ』が十一月三十日発行された。又、十一月三十日、支部会員名簿が作成され全会員に送付された。訃報として平成三年十二月五日、札幌の今井三男会員が六十二歳で亡くなられました。誌上をかりてあらためて哀悼の意を表します。名簿作成にあたり道内居住者で支部に所属していない方にアンケート実施の結果新たに七名の方が支部会員に追加されました。三年度新入会員十四名を加えて四年三月末現在の支部会員総数百八十六名となりました。

平成四年度に入り四月十七日支部総会（三十八名）、五月十六日支部長会議・総会に支部長出席、五月二十七日支部委員会（十四名）と実施された。新役員には海外担当に沼崎洋会員が入り植田淳慈会員は辞任、他の役員は留任となる。三年同様二十二名の役員により今年度の行事を推進する事となる。平成四年度事業計画は左記の通り決定する。主要山行は年四回、グループ山行年二回を計画。

一、春期　五月十六日～十七日　黄金山（清掃）
一、夏期　七月二十五日～二十六日　大雪山（愛山渓）
一、秋期　十月十日～十一日　芽室岳（兼観月会）
一、冬期　五年二月十三日～十四日　ニセコアンヌプリ

一、グループ山行　六月六日～七日　雷電山（山菜採取）、九月初旬　飯豊連峰（東北）
忘年会　十二月十二日
会報『ヌプリ』発行
海外研究の夕べ年二回予定
自然保護　全国関連集会参加等。なお来年度は支部創立二十五周年になるため準備委員による記念行事の検討等。以上のような計画のもとに各担当委員が細部に就いて検討する。

本道の場合広域のため会員の行事参加が困難なのが悩みの種である。出来るだけ山行の山の選択等により一人でも多くの会員との接触と親睦を図りたいと思う。道内の地区別会員分布状況は道央（七六・八パーセント）、道北（八・六パーセント）、道東（八・一パーセント）、道南（四・八パーセント）。今年度山行は道北、道東の山を加えて実施となっている。

（小須田喜夫）

■岩手支部

平成三年の秋季例会は九月十四日、十五日に岩泉町の嘉村旅館で実施。この年は天候不純で、会員お目当ての松茸は不作で当て外れであったが甲子山、岩泉黒森山に登った。

平成四年二月一日に冬の例会を盛岡市の三ちゃん寿司で行った。貫田宗男著『ふたりのチョモランマ』刊行記念と、二上純一氏の遺族送別会、和田庄司・藤岡知昭両氏の還暦厄払いの三つの趣旨を持ったもので、二上さんのご家族全員を含めて二十五名の参加であった。幹事は宮伸穂・佐藤紀子。

平成四年の春の例会を四月十八日、十九日川井村田畑旅館に泊まって大笹山登山で行った。この会は、ご夫妻とも会員である石村実・日満子両氏の中国新疆昌吉市への転居の送別も兼ねていた。実氏は新疆科学院に勤務されて作物研究の指導を、日満子氏は八一農学院で日本語教師をされる由。参加者は二十名で幹事は小口洋右。この会で、佐藤支部長の入院が話題になったが重体との認識は持っていなかった。一同のお見舞いを持って病室を訪れた代表者は、面会謝絶ではあったが、たまたまドアが開いていて面会が出来てお話もする事が出来たのだったが、二日後に逝去された。故人の遺志によって葬儀は真の意味の密葬が早期に行われてしまっていて、支部委員会は支部としての弔意を表すタイミングをなくしてしまった。六月六日紀子夫人の主催で盛岡のグランドホテルで生前の交誼に感謝する会が行われ、山田会長をはじめとして故人と親しかった岳人を始めとする多彩な人たちが各地から招待された。山田会長は当日朝、姫神山の一本杉の名水を汲んで来られて霊前に捧げられてご冥福を祈られた。

当支部は副支部長を決めていなかったので、支部長亡き後の対応に戸惑ったが椚田房男・菊地修身両総務委員、特に盛岡在住の椚田さんに中心になってもらった。後任の支部長を選出するにあたっては支部総会を予定したが、改めて支部規約を読んでみたところ、「支部委員の互選によって支部長が選出される」となっているので、それに基づいて委員会を開催して中谷科学委員が新支部長に、副支部長には菊地修身総務委員が互選され、また事務連絡先は田鎖寿監

事方にお願いすることにした。

支部長の一枚看板によって指導されてきた岩手支部はその逝去により大黒柱を失った感がある。これからの支部は新たな体制になっていくので、ここしばらくは他支部との交流等に控えめの運営にならざるをえないがよろしくお願いしたい。

（中谷　充）

秋田支部

平成三年度の支部活動は、例年に比べ少し忙しい事業内容となった。

山行については、例年通り各会員が重複所属の関係上、二度程度に留め、春は忘れ去られている山谷薬師と貝吹岳を総会と兼ねて実施。秋には地元信仰の山・奥宮岳と金峰山を共に多数の参加者を得て実施した。

特別事業としては、十月に婦人懇談会を宮城支部との協賛で、八森町の二ッ森を会場に七十一名の参加者を得て実施。当日、あいにくの雨で山頂からの雄大なブナの樹海を残念ながら眺望出来なかったが、地元の菊地町長を交えての懇談は意義あるものであったと思う。

なお、この日から婦人懇談会が女性懇談会と改称された。

十一月には、かねてから進めていた韓国・智異山と当地の太平山とを、共通点の多いことを事由に姉妹山として協議。七日に地元の太平山三吉神社、十一日（世界平和記念日）には韓国の慶南大学に於いて、それぞれ国内調印と本調印の式典を行い契りを結んだ。

本会関連で実施した支部懇談会・富山集会に三名、年次懇談会には地方支部としては珍しい十名の多数が出席、共に交流を深めた。

支部報の発行も増刊して三回発行、ようやく二十一号となった。

新入会員は五名、実質会員は六十名とこれまで共に最多となったが、加賀谷功会員に続いて冨塚清一会員を残念ながら失っている。

（佐々木民秀）

山形支部

支部創立四十周年の翌年となったが、記念山行として九一年八月、会員十二名が参加して韓国・雪岳山縦走を行った。屹り立つ岩峰群の稜線は、一行の足に山形（ミチノク）の山とは違う感触を充分に味わせてくれた。

この時の登行を共にするなど、心暖まる支援をいただいた韓国の張健児氏、権純縣氏等の来日を機に三月十五日には、山形市において歓迎の夕を催したり、その後の交流を続けているが、隣国の岳人達と、友情と云う得難い財産が築かれたと思っている。

この年、嘗て支部を支えて下さり、山を愛し続けた畠中善哉、森喜八の両氏が相次いで他界された。

また十月には、一周忌を迎えた元支部長・後藤幹次氏を偲ぶ「幹山会の集い」を秋色に飾られた「蔵王とどまつヒュッテ」にて開催。多数の参会者が和やかに故人の思い出を語らって、翌る日、地蔵岳に登った。

十二月、肘折温泉で支部晩餐会。二月、樹氷を縫うスキーツアー

を蔵王坊平にて。三月、山形冬期国体に御来県の皇太子殿下に、支部会員一同からの記念品をお届けした。

四月二十六日に九二年度支部総会を、羽黒山麓の「いでは山荘」において行った。新入会員も加えて五十一名となった支部が、会員にとって親しみのある会であることを目指している。そのために、支部山行を年七～八回に増やすこととし、理事全員が交代制で立案することになった。本年度最初のプランである五月の加無山は、山形・秋田県境の藪に覆われた秘峰であるが、連続する雨に崇られて、とうとう十一月に変更となっている。

新事業の一つとして、海外登山実行委員会を、この六月に梅津博会員を委員長として発足の運びとなった。夢のある企画の検討が待たれるところである。

山に登ると、自分がいかに小さいものであるかを思い知らされる。そのことがまたとなくいいと思う。ともすれば自然に対して傲慢になりがちな人間社会の一員として、その思いを忘れずに感じ続けたい。山を通して自然なるものに溶けこませてもらう。そんな気持ちで山に登っている。あるいは、そのように登ろうと思っている。

しかし、登り方はひと様々であり、会員の山への対峙のしかたも夫々違うと思う。自然保護運動についても同様である。山が好きな集まりとは云っても自ずと考え方の相違があろう。その中にあって繋ぎ合える接点を求めて、共有できる山の悦びを沢山つくってゆきたい、と願っている。

（大橋克也）

信濃支部

松本市がカトマンズ市と姉妹提携　信濃支部の努力実る

日本アルプスの玄関都市、松本市とネパール王国の首都カトマンズ市の両〝岳都〟の姉妹提携が実現、両市の交流が進んでいる。提携には、信濃支部も積極的に協力、その努力が実ったものである。

両市の姉妹提携の動きは、昭和五十一年にさかのぼる。同年八月、ネパール王国駐日大使B・P・スレシタ氏が、当支部元副支部長の清水悟朗・信州大学名誉教授（故人）の案内で松本市を訪問された際、松本市に打診された。北アルプスを背景とした松本平の風景がカトマンズ盆地に似ており、岳都同士の縁を感じた、というのが打診の動機とのことである。

その後、昭和六十一年、当時のカトマンズ市長からオイスカインターナショナルを通じて松本市長に働きかけがあった。同年八月、当支部より日本山岳会に依頼、全面的な支援をいただいて、松本市で国際アルピニスト大会が開かれた。その際、大会に参加されたネパール王国皇室のクマール・カドガ殿下（ネパール山岳協会会長）も松本市長に提携促進を要望された。さらに、平成元年三月、松本市を訪問したS・P・バタライ・カトマンズ市長の歓迎昼食会で、当時の和合正治松本市長が「提携実現に努力したい」とあいさつした。

こうした機運の高まりをみて、当支部は、オイスカ関係者と共に市議会関係者らに積極的に働きかけた。その結果、同年九月市議会で、和合市長は、「できるだけすみやかに、姉妹都市提携を実現し

たい」と答弁した。

和合市長は、提携の理由として▽市民の多くがアジアの都市との提携を希望している▽両市が山岳都市、観光都市など共通点が多い▽登山、植林、緑化などですでに交流が行われている▽カトマンズ市が世界の数多い都市のうちから松本市だけを選んだ―ことを挙げた。

同年十月、市議会は全員一致で提携に同意。同年十一月に、和合市長を団長とする一行二十九人がカトマンズ市を訪問、同月十七日、ヤク・アンド・イエティホテルで調印が行われた。最初に打診が行われてから十三年ぶりであり、松本市としては海外では米国・ソルトレーク市に次いで二番目の姉妹都市となった。

調印直後の平成二年に入って、ネパールでは「民主化運動」が活発となり。カトマンズ市でもデモ行動、ゼネストなどが行われ、警官隊とデモ隊の衝突が起きた。姉妹都市提携は、あやうく流れるところだっただけに、松本市の関係者はホッとしていた。

両市は、提携調印を受けて、交流活動を盛んに繰り広げている。平成二年四月から大阪で開いた国際花と緑の博覧会に出展するネパール王国に対し、松本市は出展経費の一部五百万円を賛助金として支出した。

平成二年五月二十八日には、松本市で、両市交流の窓口となる「松本市カトマンズ市姉妹提携委員会」（会長・松本市長）が官民一体の形で設立された。当支部からは、役員として、理事に赤羽孝一郎支部長が、幹事に田中弘美副支部長がそれぞれ就任した。

同年九月には、松本市がカトマンズ市の都市計画・建設技術担当職員のデビンドラ・ドンゴル氏を招き、十一月初旬まで日本の日常生活、行政の実態などの体験、研修をしてもらった。同年十月、花と緑の博覧会への賛助金の謝礼としてネパール政府から松本市に「ベル・ピース」（平和の鐘）が寄贈され、市中央公園で、写真やパネル、物産展示による「ネパール・カトマンズ展」を提携委員会が開いた。

同年十一月、提携一周年記念訪問団がカトマンズ市を訪れ、十三日、ホテルアンナプルナで記念式典、祝賀会が行われた。続いて十二月には、松本市民訪問団の二十六人もカトマンズ市を訪れたほか、ヒマラヤ友好協会のメンバー十一人がカトマンズ市を訪問すると共に、ヒマラヤ・ロールワリン山群でトレッキングを楽しむなど、それぞれ交流を深めた。

さらに、平成三年に入ってからも、七月にオイスカ植林隊二十六人がカトマンズ市を訪れ、ここには長野県内からも八人が参加した。同年十月には、ヒマラヤ友好協会が「ヒマラヤの自然とネパール文化展」を開催。十一月には、提携二周年記念訪問団の二十九人がカトマンズ市を訪れ、祝賀会を開いた。

カトマンズ市からは、日本を訪問した市民ら（歯科医師、仏像師、シェルパら）が、松本市に立ち寄りたいとして、市を訪問して交流を行っている。

松本市側からは、カトマンズ訪問の際、学用品、タオルなどを学校へのプレゼントとして持参し贈っている。

松本市では、昭和六十一年に開いた国際アルピニスト大会の「松本宣言」で提唱したＵＩＡＡ総会の松本開催（'92国際山岳連盟総会）

が実現、本年十月七日から十一日まで、各国代表（四十九ヵ国・六十九団体）百五十人、日本代表（四十六都道府県）五十人が参加して開かれた。市側は官民一体で受入れ実行委員会を組織し、支援・協力した。これを機に、松本市とカトマンズ市の姉妹提携に基づく交流が、広く世界に理解され、はずみがつくことが期待されている。当支部としては、今後も積極的な協力を惜しまないつもりである。こうした地域に密着した活動が、市民の幅広い理解と関心を呼び、新しい時代の登山文化の発展につながると考えている。

（田中弘美）

■ 山梨支部

山梨支部設立は、昭和二十三年（一九四八年）、今年で四十三年目になります。創立は戦前より甲斐山岳会のち南嶺会会長大沢伊三郎、三井松男、今井友之助、百瀬舜太郎諸先輩の努力によって発足致しました。当時の県内には往年の平賀文夫氏などおり支部員約三十数名でした。

発足当時は本部でも力を入れて下され松方、三田、槙、などの諸氏も来県されて、支部の活動に種々助言を戴きました。

また、日本山岳会創立六十周年記念には、支部行事の一環として本部より、加藤泰安、望月達夫両氏をお招きして、南アルプス広河原にて夜の更けるのも忘れ楽しい一夜を過ごしました。其の後三井松男氏の悲報に接し、各支部でもあるように、ここ十何年かは支部活動も低迷いたし、又大方の支部員が他の山岳会と重籍しており高齢化と共に若手の入会者が無い現状です。

本部よりは、山梨支部の活動に対して再々声がかかり、平成三年五月の支部総会を機に、本部より村木、望月、飯野各氏に来県して戴き、新役員を改選いたし、会長は従来通り大沢伊三郎氏にお願いし、執行部には若手の委員長古屋学而氏ほか委員十二名を選出いたしました。現在支部員として登録人数は七十三名になっております。

支部としては、新旧の会員の親しみ易い支部に、又他支部との交流、新会員の獲得等、支部の活動に全員が参加して戴くよう努力しております。

山梨県支部年度行事計画

四月十九日　深田祭（韮崎市茅ヶ岳・深田公園）支部協賛
四月二十五日　山梨支部通常総会
五月十五日　日本山岳会支部長会議（東京）、支部長出席
五月十六日　木暮祭前夜祭（増富・有井館）、十七日参加者懇親登山（支部主催、山村実行委員長）
七月二十五日　支部納涼懇親会
七月二十六日　参加者懇親登山
十二月五日　支部長会議（東京、支部長出席）
十二月五日　年次晩餐会（東京）

（岩間弘雄）

■ 福井支部

福井支部は平成三年十一月八日、三十六名の会員（新入会二十九

名）で発足した。各会員は既に県下や国内、あるいは海外での登山経験を持つものばかりといえたから、始めから顔見知りもほとんどで、なごやかな会合のうちに支部長中村義ほか役員を互選した。

その後、半年間の行動は次のとおりである。

設立記念講演会　今立町「いまだて芸術館」にて、演題「極限に挑む—南極・北極、チョモランマ、チョ・オユーの登山」、講師は本部より神崎忠男氏、当支部からは関孝治が担当した。なお、当日は立見も出る盛況であった。

四月二十六日、浄法寺山（一〇五三メートル）にて支部長以下九名が参加して親睦登山。お天気にも恵まれて一同のピッチはあがり、予定を越えて丈競山を往復した。同日夜は兎越山保養センターを会場に、第一回の総会と懇親会（参加十六名）を行った。

六月六・七日、福井支部設立記念登山。近隣の各支部（京都、岐阜、富山、石川）からの参加を得て、県内最高の経ヶ岳（一六二五メートル）で記念登山。なお前日は夕刻より六呂師高原ハイランドホテルにて、設立記念懇談会を開催した。

以上が福井支部発足以来半年間の行動概要である。これまでの記載から想像されるように、支部の会員のうち八〇パーセント以上は、既に県下の各山岳会に所属しており、また各会の中心的メンバーでもある。したがって、日本山岳会福井支部のこれからの動きは、登山そのものよりも、現代の登山のグラウンドの状況を、常に意識したものになってゆくだろう。

もちろん、福井県下の山やまの様子は、年ごとに、自然の状態から人工による劣悪な管理のもとへと向かいつつある、といってもいいだろう。こうした現状に対して、個人による意見の発表は、地方紙を借りてなされてはいるが、更に声の集まりとして、支部の態度表明が期待される。

また、支部創立メンバーの年齢構成を見てゆくと、目下の急務とされている中高年者への登山対策が、たちまち各自の問題となりそうな気配である。この点も、今後はよく活用して、福井支部では個人の登山行動から、一般的な中高年者の登山の問題点の指摘について、知識を交換し合う予定でいる。

以上が、発足したばかりの福井支部が抱える行動目標になりそうである。とりあえずは、一人ひとりが「形」のよい山登りをすることから、全ては始まるのではなかろうかと考えている。

（増永迪男）

■京都支部

近年、地球の環境問題に関する意識が高まるなかで、当支部の行事もそれに連動した取り組みとなってきた。

京都支部設立五周年記念事業として、企画した日本・パキスタン合同ティリッチミール登山隊は、キャンプ地のゴミ処理に正面から取り組み、過去に放置された物までも撤去した事で話題となり、後に続く登山隊に多くの示唆を与えた。又同隊は湾岸戦争の煽りで発生した油井大火による大気の汚染にも目を向け、ヒマラヤの雪の採集と分析に取り組んでいる。

一方、国内では、昨年より身近な山として新「山城三十山」を月

例会として取り上げ、毎回清掃登山を実施している。「山城三十山」は、故今西錦司先生たちが京都一中時代に青葉会を作り、そこで選定されたのが始まりで、その後、後輩が改訂して新「山城三十山」にしたものである。それ等のほとんどが京都周辺の一〇〇〇㍍に満たない山ばかりで市街地に近く、気軽に登れることから、毎回二十人前後の参加者がある。この六月で十三回を数え、参加者の間にもゴミの拾集行為が定着してきたようだ。また、参加者には当時の中学生たちが執筆した「山城三十山記」（一九三四年発行）の中から該当する山の資料が配付される。それには山の概観・歴史・地理・登路等、六十年前の山の様子がひたむきな少年の目を通して詳しく記述されており、山の変化を知る貴重な資料である。それを片手に歩くと、頂上の周辺にのみ昔日の面影が残るという山が多い。長い歳月の間に人々の生活様式も変わり、道路の敷設やゴルフ場を初めとするレジャー施設等の出現で、山容もずい分変化してきている。当支部が第一回目の例会に選んだポンポン山もゴルフ場になるところであったが、自然保護運動によって、この春京都市に買収されることに決まったと聞いた。

折しも今年の自然保護全国大会は、滋賀県の朽木村で開催された。熱心な討議を拝聴して、これまで遠くに聞いていたこれ等の問題が、身近に迫っているという印象を受けた。

新「山城三十山」執筆のメンバーであった梅棹忠夫先生（国立民族博物館館長）が「千里眼」三十七号の〝北山そだち〟の中で当支部が新「山城三十山」を取り上げたことにふれ「新しい時代において信頼出来る後継者をえた」と結んでおられる。例会での取り組みはささやかではあるが、取り敢えず出来ることから手懸けて、自然保護に対する意識を高めるよう努めて行きたい。

この外の活動として、岩、沢登り、スキー登山、スケッチ山行があり、会員それぞれの興味と体力に応じて参加し、四季の自然を楽しんでいる。インドアの山水会も、天文学、民俗学、国宝見学等バラエティーに富んだ内容になっている。多くの会員がこれらの行事に参加して交流されることを望みたい。

（内田昌子）

■関西支部

昨年に続き、平成四年度も、支部会計は悪化の一途をたどり、支部活性化以上に本年は支部運営の正常化が求められる年となった。支部総会において、支部規約の一部変更が承認され、次年度から委員会活動も、より充実したものになると思われる。本年度は、そのステップの年と考え、支部委員の選抜メンバーにより、ワーキング・グループ（W・G）を編成して、阿部支部長を座長に、今後の支部運営について、全面的に検討を加えることになった。四月より、月一回のペースでW・G会を開き、秋には支部評議員会を開き、支部評議員の皆様にも改革案を審議して頂き、平成五年度から新しい支部運営正常化案が実施される予定であります。

第一回のW・G会で、まず他支部の実情を調べようということになり、アンケートをとらせて頂きました（結果は関西支部報第六五号に掲載されていますのでご覧下さい）。アンケートの結果から、支部会員の多さからして、他支部との比較は一概には出来ないが、単

純な数字の判断では、支部運営費徴収も止む得ぬことかと思われる。

W・G会では、次のような項目が議題として提案されている。

①支部委員会の編成　支部活動の企画・討議する委員会と計画・実行する、スタッフ会に分ける。

②支部運営費の徴収　日常の運営費と、蔵書の保管のためのルームの設置まで、見通した話し合いが求められる。

③　集会の充実　報告会中心の現状から、多種多様な会合の開催が求められる。

④　支部報発行回数の検討　年四回発行では、行事の予告が十分に出来ない。年六回位の発行ではどうか。

⑤　若年層の充実　若年層充実のため、本部の青年部や学生部に規範を求め、関西支部にも同様な機関を造って若い人との交流の場を設ける。

⑥　支部蔵書について　支部蔵書は現在、今西組の一室に保管をお願いしているが、これとて場所を検討してお願いしたのではなく、前の場所を放り出されて、行くところがなくて今西氏のご好意で一部室を提供して頂いた状況から、いつまでも現状では困るので、支部蔵書の収納出来る支部ルームの開設が早急に望まれるのであります。この件については、支部会員の意向が大事であるが、それとともに、本部の支部活動に対する援助が強く望まれるところであります。

『山岳』が発行される頃には、W・Gの提案が支部会員にも問われ、支部総会への提案準備中と思われるが、長い歴史を誇り、四百余名の大勢の支部会員で構成される関西支部が還暦間近かに、生まれ変わるよい機会と考えられるのであります。

（桑田　結）

■　山陰支部

会員約三十名の山陰支部は、毎月の例会を欠かさず続けており、いつも半数以上の会員が参加するサロンは、話題が飛び交って尽きない。また約百名に近い「山陰支部友の会」会員とは、年二回の山行を中心に連係を保ちながら、日本山岳会の活動が地域の活動の下支えとなるよう進めている。

新体制としてスタートした吉川支部長体制も今年で三年目、重点課題であった会員増加の目標は一歩前進し、待望の女性会員二名を含む三名の参加を得た。支部の平均年齢が少し下り、新しい風はどよめきにも似た響きで支部活動の活力を生み出しつつある。

平成四年度は四役の留任を決め、新しく自然保護委員会が発足した。各委員会は――

・運営……会の四十五周年記念事業を企画。

・山陰の山研究……会員が全鳥取県境走破とその記録をまとめようとする企画で最も力を入れている。ほとんどのコースに踏跡のない三五〇キロ走破は難題だ。

・海外登山研究……四十五周年記念行事としてヨーロッパ・アルプス登山山行準備中。

・自然保護……大山中心に自然保護とその啓蒙活動を地域と共に進める。

以上の活動のほかに会員の個人山行を合わせて車の両輪とし、他

の支部でも報告されている会員の高齢化問題を克服し、特徴ある支部活動の推進を目指している。活動概況は――

平成三年七月は、第八回山陰支部友の会山行で七十五名が北アルプス燕岳を目ざしたが雨にたたられ中房温泉への道が通行止め。黒部ダム・八方尾根にコースを変更、その後で大町山岳博物館や山陰の大山の麓に生まれた田渕行男氏記念館などを見学し帰郷した。

平成三年八月は、吉岡淳一会員（フランスのル・サロン会員）の「山の絵展」。

平成三年九月は、日本山岳会立山集会の後で、毎年の「干支」の名の山にこだわって登り続ける五名が、新潟県の「未丈ガ岳（みじょうがだけ）」一五五二メートルに登り、晴天の山頂から越後三山、尾瀬燧ヶ岳など確認した。

平成三年十月は、すっかり恒例となった福岡支部との交流登山で、昨年出版した「山陰の百山」の一つである島根県と山口県境の莇ヶ岳（あざみがだけ）に九名参加。渓流沿いで採取のクリタケ汁により交流を深めた。

平成三年十一月は、紅葉狩山行で、ブナの純林が続く宝珠尾根から三鈷峰は快晴の中にあり、友の会メンバーを含む三十余名がその紅葉に染まった。

平成三年十二月は、山陰支部晩餐会で、ゲストに松田雄一副会長を迎え盛会であった。

このほか、個人山行を含めると、大山冬山パトロール、親子での知床山行、福岡支部計画に同行したニュージーランド山行、同じく福岡支部山行に参加した祖母・傾山山行などがある。

（吉川暢一）

■東九州支部

平成三年度の支部活動は、それなりに多彩だった。なにしろ前年度が支部創立三十周年で、山田会長はじめ全国各支部の皆さんを迎えて記念集会・登山会を催したり、あるいは二十周年に選定したあと定例山行で登り続けてきた「大分百山」をガイドブックとして記念出版するなど、かなり多忙だった。この反動もあって、あるいは気の抜けたような一年になるのではないかと当初は心配したものだが、振り返って見れば、かなり充実した年となっていた。

その一つは、韓国の仁川山岳会との交流が生まれたことである。同会の来日については最初に本部の西村氏から打診があった。支部としてOKを決め、連絡をとり合った結果、八月に実現した。会長以下、十余名の会員がソウル―福岡空港で十二日に大分県入り、別府温泉での公式交歓会のあと十三日は観光と鶴見岳登山、十四日は九重山群登山、十五日に帰国という慌ただしいものではあったが、毎日が楽しかった。

ちょうどお盆にあたり、支部会員のなかには忙しい人もいたが、それでも在籍者の三分の二が参加するという盛況。毎夜が酒盛りとなり、民族や言葉の違いを超えて山を語り合った。印象に残ったのは、韓国の若い人たちの礼儀正しさと素晴らしい体力である。その後、さっそく支部からも数人が韓国に渡りソウル周辺での登山を楽しみ、おおいに歓迎された。以来、支部としてだけでなく、会員個

人間の交流も続いているが、本年度から大分―ソウルの定期航空路も開設されたことであり、相互訪問はさらに活発になりそうだ。

定例山行は大分百山に続き、県境の山々を中心に月一回行ったし、平成四年も継続して実施中。大分県は耶馬渓・英彦山群や津江山群で福岡、九重山群で熊本、祖母・傾山群で宮崎の各県と接している。いずれも九州を代表し得る山々であるとともに、幸いそれぞれの県に日本山岳会の支部がある。県境の山を選んだのには、地域の境を乗り越えて、例えば自然保護など共通する山の問題をともに考え、九州における支部間の交流を活性化しようという狙いもある。

自然保護といえば、最も身近な自然である里山が、ゴルフ場や別荘地などバブル経済の投資の対象となり、荒らされる傾向が出てきた。四年になってバブルが破綻、やや沈潜化しているし、スポーツ登山の場ではないものの、環境問題として見過ごせない。支部としては、他の各種団体と提携し、保護運動を進めている。

最後に、支部の決定に基づく活動ではないが、会員のうち五人が中高年者の登山グループにリーダーとして入り、指導している。これは十年以上にわたり、このなかから日本山岳会に正式会員として加入する人も生まれてきたし、支部の会友も増えていることを報告しておきたい。

（梅木秀徳）

■熊本支部

「君子」というには程遠い会員の揃った支部だが、その「交わりは淡きこと水の若し」で、目下のところ、年四回の例会でお茶を濁している。もっとも、こうしてたまに会うから、「やあやあ暫く」で、案外うまくいっているのかも知れない。さて、この一年の「淡き交わり」を振り返ってみたい。

八月二十四日、夏季例会「山の映画とビールの夕べ」を、熊本市内のレストラン「ホルン山小屋」で開催し、二十一名が出席した。五年前までは、夏季例会も山行となっていたが、暑い時期に標高の低い九州の山の、それもあまり人の訪れないヤブ山を登っていたので、誰云うともなく次第に停滞、現在のような「映画とビール」の例会となった。

映画（現在はビデオ）は、当初から神谷会員（熊本八ミリクラブ会員）の作品で、昨年は、前年の秋季例会の記録「秋の石堂山山行」を上映した。夏季例会は、支部の例会のなかでも一番人気があり、ビールと歓談で、支部会員にとっては真夏の夜の一服の清涼剤となっている。

秋季例会は、十月二十日、九州脊梁の烏帽子岳（一六九二メートル）へ紅葉山行。前夜は落人伝説で有名な五家荘最奥の「樅木」の民宿に泊まり、翌日、モハチ谷から登ったが、台風十九号の通過した直ぐ後で、至る所で倒木に出会い、思いのほか手こずってしまった。幸い晴天にめぐまれ、山頂からは色づき始めた九州脊梁の山並みを見渡すことができた。十名参加。

平成四年一月十一日、新年晩餐会を「ホルン山小屋」で開催し、二十五名が出席した。本部の年次晩餐会に倣って始めた支部の新年会も今年で十二回目、すっかり支部の行事として定着した。

食事が一段落したところで、近況報告あるいは今年の抱負を、各

自ユーモアを交えて思い思いに述べ、その後は終了時間まで、なごやかな歓談が続くのが恒例となっている。

三月八日、春季例会は十五名が参加して、大分県の万年山（一一四〇㍍）に登った。前夜は万年山の北麓にある、温泉宿「美人湯」に宿泊、その名の通り、いかにも美人になりそうな泉質だった。翌日は、頂上台地のすぐ下まで車で上がり、ひと登りで山頂へ。寒風の吹くなか、頂上台地の東端から西端まで往復する「高原散策」となった。

三月三十一日、支部報第三号を発行。会員の随想のほか、熊本の登山史の一側面として「熊本岳連回想」が寄稿されている。

四月二十五日、支部総会を「ホルン山小屋」で開催。本部の「支部運営に関する規定」に併せて支部規約を改正し、任期満了に伴う第五代支部長として、本田誠也を選出した。また、今年は支部創立三十五周年に当たるので、それを記念して、七月十八日から十日間の予定で、カナディアン・ロッキーのアサバスカ峰（三四九一㍍）へ、遠征することになった。総勢十一名で、計画は予定通りに進んでいる。

（田上敏行）

会務報告

一九九一年（平成三）六月～一九九二年（平成四）五月

一九九一年度役員・評議員・支部長

会　　長　山田二郎

副　会　長　藤平正夫・松田雄一

常務理事　小倉茂暉・大倉昌身・重廣恒夫・大森弘一郎・神崎忠男

理　　事　入澤郁夫・穴田雪江・小倉　厚・山本良三・関口令安・伊丹紹泰・石橋正美・藤井正彦・山口俊輔・村井龍一・片岡泰彦・南川金一

監　　事　飯野　亨・中島伊平

常任評議員　鳴原啓佑・橋本　清・斎藤惇生・湯浅道男・西村政晃

評　議　員　今西壽雄・吉村健児・大塚博美・室賀輝男・佐藤　光・奥原教永・河野　長・大森久雄・西丸震哉・村木潤次郎・徳久球雄・鈴木郭之・國見利夫・田部井淳子・廣江　研

支　部　長　小須田喜夫（北海道）・佐藤敏彦（岩手）・岡田光行（秋田）・大橋克也（山形）・西郡光昭（宮城）・中島正夫（福島）・佐藤一栄（越後）・赤羽孝一郎（信濃）・大澤伊三郎（山梨）・安間　荘（静岡）・湯浅道男（東海）・松井辰彌（岐阜）・斎藤惇生（京都）・若林啓之助（富山）・増江俊三（石川）・阿部和行（関西）・吉川暢一（山陰）・権藤太郎（福岡）・梅木秀徳（東九州）・奥野正亥（熊本）・魚本定良（宮崎）・中村義（福井・一九九一年十一月八日設立）

理事会は会長、副会長、理事、監事、常任評議員によって構成される。

◇六月（一九九一年）理事会　六月十三日　本会会議室

出席者　十九名

▽審議事項

一、ナムチャバルワ・山研合同募金の件

▽報告事項

一、東海支部創立三十周年記念行事

二、ウェストン祭出席と、安曇村村長から本会に感謝状と記念品代として金一封を贈られた。

会報五五五号参照

▽各委員会の運営方針、新委員会の構成（会報五五五～五五六号参照）

◇七月理事会　七月十八日　本会会議室

出席者　十九名

▽審議事項

一、電気大学二部山岳部ヤツギルドーム南峰登山隊推薦状依頼の件

二、ナムチャバルワ募金の件

三、ナムチャバルワ登山隊の準備状況

▽報告事項

一、山岳研究所改築準備について

二、HAT―J、その他

会報「山」五五六号参照

◇九月理事会　九月十二日　本会会議室

出席者　二十名

▽審議事項

一、ナムチャバルワ登山隊九月十九日本隊出発後の体制など

二、海外登山基金委員会委員交替の件、その他

▽報告事項

一、ＨＡＴ―Ｊのシンポジウムについて
二、山岳研究所改築準備状況、その他
会報「山」五五八号参照

◇**十月理事会**　十月十七日　本会会議室
出席者　二十名
▽審議事項
一、秩父宮記念学術賞候補者推薦の件、その他
▽報告事項
一、ナムチャバルワ遭難報告
十月十六日十四時十五分、大西隊員が雪崩に巻き込まれ遭難死、十月二十日に両親と姉が現地へ、ＪＡＣから橋本清、佐野哲也の二名が付き添う。
二、中間監査報告、その他
会報「山」五五九号参照

◇**十一月理事会**　十一月十四日　本会会議室
出席者　十八名
▽審議事項
一、福井支部設立の件（設立会員二十九名）
十一月八日に設立総会、支部長以下次のとおり、
支部長　中村　義、事務局長　宮本数男、副支部長　関　孝治、監事　吉村和義、委員　増永迪男、牧野治生、井上泰利
一、女子エベレスト合同登山隊への参加要請、見送り、その他
▽報告事項
一、ナムチャバルワ登山隊の件
大西隊員の遺骨十一月二日に帰国、二十三日に告別式
二、合同募金、山岳研究所、その他
会報「山」五六〇号参照

◇**十二月臨時理事会**　十二月七日　新高輪プリンスホテル・パミール館・紅玉
出席者　二十一名
▽審議事項
一、平成四年度ナムチャバルワ峰に再挙の件を承認

◇**十二月理事会**　十二月十二日　本会会議室
出席者　十九名
▽審議事項
一、文部省生涯スポーツコンベンション'92派遣について
五つの分科会のうち4高年者、5野外活動の二分科会に参加、二名を派遣することになった
二、ナムチャバルワの件
十二月二十一日に検討会、報告会と大西隊員の追悼会を番町グリーンパレスで開催。十二月四日、大西君ご両親が来室、一〇〇万円を寄贈され、海外登山基金に編入を承認した
▽報告事項
一、ＨＡＴ―Ｊ報告の件
二、山岳研究所の新築申請の件、その他
会報「山」五六一号参照

◇**一月（一九九二年）理事会**　一月十六日　本会会議室
出席者　二十一名
▽審議事項
一、海外登山基金　四件承認の件
申請六件に対し、次の四件に交付を承認
(1)日本・中国ナムチャバルワ登山隊　一五〇万円
(2)アンタークティックウォーク隊　一〇〇万円

(3)マッキンリー気象観測機器設置隊　五〇万円
(4)広島山の会スクーニャン峰隊　五〇万円
その他
▽報告事項
一、ナムチャバルワ登山再挙の件、その他
会報「山」五六二号参照
◇**二月理事会**　二月十三日　本会会議室
出席者　二十二名
▽審議事項
一、第二次ナムチャバルワ登山の件
総隊長は山田会長、隊長は重廣氏、副総隊長の人選は、両副会長、総隊長、隊長に一任とした
二、平成四年度予算の件
三、アンタークティックウォーク隊名義後援の件、承認
▽報告事項
一、募金状況報告、その他
会報「山」五六三号参照
◇**三月理事会**　三月十二日　本会会議室
出席者　二十四名
▽審議事項
一、中国登山協会との協議
本会から登頂時期を早めること、気象の専門家同行を提案、中国側から総指揮部強化などが提案され、大筋で合意。また日中友好協会からの提案で、日本国交正常化二十周年記念の冠を隊の名称につけることになった
二、平成四年度事業計画案および予算案の件、その他
▽報告事項
一、委員会報告、その他
会報「山」五六四号参照
◇**評議員会**　四月十六日　本会会議室
出席者　山田二郎・藤平正夫・松田雄一・鴫原啓佑・斎藤惇生・西村政晃・吉村健児・大塚博美・室賀輝男・佐藤　光・河野　長・西丸震哉・村木潤次郎・徳久球雄・鈴木郭之・國見利夫・田部井淳子・小倉茂暉
▽議事
一、通常総会提出議案承認の件
(1)平成三年度事業報告並びに収支決算報告
(2)平成三年度監査報告
(3)平成四年度事業計画並びに収支予算案
(4)会費未納による除籍対象者
会報「山」五六五号参照
◇**四月理事会**　四月十六日　本会会議室
出席者　二十一名
▽審議事項
一、平成三年度事業報告および収支決算書、財産目録承認の件
▽報告事項
一、合同募金について
三月三十一日現在の募金状況、会員一一〇一名で二六、一九〇、〇〇〇円、企業募金は申し込みを含め四四、六四〇、〇〇〇円
二、ナムチャバルワ峰登山について
四月一日事務局開設、四月二十六日～二十九日北京会議に斎藤惇生、重廣恒夫出席、七月中旬に隊荷を船積み、九月一日出発、十月中旬に登頂の予定
三、早坂敬二郎氏(元学生部担当理事)が三月二十二日大天井岳で行方不明

会報「山」五六五号参照

◇**五月理事会**　五月十四日　本会会議室

出席者　二十三名

▽審議事項

一、ナムチャバルワ登山の件

(1)北京会議での協議決定事項についての承認

隊の構成（JAC十二、中国四十一、報道十四、計六十九名）、その他

(2)登山隊員選考についての承認

登攀隊長＝山本一夫、隊員＝三谷統一郎・青田　浩・山本　篤・佐藤正倫

二、山研およびナムチャバルワ登山の両事業は、事業年度がまたがる特別のプロジェクトなので、通常会計と分けて管理している。飯野監事より正確かつ適正に処理されているとの報告があり、了承

会報「山」五六六号参照

◇**支部長会議**　五月十六日　コープビル

出席者三十四名

一、岩手支部長佐藤敏彦氏の四月十三日逝去に関する件、ほか

二、全国支部懇談会ほか、平成四年度事業計画について

◇**支部長交替**

平成三年度の総会で「支部設立ならびに運営に関する規定」が改訂され、支部長の任期等が明確化されたが、平成四年度から次の四名の支部長が新たに就任した。

▽熊本支部長　本田誠也氏

▽福岡支部長　吉村健児氏

▽富山支部長　木戸繁良氏

▽岩手支部長　中谷　充氏（五月に急逝された佐藤敏彦支部長の後任）

会報「山」五六六号参照

◇**平成四年度通常総会**　五月十六日（土）千代田区内神田コープビル

出席者　二五〇一名（委任状を含む）

▽総会次第

一、会長挨拶

二、会務報告

三、平成三年度事業報告承認の件

四、平成三年度収支決算、財産目録承認の件

五、監査報告

六、平成四年度事業計画（案）承認の件

七、平成四年度収支予算（案）承認の件

八、平成三年度除籍対象者の件

九、議事録署名人の件

総会終了後、引続き懇親会が行われた。

会報「山」五六六号参照

◇**主な行事と集会**

▽一九九一年六月一～二日上高地

第四十五回ウェストン祭

▽六月七～九日　岩手・七時雨山

第十五回　若葉会山行（集会・岩手支部）

▽六月八～九日　谷川岳

学生部初夏合宿

▽六月十五～十六日　小川山

学生部小川山岩登り集会

▽六月二十二日　富士山

青年部富士山合宿

▽六月二十四日　ルーム

ビデオ映写会Ⅰ
▽七月二十～二十一日　駒止湿原
科学研究委員会探索山行・湿原と植物
▽九月二十八～二十九日　立山
全国支部集会
▽十月五～六日　上高地
スケッチ山行
▽十月五～六日　小川山
指導委員会初級岩登り講習会
▽十月五～六日　小川山
青年部秋合宿
▽十月十二～十三日　秋田・八森町
女性懇談会全国集会
▽十月十五日　ルーム
ムスターグ・アタ、ブロード・ピーク報告会
▽十月二十一日　ルーム
新入会員懇談会
▽十月二十三日　ルーム
講演会「山を語る」広島三朗氏
▽十月二十七日　西沢渓谷
ビデオ撮影会
▽十一月六日　ルーム
青年部「早大トリボール、拓大スクーニャン」報告会
▽十一月十日　皇居周辺
学生部「第二十八回マラソン大会」
▽十一月二十二日　ルーム
講演会「飯豊の高山植物」小荒井実氏
▽十一月二十八日　ルーム
冬山講習会「防げるか冬山の孤立遭難」
▽十二月五日　ルーム
青年部「立正大シシャパンマ報告会」
▽十二月五日　ルーム
学生部「積雪期剱岳八ッ峰研究会」
▽十二月七日　新高輪プリンスホテル
支部長会議
▽十二月七日　新高輪プリンスホテル
年次晩餐会
▽十二月十五日　鹿留山
忘年山行
▽十二月二十一日　番町グリーンパレス
ナムチャバルワ登山検討会及び報告会
▽一九九二年一月八日　ルーム
青年部「千葉大ツェンダカン」報告会
▽一月十一～十三日　八方尾根
スキー懇親会
▽二月六日　ルーム
講演会「マッキンリー気象観測報告」大蔵喜福氏
▽二月八日　ルーム
ナムチャバルワ登山総括
▽二月十四日　ルーム
第二〇回「山岳史懇談会」関西学院大学山岳部七十年の歩み
▽二月十八日　ルーム

ビデオ映写会Ⅱ
▽三月三日　ルーム
第二十三回「山岳図書を語る夕べ」薬師義美氏
▽三月三日　ルーム
第二十九回「この一本展」
▽三月八日　ルーム
南極ビンソンマシフ峰報告会
▽三月七～九日　戸隠
女性懇談会戸隠スキー集会
▽三月十四日　ルーム
新入会員オリエンテーション
▽三月十四～十六日　会津駒ヶ岳
指導委員会　山岳スキー講習会

◇研究・シンポジウム

▽四月六日　青山学院大学
科学・自然保護委員会共催「山小屋の屎尿処理」永嶋正信氏ほか
▽七月五日　青山学院大学
科学委員会「山における雷の問題」北川信一郎氏
▽七月十三～十四日　北里研究所北里本館
第十一回登山医学研究会
高齢者登山について　小林太刀夫
多様化する登山に対する医療はいかにあるべきか　大森薫雄

◇登山施設の改善その他登山のための適切な事業

▽上高地山岳研究所の開設及び改築計画の検討・解体　平成三年四月～十月
▽山に関する貴重なフィルム、スライド、テープ、アルバム等の複製、および貴重な資料の収集、整理、管理

◇山岳遭難の予防とその対策に関する企画および指導

▽二月二十二～二十三日　水道橋グリーンホテル
中高年登山対策全国大会

◇自然保護活動の推進

▽六月二日～九日　全国一斉清掃登山の実施（ＨＡＴ―Ｊ）に協力
▽六月二十九～三十日　新発田市及び飯豊山麓・湯の平温泉
▽九月一日　玉原湿原
自然観察山行
▽十一月二～三日　稲包山
自然環境保全のための現地視察
▽一九九二年三月一日　奥武蔵
自然観察山行
▽ＪＡＣの自然保護活動の歴史の調査、編集

◇機関誌などの発行

▽「山岳」第86年（一九九一年）の発行
▽会報「山」第五五一号～第五六二号の発行
▽会報「山」第五〇一号～第五五〇号目録の発行
▽「登山医学」第11巻の発行に協力

◇国内および外国山岳団体との連絡、情報交換

▽国内関係団体（日山協、都岳連その他）との密接な連絡
▽海外登山団体との機関紙および情報の交換
▽十一月九～十日　昭和女子大学人見講堂　山岳環境保護国際シンポジウム開催に協力

◇海外登山

▽七月二十一日～八月二十六日

青年部「ムスターグ・アタ」登山隊の派遣　六
▽九月～十二月　七
ナムチャバルワ峰登山隊の派遣　七
▽十月二十日～十一月五日
ナムチャバルワ・トレッキングの実施

H.N.

SANGAKU

The Journal of the Japanese Alpine Club

Vol. 87 (No. 145) **Issued December 1992**

CONTENTS

Problems of the mountain environment
—From the report on the international symposium of mountain environmental protection in 1991— ····· EMOTO Yoshinobu··· (7)
Mt. McKinley's gale
—Some research on high altitude wind in mid-winter for the prevention of mountain accidents caused by weather— ····· OHKURA Yoshitomi··· (21) ※
Sports climbing as a new field of mountaineering ····· KANZAKI Tadao··· (32)
"SPECIAL ISSUE" : Thinking of mountaineering by older people ····· (38)
Report on Japan China cooperative expedition to Namcha Barwa 1991
····· SHIGEHIRO Tsuneo··· (90) ※
Japan Gunma winter Mt. Sagarmatha south-west face expedition 1991-'92
····· OGATA Yoshio··· (98) ※
An ascent to Trivor peak in Karakoram ····· OHNUKI Toshifumi··· (104)
The first ascent of Tsendakang in Bhutan/Himalayas ····· SAKURAI Fumitaka
YOSHINAGA Hideaki··· (110)
The noted highest peak, Tirich Mir in Hindu Kush ····· SUDO Tateshi··· (116) ※
An ascent to Cho·Oyu peak by an over fifties party ····· IKEDA Kaneshige··· (122)
The 1991 expedition to the Broad Peak ····· SATO Masanori··· (128)
An ascent of Mt. Xixiabangma ····· HINO Etsurou··· (132)
An ascent of Mt. Mustagata by members of JAC Youth ····· SOHMA Tsutomu··· (136)
The 70 years history of Kansai Gakuin Univ.'s Alpine Club ····· (140)
Documents list the Himalayas and other ····· YAKUSHI Yoshimi··· (150)
The Japanese Alpine Club's environmental conservation history (2) ····· (A59)
Basic knowledge to protect oneself from rockslides ····· IWAFUNE Masaki··· (A51)
Weather at Namcha Barwa 1991 ····· OKUYAMA Iwao··· (A37)
Book Review ····· (162)
Obituary : ····· (172)
Reports from branches : ····· (209)
JAC's notes ····· (221)

※ English abstract attached

The Japanese Alpine Club
(Founded 1905)
Address : Tokyo, Chiyoda-ku, Yonban-cho, 5-4

Office Bearers and Committee
1992 (May1992-April1993)

President : YAMADA Jiro
Vice Presidents : FUJIHIRA Masao, MATSUDA Yu'ichi
Honorary Secretary : OGURA Shigeki
Honorary Editor : MINAMIKAWA Kinichi
Honorary Librarian : OGURA Shigeki
Honorary Treasurer : OHKURA Masami
Auditor : IINO Thoru, NAKAJIMA Ihei

Committee

ANADA Yukie
FUJII Masahiko
IRISAWA Ikuo
ISHIBASHI Masami
ITAMI Tsuguyasu
KANZAKI Tadao
KATAOKA Yasuhiko
MINAMIKAWA Kin'ichi
MURAI Ryuichi
OGURA Atsushi
OGURA Shigeki
OHKURA Masami
OHMORI Kōichiro
SEKIGUCHI Reian
SHIGEHIRO Tsuneo
YAMAGUCHI Shun-suke
YAMAMOTO Ryozo

Council

HASHIMOTO Kiyoshi
HIROE Ken
IMANISHI Tosio
KONO Masaru
KUNIMI Toshio
MURAKI Junjiro
MUROGA Teruo
NISHIMARU Shin'ya
NISHIMURA Masaaki
OHMORI Hisao
OKUHARA Kyoei
OTSUKA Hiroyoshi
SAITO Atsuo
SATO Teruo
SHIGIHARA Keisuke
SUZUKI Hiroyuki
TABEI Junko
TOKUHISA Tamao
YOSHIMURA Kenji
YUASA Michio

Chairmen of Branches

Hokkaido : KOSUDA Yoshio
Iwate : NAKAYA Mitsuru
Akita : OKADA Mitsuyuki
Yamagata : OHASHI Katsuya
Miyagi : NISHIGORI Mitsuaki
Fukushima : NAKAJIMA Masao
Echigo : SATO Ichiei
Shinano : AKABANE Kohichiro
Yamanashi : OHSAWA Isaburo
Shizuoka : ANMA So
Tokai : YUASA Michio
Gifu : MATSUI Tatsuya
Kyoto : SAITO Atsuo
Toyama : KIDO Shigeyoshi
Ishikawa : MASUE Shunzo
Fukui : NAKAMURA Tadashi
Kansai : ABE Kazuyuki
San-in : KIKKAWA Yoichi
Fukuoka : YOSHIMURA Kenji
Higashi Kyushu : UMEKI Hidenori
Kumamoto : HONDA Seiya
Miyazaki : UOMOTO Sadayoshi

A PRELIMINARY REPORT ON METEOROLOGICAL OBSERVATIONS ON MT. McKINLEY, ALASKA

Harold Solomon

Mt.McKinley is known for having some of the most violent weather on earth. Using the standard of 3 feet of elevation per mile of latitude, its elevation of 20,320 feet at latitude 62 degrees north makes it the equivalent of a 14,500 foot (4,400m) high mountain at the North Pole, or a 27,400 foot (8,300m) high mountain at the latitude of Mt. Everest. In addition, unlike for example the South Pole, it is only 150 miles from the ocean, and in the track of powerful storms circling the Arctic.

The severe weather conditions and rapid changes frequently catch climbers unprepared. As of 1982 there had been 147 "incidents" resulting in 41 deaths recorded on the mountain; every year there are disasters and near disasters. The storm of July 15 to 28, 1967, which hit the expedition led by Joe Wilcox, resulted in 7 fatalities and is considered possibly the worst storm anywhere in mountaineering history.

The principal routes on this mountain are (except for crevasse danger) not technically difficult; weather and altitude are the major causes of trouble.

The potential for weather-related trouble has increased as more climbers venture onto the mountain in winter. Particular interest has been created in Japan by disasters which struck several of Japan's most famous climbers during winter ascents of McKinley. In 1984 Naomi Uemura, best known for his solo conquest of the North Pole by dog sled and also having numerous other accomplishments as a mountaineer and explorer, did the first solo winter ascent of McKinley (which was also the first ascent at the height of winter, previous winter ascents having been in March when days are longer and conditions relatively milder), but disappeared on the descent, and search operations were hampered for a week by severe storms. In 1989, Noboru Yamada, attempting to become the first man to scale the highest mountains on 5 continents in winter, and his companions, Teruo Saegusa and Kozo Komatsu, were killed in a severe storm just below Denali Pass.

Following these disasters, Yoshitomi Okura, a professional alpine guide having developed a keen interest in high mountain weather since participating in winter attempts on the North Face of Mt. Everest in 1983 and 1985 (the latter attempt reached 8,500m, the altitude record on the north side of Everest in winter), undertook to organize an observational program near the summit of Mt. McKinley. The plan was to install automatic recording instruments that would be left in place for a whole year and thus obtain a record of winter as well as summer weather. In addition to the value for mountaineering safety, it is hoped that the data from this program will be useful to the ACARS data

network for aircraft operations in Alaska, and by providing an additional point in a sparse observational grid will possibly help to improve the accuracy of numerial weather prediction.

With sanction from the Japanese Alpine Club and initial support from Asahi Broadcasting Corporation, which produced a documentary, an expedition under Okura's leadership was organized in 1990, and instruments installed at the site of a rock outcrop at an estimated altitude of 5,710m (18,735ft) above Denali Pass, a bit off the climbing route on the ridge leading to the South Summit.

The instruments installed in 1990 included an aerovane-type anemometer, and 2 platinum resistance thermometers. The anemometer was mounted at a height of about 1.5m on a stand made of angle iron (before departure, then disassembled for travel) by the climbers. One thermometer was mounted under the anemometer, in a plastic sports drink bottle cut open at one end. Data were recorded in Data Mark data loggers made by Hakusan Corporation, inside a plastic bucket for protection from crows, and buried beneath about 0.5m (2 feet) of snow. The second thermometer was inside the recorder box.

The angle iron stand was secured by guy lines, but in deference to a request from the National Park Service, bolts were not used.

A record of wind speed was obtained from June through November, 1990. In November, following several severe storms, the rig blew down and recording of wind speed stopped. Although theoretically the wind over a mountain is stronger than the wind in the surrounding free air due to the airfoil effect, the wind recorded on the mountain was weaker than winds at the same altitude over Anchorage, Fairbanks and McGrath (kindly provided by National Weather Service forecaster Ted Fathauer). Suspected causes include thickening of lubricating oil at low temperature, and possible erratic response of the aerovane to sudden changes of wind direction in strong turbulence. Wind direction data were clearly erratic and were discarded.

Temperature data continued to be recorded throughout the year, with the lowest being −58.2 °C (−72.8°F) on February 3. The excellent performance of the Data Mark loggers and the lithium batteries is considered the most important accomplishment of the first year's observations.

A second set of instruments was installed in 1992. This time light weight 3-cup anemometers were installed in place of the aerovane. It is hoped that they will be more responsive to rapid changes in wind speed, and that the temperature will remain low enough so that the cups do not fill with wet snow or ice. Light weight wind vanes are used to measure direction. An air pressure sensor was also installed this time. The rigging was professionally designed and built, in a broad-based pyramid shape for stability, and made of aluminum tubing coupled with U-clamps rather than bolted angle

iron. With the previous failure having demonstrated the need, permission was granted to use bolts (which in any case are routinely permitted in the park for mountain climbing). So although there is no guarantee of success in the severe environment, there is significant improvement over the 1990 rig.

The data loggers were installed in a strong folding plastic packing carton, which is more convenient to carry and use than a bucket, and will hopefully be strong enough to resist crow attacks.

With instrumentation, tools and a 50kg support rig to carry in addition to mountaineering equipment, and with one member having to cancel out due to circumstances at work, each of the 4 climbers in 1992 had to carry and pull 60kg up the Kahiltna Glacier. After the second camp above the landing point at 3,100m (10,200 feet), caches were used and the equipment carried up in relays. The ascent, by the West Buttress route, took from June 10 to 22, the summit being reached on the night of June 22, during a break in generally bad weather, after the equipment installation was completed. The party was at the landing point on June 27 when Mount Spurr erupted, depositing ash on the glaciers. Fortunately very little fell on the runway, and it was possible to fly out. Weather on the mountain this year was particularly bad, with a record 13 deaths as of July 1.

Instrumentation (1992)

Instrument	Quantity	Remarks (Manufacturer)
Platinum thermometer	4	
3-cup anemometer	2	Both analogue and pulse outputs (Makino)
Wind vane	2	Potentiometer type (Makino)
Air pressure sensor	1	(Vaisala, modified for high altitude by Makino)
Data Mark logger	4	LS-3000 (Hakusan)
Peak hold unit	1	(Hakusan)
Lithium battery pack	5	(Hitachi-Maxell)
Stand	1	(Iida)

Three of the Data Mark loggers are set to record every 30 minutes, staggered 10 minutes apart so that if all work correctly data will be obtained every 10 minutes. The fourth logger is connected to a peak hold unit and records extreme values in each 60-minute period.

Expedition Members

1990

Yoshitomi Okura (leader)
Eiho Otani (director TV crew)
Akira Kiuchi
Manabu Hirose
Motoki Kodama
Taijiro Maeda (TV crew)
Fumihiko Yamanushi (TV crew)
Harold Solomon (landing point observations, liaison)

1991 (data recovery only)

Yoshitomi Okura (leader)
Toshihide Haruki
Shigeki Nishikawa

1992

Yoshitomi Okura (leader)
Atsushi Hasegawa (directed instrumentation work, canceled from climb)
Makoto Nakamura
Shin'ichiro Chiba
Kiyotaka Tanaka
Harold Solomon (landing point observations, liaison)

Acknowledgments

The 1990 expedition was sponsored by Asahi Broadcasting Corporation. In 1991 (data recovery only) the climbers were self-financed. Partial support in 1992 was received from the Japanese Alpine Club.

We thank Hakusan Corporation, paticularly Minoru Yoshida and Masayuki Kobayashi, for considerable help with instrumentation and for providing working space and facilities. We are also grateful to Akihiro Makino of Makino Instrument Corporation and Nobuji Iida of Iida Manufacturing Company for their assistance.

We thank the mountaineering rangers of Denali National Park and Preserve for their cooperation. Former Chief Mountaineering Ranger Bob Seibert and Roger Robinson have been particularly helpful. Former Assistant Superintendent Ralph Tingey and park ecologist Tom Ford have also been supportive of the project.

The Japanese National Institute of Polar Research and Hakusan Corporation loaned instrumentation for landing point observations. Okitsugu Watanabe and

Hideaki Motoyama of the National Institute of Polar Research, Yuji Kodama of Hokkaido University, Sachio Watanabe of the Japan Meteorological Agency and Guy Gosselin of Mount Washington Observatory provided valuable discussion of observation and instrumentation problems in the severe environment.

National Weather Service Fairbanks forecaster Ted Fathauer, who provided upper air data, is a collaborator in this project and will participate in future reports. We also thank Gary Hufford of NOAA in Anchorage for assistance with regard to the possible future use of telemetry.

We thank the Japanese Alpine Club Natural Science Committee for being consistently supportive of this project.

Mr. and Mrs. Itsuro Kato of Midnight Sun Express, Anchorage have been very helpful with local arrangements and logistics.

English References

(Readers of Japanese are referred to Okura's report in this issue for Japanese references.)

Fathauer, Ted (1984) Forecasting weather for mountaineers on Mt. McKinley, National Weather Service Alaska Region Staff Notes.

Wilcox, Joe (1980) Storm of storms, Summit August-September issue.

Wilcox, Joe (1980) A study of windstorms on Mt. McKinley, Summit November-December issue.

Wilcox, Joe (1981) White Winds, Hwong Publishing Company, 499 pp. (out of print).

REPORT ON JAPAN CHINA COOPERATIVE EXPEDITION TO NAMCHA BARWA 1991

SHIGEHIRO Tsuneo

1. Purpose of Expedition
   1) To climb Namcha Barwa, the highest unclimbed peak in the world
   2) Develop friendly relationship between China and Japan, and promote climbing techniques
2. Climbing Plan
   1) Climbing route — South ridge via Naipun
   2) Climbing period — 29th Sept. - 30th Nov. 1991
   3) Climbing style — Polar method without oxygen
3. Composition of the team

DUTY	JAPAN	CHINA	YOMIURI	NHK	TOTAL
General Leader	1	1			2
Deputy Leader	1	1			2
Team Leader	1	1			2
Climbing Leader	1	1			2
Member	4	4			8
Manager	1	1	1	1	4
Medical Doctor	1				1
Interpreter		1	2 (CHINESE)	1 (CHINESE)	4
Liaison Officer			1 (CHINESE)		1
Kitchen Staff		3			3
Driver		2	2		4
High Altitude Porter			6 (CHINESE)	5 (CHINESE)	11
Low Altitude Porter		10			10
Newspaper Staff		3	8		11
T.V. Staff				4	4
Radio Engineer		1			1
TOTAL	10	29	20 (9) (CHINESE)	11 (6) (CHINESE)	70

ACTION PLAN

We divided the climbing period into three stages over a longrang plan.

As follows :

First Stage	Establish a Base Camp—the Advance Base Camp. Make a route up to "Rabakou".
Second Stage	Establish Camp 2. Plan a route and carry equipment and food to Camp 4/5.
Third Stage	Establish Camp 5. Plan a route to Camp 6. And attempt to reach the summit.

DETAILS OF THE AVALANCHE

Scale of the avalanche	Depth	: 30— 80cm
	Width	: 150—200m
	Length	: 50— 80m
	Altitude	: Around 6,250—6,200m

Report from the Camp 2

13 : 10	Takami, the climbing leader, reported that they had reached the Plateau.
13 : 15	Received report on the condition of the upper slope from Onishi.
13 : 40~ 13 : 45	Avalance occurred and Onishi was reported missing. Giving artificial respiration to Onishi.
14 : 15~ 14 : 20	Confirmed Onishi was deceased.
14 : 40	Asked Mr. Shimada of Yomiuri Newspaper to contact Mr. Yamada, General Leader, in Lassa and Tokyo.
15 : 15	Instructed Dr. Kojima to climb to Camp 2 in conduct an inquest on Onishi's death.
15 : 25	Reported from Takami that they stowed the dead body at the point of 5,850m.

Attempt to reach summit

On 19th Nov. the first attempt party set up Camp 6 at the lowest col of 6,700m and a route up to 7,230m.

On 20th Nov. the party left Camp 6 for the summit. It had been snowing that morning and the party could not be seen from Camp 5. The Climbing Leader Takami reported that the party was reaching around the 7,500m point on the steep slope. It was still snowing and the visibility was very poor because of a dense fog. They reported that many avalanches were breaking by their steps. We decided to return to Camp 6 and then deposited the climbing gear at the point of 7,350m.

On 21st Nov. the members of the first attempt party took a whole day's rest at Camp 6 since the weather was poor and all of them were exhausted because of hard climbing over several days. Food and fuel were supplied to Camp 6 from Camp 5.

On 22nd Nov. six members of the first attempt party, consisting of three Japanes and three Chinese, left Camp 6 under a brightly shining full moon at 4 : 20 in the early morning. Takagi began to traverse the rock-band where they had reached the previous climbing day. Unsettled snow on the rock-band forced the members to take much time. Meantime, weather condition had gotten worse. At 13 : 40 the party was seized with the snow avalanche. Each member droved their ice axes into the snow slope and held to fixed rope, not to be swallowed up by the avalanche. Some members lost their equipment such as sunglasses. Most members got frost-bitten lightly on their hands and feet in the bad conditions. Eventually we decided to make a retreat from the attempt at 13 : 00 and got back to Camp 6. The altitude 7,460m was the highest point we could reach in this attempt.

JAPAN GUNMA WINTER MT. SAGARMATHA SOUTH-WEST FACE EXPEDITION 1991-'92

OGATA Yoshio

The Gunma Mountaineering Association (GMA) was founded in 1941, and the activities sponsored by the GMA cover a wide range of mountains in the world. In the Himalayan area, the GMA has sponsored 7 climbing expeditions, including climbs to the summit of Mt. Dhaulagiri I (8,167m, the first ascent of the S.E. ridge) and Annapurna I (8,091m, the first winter ascent of the South Face).

In 1991, the GMA sponsored a climb to the route of the south-west face of Mt. Sagarmatha (Everest 8,848m) in winter which the British team failed in 1975, and this plan was made in commemoration of the 50th anniversary of the GMA foundation. Mr. Hikaru Hoshino, the president of the GMA, was the General Leader of the Expedition and Mr. Kuniaki Yagihara, the chairman of the Overseas Mountaineering Committee of the GMA, was the Leader. The team consisted of 15 climbing members, not including the General Leader and the Leader.

For the preparation of this expedition, each members trained himself separately at Kangchenjunga, The Broad Peak, Nun and Pamir in spring and summer. Our team was divied into four parties and stayed in Kathmandu from 3rd Oct. to 21st Oct. After that, we trained for the acclimatization at the 5,099m high peak behind Pheriche and at Pokalde Peak (5,806m) opposite Lobuche.

We set up the Base Camp on the Khumbu Glacier at an elevation of 5,350m on 11th Nov. We started making a route to the ice-fall together with two Korean explorers toward the South Pillar and the South Col on the same day. We finished making a route for the ice-fall by 16th Nov. Having trained for the acclimatization for 6,000m, we carried our load up to Camp 1 from 20th Nov. to 27th Nov.

After three days rest, we started winter climbing to the South-West Face of Mt. Sagarmath on 1st Dec. We established Camp 1 a top of an ice-fall at an elevation of 6,020m on the same day.

The next day, we pitched Camp 2 on the Western Cwm at an elevation of 6,500m.

At the elevation of 6,700m, we found a big "schrund" base at the South-West Face which had to be got over before we crossed it through a narrow gap. The upper part of the "schrund" looked like an easy ice-snow slope and its average gradient of the slope was 35° approximately. Nazuka's party stretched 8.5 pitches of the fixed rope on the upper part of the "schrund" on the 2nd and 3rd Dec.

We established Camp 3 below the big rock just like a warship at an elevation of 6,900m on 5th Dec.

We stretched 23.5 pitches of fixed ropes from Camp 3 to Camp 4, and the average gradient of the slope was approximately 40°. Camp 4 was pitched on a slope just below the Grayish Turm at an elevation of 7,600m on 11th Dec. The artificial camp stage was used for Camp 4. On the same day, Nazuka's party started route making for Camp 5. They extended the route 17 pitches up toward the left "couloir" cutting into a rock band from 11th to 14th Dec.

The next day, Ogata's party extended the route one more pitch up, and they reached the entrance of the "couloir". They went up some 1.5 pitches of narrow gully to the amphitheatre at the top. The "couloir" has a width of three or four meters, and a small chockstone (almost covered with snow) hindered in the "couloir". The average gradient of the "couloir" was approximately 50°. They reached at the elevation of about 8,300m just below the Ramp. On the very steep rock face we found an old fixed rope which presumably belonged to the 1975 British expedition team.

On 16th Dec., at length we accomplished overcoming the key point of the rock band successfully. Ogata took over and led up the rock face, tending slightly to the right to gain a ramp. Ogata went up the ramp, taking care not to drop a stone. On the ramp there were loose and brittle rocks. He extended the route one more pitch up on the ramp.

On 18th Dec., Hashimoto's party stretched for another short pitch, until they were almost sure that the way was clear to reach the site for Camp 5 at an elevation of 8,350m. They found the remains of British team's Camp 6 in that place.

On 21st Dec., Ogata's party attempted to put up Camp 5 but failed. The tent poles

were broken by the cold and strong wind. Then the real cold winter visited the mountain.

On 25th Dec., we were compelled to evacuate from the Camp 2 to the Base Camp. After five days rest, we started climbing again, but we suffered from the strong wind almost everyday in January. We went up to the upper camp but again we came down to Camp 2 without any result.

On 8th Jan., we set up Camp 5 (8,350m), and Nazuka and Sato stayed the first night there. Next morning they had to go down to Camp 2 because the night at Camp 5 was too severe.

On 15th and 29th Jan., two parties reached at Camp 5 again, but they could not continue to climb up higher than to Camp 5. Sherpas refused to supply the goods to Camp 5.

When February comes the gales set in. We resolved to give up climbing on the 9th of Feb. All members and sherpas came back to the Base Camp safely on the next day. Most of the 83 climbing days were spent just waiting for the wild wind to calm down.

ASCENT OF TIRICH MIR

SUDO Tateshi

On 1st of July 1991 Saito, Suddo, Horie, Funao, Oda, and Yamaguchi visited Adventure Training Centre, which is situated at the resort city of Abbottabad. The both sides of Japan-Pakistan Joint Tirich Mir expedition met each other for first time. Six Pakistani climbers participated in the expedition. Sajjad Shah is deputy leader. Ata-UI-Haq, one of the few experienced Pakistani climbers, stood on the summits of Nanga Parbat, Gasherbrum II, and Sia Kangri, joined this time as liaison officer.

After four days caravan journey, on 12th of July the main body of the party reached bend of the Upper Tirich glacier (4,800m), and built Base Camp. Climbing of Tirich Mir was commenced on the following day.

Camp 1 and Advance Base Camp were pitched respectively at 5,800m and 6,400m. Luggages of higher camps were carried up by 24th, and members descended to Base Camp to take five days' rest. Miyagawa, Matsuda and Dokai of the rear group arrived at Base Camp to join the main body.

On 30th Sudo, Horie, Funao, Oda, Atta, Tayyab and Nadeem left Base Camp. They built Camp 3 at 6,800m on the crevasse-ridden upper end of the glacier, and spent two days to cut open fifteen pitches of way on the ice couloir culminating in the col between the summit and West Peak. Camp 4 was built on the col.

Seven climbers started on 5th to assault on the summit. But Tayyab slipped at 7,400m and fell to the Lower Tirich glacier. Fortunately he was found lain in a crevasse 400m lower down. He was hardly hurt and able to be carried down to Camp 3. Remaining three climbers ascended to Camp 3 to meet others. Tayyah was safely rescued down to Base Camp on 6th.

On 9th Horie, Funao and Atta ascended to Camp 4 and went on the second summit assault on 10th. The heavy wind broke tent poled at Camp 4, and they could not cut the way up and were compelled to return at 7,450m and arrived at Camp 4. Atta got frostbitten on both feet and he returned to Base Camp on the following day.

On 10th Sudo, Miyagawa, Matsuda, Oda and Dokai left Base Camp and climbed to Camp 4 on 13th. On 14th Sudo, Miyagawa and Matsuda started on the third assault, but it took too much time to find out the way on the rocky arete leading to the summit. After climbing 4 pitches it became too late, and they were forced to return. On 15th Sudo and Miyagawa managed to climb the rest of 4 pitches on the arete, and finally reached the sumit (7,708m) at 2 pm.

In the morning of 16th Dokai at Camp 4 was seriously affected with cerebral edema and he could not walk by himself. Rescue operation was begun without delay. Dokai was carried down to Camp 3, where Horie and Nadeem joined the group. At Advance Base Camp Sajjad joined. Camp 3 and Advance Base Camp were removed and they bivouaced at 6,100m. Dokai was carried down to a place some 1,200m lower down, and he considerably recovered by the follwing morning. The party could carry safely him back to Base Camp. As a member of the rear group Miyagawa came to the mountain rather late. He could tread on the summit 19 days after he reached Base Camp.

The second object of our expedition was to minimize the volume of rubbish and to carry out the luggage as much as possible. Because of unanticipated happenings of incidents at higher camps, we were unable to attain completely the object. We were compelled to leave some of equipments and foods on the mountain. One tent of Camp 4 and provisions at Camp 3 and Camp 1 were thrown into crevasse of the glacier nearby, and rations at Advance Base Camp were left on snow since we could not find out crevasse in the neighbourhood. Climbing rope fixed at 23 pitches on the steep slope was left.

While we were climbing, all garbages were carried down to Base Camp and burned there. Emptied tins and garbage found on camp sites of previous expeditions were cleaned up. Emptied tins were pressed compactly, and together with inflammble wastes, those were transported back to Abbottabad by three special porters.

On 26th August all of us were invited to the reception party given by the President. I handed over the piece of stone to the Presindent which I picked up at the summit of Tirich Mir, and reported him the results of expedition. Japanese members left Pakis-

tan on 31st of August.

ナムチャバルワの気象（1991年）

奥山　巌

1．まえがき

1991年秋，日本・中国合同登山隊はナムチャバルワの登山を行った。しかし悪天候にはばまれ登頂には成功しなかった。

以下の報告はBC（3520㍍）からC5（6900㍍）までの天気を重廣登攀隊長からいただいたので，この間の気象を上層天気図などと比較，検討してみた結果とそれに関連した調査結果である。

2．300，500mbの気圧の谷と天気との関係

第1図は上が300mb（那曲（ナッチュ）　北緯31.5度，東経92.0度付近）と500mb（ラサ　北緯29.5度，東経91.0度付近）の高度と気温，中が那曲の300mbとラサの400・500mbの風，下が登攀中の天気とコメントである。

まず，下の天気を見てみよう。10月中旬まで天気が曇りがちなのはモンスーンの影響があろうが，その後の天気はだいたい気圧の谷通過のとき崩れている（谷接近につれ天気悪化し，通過とともに回復している）。気圧の谷は300～500mb各層とも少しのずれはあるが（だいたいは上の方が後にずれている），ほぼ同時に通過している。

しかし10月14～15日の悪天のみは，300mbでみると気圧の谷ではなく，気圧の峰のところの悪天のようにみえるが，500mbを細かく見ると，やはり気圧の谷は通過しており，しかもこのときは南からの湿ったベンガル湾気流も関係している。

気圧の谷と天気の崩れは割合よい一致を示すが気圧の谷の構造は単純なものばかりでない。その何例かをとりあげ解析してみた。

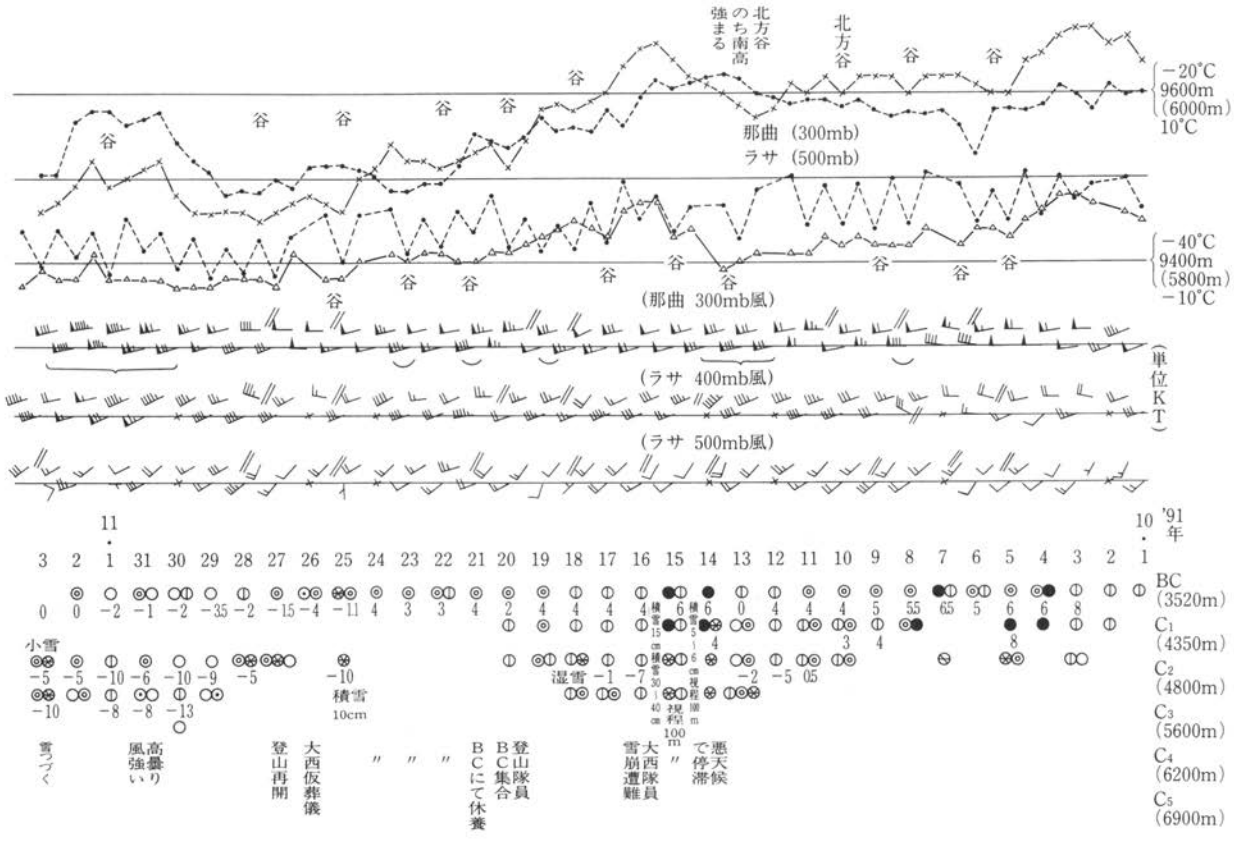
3．気圧の谷の解析例

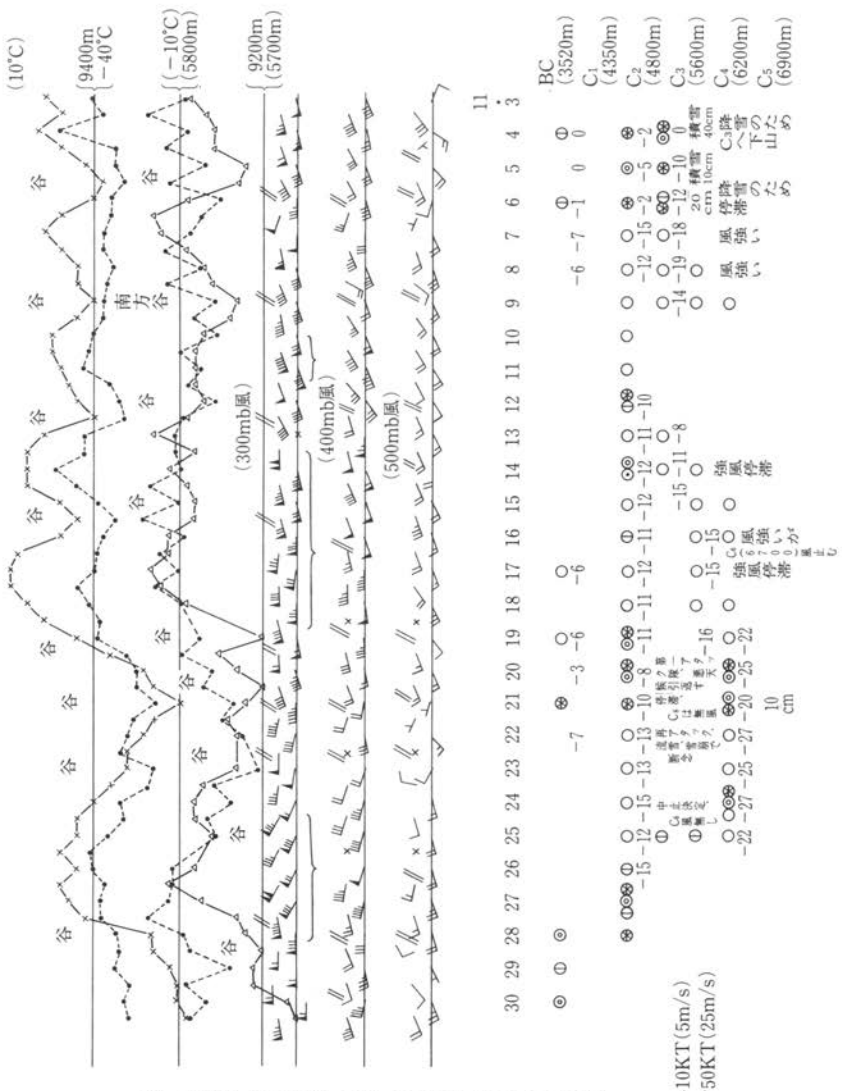
①　10月13～16日の例

500mb（第2図）をみると，10月13日は西から谷が接近，これとともにベンガル湾からの南風が山へ直接入りはじめた。この谷は14～15日にかけて山へもっとも近づき，15日夜は弱まりながら東へぬけた。この谷の通過に伴って，南から暖湿な気流が入ったため山はかなりの降雪となった。とくに雪崩遭難の起った（16日），山の稜線の風下斜面では50㌢㍍前後もの降雪があった。

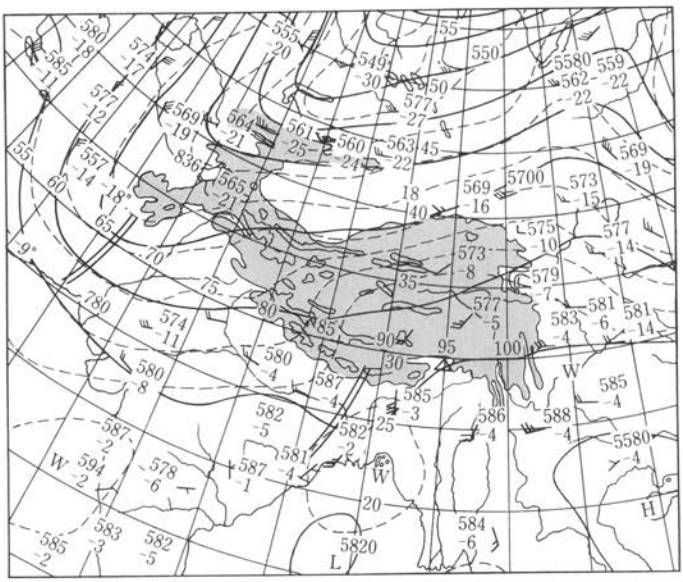
その後，また別の深い気圧の谷がインド西部へ進んできたが，この谷は西の方では深くとも東へ進むにつれ弱まり，山を通過したのは17～18日。山の上の方では18日に雪が降っているが，この影響であろう。この谷の接近のため，山では16日も南西風となったが，天気はよかった。

第1図　ナムチャバルワの気象と那曲・ラサの上層資料（'91・10～11月）

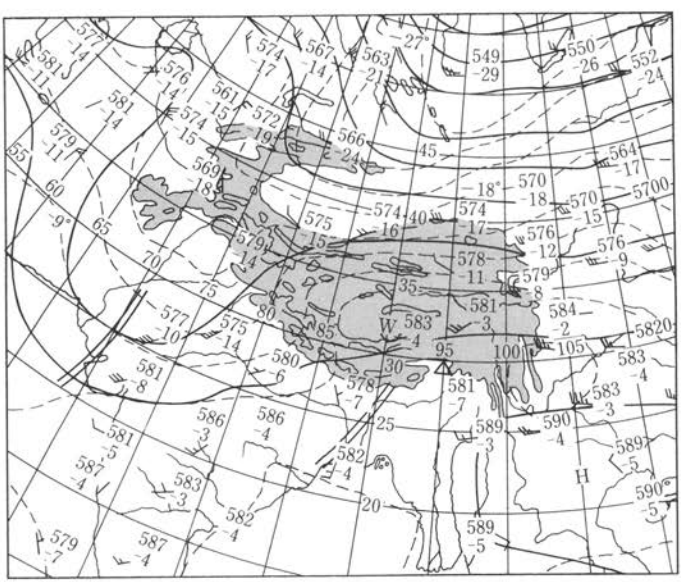




（注）
二重実線・高度，太実線・気温，
斜線・高度，破線・露点を示す。
谷通過の風速はKT（ノット，
mb，mの高度，mbの平均の高度，
mの順）

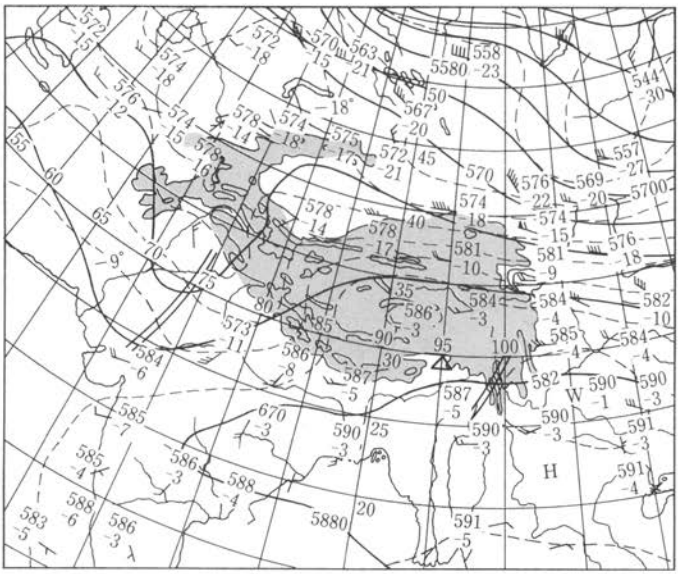


(1)　10月13日　12Z

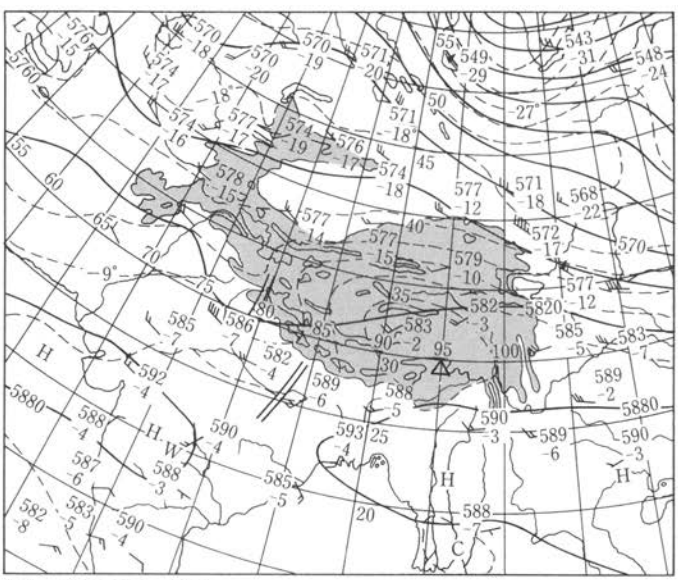


(2)　10月14日　12Z

第2図　'91.10.13～16
500mb 天気図



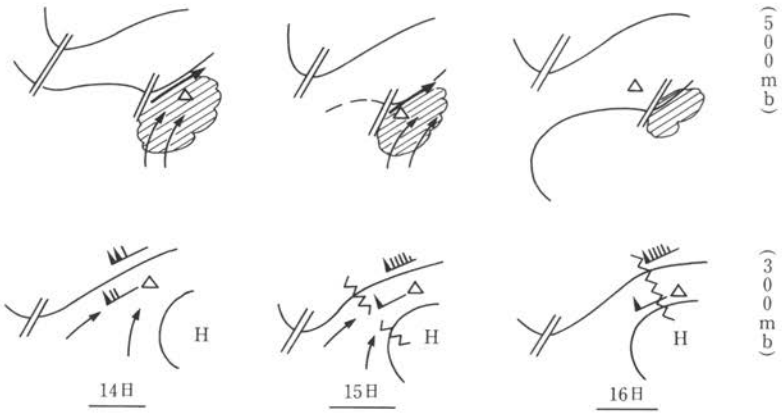
(3)　10月15日　12Z



(4)　10月16日　12Z

(注)　実線：等高度線（m；60 m おき）
破線：等温線（℃；3℃ おき）
二重線：気圧の谷
矢羽根：└─ 10KT（5 m/s）

データ：上から高度，気温
アミ部分は高度3000m 以上
△：ナムチャバルワ



これはスケッチ図上の500mb のように，南からの暖湿気流は北西方にある深い気圧の谷へではなく，その南側にある強風軸に伴う南側の気圧の谷の前面へ入るため，悪天域は深い気圧の谷よりも前に現われることが多い。300mb（スケッチ図下，または**第3図**）では南の気圧の谷は表現されず，西からの気圧の峰の東進の方が強く表現されている。16日好天になったのはこの峰が山の上に重なったためでもあろう。しかし，14～15日の悪天は500mb 以下の下層の現象であった。

② 11月4～6日の例

第4図の300mb をみると，西から接近する谷ははっきりしているが，細かくみると谷は2つある。A の谷は4～5日にかけ山の南側を通過。B の谷は山の北西方から南東進しており，これが，5～6日通過した。しかし40ｾﾝﾁﾒｰﾄﾙもの大雪が降ったのは南側の谷の通過に伴ってで，北側の谷では降雪量としてはそれ程ではない。

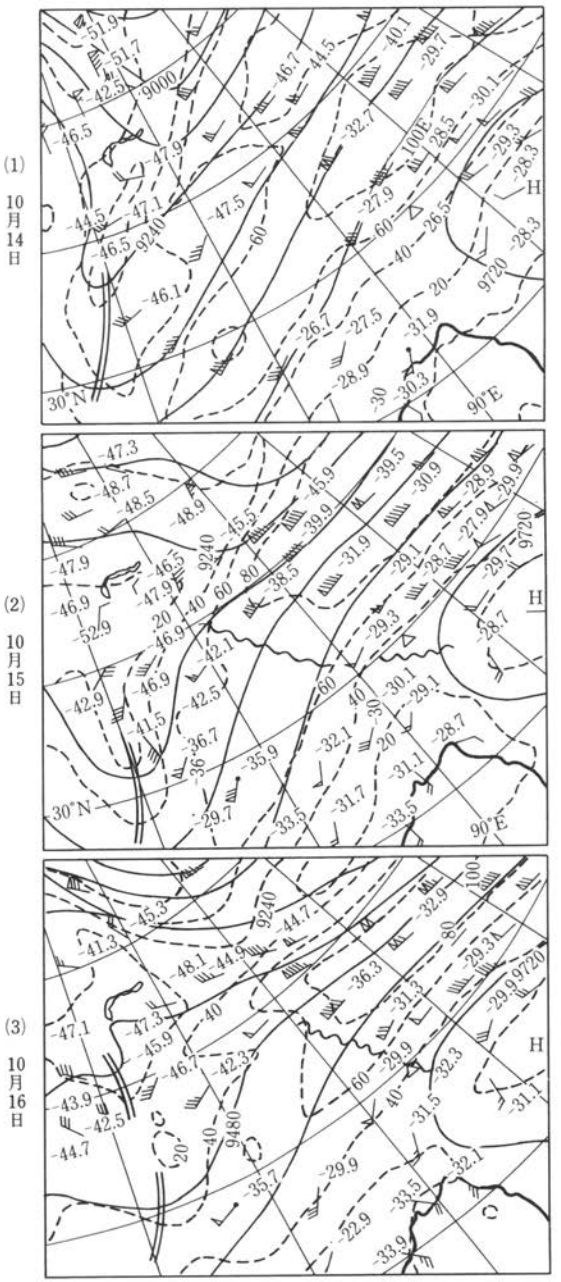
この例でも気圧の谷は二段構造を示し，より悪天域は主な気圧の谷の南東側にある気圧の谷の方である。前例と同じく下層の暖湿気流は南側の谷の前面に入るからである。とくにこの例では4日12Z の500mb の風が弱いながら南東風を示している（**第1図**）。500mb もの上層で東よりの風を観測することは上層まで低気圧性循環のあることを示しており，それだけ伴う上昇気流も強く，このため降雪量も多くなったのであろう。一方北側の主な谷の方は，上層寒気中心に対応するもので，この方は大気を不安定にさせ降雪をもたらすが，それほどの降雪量はなく，風も比較的弱いのが普通である。

③ 11月19～21日の例

この場合も，気圧の谷はいくつかある。（**第5図**）一つの谷 A は19日夜通過。つづいて B の谷が20～21日にかけ通過したが，この方は前の例と同様，南北2つの二段構造を示していた。北系の最後の谷 C がぬけたのは21日朝であった。これに対応して山では19～21日にかけて降雪となった。

④ 11月14～22日の強風，流雪について

11月14～18日にかけての300mb の風は70～80KT（ノット）を示し物凄い強風であっ



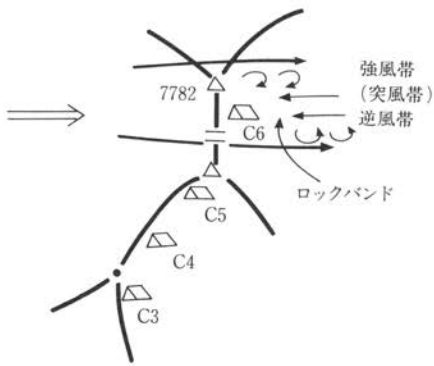
第3図　'91.10.14～16
00Z

（注）　実線：等高度線（120 m おき），
破線：等風速線（KT，20 KT おき），
二重線：気圧の谷
ジグザグ線：気圧の峰
矢羽根：╲ 50KT（25m/s）
╲ 10KT（ 5m/s）

た（第１図）。これを反映して登山隊もしばしば強風のため停滞を余儀なくされていた。19日以降になると深い気圧の谷接近のため，21日にかけて天気は崩れた。

しかし風そのものは300mb では，それ以前と比べると弱まっている。それでも40～50KT はあったが，肝腎の400mb（7500m くらい）の風は20～30KT と弱い。あるいはこれはチベット内陸のラサの風だから弱いので，山の稜線では300mb に近い風が吹いていたのかも知れない。

とにかく登攀隊のビデオを見ていると，山頂直下のロックバンドでは，下から吹き上げる強風のため雪が下から吹きつけ，登山が難航している様子がよく撮られていた。



これはその場所が上空を吹く強い風の風下の逆風帯に位置するためであろう。

山本三郎調査の富士山気流図（第７図）では，風向に対して側面が強風帯，真後ろが逆風帯，強風帯と逆風帯の間が突風帯（つむじ風帯）となっているが，この場合，主風向が西～西北西風なので，ロックバンド付近が丁度逆風帯～突風帯に当っていた。

また，山の風蔭では地形の影響で逆風にも当りにくい所があるが，そこでは無風状態になることもある。16日，21日，24日のＣ６の風弱しという記事はこの無風帯に入ったことを示しているのであろう。

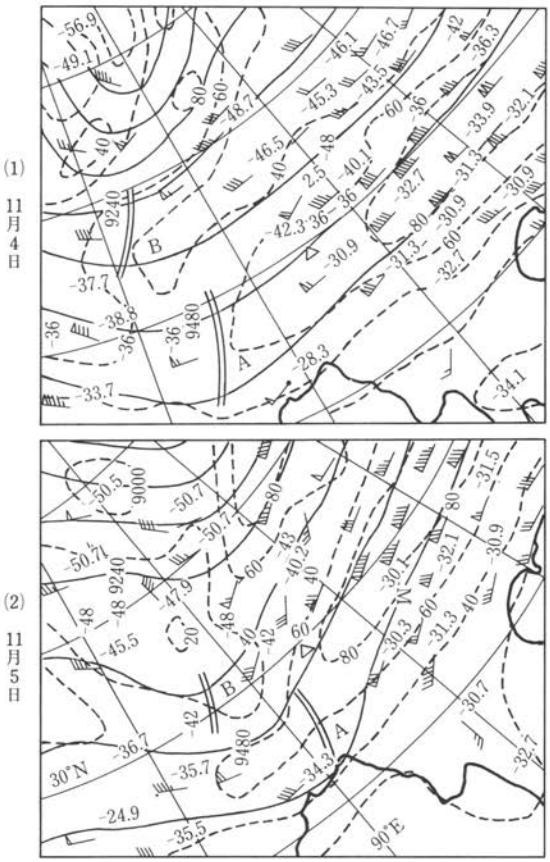
⑤　300mb の強風と気温について

第１図の中段の風は300mb の風であるが，ここで70KT 以上の強風については〜，または〜〜をつけてある。ここで注目すべきことは〜は単発的な強風であるが，このときは大体上層の気圧の谷（上層寒気南下）に伴う強風である。一方〜〜の方は，気圧の谷通過後，気圧の峰が接近する場合であって，気温も上昇している。すなわち亜熱帯高気圧（サブトロピカル　ハイ）の張り出しに伴う強風であって，この方がより強く，より長期間つづく習性がある。

筆者は前に「上層の強風と気圧の谷との関係」について報告したが，そのときの解析には日本付近のデータを用いた。日本付近の上層の強風の場合，気圧の谷（上層寒気南下に伴って現われる）通過前後に現われる回数の方が，亜熱帯高気圧張り出しのときより多かった。

強風は等高度線の間隔が狭くなるとき（空気の流路が圧縮されるとき）起る。それは寒気南下，暖気北上の双方で起る。寒気南下の場合，南下しすぎると，寒気内の弱風域に入ってしまうし，またその南下のし方によって強風は，谷の前で起ったり後で起ったりする。しかしこの場合，強風は割合短時間ですむことが多い。

しかし暖気北上，亜熱帯高気圧の張り出しの方は，よりスケールが大きく，ヒマラヤ



第4図　'91.11.4～5
12Z
300mb 天気図

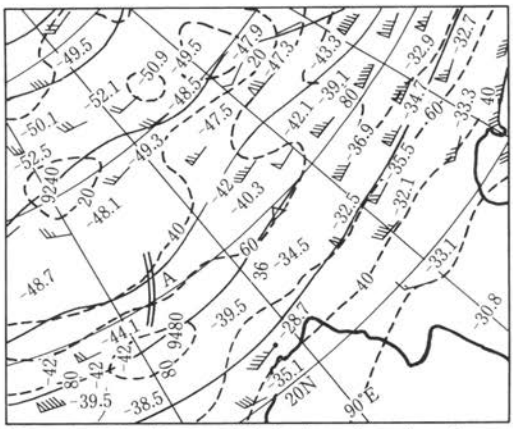
の場合，起ると3～4日はつづく傾向がある。第6図がその一例（1991・11・12～13）である。12日夜気圧の谷通過中は谷の中の弱風域に入ったため風は弱まったが，通過後の13日になると南から亜熱帯高気圧が北へ張り出し強風となり，18日までの6日間も70KT以上の強風がつづいた。

気温の方をみると，12日は低かったが，12日夜から上り出し，13日朝にかけ約5℃の上りを示している。そして強風の吹く間，気温は高めであった。（かえって15日夜，弱いながら気圧の谷通過，気温が下がったが，このとき風はやや弱まっている）。

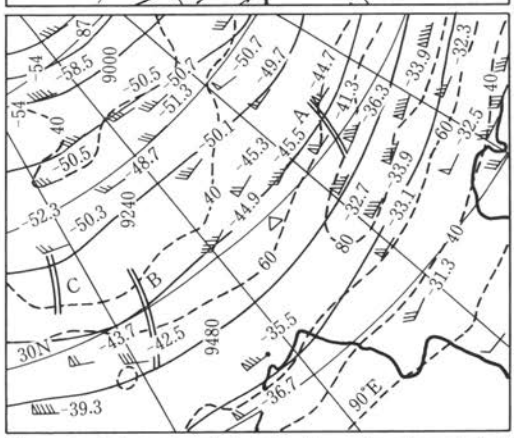
このようにヒマラヤ付近については，寒気南下の場合よりも暖気北上の方が回数も多く，かつ顕著のようである。

先に大蔵喜福は気温上昇は強風発現の前兆となると指摘されたが，ヒマラヤに関してはこのタイプの強風がかなり多く発現するようである。1991年秋はとくにこのタイプが多くどうやら年によるくせもありそうである。また他の地域ではどうかも含めて，もう

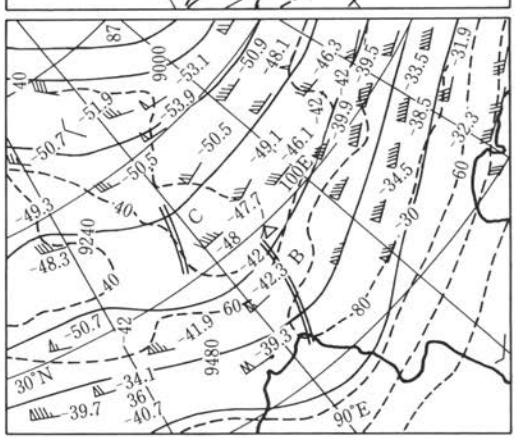
(1)
11月19日



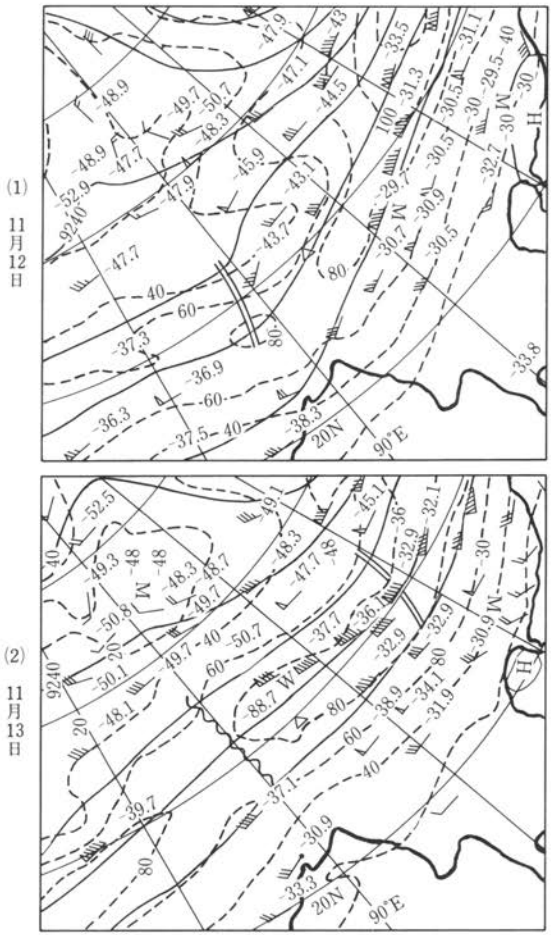
(2)
11月20日



(3)
11月21日



第5図　'91.11.19～21　00Z　300mb 天気図



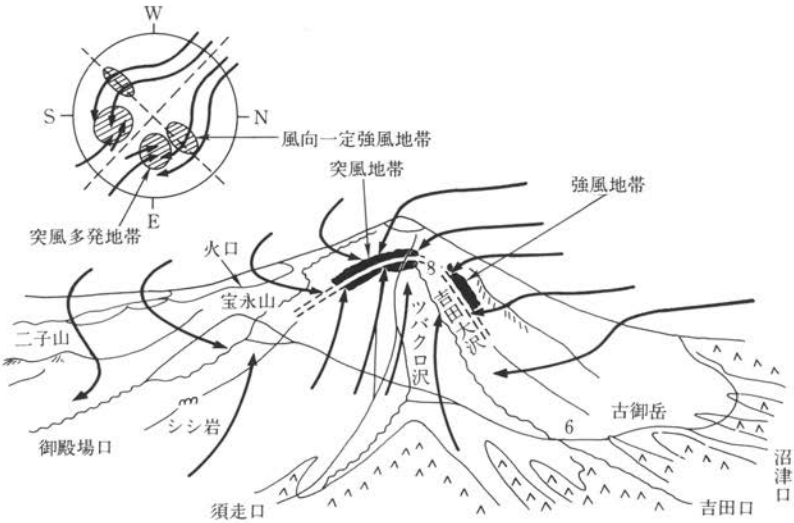
第6図　'91.11.12～13　12Z　300mb 天気図

少し調査をつづけていきたいと思っている。

4.　東経90度線にそう強風軸の南北変動

夏から冬へ移り変わる時期，300mb や 500 mb の風はどう変化しているのであろうか。このことをみるため，1991 年 8 月～1992 年 3 月の 300 mb，1991年 8 月～12月の500mb の北緯65～23度の各緯度 5 度ごとの代表観測点における，旬別の平均風速を出してみたのが第 1 表である（代表観測点の毎日12Z の風速の平均）。

300mb でみると，夏の間（8～9月）は北緯40度付近に比較的強いものが停滞しているだけだが，10月になると北緯55～65度の高緯度により強いものが現われ，同時に北緯40度付近にあった強風軸が北緯30度付近へ南下強まった。11月になると強風軸はそれぞ



第７図　北西季節風時の富士山気流図（山本三郎）

れさらに北緯55度，25～30度付近へ南下。12月以降は北のものより南の方が強まり，とくに南のものは25度を中心に80～100KT，またはそれ以上を示す。

一方500mb の方は300mb と傾向はほぼ同じだが風速は弱い。しかも30～35度付近はチベット高原の影響で，風はさらに弱めに出ている。

10月中旬までは強風軸はチベット高原の北（40度付近）で停滞しているが，10月下旬になると急に25度付近へとチベット高原を飛びこして南下。真冬になるとさらに南下停滞するようである。

風の強さからいうと，秋の間は低緯度（25度）の方より高緯度（50～55度）の方が強いが，真冬になると低緯度の方が強まってくる。

問題の32度付近に注目すると，500mb でこの付近が強まるのは10月中，下旬頃。チベット高原の影響で強風軸がこの付近を南下するときも，この付近の風は比較的弱い。しかし冬になるにつれ低緯度の強風軸の強さが増すにつれ35度付近の風速も増大してくる。

真冬（1～2月）になると，300mb では25度を中心にその風速は80～120KT（40～60m/s）という猛烈なものとなり，32度付近でも50～80KT となる。もちろん周期的な気圧の谷の通過や南の亜熱帯高気圧の強弱によって，より強いときもある代り，ときにはぐっと弱まるときもあろう。しかし平均的には冬期は猛烈な風の吹くときの方が多くなるといえよう。

5.　まとめ

1991年10月～11月の２カ月間のナムチャバルワの気象と前に行なわれた1988年3～5月

第１表（１） 300 mb 風速の緯度別、月、旬別平均風速（KT）
（'91. 8月～'92. 3月）

'91～'92 ＼ 緯度		65	62	57	52	48	43	39	32	26	23
8月	上旬	42	56	43	42	47	50	51	16	11	21
	中旬	21	33	34	51	46	35	44	20	8	18
	下旬	33	28	34	31	43	61	55	18	9	14
9月	上旬	26	18	28	43	40	38	49	31	11	9
	中旬	35	31	34	39	50	56	60	30	10	9
	下旬	31	40	35	38	37	45	39	41	30	9
10月	上旬	59	58	58	31	27	48	53	55	28	11
	中旬	57	42	45	42	35	48	51	64	39	16
	下旬	53	65	72	57	46	32	19	62	51	30
11月	上旬	59	49	35	69	45	46	38	62	63	40
	中旬	45	49	41	27	26	29	35	63	59	51
	下旬	25	43	59	54	57	48	40	60	75	67
12月	上旬	19	39	70	66	54	52	34	54	59	57
	中旬	31	40	53	59	76	68	51	50	41	52
	下旬	70	63	51	40	46	39	37	75	90	85
1月	上旬	29	59	56	48	44	42	50	64	73	85
	中旬	69	61	56	44	29	35	40	49	78	80
	下旬	48	43	53	62	65	56	55	49	57	70
2月	上旬	47	43	37	33	32	38	47	56	89	87
	中旬	30	37	51	33	32	33	45	81	120	95
	下旬	31	52	50	40	53	36	21	44	68	87
3月	上旬	45	43	47	41	49	49	49	85	98	71
	中旬	42	30	38	36	57	51	55	55	70	58
	下旬	65	73	74	49	39	68	70	66	74	59

（注） 風は毎日 12 z のみの平均、— 風速の極大、--- 次位
風速は KT（ノット）、m/s はその 1/2。

第１表（２） 500 mb 風速の緯度別、月、旬別平均風速（KT）
（'91. 8月～12月）

'91～'92 ＼ 緯度		65	62	57	52	48	43	39	32	26	23
8月	上旬	24	32	29	28	23	23	14	9	9	8
	中旬	17	21	33	25	24	15	15	12	10	13
	下旬	23	24	14	19	25	35	20	8	11	16
9月	上旬	20	15	25	25	27	24	25	7	7	9
	中旬	26	19	20	22	29	26	23	9	10	8
	下旬	22	25	23	24	21	26	18	11	15	12
10月	上旬	38	36	34	21	19	21	23	16	15	10
	中旬	39	39	37	30	24	20	23	19	19	14
	下旬	35	46	55	41	30	20	10	16	27	19
11月	上旬	33	34	38	38	34	24	27	17	35	26
	中旬	38	37	35	31	19	16	18	21	38	24
	下旬	19	33	46	50	46	32	26	27	41	39
12月	上旬	17	24	42	50	40	24	27	19	31	32
	中旬	21	32	44	33	43	41	37	24	21	19
	下旬	42	41	37	24	23	20	20	19	53	51

のチョモランマの気象を解析してみた結果および中島の報告などでは，ヒマラヤの悪天は上層の気圧の谷通過とはほぼ対応するといえる。しかし気圧の谷も細かくみてみると，単独で通過するもの，南北の二段構造を示すもの，また谷も浅いものや深いものがある。また谷の通過が山の真上を通るもの，北方を通るもの，南方を通過するもの，また南からの下層暖気を伴うものなど，いろいろあり，山への影響はこれらの複合作用で決まる。

しかしモンスーン終了後，上層気圧の谷通過のときの山での大雪（降雪10cm 以上）となると，南からの下層暖気の流入が重なるときとか，500mb でも低気圧が表現されるほど気圧の谷が深いときとなる。

しかも事後の解析ではもっともらしいことをいえても，事前の予測となると一層難しい。

気象庁は北半球500mb 天気図については一週間先までの予想天気図（電子計算機での計算）を作っているが，ヒマラヤ付近は500mb 近くまで大きなチベット高原があるため，その影響をうけて他地域より予測精度は落ちる。300 mb の方が地形の影響のうけ方は少ないが，この方は24時間先までの予想天気図しか作っていないし，300mb だけだと前に述べた1991年10月13～15日の例のような500mb 以下の現象は予測できない。

このためヒマラヤの天気予測を行うには，まず第１には，気象庁の計算機による予想上層天気図を利用して行うが，ヒマラヤ付近では予想天気図の精度が不十分なので，現地の気象の変化，気象衛星の雲画像からの雲の動き，現地周辺の高層観測所における上層観測値そのものの変化などを注意深く見て，次に来る気圧の谷の構造，強弱，速度などを推測し，予想天気図を補正して使うことが，今のところの最良の方法であろう。それ故今後はヒマラヤへ出かけられる方は，その気象データを是非科学研究委員会へ提供していただきたい，とお願いして結びとします。

（日本気象協会　日本山岳会科学研究委員会委員）

参考文献

中島　暢太郎・ヒマラヤの天気予報
山　岳　第78年（1983）p37～60　日本山岳会
山本　三郎・富士山の気象　山の気象（Ⅰ）
山の気象研究会　p29～39　恒星社
奥山　　巌・チョモランマの気象（Ⅰ）
山の気象研究会ニュースNo77．p11～18　山の気象研究会
奥山　　巌・チョモランマの気象（Ⅱ）
山の気象研究会ニュースNo78．p85～94　山の気象研究会
奥山　　巌・上層の強風と気圧の谷との関係
山の気象研究会ニュースNo80．p66～73　山の気象研究会
大蔵　喜福・気象遭難における風についての考察
日本山岳会科学研究委員会講演資料
（冬期マッキンリーの登山と気象遭難）1990年２月

落石から身を守る基礎知識

岩　船　昌　起
（東北大学・理学研究科）

Ⅰ　はじめに

落石により，命を落とす登山者は数多い。一昨年の夏，男女二人のパーティーが前穂高岳・北尾根Ⅳ峰を登っていた。トップの男性は，突然発生した長径3m以上もある巨大な落石に巻き込まれ，およそ300m滑落した。筆者は，その時近くで地形調査をしていたが，数十もの落石がすさまじい音を立てながら転がり落ちる光景に身震いした。あたりが静かになっても，彼の名前を繰り返し叫び続ける女性の声だけがカール内に響きわたっていたことを忘れられない。

落石による事故を100%防ぐことは簡単である。落石が発生する危険なところに近づかなければよい。もっと分かりやすく言うと山に登らなければよいのだが，そうなると大半の山小屋がつぶれ，多くの人々が困る。日本山岳会もなくなり，私の文章もこれで終わりになる。ところが幸いなことに（？）多くの登山者は多少の危険を冒してでも山の自然美に触れることを望み，「山に登るな」というナンセンスな忠告を聞かない。

落石の危険性を承知で山に登るからには，山でおきる事故の責任は登山者自身で負わなければならない。しかし，多くの登山者は落石が非常に危険なものだということを把握していないように思える。私たちは，落石事故を未然に防ぐため，落石という現象をしっかりと理解する必要がある。

そこで本文では，登山者が自分自身で落石事故を防ぐ基礎知識として，落石について地形学的観点から説明を行う。冒頭にも少し書いたが，筆者は穂高岳，涸沢カールの地形を研究している。その都合上，落石に関する地形学的説明も涸沢カールでの研究結果がもとになっている（岩船，未発表）。

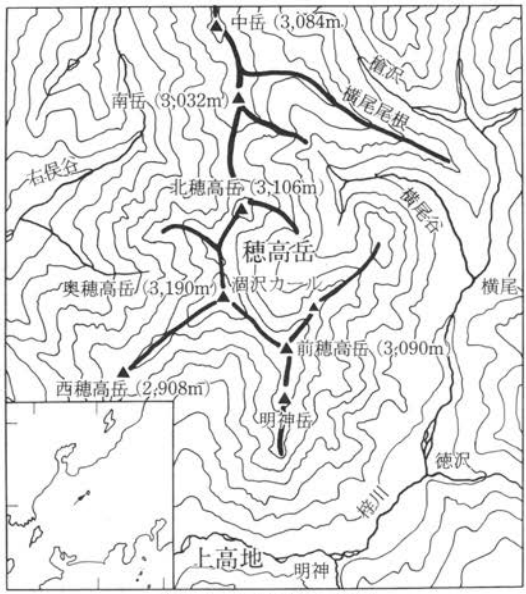
Ⅱ　落石が頻発する涸沢カール

穂高岳は，前穂高岳，奥穂高岳，北穂高岳などの岩峰群の総称である（第1図）。穂高岳周辺には氷河地形が数多く分布し，古くから多くの研究が行われてきた（例えば，今村，1940；式，1952；五百沢，1962；Ito and Vorndran，1983）。そのため穂高岳は，日本における氷河地形の模式地とされてきた。

涸沢カールは，穂高岳の東側斜面に位置する日本最大規模のカールである。涸沢カールでは，裸岩壁と崖錐の地形が非常によく目立つ。崖錐は，裸岩壁から生産される岩屑がその脚部に堆積してできた急傾斜の斜面である。より具体的に示すとザイテングラードに取り付く前のガラガラ斜面のような地形を崖錐という。この崖錐を調べることにより，過去に裸岩壁からの岩屑生産がどの様に行われてきたかを知ることができ

る。

涸沢カールの地質は，吊尾根の一部に閃緑斑岩が分布するのを除き，裸岩壁のすべてが前穂高岳溶結凝灰岩からなる（原山，1990）。岩屑生産など地形の形成に関わることを論じる場合，地質条件を吟味しなければならない。地質の違いにより岩屑の生産の仕方が異なるからだ。しかし涸沢カールの地質はほぼ一様と見なすことができ，地質条件をほとんど考慮する必要がない。



第１図　調査地域の概念図

崖錐を調べることにより，現在の岩屑生産は晩氷期（約１万年前）やネオグラシェーション期（約３千年前）に比べて規模が小さいことが解った。生産されたほとんどの岩屑は裸岩壁のガリー内に一旦蓄積された後，slush debris flow（シャーベット状の雪が雪面上の岩屑を取り込み，高速度で移動する現象）や wet debris flow（いわゆる土石流）により崖錐の上部に運搬される。崖錐の上部はこの繰り返しにより現在も形成され続けている。

表１　月別の落石発生数および落石発生頻度

	落石発生数	崖錐上へ落ちた数	落石発生頻度（観測日数）
5月	74回	5回	37.0回／日（２日間）
6月	57回	6回	11.4回／日（５日間）
7月	59回	5回	7.4回／日（８日間）
8月	9回	1回	3.0回／日（３日間）
9月	28回	3回	9.3回／日（３日間）
10月	111回	6回	55.5回／日（２日間）

裸岩壁のガリー内に堆積せずに，落石として直接崖錐にたどり着く岩屑の数は意外と少ない（表１）。

Ⅲ　落石の地形学的な意義とその研究方法

落石の定義についてここで再確認しておきたい。「落石」とは，岩壁から岩屑が生産され，自由落下した後，下方の斜面に堆積するまでの一連の現象を示す。従って，堆積する場所が裸岩壁のガリー内や崖錐であってもそれまでの現象は落石と見なすことができる。また自由落下した岩屑そのものを落石という場合もあるが，本文ではそのようなものについては「岩屑」と表現する。

地形のでき方を考える場合，地形を構成しているものが，どこで生産し，どの様に運搬され，堆積したかということを明らかにしなければならない。落石は，運搬や堆積が比較的単純に行われるため，岩屑生産を直接把握することができる。したがって，落石の発生メカニズムを解明することは，岩屑生産の仕組みを明らかにすることとなる。

ところで日本の高山地域での岩屑生産には，凍結融解作用（例えば，岩体内部の水分が凍結—融解することにより岩体が破砕される現象）が大きく関与していると考えられている（小泉，柳町，1982，Matsuoka，1990 など）。Matsuoka（1990）は，南アルプス間ノ岳において生産された岩屑量の比較から，夏季（6 月から 9 月まで）より，凍結—融解が繰り返し頻発する冬季（10 月から 5 月まで）の方がその生産量が多いことを明らかにし，この岩屑生産が凍結融解作用と関連していることを示唆した。しかし，この研究は蓄積された岩屑生産量と日周期で生じる凍結—融解の回数との関係を調べたものであり，どの様な温度変化に対応して岩屑生産が行われているかということは具体的に提示していない。凍結融解作用により岩屑生産が行われていることを明らかにするには，日周期の凍結—融解に対応したより小さなオーダーで議論する必要がある。

日周期の凍結—融解に対応した岩屑生産の仕組みを解明するには，少なくとも時間のオーダーの精度で議論したい。その点，落石の観測は，その発生音を記録することにより岩屑生産の時間変化を明らかにすることができる極めて有効な手法である（Åkerman，1984）。

基本的に昼は連続的に，夜は 2 時間ごとに 1 時間落石の発生音を観測した。発生音から方角を推定し，おおよその発生地点とその規模，発生時間，発生原因などを観測し，あわせて日射の強弱，ガスや雨の状態などその時の気象状況についても記録した。観測期間中，測定された落石のデータは，風や雨などノイズのほとんどない時に観測されたものであり，ノイズの多い時間帯や音が非常に小さくて不確かなものなどは除いてある。

Ⅳ　気象状況に対応した落石の発生メカニズム

1．落石の発生と気象状況との関係

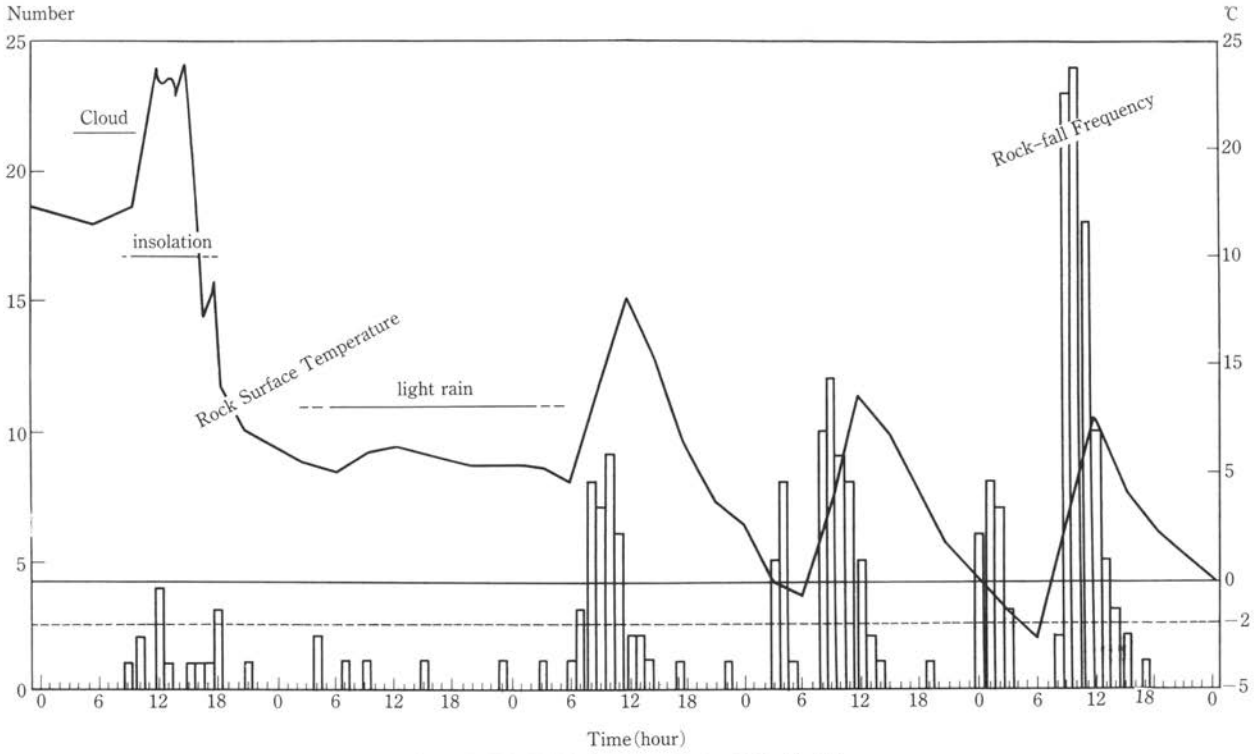
いくつかの観測例から，落石の発生と気象状況との関係は**第 2 図**のようにまとめられる。左の縦軸は，1 時間あたりの落石の発生頻度を，右側の縦軸は表面岩温を，横軸は時間を表す。図の左側から，0°C 以下に表面岩温が低下しない場合（①～④），0°C 以下に表面岩温が低下する場合（⑤，⑥）の順に説明する。

①曇りや裸岩壁にガスが掛かっている時には，表面岩温の変化が少ない。この場合，落石は時間あたり 0～1 個の頻度でしか発生しない。

②晴天の日など，表面岩温がある程度変動した場合，落石は若干発生する。特に裸岩壁に日射が強く当たり，急激に表面岩温が上昇した場合には，時間あたり 3～4 個の割合で落石が発生する。

③小雨が降り，表面岩温の変化がほとんどない時は，①と同様に落石はほとんど発生しない。時間あたり 0～1 個の頻度である。

④雨天後の晴天時，表面岩温が急激に上昇すると，時間あたり 7～8 個の頻度で落石



第2図　気象変化と落石発生頻度との関係の模式図

が発生する。表面岩温が0°C以下に下回らない場合の発生条件の中で（①～④），最も落石の頻度が高い。

⑤表面岩温が0°C以下に低下する場合，0°Cを下回った直後と最低岩温に達した後の温度上昇時には落石が頻発する。前者は時間あたり7～8個の頻度で，後者は時間あたり10～12個の頻度である。

⑥表面岩温の最低値が－2°Cまで低下した場合，その後の温度上昇時には落石の発生頻度が高い。時間あたり18～22個であり，表面岩温が0°Cを若干低下した時より約2倍多い。

2．落石の発生メカニズム

観測結果から，特に表面岩温が0°Cを上下した時に落石が活発化することが解る。このような落石は凍結融解作用により生じるものと考えられ，その大部分は表面岩温が0°C以下になった後の温度上昇時（特に融解進行時）に発生する。凍結進行時にも落石は発生するのだが，その頻度は融解進行時に比べてはるかに少ない。この現象は次のようなメカニズムで生じていると考えられる。凍結進行時や最低岩温時には，裸岩壁内部の水分が凍結することにより，体積が膨張して凍結破砕を生じるが，同時に氷が接着剤の役割を果たし，裸岩壁を徐々に安定させる。融解進行時には裸岩壁が融解し，これまで凍結していることにより張り付いていた，凍結破砕された岩屑が次々に剝がれ落ちる。涸沢カールでの落石の大半は，このようなメカニズムで生じる。

表面岩温が0～1°Cに低下した時の落石の発生頻度より，－2°C以下に低下した時の方が約2倍ほど多い。これは，凍結融解作用の働く最適効果温度との関係によるものと考えられる。水分を多く含む節理の発達した岩体において，氷になった時の膨張率が最も高くなり，効果的に凍結融解作用が働く温度は－2°Cであるという（Matsuoka，1988ほか）。そのため表面岩温が－2°C以下になった時には，氷の高い膨張率により効果的に凍結融解作用が働き，0～1°Cになった時よりも落石発生頻度が高くなる。

表面岩温が0°C以下にならない場合，最も落石の発生頻度が高いのは雨天後の晴天時である。特に日射が直接あたる裸岩壁では，表面岩温が急激に上昇し，落石が活発化した。この発生メカニズムははっきりと解らないが，乾湿風化，水分の移動・蒸発による裸岩壁内部での重量の変化などが考えられる。

V　落石の運動エネルギー

涸沢カールで生産された岩屑のすべてが，落石として崖錐に運ばれるわけではない（**表1**）。生産された岩屑の大きさと生産された高度（基本的に高度により落石のスピードが決められる）との関係，すなわち運動エネルギーの大きさにより崖錐斜面に到達するかどうかがほぼ決定される。運動エネルギーの小さいものは崖錐まで到達することができず，裸岩壁のガリー内に堆積する。岩屑の運動エネルギーが大きくなると崖錐に到達するのだが，中には涸沢のテント場の近くまで来る，非常に大きな運動エネルギーを有する落石もある。

崖錐では，上部から下部になるほど岩屑の粒径が大きくなるのが特徴的だ。大ざっぱ

に考えると，裸岩壁は節理が入り組んでいるため，大小異なる岩屑を一様に生産すると考えて差し支えない。従って，比較的粒径の大きい岩屑は運動エネルギーが大きいために崖錐下部に，小さいものは崖錐上部に堆積する。このような岩屑の配列を Rockfall-sorting（Rapp，1960）といい，涸沢カール以外でも崖錐斜面なら一般的に認められる。

融雪期（6月）に雪渓上に運搬された岩屑の大きさを測定していると，時々落石が近くを通り抜ける。見た目には大したことが無いように思えるが，実はその運動エネルギーは非常に大きい。実際に測定したわけではないが，下部より上部の方が落石の速度が速く，上部では時速 60～80 km になると考えられる。仮に 300 kg（50 cm×50 cm×50 cm：涸沢カールで一般的な大きさ）の岩屑が時速 80 km の速度で移動しているとすると，その運動エネルギーは，自動車（1000 kg）が時速 45 km の速度で移動している時の運動エネルギーとほぼ等しい。

ぶつかりそうになると，自動車は止まってくれるし，避けてもくれる。しかし落石にはブレーキもなく，ハンドルもない。山の中では，残念ながら道路交通法は適用されない。

Ⅶ　登山にあたっての注意

登山にあたっての注意を季節ごとにまとめた。

①　春

残雪期には落石が多い。この時期には日周期の凍結融解作用が頻発し，同時に消雪とともに年周期の融解が生じる。特に，裸岩壁に日射が当たり表面岩温・気温が上昇する午前中に落石が発生する傾向が強い。また今回は説明できなかったが，融雪期に生じる小規模な雪崩も，日射が当たり雪面が融けはじめる 9～13 時頃の時間帯に発生しやすい。この時間帯には岩壁の直下やガリー沿いでの行動はできるだけ避けたい。

②　夏

雨天が続いた後の晴れた日に落石が発生する。このような日はあまりないため，全体としての落石の発生頻度は非常に少なくなる。代わってこの時期に特に注意しなければならないのが人為落石だ。夏山シーズンには多くの登山者が訪れるため，人為落石の発生頻度が自然落石の頻度をはるかに上回る。登山者自身がマナーを守り，安全な登山を心がければ心配無い。

③　秋

10 月に入ると，日周期の凍結―融解が生じるようになる。特に雨が降った直後で，裸岩壁全体が飽和状態にあると，全体で効果的に凍結融解作用が生じ，落石が非常に多く発生する。落石が集中的に発生する時間帯は①春とほぼ同じなので，同様の注意をはらい，行動していただきたい。

④　冬

冬期にはほとんどの裸岩壁が雪に覆われ，露出している部分も氷で固められているため，落石は発生し難い。しかし強い日射が当たり，裸岩壁表面が融けると，落石が発生する可能性が生じる。

現在，岩屑が生産されているところは，ダケカンバやハイマツなどの木本類植物に覆われていない裸岩壁で，特に地質断層や弱線沿いの節理間隔が小さい部分（割れ目が密集している部分）に集中している。このような場所は岩稜の登山道沿いには必ずある。岩場に近づく人は，特に気象状況に注意し，落石が発生することを意識していただきたい。

Ⅷ おわりに

地形学的観点から落石についての説明を行った。実際に観測したデータに基づいているので，気象変化と落石発生頻度との関係の模式図（第２図）は確かなものだと信じている。この基礎知識を理解し，登山で役立てていただければ幸いである。

本文で取り上げたことはあくまでも基礎知識であり，この知識を覚えたからといって落石事故を100％防ぐことはできない。落石は凍結―融解の生じる季節に多く発生するが，それ以外の季節でも不規則的に発生する。また落石の発生メカニズムがすべて解明されても，いつ・どこで・どのような落石が発生するかを予知することは困難だ。結局，落石から身を守るには自分自身で的確な判断を行い，行動するしかないのである。私たちは，登山をする時に，いつ落石が発生しても対処できる心構えで臨まなければならない。

最後にこの場を借りてお願いがある。私たち地形学者（研究者）は，普通の登山者と異なり，とんでもない所にいる。例えば，私は前穂高岳や奥穂高岳直下の崖錐にいる場合が多い。登山者の多くは，人為落石を発生させた時に「落（ラク）」と叫んでくれるのだが，「下には誰もいない」と勝手に思い込み，何も言わない人もいる。そのような人はまだ許せるのだが，中には空き缶を自由落下させる不届きものがいた。ただでさえ数が少ないのに，これ以上地形学者が減ると日本の（世界の）地形学が成り立たなくなる。ぜひとも御配慮をいただきたい。

＜参考文献＞

Åkerman, J.（1984）：Notes on talus morphology and processes in Spitsbergen. Geographiska annaler, 66A, 267-284.

原山　智（1990）：上高地地域の地質．地域地質研究報告（５万分の１地質図幅），地質調査所，60-71.

Ito, M. and Vorndran, G（1983）：Glacial geomorphplogy and snow-lines of younger Quaternery around the Yari-Hotaka Mountain Range, Northern Alps, Central Japan. Polarforschung, 53, 75-89.

小泉武栄・柳町　治（1982）：木曽山脈主稜部における周氷河性岩屑生産。第四紀研究，20，281-287.

五百沢智也（1962）：槍・穂高連峰付近の最低堆石提について。地理学評論，53，652-653.

今村学郎（1940）：『日本アルプスの氷期と氷河』岩波書店。

岩船昌起：穂高岳・涸沢カールにおける気象変化に対応した落石の発生。投稿中。

Matsuoka, N. (1988) : Laboratory experiments on frost shattering of rocks. Sci. Rept., Inst. Geosci., Univ. Tsukuba, Sect, A, 9, 1-36.

Matsuoka, N. (1990) : The rate of bedrock weathering by frost action : Field measurement and a predictive model. Earth Surfice Processes and landforms, 15, 73-90.

Rapp (1960) : Talus slopes and mountain walls at Tempel-fjorden, Spitsbergen. Norsk Polarinstitutt skrifter. 119, 1-96.

武　正英 (1952) : 北穂高岳北側斜面の氷蝕地形。地理学評論, 25, 448-457.

(筆者の連絡先 : 〒982　仙台市太白区八木本町 2-37-14-101, 電話 022-229-8305)

日本山岳会・自然保護の歩み（2）

＜昭和51年（1976）～昭和63年（1988）＞

［お読みになる前に］

1. この年譜は前号に続く昭和51年から昭和63年までの13年間の記録で，次号の平成元年から同4年までの記録で終了する。
2. 論稿の出典は，①機関誌「山岳」（創立の翌年より発行），②会報「山」（昭和5年より発行），③自然保護委員会「議事録」（昭和39年に設置），の三種類に限定した。
3. 会員ではないが，平野長藏氏らの寄稿や，各紙記事からの転載は採録した。
4. 論稿を所属させた年度は，主に機関誌「山岳」の第○○年（昭和○○年），あるいは（西暦19××年）の表示に拠った。
   また編者の都合などで，翌年以降に発行されたものも，「山岳」の表示した年に統一した。
5. 表題は原典に拠ったが，固有名詞以外は適宜，常用漢字に置き換えた。
6. 著者名は原典どおりとした。イニシャル，号，姓のみ等，そのままである。
7. 概要欄（＊印）は，極力原文のニュアンスを伝えようとしたが，不整合のある点はお許しいただきたい。

1992年8月30日

日本山岳会自然保護委員会

昭和51年（1976）

「環境庁との懇談会を開催した」　〔山本良三〕

＊　昭和50年11月の理事会報告。　（「山」367号）

図書紹介『山は満員』　渡辺公平著　〔島田　巽〕

＊　ジャーナリストでもある著者が，ここ十余年の間に新聞，雑誌に寄せたものの中から60数点を選び新著とした。自然保護の推進者としての発言が強く出ているが，激しい抗議調ではなく，おだやかな口調で開発反対論を述べている。著者は，自然保護委員。　（「山」368号）

図書紹介『朝日連峰・吾妻連峰・飯豊連峰・鳥海山・飛鳥・出羽三山・葉山』山形県総合学術調査会輯　〔朝井一男〕

＊　専門家による本格的調査報告書。自然の汚損を防止し復元をはかるのに必要な知識を満載した五輯からなるシリーズ。　（「山」368号）

図書紹介『蔵王――自然と人間――』　東北大学山の会編　〔望月達夫〕

＊　「蔵王にスキーがもちこまれて50年，自然と人間のかかわりはどう変わったか」をテーマに，旧制二高及び東北大学の山岳部関係者による回顧録。観光開発と自然破壊についても触れている。　（「山」369号）

「第328回小集会『会員懇談会報告』テーマ2　自然保護について」

＊　第328回小集会として，「テーマ1　山岳会について」「テーマ3　登山者のモラルについて」と共に開催された。森林開発，林道，観光道路などについて論議し，林野行政と保護の矛盾，過疎と開発，住民意識などに関する問題提起と，屋久島保護についての要望。　（「山」370号）

自然保護情報「自然保護委員会昭和51年度活動計画」　〔山本良三〕

＊　“会員を対象に自然保護に関する啓蒙を行う”を基本方針に，活動計画を発表。その一項目にスローガン「自然をよごさないように，ゴミを持ちかえろう」の会報掲載をうたっている。　（「山」371号）

「山をきれいに　ゴミは持ちかえろう」

＊　スローガン，掲載はじまる。　（「山」373号より）

自然保護情報「自然保護担当者の設置依頼について」　〔山本良三〕

＊　会長，委員長名で各支部長宛に支部在住自然保護委員の設置を依頼。6月20日現在，8支部11名の推薦があったことを報告。　（「山」373号）

「アラスカの山からゴミの回収を要求」　〔秋田しおみ〕

＊　アメリカ山岳会から日本山岳会に寄せられた手紙。内容は，アラスカの山，特にマッキンレーでのゴミ公害の大半は日本から持ち込んだもの。空罐その他は回収するようにとの協力要請。　（「山」374号）

「上高地での自然保護委員会」　〔武田満子〕

＊　初めて各支部に参加を呼びかけ，35名による集会。ゴミの問題に焦点をあて，岳沢をクリーンエリアとして会員の自然保護思想の啓蒙をはかっていくこと，各支部に自然保護委員をおくことなど活動方針と「穂高宣言」採択および参加者による各地の活動状況の報告。　（「山」375号）

自然保護情報「各支部の自然保護委員」　〔自然保護委員会〕

＊　各支部在住の自然保護委員20名（支部長推薦18名，本部委嘱2名）の氏名発表。　（「山」376号）

自然保護情報「日本山岳会『穂高宣言』」

＊ “このかけがえのない美しい日本の自然”を守るためにと，自然保護委員会第一回上高地集会において採択された「穂高宣言」の全文を掲載。

（「山」376 号）

自然保護情報「岳沢クリーン・エリア計画」

＊ 「穂高宣言」の精神にのっとり，奥穂・前穂・岳沢を結ぶ地域を自然保護モデル地域として，徹底したゴミ一掃，ゴミ持ち帰り運動を展開中と報告。（「山」376 号）

自然保護情報「冬山登山のゴミが山を汚す」〔三上博民〕

＊ 10 月 30～31 日に開催された自然保護委員会第 2 回上高地集会の内容。新潟・大阪両地域での清掃登山の報告，大台ガ原の林道工事による自然破壊の状況，国立・国定公園内の花木の盗伐などが問題提起された。

（「山」378 号）

「スイス山岳会長オットーメイヤー氏との思わぬ会見」〔早乙女綏次〕

＊ オットーメイヤー氏と会見した際，日本人登山者のゴミ処理問題が出たことがあったが，帰国後「マッキンレー山脈に於けるゴミ」の新聞記事を読んで，一文を寄せる気になった。（「山」378 号）

昭和 52 年（1977）

自然保護情報「山をきれいに」〔自然保護委員会〕

＊ 冬山シーズンに備えて各大学山岳部宛に，ゴミ処理などへの協力を要請した。（「山」380 号）

自然保護情報「御在所岳北谷の水質調査（一）（二）」〔尾上　昇〕

＊ 御在所岳（1209）にロープウェイがかけられて 17 年，頂上は山上公園の様相となった。以来，誰が言い出したともなく北谷の水は飲用不適と言われてきた。その北谷の水質を検査し，汚染源が山上の諸施設にあることを解明したもの。（「山」380・381 号）

自然保護情報「これでいいのか？　矛盾した自然保護行政」〔田村聡明〕

＊ 全額国費で買い上げて保全しようという大台ヶ原山上に，コンクリート舗装が進められている。そのくせ登山者への規制はきびしいことなど，行政の矛盾を問題提起している。（「山」382 号）

自然保護情報「ゴミ持ち帰り運動の提言」〔藤田英治〕

＊　ゴミ持ち帰りこそ，国民一人ひとりが取り組める極めて教育的な自然保護運動であり，すべての保護運動の第一歩といえる。清掃登山の実績をもつ越後支部からの提言。　（「山」383号）

自然保護情報「ブナの原生林を守ろう――和賀岳の場合」　〔高橋亨夫〕

＊　岩手・秋田の県境にある和賀岳及び朝日岳一帯のブナ原生林は，原生自然環境保全地域候補地になっているが，国有林で林野庁の保安林に指定されているので，それを解除し，新たな指定を受け入れることで美しい自然を残したい。　（「山」385号）

「大峰・大台からのアピール――自然保護委員の視察行」　〔渡辺公平〕

＊　6月11日，大台教会山の家において採択した奈良県当局及び環境庁に対するアピールの内容は，白川又川谷流域の伐採計画の再検討と，奥地の普通地域を特別保護地区に昇格させようというものである。　（「山」386号）

自然保護情報「プロの手から盗伐・盗掘を防ごう」　〔葛貫一雄〕

＊　近年，道路が山中に伸びたことによって，古木・植物の盗伐・盗掘が目にあまることをとりあげ，華道関係者に向かって残り少ない自然植物を花材に使うことを止めるよう警告している。　（「山」386号）

自然保護情報「春スキーとゴミ」　〔武藤清次〕

＊　山岳観光道路開発による自然景観の破壊と動植物への悪影響などを憂い，ゴミ持ち帰りの徹底を訴える。　（「山」387号）

自然保護情報「自然保護委員会第三回上高地集会の概要」　〔小倉　厚〕

＊　8月27日夜の集会で示された52年度計画は，現地調査と啓蒙の二本建てで行くというもの。続いて参加者による討論と翌28日の岳沢周辺のゴミ収集と実地調査の報告。　（「山」388号）

自然保護情報「早池峰の小田越林道を廃止しよう」　〔湯浅俊行〕

＊　特別天然記念物に指定されている早池峰山だが，昭和45年の岩手国体と同時に林道が開発され，その結果，盗伐や密猟を招いている。自然破壊の原図ともいうべき小田越林道の廃止に向けて当局の英断を期待する。　（「山」388号）

「どこまで壊せば気がすむのか――自然破壊の現状・南アルプス北部の場合」　〔山村正光〕

＊　南アルプスの原生林を東西に横断する南ア・スーパー林道，現在は北沢峠をはさんだ一部を残して工事をストップしている。長野側尾勝谷，山梨側野呂川左岸などの現場をたずね，その惨状を訴えたもの。

（「山」389号）

自然保護情報「原生林の北沢峠は守れるか――追いつめられた南アルプス」

〔市川一雄〕

＊　北沢峠をはさむ1.8キロの未施工部分をめぐって10年越しの論議が続いている南ア・スーパー林道。環境庁の裁断を前に，日本最大の山岳地帯を従来の山岳観光地に堕落させてはならないと林道建設廃棄を訴えている。（「山」390号）

自然保護情報「自然保護委員会　東京集会」〔織内信彦〕

＊　裏丹沢長者舎山荘における集会の記録。越後支部からは「新潟県山のゴミ会議」制作の映画によって山の汚染状況を，東海支部からは御在所岳北谷上流付近の谷川水の汚染状況を報告。（「山」390号）

自然保護情報「自然保護委員会丹沢集会に参加して」〔高橋亨夫〕

＊　岩手支部から初めて集会に参加した感激と感想。秋晴れの丹沢で先輩たちと親しく話し合えたことを喜び，本委員会がますます強化されて，わが国の自然保護のよきリーダーとなるようにと結んでいる。

（「山」390号）

「大台ヶ原の自然保護について」〔田村聡明〕

＊　大正初期の濫伐に関する悲嘆の文章，昭和47年の特別地域国費買上げ，ドライブウェイと環境整備，昭和52年の日本山岳会自然保護委員会大台ヶ原視察等について。（山岳　第71・72年　61～73頁）

昭和53年（1978）

自然保護情報「山は山でもゴミの山――山のゴミ公害について」

〔坂倉登喜子〕

＊　観光地だけでなく，健脚の登山者だけの山岳地帯や，天下の秘境といわれた地域までゴミの山で，もはや有志による清掃活動だけでは間に合わない事態だ。組織的な規制と罰金制を提案している。（「山」391号）

「白川又川林道工事について」〔自然保護委員会〕

＊　奈良県白川又川林道建設について，日本山岳会は昭和52年9月に奈良県知事宛，中止を要望していたが，この要望書の全文と，奈良県知事か

らの回答の全文を紹介し，中間報告をしている。　（「山」393号）

自然保護情報「北海道の山の自然とその保護」　〔辻井達一〕

＊　従来，北海道の山は入りにくかったため，山の自然は保たれてきたが，大雪山系では層雲峡などで観光化が進み，日高山系も国定公園編入で開発が進み，自然が損なわれそうだ。北海道の山は登りにくいことを特徴として，自然を保護していきたいと提言している。　（「山」395号）

自然保護情報「山道」　〔庄司駒男〕

＊　奥羽の山なみを背にした仙台近郊も，大規模な都市化と東北自動車道の開通で，杜の都も緑が少なくなった。舟形山腹の落葉広葉樹は皆伐され，林道の近くでは盗掘の穴が多い。厳しい自然に保護された静かな山道は遠くにある。　（「山」396号）

自然保護情報「立山の開発と自然保護」　〔若林啓之助〕

＊　昭和29年8月の千寿ヶ原から美女平へのケーブルカー架設，黒四ダム建設計画と前後して，富山県の自然保護運動が始まり，昭和49年夏から県制度によるナチュラリストの設置と，その活躍を語る。

（「山」397号）

「1978年日米民間環境会議」

＊　アメリカ最大の山岳・自然保護団体シエラ・クラブ，オーデュボン協会他の呼びかけに応じて第1回日米民間環境会議が開かれる。内容は環境教育，環境汚染，自然保護その他。　（「山」397号）

自然保護情報「大峰・白川又川流域の林道建設中止の要望書」

〔自然保護委員会〕

＊　393号で奈良県知事への要望および回答の報告をしているが，これに続いて昭和53年6月に重ねて林道建設中止を要望したのに対して，奈良県知事から工事継続と，自然保護に留意する，との回答が寄せられた。要望書と回答書が掲載されている。　（「山」399号）

自然保護情報「第四回上高地集会“やたらに開発に反対するのでなく，やたらな開発に反対する”」　〔小倉　厚〕

＊　北海道から九州まで日本全国から50名が参加し，熱心な討議が行われた。「開発と自然保護の限界と範囲」について大論争が行われた。三田元会長が55年ぶりに徳本峠を越えて，この集会に参加した。

（「山」401号）

「穂高宣言と大峰大台アピール――自然保護 1977～8」　〔渡辺公平〕

＊　小島烏水の上高地風景保護の公開状，昭和 51 年の「穂高宣言」。昭和 52 年の大峰・大台ヶ原の自然保護委員会の視察と奈良県知事への要望書など。山岳会の自然保護活動を総括している。

（山岳　第 73 年　巻頭 6～14 頁）

昭和 54 年（1979）

自然保護情報「冬・春山のゴミを持ち帰ろう――自然保護委と環境庁合同会議」　〔小倉　厚〕

＊　環境庁自然保護局長，同保護管理課長，山岳会自然保護委員，大学山岳部リーダー等多数が出席。冬山のゴミ処理は大学山岳部が模範となって，社会人パーティーの啓蒙役になってほしい，と要望があった。

（「山」405 号）

「環境庁からの要望書」　〔金子太郎自然保護局長〕

＊　冬山のゴミ処理について，山岳会，日山協会長に要望があった。

（「山」405 号）

自然保護情報「山のゴミ――蛾ヶ岳で考えたこと――」　〔小林　茂〕

＊　甲府盆地と盆地をとりかこむ山々の眺望に恵まれた静かな山頂も，空缶の山であった。登山者のモラル低下と，ゴミ問題に JAC が取り組まねばならない現状に疑問を持った。　（「山」405 号）

「ユングフラウヨッホの水晶宮殿」　〔自然保護委員会〕

＊　ヴァリス当局がユングフラウ鉄道にヨッホの水晶宮殿建設を認可したことにスイス山岳会が反対の抗議をしている。岡沢祐吉会員訳。

（「山」408 号）

自然保護情報「鳥海山ではじまる観光開発」　〔斎藤重一〕

＊　秋田県側北東斜面の頂上直下までゴンドラによる索道を建設する計画があり，秋田では開発を阻止すべく多くの岳人が結集しつつある。全国の大きな応援を願っている。　（「山」409 号）

自然保護情報「島々谷川の道――建設と破壊の谷――」　〔小林俊樹〕

＊　徳本峠を越えて上高地へたどる美しい島々谷の道が，二俣の地に砂防堰堤がきずかれてから，次々に渓谷破壊の工事が進められそうだ。古き名残りの渓谷の景勝を，そのまま残してほしい。　（「山」410 号）

自然保護情報「白川又林道建設の中止と大台ヶ原マイカー規制を求めて」
〔中村純二〕

＊　5月25日に折井副会長，自然保護委員と関西支部および地元有志たちが奈良県庁にアピールに出かけ，考え方に相違があったものの，林道線の変更など一部に前進があったため，一応の区切りとした。
（「山」411号）

「映画『穂高讃歌』のこと」　〔折井健一〕

＊　神憲明君が穂高山荘を基地に7年間を費やして製作した「穂高讃歌」は，本会自然保護委員会の特別推薦を受けたが，文部省からも特選を受けた。
（「山」411号）

図書紹介『登山者のための生態学』　渡辺弘之著　〔大森久雄〕

＊　山の樹木や草花，鳥や虫，苔，水などとの対面，森林生態学について，述べており，自然保護についてもバランス感覚のある意見を読んでいると生態系の崩壊と山登りの関係を一層深く考えさせられる。
（「山」412号）

「大峰・大台現地視察と大杉谷山行」　〔中村純二〕

＊　二年前の視察時にくらべ，のり面の緑化などで，やや改善がみられているが，皆伐地域の多くは無惨な姿を露呈している。関西支部の援助に感謝しつつ，3日間の現地視察を報告している。　（「山」413号）

自然保護情報「大正池の河川化と田代池の壊滅」　〔富田健一〕

＊　昭和59年8月21日の台風11号の影響で，霞沢岳の崩壊，八右衛門沢の土砂崩れで田代池が埋没，焼岳からの慢性的な土砂流入と六百山の山崩れにより大正池が元の梓川に戻りつつある。修復整備のブルの音を聞きながらも人力の弱さを感じた。　（「山」414号）

昭和55年（1980）

「自然保護委員会　忘年会を兼ねて清掃登山を実施」　〔小倉　厚〕

＊　奥多摩でも屈指のハイカーのメッカである，奥多摩御岳～日之出山の清掃登山を12月15，16日の両日実施した。山頂付近に多量に散乱するゴミを処理したが，「山のゴミ持ち帰り運動」を一般ハイカーにまで徹底するのはまだ先のことと思われる。　（「山」415号）

＜日本山岳会隊，チョモランマ北東稜（5月3日）・北壁（5月10日）登頂に成功＞

自然保護情報「鳥海山の自然を守ろう」　〔自然保護委員会〕

＊　東北の名山，鳥海山の北東斜面に，秋田県企業局がスキー場等の「鳥海山開発構想」を打ち出した。大規模な自然破壊が心配されるので，2月1日付，西堀会長・織内自然保護委員長名で，秋田県知事他の関係方面に要望書を提出した。現在，山形県で同様の計画が持ち上がっている。

（「山」422号）

自然保護情報「日高中央横断道路計画とその問題点」　〔渡辺正臣〕

＊　日本各地の山岳地帯で自然破壊が問題になっている中，北海道日高山脈の中央を貫く，中央横断道路建設計画が進んでいる。既に日勝道路や建設中の道路もあり，建設の正統性が薄く，二つとない原始環境を破壊してまで作らねばならない道路とは思われない。「日高中央横断道路建設に対する要望書」を会長名で北海道知事，道議会議長，北海道開発庁長官等に提出した。（「山」422号）

「尾瀬に再び自然破壊の危機――自然保護委員会，現地視察報告」

＊　首都圏の水不足が年とともに深刻化する中，神奈川県を除く自治体は，共同で昨夏から『尾瀬の水を首都圏へ』と，ダム建設を計画する運動を始めた。自然保護委員14名は，6月28～29日，ダム予定地の三条の滝，平滑の滝，尾瀬ヶ原一帯を視察した。本件では，単なる反対から一歩踏み出し，再生用水道を上下水道のほかに新設するなど，水道政策の見直しを迫るといったことが今後検討されてよいであろう。（「山」422号）

「自然保護委員会　第五回上高地集会」　〔小倉　厚〕

＊　9月27日は『講演と映画の夕べ（環境庁ビジターセンター）』と，懇談会（山研）。翌28日は，岳沢の清掃を行う。回収ゴミ袋40袋であった。中村純二委員の講演要旨も掲載。（「山」425号）

昭和56年（1981）

自然保護「ゆがめられた自然保護運動」（日高中央横断道路反対の矛盾点）

〔一原有徳〕

＊　「日高山脈は日本に残された唯一の原生林」との前提で，大々的な連合会が発足し，本会も加わっているが，反対運動に参加する人に，日高山脈と横断道路の実体を知っている人がどれだけいるのであろうか。真に保護の対象とすべき地域は他にあろう。（「山」431号）

「1980年UIAA総会報告」　〔海外連絡委員会・丹部節雄〕

＊　昨秋，ジュネーブで開かれたUIAAの常任理事会傍聴記と，総会報告。副会長のドムケ（西独）は，自然保護なくしてはUIAAの存在価値はないと強調。英国のグレーは，山の自然保護は世界的規模の運動に盛り上げねば効果はない。ネパールのクマール・カド，アメリカのパトナム他の意見等が報告されている。（「山」431号）

自然保護「再び　日高中央横断道路計画と問題点」〔渡辺正臣〕

＊　前号の一原氏の御意見に対する自然保護委員会の見解。原生自然の保護をしようというのは，その林野が有用の森林資源であるか否かは無関係。一年の半分を雪で交通途絶される道路が，原始的大自然を破壊してまで建設される必要があろうか。（「山」432号・422号）

自然保護情報「環境週間北海道大会に参加して」〔渡辺正臣〕

＊　北海道自然保護団体連合主催の行事に，自然保護委員会から織内委員長，工藤，渡辺委員が参加した。日高横断道路建設予定地を視察した後，大石元環境庁長官，織内委員長が講演した。二日目，三日目と視察場所を道東へと移して，意義のある大会を終えた。（「山」434号）

自然保護懇親山行「青木ヶ原の地底を探る」〔国見利夫〕

＊　ヘルメット，アイゼン，ピッケルを使い真黒な溶岩洞穴を垂直下降する。地底は蒼い氷田，170 m 進んだ地点で大氷柱を目にした。（「山」434号）

自然保護「国際山岳会(IMS)創立――山を守る運動を登山家と科学者の手で――」〔田中　薫〕

＊　発足した国際山岳会の概要を紹介する。問題の所在，本会の目的，機関誌，本会設立の背景，創立の役員（J.C. アイヴス博士，コロラド大）等が，会の趣意書に基き紹介されている。（「山」435号）

「委員会会議――自然保護委員会の運営方針」〔渡辺正臣〕

＊　支部に自然保護委員を委嘱してもらい，各支部との連繋を深める。フィールドマナー・ノートを作成する。国際山岳会，日米環境会議への協力をすすめたい。（「山」437号）

「月山の高山植物について」

＊　科学研究委員会「出羽三山に修験道と高山植物を訪ねる旅」における，元山形博物館々長，結城嘉美氏の講演概要。月山に鳥海山から移植したチョウカイフスマが成育繁殖しているが，将来自然生と見誤られる懸念がある。

その意味からこれも自然破壊行為であると訴えたい。　（「山」437号）

自然保護講演会「ヨーロッパの自然保護」　〔井手貴夫〕

＊　自然保護運動は1853年フランスの「フォンテンブローの森を守る」が嚆矢であり，国立公園では1895年アメリカの「イエローストン公園」が最初である。ヨーロッパでは原始的自然が殆ど残っていない。人口が増加し，文明が進展する中で，人間は自然との調和を見出さなくてはならない。　（「山」438号）

昭和57年（1982）

「自然保護委員会　第六回上高地集会」　〔関塚貞亨〕

＊　本年度の集会は支部との交流を深めることを重点に置き，10月24～25日の両日上高地で開催された。6支部，参加者33名。渡辺委員長よりフィールドマナー・ノートの作成，自然破壊への対応について等活動方針が述べられた。　（「山」439号）

「講演会　山と鳥」　〔自然保護委員会〕

＊　日本鳥類保護連盟指導部長柳沢紀夫氏による講演（1月22日，於ルーム）。鳥はどのような動物か。世界中で8,600種，鳥は自然環境のモニター的な役割をもっている。自然保護運動の最初の引き金は鳥の関係者であった。　（「山」443号）

「懇親探鳥会」　〔自然保護委員会〕

＊　4月24～25日，八ヶ岳山麓で行う。参加16名。　（「山」446号）

「講演会　山岳における危機」　〔科学研究・自然保護両委員会共催〕

＊　国際山岳会々長J.D.アイブス氏による講演（3月12日　於ルーム）。ネパール，チベット高原，天山山脈，チェンマイ山脈等に於て見られる自然災害の状況をスライドを利用して紹介。危機的状況にある山岳環境の保全に取り組むよう訴えた。　（「山」447号）

昭和58年（1983）

自然保護「南アルプス・スーパー林道を踏む」　〔沢井政信〕

＊　6月26～27日　自然保護委員会の有志で南ア・スーパー林道の現状を視察。あちこちに道路建設で惹き起こされた崩壊の跡がみられた。
（「山」451号）

「自然保護全国集会」　〔松本恒広，中村純二〕

＊　7回を迎える自然保護全国集会が，自然保護委員会と静岡支部の紅葉会との併催で，11月13～14日静岡県井川にて開催された。フィールドマナー・ノートを作成するについて活発な意見交換が行われた。

（「山」453号・446号）

「南ア・スーパー林道修復停止の要望書提出」　〔自然保護委員会〕

＊　南ア・スーパー林道の惨胆たる現状とその将来を慮り，昭和57年12月17日付で北沢峠広域基幹林道の修復停止の要望書を佐々会長，国見委員長名をもって山梨，長野両県知事，農水大臣，林野庁長官及び環境庁長官等関係各方面へ提出した。要望書の全文を掲載。　（「山」453号）

自然保護「山を美しく保つためのフィールドマナー・ノートの配付について」

〔中村純二〕

＊　第七回全国集会での検討結果をもとに，先ずはJAC会員を対象に，自然保護委員会ではマナーノートを作成，会員全員に配付した。

（「山」454号）

自然保護「携帯灰皿頒布について」　〔自然保護委員会，総務委員会〕

＊　フィールドマナー・ノート作成配付に呼応して，JACマーク入りの携帯灰皿を作製頒布することになった。　（「山」454号）

「白神山地ブナ原生林」　〔中村あや〕

＊　青森秋田県境にまたがる白神山地，広大なブナ原生林帯が残る貴重な自然の宝庫に林道建設計画がもち上がった。この反対運動に協力する為に現地視察を目的に白神を訪れた。　（「山」458号）

「白神山地ブナ原生林の保全並びに青秋林道建設反対の要望」

〔自然保護委員会〕

＊　1万6千ヘクタールというわが国に残された最大級のブナ原生林帯の中心部に，建設が予定されている広域基幹林道青秋線に反対する要望書を，昭和58年7月11日付で，佐々会長，中村常任評議員，国見委員長連名にて関係各方面に発送した。要望書全文掲載。　（「山」458号）

会員懇談会「白神山地のブナ原生林」　〔自然保護委員会，総務委員会〕

＊　4月15日ルームにて，白神山地のブナ原生林と屋久島の植物についての懇談会が工藤父母道，根深　誠，中村純二各委員を講師として開催された。出席者23名。　（「山」458号）

会員懇談会「フィールドマナー・ノートについて」
〔自然保護委員会，総務委員会〕

＊ 6月15日ルームにて，フィールドマナー・ノートについての懇談会を開催。話題提供，中村純二委員。（「山」458号）

「アンケート調査報告」〔アンケート調査特別委員会〕

＊ 全会員を対象として行われたアンケートの調査報告中，今後JACに活動を強化してほしいことは？との設問に対し，第1位は自然保護で30.9%の高率であった。（「山」458号）

「白神山地視察行」〔中村純二〕

＊ 白神山地の保全と青秋林道問題の視察と陳情を兼ね，8月25～27日にかけて自然保護委員会は，自然保護国会議員連盟岩垂事務局長始め，日本自然保護協会，日本野鳥の会，世界野生生物基金等関係諸団体のメンバーと共に現地を訪れた。（「山」460号）

「自然保護委員会第八回全国集会」〔松本恒廣〕

＊ 8月27～28日の両日富山支部，富山県自然保護協会との共催で立山山麓で開催。環境庁塚本静雄氏の国立公園の保護対策についてと，県自然保護課長林信雄氏の県のナチュラリストについての講演があり，有意義な集会となった。（「山」460号）

昭和59年（1984）

「箱根の自然と鎌倉古道を歩く」〔渡部温子〕

＊ 会員懇談会の一つの催しとして箱根古道の一つである湯坂道を歩いた記録。（「山」468号）

「奥秩父自然観察山行」〔木名瀬　亘〕

＊ 会員啓蒙の一つ，観察山行の記録。かつての和名倉山の原生林をしのび，削られゆく武甲山の姿を嘆きつつ，国道140号の工事現場を訪れて，莫大な費用をかけて山河の損壊をくり返している現状を報告。（「山」470号）

図書紹介『山は甦る――山岳美化10年の軌跡』　新潟県山のゴミ会議著
〔小倉　厚〕

＊ 誕生から13年を数える『山のゴミ会議』は，わが国屈指の実戦力を誇る自然保護団体である。ボランティア精神によって貫かれた活動によって，汚染された山が甦っていく。その苦闘10年の記録が収められている。

（「山」474号）

「山岳と山村の変貌――南アルプス・スーパー林道が示すもの」　〔細田　浩〕

＊　1967年，森林開発公団によって多目的林道として計画され，いろいろな自然保護団体の反対にもかかわらず1980年に全道開通した南ア・スーパー林道による山麓の人々の生活や社会の変化および自然環境や景観の破壊について述べている。　（山岳　第79年　A23～A42頁）

昭和60年（1985）

図書紹介『生態調査のすすめ――ヒマラヤの人々の生活と自然』　沼田　真編　〔松田雄一〕

＊　千葉大ヒマラヤ学術調査隊に関わった17名によるエッセイ集。第Ⅰ部の「ヒマラヤの自然」は，植物生態学に関連したものを収録。最後を「ネパールの自然保護」で結んでいる。第Ⅱ部は「人々の生活」を中心に収録している。　（「山」475号）

シンポジウム「ヒマラヤのエコロジー」　〔高橋　詢〕

＊　10月27日に科学研究委員会が開いたシンポジウムの報告。川喜田二郎，小野有五，中島暢太郎，金井弘夫，高遠宏，春日俊郎，滝口正三，渡辺兵力の諸氏をパネリストに，ヒマラヤ地域をエコロジーの視点から解明している。　（「山」476号）

「秩父宮記念学術賞を沼田真会員が受賞」　〔岡沢祐吉〕

＊　会員で千葉大学名誉教授の沼田真氏が「東部ネパールヒマラヤについての永年にわたる生態学的研究調査の成果」により，秩父宮記念学術賞を受賞した。　（「山」477号）

「自然エネルギーの利用について――風力・水力から太陽光との複合利用へ」　〔鳥居　亮〕

＊　山岳地帯におけるクリーンな自然エネルギーの利用に関する歴史的考察と現状報告。穂高岳山荘では初代今田重太郎氏によって風力発電が試みられ，その後，故折井健一氏の仲介で二代目英雄氏と著者とが組んで実験，実用化に向かいつつある。　（「山」478号）

「ヒマラヤの環境保全」　〔沼田　真〕

＊　ユネスコのMAB計画の第六プロジェクト「山地におけるツンドラ生態系に対する人間活動の影響」についての，地域集会での決議をもとに設立されたICIMOD（イシモド，国際山岳総合開発センター）の紹介。

（「山」480号）

「武甲山の自然破壊を視る」　〔小倉　厚〕

＊　かつて1,336メートルの標高を誇っていた奥武蔵の名山。いま山頂は消え，既に2億トンもの石灰岩を採掘したという。自然保護委員会による武甲山での自然破壊の現状の視察と山行の記録。（「山」481号）

「祖母・傾山系の原生林保護と伐採施業計画見直しのための要望書提出」　〔中村純二〕

＊　昭和60年3月の自然保護委員会の現地視察にもとづき。林野庁並びに環境庁長官宛に提出した標題の要望書提出までの経緯の説明。要望書全文も別掲。（「山」482号）

「『ブナ・シンポジウム』に参加して」　〔麦倉　啓〕

＊　国際森林年協賛行事として日本自然保護協会主催，日本山岳会他の後援で6月15，16日に秋田市で開かれたシンポジウムへの参加記録。「ブナ帯文化」「ブナ林の現状」について討論された。（「山」483号）

「志賀高原植物生態系観察探索行」　〔高橋　詢〕

＊　科学研究委員会主催の初夏の志賀高原自然観察行。田の原湿原を経て三角池，上の小池，長池と，れんげつつじ，むらさきやしをつつじを楽しみつつ，自然教育園を見学。（「山」483号）

「日本山岳会創立八十周年記念展覧会出品目録・自然保護」

＊　武甲山の今昔（写真）〔清水武甲〕　富士山の車道（写真）〔松下電器〕北アルプス・南アルプス・富士山の自然破壊（写真）〔渡辺正臣〕　白神山地のブナ（写真）〔江川正幸〕他8点。（「山」484号）

「自然保護“標語”募集」　〔自然保護委員会〕

＊　「山」誌上に載せる標語の募集。（「山」485号）

「高尾山の自然と圏央道の計画について」　〔横山　隆〕

＊　首都圏から放射状に広がる東北・関越・中央・東名の高速道路を横につなぐ「首都圏中央連絡道路」の計画では，高尾山にトンネルが通るという。9月8日に自然保護委員会が実施した現地視察の記録。（「山」486号）

「自然保護全国集会」　〔松本恒広〕

＊　10月19，20日に三重県湯の山温泉で開催された第11回全国集会の記

録。第1日目は支部報告に続いて「祖母・傾山でのブナ伐採の現状」(中村委員)の報告やスライド(渡辺委員)。第2日目は自由討議として入山規制,し尿処理,マナーノートⅡをめぐって意見交換が行われた。

(「山」486号)

図書紹介『森林』 四手井綱英著 〔近田文弘〕

＊ 森林生態学者の著作を,とくに登山者として読むべき図書として紹介。日本人と森林のつき合いから自然保護論まで展開している。

(山岳 第80年 108～110頁)

「山岳地帯における自然エネルギー利用の実用化へ向けて」

〔鳥居 亮・森 武昭・富田英雄・重村 清・池田 実・今田英雄・神 憲明〕

＊ 穂高岳山荘における風力・太陽光発電の実験段階から手がけたスタッフによる山小屋での自然エネルギー利用の有効性に関する提言。

(山岳 第80年 A31～A46頁)

昭和61年(1986)

「ヒマラヤの生態系と環境——公開シンポジウム——」 〔高橋 詢〕

＊ 日本山岳会創立80周年記念行事の一つとして,日本ネパール協会と共催でもたれたシンポジウムの報告。講師は川喜田二郎,中尾佐助,沼田眞,渡辺桂,渡辺兵力の5氏。ヒマラヤの自然保護,ヒマラヤの生態系保全の問題点などについて発言。他所者の自然保護意識は山地住民のそれとは異なること。ネパール・ブータンにおける人口増加,林内過放牧による森林の荒廃が進んでいるなど豊富な内容であった。

(「山」489号・503号)

「フィールドマナー・ノート(英語版)完成」

＊ 佐々会長(当時)から要請のあったフィールドマナー・ノートの英訳版が,佐藤テル会員によってこのほど完成した。 (1月委員会議事録)

図書紹介『ミズバショウの花いつまでも』 蜂谷 緑著 〔国見利夫〕

＊ 尾瀬という自然の宝庫の美しさ尊さを感受性豊かな少年少女に語りかける本書は,大人にとっても,自然を大切にする心を育てる啓蒙の書として推賞する。本書は第40回毎日出版文化賞を受賞した。著者は自然保護委員。

(「山」490号・499号)

「尾瀬を守る懇話会の提言への意見書」

＊ 大石武一氏らの「尾瀬を守る懇話会」より,同会の7項目の提言につい

て日本山岳会としての意見を求められていたが，自然保護委員会より意見を提出した。（3月委員会議事録）

「山を美しく保つために　フィールドマナー・ノート（松本版）完成」

＊　8月に松本市で開かれる「国際アルピニスト・シンポジウム松本」に，完成間近の『フィールドマナー・ノート（Ⅱ）』を（松本版）の体裁で，一足早く印刷し，シンポジウムやトレッキング参加者に配布することを決定した。（4月委員会議事録）

図書紹介『自然保護のあゆみ』　日本自然保護協会三十年史編集委員会編

〔村井米子〕

＊　戦後日本の自然保護行政，一般市民の自然保護意識の移り変わりや民間人の自然保護運動の推移がよく捉えられている。自然保護を長年，総合的かつ全国的な視野で見つめ，実践してきた結果がうかがわれる。紹介者は同協会および日本山岳会の自然保護委員会発起人の一人であった。

（「山」491号）

「尾瀬ヶ原をのこした記録」　〔中沢真二〕

＊　大正12年に平野長蔵氏から尾瀬に発電所を作らないようにしてほしいと依頼された。戦後，電力の需要が急増し，尾瀬の発電所建設プランが新聞を賑わした。武田久吉氏や国立公園協会等の尾瀬を守ろうとする側は，実業界等の建設推進派の勢いを阻む術を持ち得ないようだった。多年発電所建設計画に携わっていた中沢氏は，尾瀬一帯の雨量を年1,200 m/m と推定し，この推定を実証することにより，建設省水力課長から建設中止の判断を得るに至った。（「山」492号）

映画会『穂高は生きている』　〔鈴木郭之〕

＊　穂高岳山荘の神憲明氏による前作『穂高讃歌』につづく本作品を自然保護委員会・フィルム委員会の共催でルームにて上映。この映画をみて，誰でも，穂高はこんなに美しかっただろうか，と疑問を持つことだろう。それはウェストン師や小島烏水氏が当時見たであろう昔の穂高が，神氏の手によって映像化されているからである。（「山」492号）

「国際アルピニスト・シンポジウム松本（'86）」　〔信濃支部〕

＊　8月20から3日間，松本市で開催された同シンポジウムは，海外からの8ヵ国15人，国内9人の講師が招かれ，『山と人間』をメイン・テーマに，自然保護，登山教育，高所医学等と様々な角度から，その関わり合いを掘り下げようというものであった。基調講演はN．ハーディ氏によ

る「世界の自然保護活動について」，記念講演は今西寿雄会長，史占春氏。最後の記念講演は西堀栄三郎元会長。本大会を総括，松本宣言を確認して終了した。ヒラリー卿による特別講演をはじめ関連行事も色々と行われた。（「山」493号・497号）

「北陸電力・双六谷電源開発についての現地視察」

＊ 北陸電力と金木戸営林署で計画のある，双六渓谷電源開発について，本会富山支部・岐阜支部の支部長や支部自然保護委員，本部委員および北陸電力の環境部長・発電次長ら全員12名で，7月26～27日現地を視察した。（7月委員会議事録）

「山を美しく保つために――中学・高校生におくるフィールドマナー・ノート」

＊ 中学・高校生を主な対象としたフィールドマナー・ノート（Ⅱ）が完成し，7,000部印刷した。配布先はJACの21支部に各100部，全国高等学校体育連盟に2,000部の他，日本山岳協会・環境庁をはじめとする関連46団体に発送。一般への頒価は一部50円。（10月・11月・12月委員会議事録）

「林野行政は見直しの時期に――祖母・傾山麓で自然保護全国集会――」〔関塚貞亨〕

＊ 第12回自然保護全国集会の報告。主要テーマは「森林伐採と植林」。傾山周辺の皆伐状況はひどく，林業の常識を越えた伐採である。もはや林野行政が独立採算制をとることに無理が出ている。僅かに残された原生林を保護するため，集会に参加した地元町民30余名との数時間におよぶ討論は有意義であった。11月1日～3日，別府市および祖母・傾山麓の宇目町で実施された。（「山」498号）

「猪俣君のこと」〔小倉　厚〕

＊ 『新潟県山のゴミ会議』代表，猪俣信市君の冥福を心から祈る追悼文。山岳美化のリーダーとして類まれな信念と実行力，強力な個性の持主だった猪俣君は，延べ4,000人を動員し，100トンを越えるゴミを新潟県の山から運び降した。同会議が発行した『山は甦る（山岳美化10年の軌跡）』をぜひ読んで，一代の風雲児の足跡を偲んでやってほしい。（「山」498号・474号）

「自然保護の標語について」〔自然保護委員会〕

＊ 自然保護に関する標語を募集していたが，入選作16点“次代に残そう美しい山と渓”他が決まった。（「山」498号・485号）

昭和62年（1987）

「第4回ヒマラヤのエコロジーシンポジウム　――ヒマラヤの自然の保護と利用開発との調和――」　〔中村純二〕

＊　日本ネパール協会と本会科学研究委員会・自然保護委員会が共催したシンポジウムの報告。基調講演の後，ヒマラヤの植生の特徴，ヒマラヤの地表・森林の崩壊状況，ネパールの人口動態と自然環境の問題点など，6氏による充実した発表であった。　（「山」499号）

「知床森林問題の賢明な解決を」　〔八木健三〕

＊　知床国立公園内の国有林1,700ヘクタールを，昭和61年度から10年間にわたって伐採する林野庁の計画に対し，北海道自然保護協会会長の八木氏は発想の転換を提起する。例えば今の様な国有林の独立採算制の宿弊から脱して，森林が持つ水を涵養する能力を評価し国の予算を林野庁に回したり，環境庁は国立公園にもっと支出すべき等々，具体的な案を提示する。　（「山」502号）

「京都支部だより　自然保護集会」　〔横田明男〕

＊　今西錦司元会長ら総勢65名，支部発足以来初めての大きな集会となった。2日目は吉村健次郎氏から芦生演習林の概要と現状の話を聞いた後，杉尾峠のブナ・スギ原生林の見学等3班に分かれて行動した。　（「山」502号）

図書紹介『高尾山』　身近な自然を考えるアサヒタウンズ編　〔関塚貞亨〕

＊　東京多摩地区で発行されている週刊新聞「アサヒタウンズ」に50回に互って連載された『東京の山　高尾山』を取り纏めたもの。裏高尾圏央道問題などが収録されている。今西寿雄会長が推薦文を寄せている。　（「山」502号）

「双六谷上流地域の国立公園編入の要望」　〔関塚貞亨〕

＊　現在も原始渓谷の様相を残している双六谷上流は，北陸電力が水利権を持ち，また流域周辺は国有林となっている。最近，北陸電力が双六谷にダムを計画しているので，山岳景観を守るために，双六谷上流の国立公園編入の要望書を提出したい旨，若林富山支部長から要請された。自然保護委員会名で環境庁長官宛に要望書を提出，写しを林野庁長官に，また岐阜支部長・富山支部長から各県知事に提出。北陸電力にも協力を要請した。　（「山」503号）

「大山隠岐国立公園大山一の沢地内における治山工事用道路建設に伴うブナ・ミズナラ林伐採に対する抗議と善処の要請」　〔小西　毅〕

＊　地域住民のボランティア活動として，大山山頂の裸地復元のための一木運動などを展開している同地において，『大山自然公園指導員会会長』をしている本会山陰支部自然保護委員の小西氏が，林野庁長官に宛て標題の善処方を要請した。昭和62年7月22日付文書。

図書紹介『ほろびゆくブナの森』　工藤父母道著　〔大森久雄〕

＊　ブナの持つはかり知れない価値が，確たる将来設計もなしに乱伐され，「役に立たない」ものとして他の単一の樹木に変えられてゆくその恐ろしさが，鳥肌たつような思いでこの本から伝わってくる。著者は，元，本会自然保護委員。　（「山」505号）

「秘境の渓谷美守れ　『北ア・双六谷上流，ダム開発に反対』――日本山岳会国立公園編入を要望――」

＊　日本山岳会自然保護委員会（国見利夫委員長）が，富山支部（若林啓之助支部長），岐阜支部（松井辰弥支部長）と合同で現地踏査をしたうえ，同山岳会として『ダム反対』の立場から「双六谷上流10キロ流域を新たに中部山岳国立公園に編入して渓谷美を守って欲しい」との要望書を環境庁に提出した。同地域が昭和11年以来，国立公園から外されてきた事情や，国見委員長の談話も掲載されている。

（毎日新聞・昭和62年8月11日付夕刊）

図書紹介『水源林の四季――多摩川上流・緑と水のレポート――』　畦倉　実著　〔大森久雄〕

＊　首都圏の山好きに親しまれている奥多摩は植林と自然林が交錯し，豊かな樹相が保たれているが，それは水源林として，また土地の人の生活の場として手入れされている結果である。開発と保護への一つの解答を本書はよく伝えている。　（「山」506号）

「九州にアケボノツツジを訪ねて」　〔中村純二〕

＊　祖母・傾山系にアケボノツツジを訪ねた山旅で，九州の4支部の自然保護委員や会員諸兄と山行し，九州の照葉樹林のことなど自然保護問題についても意見を交換した。　（「山」507号）

図書紹介『屋久杉が消えた谷』　津田邦宏著　〔関塚貞亨〕

＊　屋久島の山々に囲まれた原生林の谷が，大正末期に国の伐採基地として開拓され，木を切り尽くして廃村となるまでの半世紀にわたる歴史を記録

したもので，「日本の森の未来をみる」自然保護の啓蒙書であろう。
（「山」508号）

図書紹介『尾瀬は病んでいる』　加藤久晴著　〔蜂谷　緑〕

＊　関越自動車道が開通して以来，尾瀬への入山者は90万人にも達し，ほとんど一時期に集中する。自然保護への方途をさぐるこの本の著者は，これまでも放送番組を通じて，尾瀬の危機を訴えてきたTVマンである。
（「山」508号）

「今日の自然保護の諸問題――いま改めて考える――」　〔沼田　眞〕

＊　具体的な例を種々と述べ，自然保護の諸問題を解決し，世の中がいい方向へ向かうためには，一番の基本は教育であると結んでいる。なるべく早く人間と自然がいい形で共存できるようになることを期待したい。
（山岳　第82年　7～16頁）

「目でみる自然保護の諸問題」

＊　『白神山地の場合』　根深　誠撮影

＊　『知床の場合』　渡辺正臣撮影

（山岳　第82年　カラー・グラビア頁）

図書紹介『知床を考える』　本多勝一編　〔関塚貞亨〕

＊　知床だけでなく日本の森林や自然保護問題を考えるための必読書。1987年4月14日，林野庁は知床国立公園内の国有林に機動隊を導入して，530本の巨木を切ったが，本書はその前日に刊行された。本多氏の著書としては穏健な論調になっており，各章にはそれぞれ伐採推進派と反対派の論評が載せられている。編者と工藤父母道氏の対談などは読み応えがある。編者は自然保護委員。　（山岳　第82年　91～93頁）

「世界の自然保護活動について」　〔ノーマン・ハーディー〕

＊　国際アルピニスト・シンポジウム（'86松本）での元ニュージーランド山岳会会長N．ハーディー氏による基調講演の概要。「人間が環境を破壊している。人口の増加をコントロールし，国土の大切さを教育しなくてはいけない」。　（山岳　第82年　A83頁）

「世界各国の登山事情――現在の問題と将来の展望」

＊　国際アルピニスト・シンポジウム（'86松本）セッションⅡより

自然破壊の実態や自然保護対策について，ネパールのクマール・カドガ殿下やインド登山財団のナルニ・ジャヤール副会長他，森林資源の消滅が

従来の2倍以上のスピードで進んでいること，インドのナンダ・デヴィの山頂付近を入山禁止とし，サンクチュアリとしていることなどを報告。
（山岳　第82年　A85～86頁）

「自然を語る」　〔西堀栄三郎〕

＊　国際アルピニスト・シンポジウム（'86松本）での西堀元JAC会長による記念講演。「山男は自然保護ということでは毅然とした態度で模範を示すべきだ」と呼びかけた。　（山岳　第82年　A89頁）

昭和63年（1988）

『森林保護』への提言　〔日本山岳会自然保護全国集会〕

＊　森林は日本の美しい山と渓のもとである。しかし総合保養地域整備法が成立し過疎地対策の声とともに，乱開発で森林が荒らされることを恐れる。そこで第13回自然保護全国集会において，次のとおり提言する。

一，国民総参加への推進。　二，国有林の公益的機能重視の確立。
三，国有林に関する権限の一本化。　四，リゾート地域法の対策。
五，自然保護思想の啓蒙，普及。　（「山」512号）

『森林保護』への提言を採択　〔関塚貞亨〕

＊　第13回自然保護全国集会（1987年11月14日～15日）の報告。各支部の自然保護委員会からの報告の後，「今なぜ森林保護なのか？」との疑問が出され，議長から「今年は知床伐採問題など，多くの自然林の保護が問題となった。また5月にリゾート地域法が成立して，森林保護を訴える時と考える」と説明。前記『提言』を採択した。　（「山」512号）

「三浦富士で新春自然観察山行」　〔自然保護委員会〕

＊　三浦半島の先端近くにある通称三浦富士は，緑地特別保全地区に指定されているので豊かな常緑樹の自然が残されていた。　（「山」512号）

「北八甲田山ロープウェイ建設計画をめぐって」　〔八木健三〕

＊　十和田八幡平国立公園の北八甲田山に全長7.2キロのロープウェイを建設する計画が浮上している。既設の八甲田ロープウェイだけで，大岳山頂付近は裸地化が進行し，オーバーユースの状態になっている。
（「山」513号）

「自然保護委員会より」　〔国見利夫〕

＊　北八甲田山ロープウェイ問題についての自然保護委員会のコメント。「青森県民の会理事長」から前年に話を聞かされた段階と，リゾート地

域法の施行された現在とでは，状況は変わったので対応を決めていきたい。（「山」513号）

自然保護随想『自然は子孫から借りている』〔関塚貞亨〕

＊　昨年6月に公布されたリゾート地域法で，全国150ヵ所のリゾート開発計画が申請を準備中という。日本中の良好な自然条件を備えた地域が，箱根や軽井沢，伊豆を理想の姿としているようでは困る。（「山」513号）

「屋久島の縄文杉は今…」〔羽賀克己〕

＊　縄文杉と対面するには片道5時間を要すが，年間六千～八千名の人々が訪れる。老杉の周囲は伐開され，踏みつけられ，根系は地上に露出した。地元では縄文杉を目がけたロープウェイ架設が計画されている。一方アメリカではセコイアの巨木群を守るため，巨木群の中にある村を撤去することを決めたという。一本の縄文杉に頼らねばならないほど精神的な貧困に陥っているとは信じたくないが，文化の成熟度の差違を考えさせられる。（「山」514号）

自然保護随想『米国製のコーラの缶から』〔関塚貞亨〕

＊　欧米で売られているコカ・コーラ，ジュース，ビールの缶は日本のそれとは違う。タブが離れない型だから，環境重視の合理的な構造である。日本でも空缶の回収が叫ばれているが，足元の環境保護を考えない建前論だけで，哲学の差を感じる。（「山」514号）

自然保護随想『スキーツアーについて』〔関塚貞亨〕

＊　『尾瀬を守る懇話会』作成の緊急対策の中で，「スキーツアーの禁止」という項目がある。春スキーの団体が増えて湿原を汚染し，富栄養化が問題であるという。冗談ではなく「山へは便器持参」の時代が来ているのかも知れない。（「山」515号）

自然保護随想『林道の終点で』〔関塚貞亨〕

＊　総理府が発表した「環境問題に関する世論調査」によると，3人に1人が環境問題に無関心という。煙草の吸殻のポイ捨て，渋滞する道路でのゴミのまき散らし，林道の終点の吸殻の山，理解に苦しむ光景だらけだ。（「山」516号）

自然保護随想『やせゼンマイ』〔小倉　厚〕

＊　春の連休に故郷新潟の魚沼地方の山に入った。豪雪地であるが故に，かつては山菜の宝庫であった。車道が奥地へと延び，村人達が大切にしてき

た山菜は根こそぎ荒らされて見るかげもない。　（「山」517号）

図書紹介「白神山地二冊の本」　〔国見利夫〕

『白神山地に生きる』　鎌田孝一著

＊　白神山地の秋田県側に育った著者は，青秋林道建設計画問題で不慣れな中央官庁との折衝を体験した。そうした経緯から白神の未だ世に知られていない沢の存在や，植物の新種発見等の白神の魅力を伝えたいと考えた。

『津軽白神山がたり』　根深　誠著

＊　ブナの山，伝説の山，マタギの山の20数篇から成る。最後に著者は，最貧の西目屋村が世界最大級のブナ原生林の一隅を占め，豊かな自然を持っている皮肉な事実のなかで，自然と開発を調和させる英知を，地元の人に求めているのが印象に残る。　（「山」518号）

自然保護随想『秋田杉とブナ林』　〔関塚貞亨〕

＊　青秋林道の秋田側の終点は，二ツ森の山腹まで延びている。地元の八森町はブナを伐って杉の苗を植林したが，標高が高すぎたせいか，曲りくねった杉しか育たない。植え替えたが，現状は裸山同然で，山腹は崖崩れが起きている。　（「山」518号）

図書紹介『知床を考える』　本多勝一編　〔八木健三〕

＊　1986年夏から1987年春にかけ，全国を賛否論議の渦にまきこんだ知床国立公園森林伐採問題を扱う自然保護側と，林野庁等の伐採推進側とから出された論説，評論，報告を本多氏がまとめた。なお『山岳第82年』にも，関塚氏による同書の紹介がある。　（「山」519号）

図書紹介『森はいのち――エコロジーと生存権』　宮脇　昭著　〔渡辺正臣〕

＊　森と人間との関わり合いの歴史，自然を護り，共存する方法を論じ，実践を指示している。山の森より里の森に重点が置かれているが，一読をおすすめしたい。　（「山」519号）

「白神山域を探る山行報告」　〔赤松　光〕

＊　婦人懇談会主催で山形支部・秋田支部会員との交流をまじえて，5月27日～29日に行われた山行。万緑のなかを青秋林道の核心部へ，工藤茂美講師からブナ原生林の生態を実地に聞く。地域の過疎化と自然界の調和に着目，これを守っていこうとする努力に敬服した。　（「山」519号）

「63年度自然保護委・全国集会『山岳地域における大規模開発と自然保護』をテー

マに」　〔小倉　厚〕

＊　9月3～4日の両日，上高地にて全国集会が開催された。各支部委員から実情や取り組んでいる問題が報告された。今回の主テーマは，総合保養地域整備法（リゾート法）との関連もあって，地元の行政が主体となった地域活性化と，自然保護がぶつかり合うケースが多く，真剣な討議が行われた。（「山」520号）

自然保護随想「ネイチャーゲーム」　〔遠藤光男〕

＊　子供たちが自然の中で遊びながら，知らず知らずのうちに自然と親しみ，素晴らしさを見い出し，自然界の基本的な知識を学び，保護教育へとつなげていく，それがネイチャーゲームだ。親しむ，知る，守るの三つを柱とする教育活動の勉強会を自然保護委員会でこころみた。（「山」520号）

図書紹介『神々の遊ぶ庭』　北海道自然保護協会編　〔辻井達一〕

＊　開発と自然保護，観光と自然保護，森林と自然保護の三部から成る本書は，北海道の自然の美しさと，大きさと，原始性とを守るために採るべき方策などをまとめたものである。（「山」520号）

図書紹介『尾瀬に生きる・平野長英』　平野紀子編　〔蜂谷　緑〕

＊　尾瀬を守るのは，立派な啓蒙施設や制度よりも，まず，人から人への心の伝達であろう。一人の山守りが遺した言葉には，千鈞の重みがあるように思える。（「山」520号）

「二つのロープウェイ計画」　〔自然保護委員会〕

＊　自然保護委員会は7月20日，屋久島の縄文杉の観光を目的としたロープウェイ建設計画の中止を求める要望書を，環境庁に提出した。『ムラおこしの計画に水を注す形となるが，次代に残す国民の遺産として，縄文杉と屋久島の自然を外すわけにはいかない』というのが山岳会の立場である。

北アルプスの槍，穂高の展望台として人気の高い「蝶ヶ岳」まで，安曇野側からロープウェイを架けようという計画が，ひそかに進行している。（「山」521号）

海外の山「SACの悩み」　〔J.T.〕

＊　スイス山岳会（SAC）は創設125年目を迎えたが，アルプスの自然美をそのまま残すという創始者の願いは，観光業と電力業と交通業の発展に勝てなかった。また，競争的な登攀，パラ・グライド，雪上サーフィン等のおびただしい数の競技ゲームの出現で，今やアルプスはディズニー

ランド化を前にしている。　（「山」522号）

海外の山「海外あれこれ」　〔中村テル〕

＊　山岳環境保全のため，マウンテン・ウィルダーネスと称する新しい協会がラインホルト・メスナーの意志を基にミラノに結成された。エドモンド・ヒラリー卿が名誉会長，外国代表者はクリス・ボニントン他であり，88年の計画のうちにはドロミテのマルモラーダ南面の清掃等がある。
（「山」522号）

自然保護随想「白い尾瀬」　〔渡辺正臣〕

＊　きのうは木道がどこまでもよく見えていた。同じ道を引き返す今日の尾瀬ガ原は，白一色に包まれ夢幻の世界のようであった。40センチも積った雪の向うに，平野長英さんと植物学者の本田正次博士と三人で歩いた日の思い出が重なった。　（「山」522号）

世界の山旅

トレッキングからエクスペディションまで。

アルパインツアーはヒマラヤからカラコルム、
ヨーロッパアルプス、アラスカ、カナダ、USA、南極、
アンデス、パタゴニア、ニュージーランド、中国、
アフリカ、北極圏その他の山岳地帯・辺境地帯への
主催ツアーやインフォメーションを用意しております。
もちろん日本国内の山旅も企画しております。
トレッキングのパッケージはもとより登山隊のための
航空便や地上手配などに関し、私達は豊富な知識と経験をもとに
ご相談に応じることができます。ぜひ、お問合せ下さい。

ALPINE TOUR

運輸大臣登録一般旅行業第490号／日本旅行業協会正会員／ロイヤルネパール航空代理店

アルパイン ツアーサービス 株式会社

東　京／〒105　東京都港区新橋2-2-2（川志満ビル7階）　☎03(3503)1911(代表)
大　阪／〒550　大阪市西区靱本町1-15-8（本町天祥ビル9階）　☎ 06(444)3033(代表)
名古屋／〒450　名古屋市中村区名駅3-23-6（第2千福ビル8階）　☎052(581)3211(代表)
福　岡／〒810　福岡市中央区舞鶴1-2-8（セントラルビル5階）　☎092(715)1557(代表)

覆刻 日本の山岳名著 全18点 22冊

解題書・特別資料付
企画・編集/日本山岳会
現金価格195,700円

日本の近代アルピニズム史上不滅の光を放つ
〝山岳名著〟全22冊原本そのままの姿で完全覆刻

日本風景論 志賀重昂
日本山嶽志 高頭 式編
日本アルプス 全四巻 小島烏水
アルペン行 鹿子木員信
日本アルプスと秩父巡禮 田部重治
山行 槇 有恒
黒部谷 冠松次郎
山—研究と随想 大島亮吉
山と雪の日記 板倉勝宣
雪・岩・アルプス 藤木九三
尾瀬と鬼怒沼 武田久吉
スウィス日記 辻村伊助
ハイランド 辻村伊助
氷河と萬年雪の山 小島烏水
北の山 伊藤秀五郎
山岳省察 今西錦司
Mountaineering and Exploration in the Japanese Alps
日本アルプス登山と探検 ウォルター・ウェストン
別巻 山の憶ひ出 全二巻 木暮理太郎 新装増補版
●解題書
覆刻日本の山岳名著解題 日本山岳会編
●特別資料
日本山岳会『會報』覆刻合本 第1号～第100号

新選覆刻 日本の山岳名著 全20点 29冊

解題書・特別資料2点付
企画・編集/日本山岳会
現金価格180,250円

近代登山の黄金期を築いたパイオニアたちの限りない〝山への讃歌〟

名山圖譜 全三巻 谷文晁
迦多賀嶽再興記 播隆上人
信州鎗嶽畧縁起 播隆上人
石狩日誌 松浦武四郎
山岳紀行六種(私家版) 松浦武四郎
乙酉掌記 他五種
歐洲山水奇勝 全二巻 高島北海
富士案内 野中至
西藏旅行記 全二巻 河口慧海
山水無盡藏 小島烏水
ヒマラヤ行 鹿子木員信
釵澤に逝ける人々 東京帝國大學山の會
山岳美觀 吉江藁松
山の繪本 尾崎喜八
先蹤者 大島亮吉
白頭山 京都帝國大學白頭山遠征隊編
アルピニストの手記 小島烏水
ナンダ・コット登攀 竹節作太
山に描く 足立源一郎
Playground of the Far East ウォルター・ウェストン
別巻山岳礼拝(新編集) 中村清太郎
●解題書『新選覆刻日本の山岳名著解題』日本山岳会編
●特別資料(1)
日本山岳会『會報』第101号～第100号
●特別資料(2)
播隆上人筆『鎗ヶ嶽繪圖』

図説百科 山岳の世界

N・ディーレンファース/T・ヒーベラー 他著
日本語版監修 西堀栄三郎・宮下啓三

本書は、600枚におよぶ美術的にたのしめ、かつ科学的に貴重な写真・図版類をもとに、地球上の山岳の全体像を多角的にわかりやすくまとめたスタンダードワーク(基本図書)である。

B4変型判・上製函入・310頁 18,540円

遙かなりエヴェレスト —マロリー追想—

島田 巽 著

半世紀余り前、エヴェレスト初挑戦の英国隊の一員に選ばれ、その第三次遠征時に頂上を目指したまま還らぬ人となった若きアルピニストG・L・マロリーの素顔を、多様な人々との出会いや英国の社会背景を通して描いた追想記。

四六判・292頁 1,545円

大修館書店

■内容見本呈
〒101 東京都千代田区神田錦町3-24 振替/東京9-40504 電話(03)3294-2221〈大代表〉

●定価はすべて消費税込みです。

軽く、コンパクトなテントのことなら

ARAI TENT

㈱アライテント

〒175 東京都板橋区赤塚5-13-7 Tel.03(3939)6481

大月書店
東京都文京区本郷2-11-9
電話03(3813)4651〈代表〉
FAX.03(3813)4656
振替東京3-16387

峰々を求めた女性たち

1章・「女人禁制」と女性の登山
2章・近代登山の黎明
3章・近代登山黎明期の女性登山家たち
4章・社会人登山
5章・学校登山
6章・登山者につくした山女たち
7章・海外登山

坂倉登喜子・梅野淑子著

日本女性登山史

資料・エピソード満載　初めての女性登山史

A5判並製カバー　定価1600円(税込)

Asahi
LIVE ASAHI FOR LIVE PEOPLE
アサヒビール

おいしい烏龍茶はアサヒ。

一・二級茶葉のみ限定使用。

本場中国福建省産の一・二級茶葉だけを限定使用したアサヒの烏龍茶。おかげさまで、一・二級茶葉だけのすっきりとした味わいが、大変ご好評をいただいております。烏龍茶葉は、品質によって等級があります。この等級は、様々な基準で選別された茶葉を、最終的には、国家機関である商品検験局の「茶師」と呼ばれる専門家が、葉の種類、大きさ、形、香り、お茶の色、味わい、喉ごしや後味に至るまで厳しく審査します。この高級茶葉だけを限定使用したアサヒの烏龍茶のおいしさを、あなたの喉でお確かめ下さい。

アサヒ 高級茶葉使用 烏龍茶

340g缶　1ℓ紙パック（要冷蔵）限定地区発売　1.5ℓ ペットボトル　2ℓ ペットボトル

アサヒビール株式会社／アサヒビール飲料株式会社

信頼されて60年

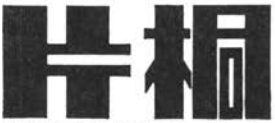
山とスキー用品専門店

山友社 たかはし

四谷本店 〒160 四谷1－20 相田ビル TEL (3351)7432・1912

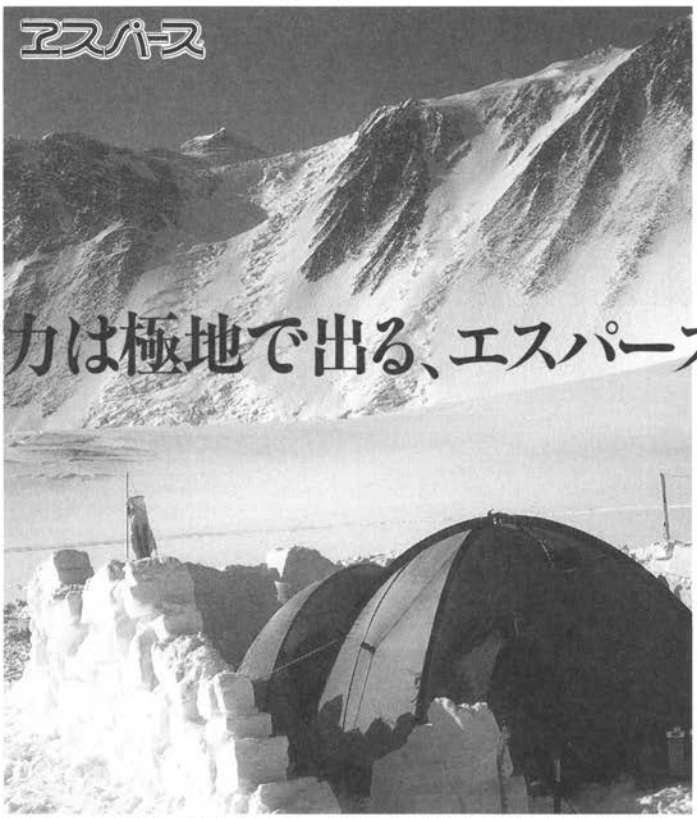
山と山スキーの専門店

クレッターザック
キスリング
夏冬用テント
カナダ、カウチン・
オリジナルセーター



東京都文京区湯島3－38－9
〒113 片桐理一郎
Tel 03(3831) 1794
FAX 03(3831) 6680

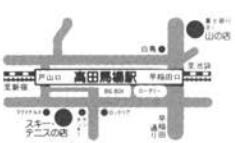
KAMOSHIKA



カモシカ同人ビンソン・マシフ登山隊

エスパース・マキシム:ミニ1~2人用¥35,000/2~3人用¥39,000/4~5人用¥46,000
ライト・エスパース(フライシート付):ミニ1~2人用¥32,000/2~3人用¥36,000
4~5人用¥39,000/ジャンボ6~7人用¥68,000
エスパース:ミニ1~2人用¥29,000/2~3人用¥36,000/4~5人用¥40,000
ジャンボ6~7人用¥68,000
ゴアテックス・エスパース:ミニ1~2人用¥49,000/2~3人用¥64,000/4~5人用¥74,000
※価格は1992年12月1日現在のものです。

株式会社 カモシカスポーツ 山の店
〒169 東京都新宿区高田馬場3-3-3 ☎03(3371)4333
●AM10:30~PM8:00(月~金)/AM10:30~PM7:00(土・日・祝)
●定休日/日曜日(4月・7月・8月・12月は定休日なし)



■呈内容見本

槙有恒全集 全3巻

◉お近くの書店へお申し込み下さい。

各巻／三八〇〇円 セット価／一一四〇〇円（税込）

I巻 憧憬
『山行』『マナスル登頂物語』
解説＝串田孫一

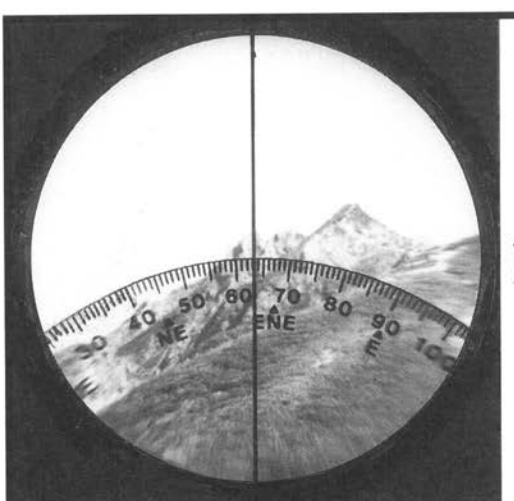
II巻 情熱
『マナスル通信』『ピッケルの思い出』『小登山家におくる』「世界の山 日本の山」「人物評」「山」
解説＝田口二郎

III巻 静寂
『山の心』『わたしの山旅』「補遺」（わたしの山旅）「山への姿勢」 年譜
解説＝立松和平

●各巻に解説・月報・口絵付き

四六判（190ミリ×130ミリ）
上製 綴り 特染布クロス装
豪華貼函入り 各巻約400頁

五月書房
〒101 東京都千代田区猿楽町2－6－5
☎03-3233-4161 FAX03-3233-4162



手のひらサイズの高精度方位鏡
ハイアイポイント
コンパスグラス HB-3
自信を持って山に行こう！
山座同定 迷走脱出に力強い味方です。

広視界10°高倍率の明るい視界内に見える目標がそのまま正しい磁気方位です。完全水密 耐圧水深50m 耐高度1万m 耐寒－25° 軽量78g水面浮上 フォーカスフリー 方位自動追尾

つや消し黒 ¥17,000　LED照明付 ¥19,800
黄橙色メタリック ¥18,000　普及型 黒 ¥11,500
送料 ¥ 440　（消費税別 料金着払い）

海上での遭難、酷使と高空1万mの低圧に耐えるプロ用です。
その信頼と精度を山の行動と安全にお使い下さい。
カタログ代無料、電話 FAX 葉書でどうぞ。

東京都練馬区上石神井1丁目37番13号
株式会社 石神井計器製作所
電話03-3928-5411 FAX03-3928-5411

コンパスグラスは狙った目標を絶対に逃がしません。

旅するあなたのサポート隊

パッケージツアー・グループ・トレッキングは西遊旅行が、割引航空券・個人旅行・個人山行は、キャラバンデスクが、皆様のお手伝いをいたします。

秘境の地へ
世界の山々へ

ネパールではカトマンズ連絡事務所の社員が、皆様のお世話をいたします。

トレッキング部門は、JAI・HIMAL TREK-KING が、一般観光部門は SAIYU・TRAVEL がそれぞれ皆様のお手伝いをいたします。スタッフは日本語も話せますので、お気軽にご利用下さい。

～ 地球の果てまでお手伝い ～

個人旅行・航空券手配の専門相談室

キャラバンデスク

03-3237-8384

シルクロード・秘境旅行・トレッキング・海外登山のパイオニア

運輸大臣登録一般旅行業第607号

株式会社 西遊旅行（さいゆうりょこう）

本　　社　〒101 東京都千代田区神田神保町2-2 新世界ビル5F
☎03（3237）1391㈹

大阪営業所　〒530 大阪市北区神山町6-4　北川ビル5F
☎06（367）1391㈹

キャラバンデスク（航空券専門相談室）　〒101 東京都千代田区神田神保町2-4　矢野ビル2F
☎03（3237）8384

カトマンズ連絡事務所　P.O. BOX3017, Durbar Marg Kathmandu Nepal.
☎221707, 224248

●B4変型・100頁・オールカラー

自然の美 写真集シリーズ

●定価はすべて税込みです。●送料各380円

尾瀬
霞立つ尾瀬に浮かぶ幻想の世界
新井幸人 撮影
串田孫一 文
定価3914円

丹沢
自然への憧れを満たす四季の叙情
渡辺千昭 撮影
三宅修 文
定価4017円

上高地
光る梓川、風わたる穂高、響き合う大自然のリズム
内田良平 撮影
田中清光 文
定価4017円

武蔵野
郷愁—田園・丘陵・雑木林—忘れかけていた風景
山下喜一郎 撮影
串田孫一 文
定価4120円

ブナ原生林
神秘漂う自然の恵み 魂の原風景
太田威 撮影
串田孫一 文
定価4300円

阿蘇
火の国、水の国、緑の国、神話が息づく
長野良市 撮影
光岡明 文
定価4300円

山稜玻璃
山を見る、自然の旋律を聴く
三宅修 撮影
串田孫一 文
定価4017円

立山
神々の雄山、きらめく四季の賦
横山宏 撮影
田中清光 文
定価4017円

南アルプス
高貴な山容、静寂な渓谷、幽玄世界
中西俊明 撮影
山口耀久 文
定価4120円

ヒマラヤ
夢とロマンが駆ける世界の最高峰
巨峰14座と高峰
内田良平 撮影
文
定価4500円

穂高槍
そそりつ屏風岩、天を突きさす尖塔、荘厳なる出岳の美
三宅修 撮影
文
定価4300円

東京都千代田区日比谷公園1-3〒100 **時事通信社** ☎03(3591)1111 振替東京4-85000

飼料・肥料配合プラントのコンサルタント

飼料・肥料製造用諸機械及び部品の販売・関連機器の斡旋取扱

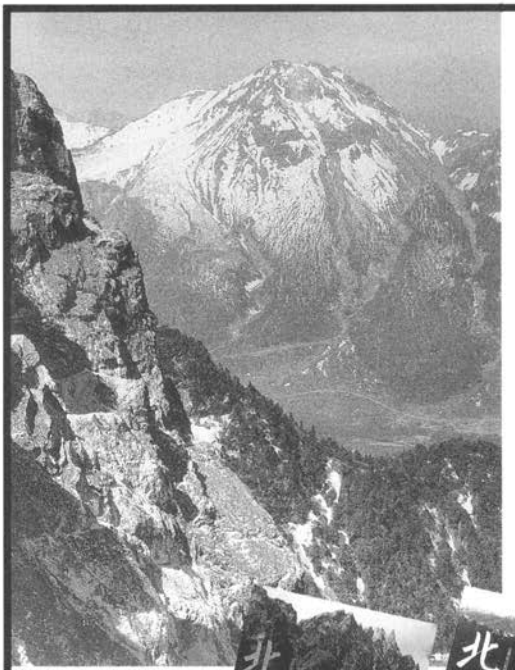
株式会社橘エンジニアリング
名古屋市中区橘一丁目27番8号
〒460 ☎名古屋052(321)1501(代)

北アルプス

題字・井上　靖

〝日本の屋根〟の全域をルポ

好評発売中



しま模様に雪が残る
焼岳（上巻から）

表紙・
夜明けの槍ケ岳

表紙・
剣岳三ノ窓雪渓

長野、岐阜、富山、新潟の四県にまたがる広大な北アルプスの豊かな自然と多様な民俗を、新聞記者がペンとカメラで紹介――。

〈主な内容〉

◎上巻＝二一二頁、カラー一七六枚

▼日本の屋根（槍・穂高のパノラマ）▼上高地周辺の山々▼乗鞍岳初夏▼穂高連峰▼槍ヶ岳▼飛騨の山々▼山上の別天地（雲ノ平ほか）▼裏銀座を行く▼忘れられた山系（船窪岳ほか）▼高瀬渓谷▼常念山系▼梓川渓谷▼越年登山▼シーズンを待つ（高山祭り、涸沢ほか）

◎下巻＝二〇八頁、カラー一八四枚

▼開山祭▼雪形▼黒部峡谷（黒部源流、下ノ廊下ほか）▼後立山連峰▼北端の山々（朝日岳ほか）▼剣岳▼立山▼西部の山々（薬師岳ほか）▼冬のアルペンルート▼冬の黒部峡谷▼白馬スキー事情▼北アを守れ・座談会ほか

◈定価
各巻（菊四変）
三、五〇〇円
（税込み）

信濃毎日新聞社出版部
〒380 長野市南県町657
026・36・3377

ニッチ

登山・ハイキングシリーズ

定評ある著者陣容！
全56巻
定価各700円

※登山・ハイキングシリーズにはこれだけの仲間が揃っています。

① 北アルプス
② 立山・剣　黒部渓谷
③ 黒部・白馬　鹿島槍
④ 雲ノ平
⑤ 槍・穂高　アルプス銀座
⑥ 上高地　乗鞍岳
⑦ 御岳　木曽路
⑧ 中央アルプス
⑨ 南アルプス北部
⑩ 南アルプス南部
⑪ 入笠山　守屋山・高遠
⑫ 八ヶ岳　蓼科山
⑬ 霧ヶ峰　白樺湖・蓼科山
⑭ 美ヶ原　霧ヶ峰
⑮ 軽井沢　妙義山
⑯ 浅間・雷平
⑰ 志賀高原　草津白根
⑱ 加賀白山　白川郷
⑲ 奥武蔵　武甲・雲取
⑳ 奥多摩　大菩薩
㉑ 奥秩父
㉒ 陣馬・高尾　秋川渓谷
㉓ 丹沢山塊
㉔ 富士・五湖　三ッ峠
㉕ 箱根　熱海・湯河原
㉖ 伊豆半島　大島
㉗ 三浦半島　鎌倉
㉘ 房総半島
㉙ 奥日光　奥鬼怒
㉚ 尾瀬　銀山湖
㉛ 谷川岳
㉜ 苗場・鳥甲　清津峡
㉝ 越後三山　奥只見・巻機山
㉞ 那須・塩原　鬼怒川
㉟ 磐梯・吾妻　安達太良
㊱ 蔵王連峰
㊲ 飯豊・朝日
㊳ 八幡平　岩手山・駒ヶ岳
㊴ 大雪山　層雲峡・然別湖
㊵ 東海自然歩道 I
㊶ 東海自然歩道 II
㊷ 東海自然歩道 III
㊸ 金剛山　葛城・岩湧山
㊹ 六甲・摩耶
㊺ 比良連山
㊻ 大峰・吉野
㊼ 大台ヶ原　大杉谷
㊽ 赤目・青山　室生寺
㊾ 鈴鹿連峰　御在所・伊吹
㊿ 大山・蒜山
(51) 阿蘇山

地図の本
尾瀬
白籏史朗著
総ページ
地図とカラー
1,010円

全改訂！
日本登山図集
総集篇
第1線級の登山家総執筆
A4版　216頁
5色×2色
定価5,800円
書店にてごらん下さい。

やぶれない地図

地図の　日地出版
本社　東京都千代田区西神田2-2-15
東京 03 (3261)5126
支店　大阪市中央区南船場2-11-23
大阪 06 (252)7421

〒102 東京都千代田区紀尾井町3-23　文藝春秋　TEL.03(3265)1211(代表)

写真集
文藝春秋編　●7000円(税込)
植村直己記念館

ビデオ
植村直己の足跡
トレース
北極からマッキンリーまで　カラー60分　VHS●2800円(税込)

実業之日本社の山と旅の本

＊定価はすべて消費税込みです。

山登りは道草くいながら
本多勝一　A5判／定価1850円

車窓の山旅・中央線から見える山
山村正光　A5変型判／定価1960円

関東百山
—100の山へのガイド・エッセイ—
浅野孝一・打田鋏一・楠目高明・横山厚夫
A5変型判／定価1850円

一日の山・中央線私の山旅
横山厚夫　A5変型判／定価1750円

展望の山旅(正)(続)
藤本一美・田代博
A5変型判／定価(正)1960円(続)2000円

カメラの山旅
—山の写真とカメラハイク12カ月—
川口邦雄　A5変型判／定価1850円

雲取山に生きる
新井信太郎　A5変型判／定価1750円

甲斐の山旅・甲州百山
蜂谷緑・小俣光雄・山村正光
A5変型判／定価1900円

富士の見える山小屋
工藤隆雄　A5変型判／定価1900円

花の山旅・日本アルプス
新妻喜永　A5変型判／定価2200円

スケッチの山旅12カ月
山里寿男　A5変型判／定価2400円

黄色いテント
田淵行男　A5変型判／定価3910円

イタリヤところどころ
—光の国の歴史・美術散歩—
西本晃二　四六判／定価1650円

ブルーガイド・ワールド

⑪スイス　定価1400円
⑯ヨーロッパ・アルプス　定価1300円
㉔ヒマラヤ・トレッキング　定価1420円
㉜アラスカ　定価1200円
㉝ニュージーランド　定価1200円

●ご注文はもよりの書店へお願いします。品切れの場合でも、書店へご依頼になれば取り寄せてくれます。
●書店に遠くご不便の方は小社に送料(冊数に関係なく一律210円)を加算してご送金下さればお送りします。(前金制・切手代用一割増)
〒104 東京都中央区銀座1-3-9／振替東京1-326

平凡社・山と旅の本

《東洋文庫》

186 **秋山記行・夜職草** 鈴木牧之／宮栄二校注
『北越雪譜』の著者による信越秋山郷探訪記。併せて『苗場山記行』自叙伝『夜職草』を収録。●定価2,884円(税込)

240 **日本奥地紀行** イザベラ・バード／高梨健吉訳
明治初期の日本を、東京から北海道まで旅したイギリス女性の克明な記録。本邦初訳。●定価2,884円(税込)

248・249 **東西遊記**《全2巻》橘南谿／宗政五十緒校注
医者でもあった著者の天明二年から六年にかけて日本国内を旅した記録。●定価1:2,472円・2:1,854円(税込)

461 **江漢西遊日記** 司馬江漢／芳賀徹・太田理恵子校注
おもしろ人間江漢の残した、江戸後期の日本旅行記。愉快なワンダーフォーゲルぶりを翻刻。●定価2,266円(税込)

472 **江戸温泉紀行** 板坂耀子編
江戸後期の有馬・熱海・箱根・草津、今はなき湯倉などの温泉町の様子をいきいきと描く。●定価2,369円(税込)

542・543 **チベットの報告**《全2巻》イッポリット・デシデリ／フィリッポ・デ・フィリッピ編／薬師義美訳
一八世紀初頭、イタリア人宣教師によって報告され、長く失われていた古典の本邦初訳。●定価各2,884円(税込)

544・550 **日本旅行日記**《全2巻》アーネスト・サトウ／庄田元男訳
サトウの残した膨大な日記から、日本旅行にかかわる部分を抄出。●定価1:2,781円・2:2,884円(税込)

555 **東洋紀行1**《全3巻》G・クライトナー／大林太良監修／小谷裕幸ほか訳
一九世紀後半、中国・日本など東アジア各地を観察・踏査したオーストリア人地理学者の記録。●定価3,090円(税込)

風土の地誌 式 正英
地型・地質、気候と人々の生活など、第一級の地理学者が語る、風景の読み方と新しい旅の型。●定価3,000円(税込)

〒102 東京都千代田区三番町5/振替・東京8-29639/Tel.03-3265-0455

極限にきらめく生と死

還らざる者たち

原 真著 ●定価2500円(税込)

●四六版 301頁 上製
●カバー・本文イラストは著者自身による。

人間の弱さとは何か、強さとは何か。長きにわたり海外登山をリードしてきた著者がヒマラヤ、アンデスなど世界の七千メートル峰岩壁を舞台に描くドキュメント。限界状況における人間の観察と分析が光る一冊。

西堀榮三郎選集

第一次南極越冬隊長を務め、限りない探究心で行動し続けた西堀榮三郎。その領域は、科学・技術・登山・極地・品質管理・原子力関連にまで至る。各分野でのパイオニア・スピリットに満ちた先駆的な足跡を集大成。

1巻 人生は探検なり(西堀榮三郎自伝)
2巻 未知なる山・未知なる極地
3巻 技術の創造力と品質管理
別巻 人生にロマンを求めて(西堀榮三郎追悼)

●定価1、2、3巻各3500円／別巻4500円(税込)

悠々社

〒162 東京都新宿区神楽坂3-6 ジーイージャパンビル2F
TEL 03－5261－0052 FAX 03－5261－0054

BHBオリジナル個人旅行

フリープラン・ヨーロッパツアー

モスクワ経由アエロフロート航空にて、中近東、北アフリカの各都市、東欧を含むヨーロッパ33都市のお好きな街へ最高60日間の旅行ができます。また、到着日のホテルが1泊ついているので安心です。

（ロンドン・パリ・ローマ・フランクフルト・他33都市）

フリープランヨーロッパに、自由自在に組み合わせが出来ます。あなた独自のフリーツアーをお作りください。

■価格

出発日	料　金
10月16日～11月30日	￥140,000
12月1日～12月18日	￥118,000
12月19日～12月25日	￥170,000
12月26日～27日	￥200,000
12月28日～1月1日	￥170,000
1月2日～1月31日	￥123,000
2月1日～2月14日	￥140,000
2月15日～3月15日	￥150,000
3月16日～3月31日	￥160,000
4月1日～4月20日	￥150,000

■日程

第1日	昼：東京→（モスクワ経由） 夜：ヨーロッパ33都市、又は中近東の各都市着（泊）
第2日～第58日	終日フリー （ご希望日、各都市よりご帰国できます）
第59日	午後、各都市→（モスクワ経由）
第60日	朝：東京着

●食事《なし》●添乗員《なし》●最小催行人数《2人》
●出発地《東京》●予定航空《アエロフロート》
●目的地の到着日ホテル一泊付き（2人部屋）、乗継便の都合でモスクワに一泊する場合は、トランジットホテル代が約￥8,000かかります。
●東欧を含むヨーロッパ33都市、中近東、北アフリカの各都市にも行けます。
●60日以内でしたら、お好きな日にお好きな都市からご帰国可能です。
●1名参加の場合は￥8,000アップになります。
●ビザ取得の場合は実費プラス手数料が必要となります。
●目的地と帰国地を組み合わせることも可能です。

★カリンカパック/ロシア二大都市

ロシア二大都市のモスクワ又は、サンクト・ペテルブルグでの宿泊、朝食、送迎、市内観光のついたお得なパック（お一人様からお申込頂けます）

モスクワ　●宿泊 ペオグラードホテル限定（2泊以上）

	2泊3日	3泊4日	4泊5日
2人部屋使用の場合	￥23,000	￥30,000	￥38,000
1人部屋使用の場合	￥39,000	￥52,000	￥65,000

※お1人様料金

サンクト・ペテルブルグ　●宿泊 モスクワホテル限定（2泊以上）

	2泊3日	3泊4日	4泊5日
2人部屋使用の場合	￥21,000	￥27,000	￥34,000
1人部屋使用の場合	￥30,000	￥43,000	￥53,000

※お1人様料金

TEL 東京（03）3535-5621（代表）
株式会社 文化放送ブレーン
〒104 中央区銀座4-4-8 浜一・和光ビル7F
日本旅行業協会正会員　一般363号

よりよきテントの最高峰を めざすヨシダテント！

1978年　植村直己北極点単独旅行
1978年　日本大学北極点遠征隊
1981年　植村直己冬期エベレスト登山隊
1981年　明治大学エベレスト登山隊
1981年　早稲田大学K2登山隊
1984年　第26次南極観測隊
1985年　和泉雅子北極点遠征隊
1985年　第27次南極観測隊
1987年　風間深志北極点遠征隊
1988年　日本テレビ〝チョモランマ〟報道隊
1989年　和泉雅子北極点遠征隊
1989年　大韓民国北極点遠征隊

YOSHIDA TENT
OGIKUBO TOKYO

小さな店の大きな自信！

株式会社
ヨシダテント

〒167　東京都杉並区桃井1-3-3
☎03(3399)2548・FAX03(3395)4655

株式会社ラマーノ
Lamano
手造りのトロフィー・オブジェ

中川　武

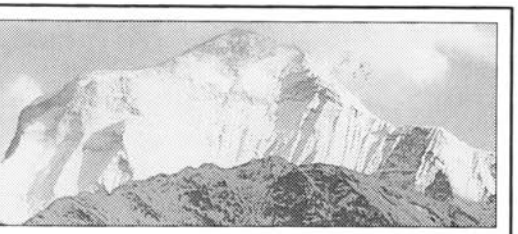
バッジ・タイ止・ループタイ・美術造型看板

〒160 東京都新宿区四ツ谷2丁目4番地
フラワホームズ四ツ谷204号
TEL03-3351-9927
FAX03-3351-9906

山岳名著選集

実際のドラマチックな体験をもとに、世界屈指のアルピニストたちが綴った感動の物語。

〈各巻A5判〉



ダウラギリ登頂
マックス・アイゼリン 著／横川文雄 訳 定価1545円

エヴェレスト登頂記
ジェームス・アルマン 著／丹部節雄 訳 定価2575円

パミール ―シルクロードの城塞―
田村俊介 編著 定価2575円

遥かなる天山 ―天山に魅せられた探検家セミョーノフ伝―
A・アルダン＝セミョーノフ 著／田村俊介 訳 定価2575円

"遠い頂"ヌプツェ ―北西峰初登頂の記録―
登歩渓流会 編著 定価2575円

プモ・リ ―世界で最も美しい山―
ゲルハルト・レンザー 著／織方郁映、橋本 信 共訳 定価2575円

アムネマチン初登頂
上越山岳協会 編著 定価2472円

スイスの山々 ―SAC山案内人の体験談―
オレル・フュスリ社 編／岡沢祐吉 訳 定価1957円

北アルプス白馬讃歌 ―山案内60年の回想―
大谷定雄 著 定価1957円

ナンガ・パルバート回想 ―闘いと勝利―
カール・M・ヘルリッヒコッファー 著／岡沢祐吉 訳 定価1957円

氷山雪嶺二千年 ―中国登山史話―
周 正 著／譚佐強・田川常雄 共訳 定価2066円

スイス―山案内人の手帳より
岡沢祐吉 著 定価2066円

登山ハンドブック・シリーズ

山岳研究会 編
各巻A5判

中級登山者のための一般的な解説から、先鋭的氷壁登攀技術、それに古典的山岳文学、山と人間との長い関わりの歴史までを論ずる、最新の登山総合解説書。

登山教本 定価1009円
世界の山岳 定価1009円
山の心 定価1009円
山の自然科学 定価1009円
山の資料 定価1009円

●不朽の名著、復刻なる！

湖底幻影 全3巻

小島六郎 監修 定価28000円

明治34年、北魚沼郡長の発企による銀山探検隊が組織された。学問と産業開発の両面より、それぞれの専門家32名、案内人と人夫を含む総勢58名。その際の記録が「銀山平探検記」となって結実したのであった。これをそのまま復刻したのが第一巻。わかりやすい現代文にしたものが第二巻、第三巻には諸家の貴重な周辺登山紀行を集録。よって、湖底に沈んだ銀山への鎮魂となす！

■造本・体裁
●第1巻 背三つ目綴り（225×153㎜）マット入り
●第2巻・第3巻 A4変型判上製カバー装（287×210㎜）

豪華写真集

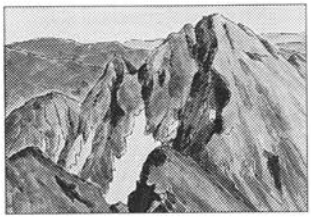
天山
中国新疆人民出版社 編
ベースボール・マガジン社 訳
A4判変型上製／定価7107円

アムネマチン
上越山岳協会 編
A4判変型上製 定価4944円

中国登山ハンドブック
上越山岳協会 編／中国人民体育出版社 監修
A5判 定価1854円

山登りのための体力トレーニング
窪田 登 著
新書判／定価855円

体育・スポーツ総合出版
株式会社ベースボール・マガジン社 〒101東京都千代田区三崎町3-10-10☎03(3238)0181※宅配も可(送料310円)



恒　文　社

山と自然のエッセイ・シリーズ

各巻A5判上製／定価2800円

緑の牧歌

自然を師として、共に生きる智慧…。森を歩いて、土を耕し、野の人を訪ね、自然を食す…。太田牧師が掘り起こした大地の教え。都市生活者たちに贈るグリーン・メッセージ。

太田愛人
わが山と旅

ネオ・ロマンチシズムを提唱して戦後抒情詩の確立をめざすかたわら、山登りを続けてきた詩人による、内外の登山と、人間の源流へと辿った旅。詩と山の五十年。

秋谷　豊
もう登らない山

登らなくなった山々への感傷的な追慕ではなく、想い出だけを綴ったものでもなく、精神的にも豊かな山登りを愉しんで欲しいと願う素朴な想いが溢れる最新山の本。

串田孫一
雲をつかむ話

「アルプ」の写真家が、四十年以上に及ぶ山登りの遍歴と山岳写真の精神を、軽妙な文章と詩情あふれる写真で語って見せる、山と写真の愛好家に最適の写文集。

三宅　修
息子と行く山

幼い息子を連れて高原の風に吹かれて歩き、移り住んだ土地の習俗を訪ねる著者の歩みは、大地に深く根を下ろし、すがすがしい自然との共生を端正に謳い上げる。

北原節子
高原の花物語

少年の日に山の生活にあこがれ、長じては霧ヶ峰高原の山小屋の主となった著者が、野に咲く花を見ては想起する四季折々の山小屋の日常と事件などを淡々と描く。

手塚宗求
高原の野鳥物語

高原を渡来する野鳥の姿や鳴き声とともに展開する山小屋暮しの日常の中に、出会った人や遭遇した出来事、懐かしくも切ない思い出を語った山住みの精神の記録。

手塚宗求
新編邂逅（かいこう）の山

僧籍に入ってひっそりと山寺で修行するかつての山の仲間と偶然に再会する表題作をはじめ、山暮しのよろこびと悲哀、自然の表情と驚異を、抒情ゆたかに描く。

恒文社　〒101東京都千代田区三崎町3-10-10

すぐ読める "本の宅配便"のご案内

書店へのご注文が不便な場合は、小社販売部へ直接ご連絡ください。早くて便利な着払い宅配便で、ご自宅またはお勤め先までお届けいたします(送料は冊数にかかわらず310円)。

販売部・コレクト便係
☎03(3238)0181

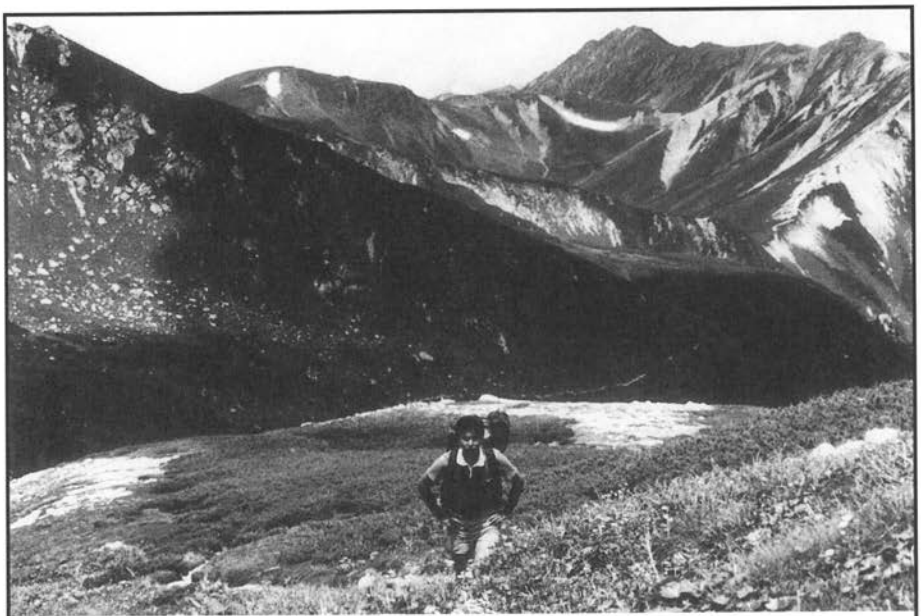
mont·bell

Alpine Clothing

私達モンベルのアルパインクロージングは、
デザインや機能を追求し、苛酷な自然条件下でも
人間の能力を最大限に発揮できるよう、
常に改善を加え、作り続けられているのです。

ゼロポイントは、高所登山や極地遠征用のギア、パック、クロージングをラインナップしたエキスパートのためのブランドです。

モンベル
本　　社●大阪市西区立売堀1丁目6-17 ☎06-531-4761(代) 〒550
東京営業所●東京都渋谷区恵比寿南1-18-6 ☎03-3760-2131(代) 〒150



読者と自然を結んで63年!

●山登りの話題と情報を満載した月刊誌

山と溪谷

毎月15日発売／定価780円

●クライミングと海外登山の専門誌

岩と雪

奇数月1日発売／定価880円

●直接購読のご案内●

「山と溪谷」一カ年分9360円(送料は無料，特大号値上げ分サービス)
「岩と雪」一カ年分5280円(送料は無料，6冊)
振替または現金書留で「山と溪谷○月号より」「岩と雪○号より」と指定のうえ住所・氏名を明記して本社営業部あてお送り下さい。

山と溪谷社

〒105東京都港区芝大門1-1-33/☎03(3436)4055・FAX03(3433)4057/振替・東京8-60249

山の本　茗溪堂

〒101 東京都千代田区神田駿河台2の1
電話　03－3291－9442
振替口座 東京8－24723

山稜の読書家
島田　巽　4,017円
山・人・本
島田　巽　2,472円
山なみ帖
小谷隆一　3,296円
わが登高行　上巻 3,914円
三田幸夫　下巻 4,635円
静かなる山　正編 1,751円
川崎精雄ほか　続編 1,854円
登山史の周辺
山崎安治　3,914円
登山史の発掘
山崎安治　2,575円
快晴の山
織内信彦　2,575円
森林・草原・氷河
加藤泰安　2,575円
山に忘れたパイプ
藤島敏男　3,296円
忘れえぬ山の人びと
望月達夫　1,957円
折々の山
望月達夫　1,957円
山を見る目
川崎精雄　2,987円
山は満員
渡辺公平　2,266円
すこしの昔の話
初見一雄　1,236円
我がスキーシュプール
麻生武治　3,502円
北の山　続編
伊藤秀五郎　2,781円
詩集 山の風物誌
伊藤秀五郎　1,442円
乾いた樹氷
雨宮淳三詩集　3,296円
山旅の足音
渡辺兵力　1,442円

坂本直行の本
わたしの草と木の絵本
1,800円
雪原の足あと
3,914円
原野から見た山
4,326円
山・原野・牧場
1,800円
淡彩画絵はがき
2集 3集 4集　各600円
ランタン紀行
エーデルワイス・クラブ　1,545円
カンチェンジュンガ縦走
カンチェ登山隊　5,150円
ナンダ・デヴィ縦走1976
ナンダデヴィ登山隊 4,017円
マナスル1974
日本女子マナスル隊 3,502円
遥かなる未踏の尾根
日本山岳会東海支部 4,944円
グリンデルヴァルトの山案内人
ブラーヴァン　3,914円
続ブータン感傷旅行
小方全弘　1,545円
山岳　日本山岳会
62年～81年、86年（1991年）
2,060～3,605円
山岳総索引　1,030円
低山高蹤
神谷恭遺稿と追悼　2,987円
山ひとすじ
中村謙遺稿と追悼　3,502円
青空と輝く残雪の山々
山田、横山 共著　1,339円
藪山迪歴
望月、岡田 共著　1,545円
日本の山登り記
木南金太郎　1,545円
（価格はいずれも税込）

マナスル　　塔田也寿

編集後記

・この仕事をしていると、時間の経過がまことに早く感じられ、発行目標期日である年次晩餐会がまたたく間に近づいて来る。因みに、年間の仕事の流れを記すと、年明けから企画の立案、三月までに企画と執筆者を決めて四月原稿執筆依頼、六～八月は届いた原稿の内容チェック（固有名詞の確認、年号・送り仮名・用語の統一など）と整理、遅れている原稿の催促、九月早々に入稿、十～十一月校正となる。専業ではないから、一般の出版物と比べると間合いは長いと思われるが、途切れることなく続き、ホッとした時には山はもう冬山である。

・季節の移ろいを山でじっくり味わうなどという贅沢はいわぬにしても、山中を駆け抜けるような歩き方では風情がない。そんな渇いた心で『山岳』が作られてよいものか、とも思う。

・本号では、マッキンリーとともに注目された、ヒマラヤの気象観測についての報告も掲載すべく原稿を印刷屋に渡すまでになっていたのだが、事情により掲載できなくなってしまったのはまことに残念である。

・本会には元気印（じるし）の高齢会員が沢山おられる。「高齢者登山・私の場合」ではそんな方々をできるだけ紹介したいと考え、支部をはじめ皆さんに伺ってみたところ予想以上の数となり、紙幅の関係で執筆者を大幅に絞り込まざるを得なくなってしまった。

・校正や英文のチェック等で関塚貞亨、南井英弘、宮沢美渚子、林栄二、中条昌子、伊藤主税の皆さんに御協力をいただいた。

（南川）

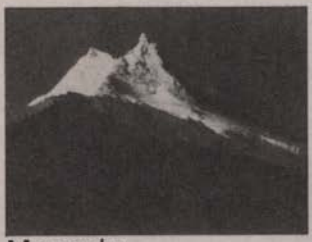
山岳　第八十七年（通巻一四五号）
一九九二年十二月五日発行
価三五〇〇円
発行所　社団法人　日本山岳会
東京都千代田区四番町五―四
サンビューハイツ四番町
（〒一〇二）
電話　東京三二六一局四四三三番
振替口座　東京三―四八二一九番
発行人　山田二郎
編集人　南川金一
印刷所　株式会社　技報堂
発売所　株式会社　茗渓堂
東京都千代田区神田駿河台二―一
電話　東京三二九一局九四四二番
振替口座　東京八―二四七二三番

本誌掲載の記事、写真および地図の無断転載を禁じます。

大好きな自然を、ゆっくりと楽しみたい

ATLAS TREK

ビギナーのための冒険旅行から、未知の魅力を秘めた国々へ、そしてエクスペディションまで、それぞれのニーズにお応えし、新しいユニークな手づくりの旅をコーディネイトします。


Manaslu

Sagalmatha

Nanda Devi

Qomolangma

Kangchenjunga

Namcha Barwa

☆世界各地へのトレックツアー、各種手配旅行、航空券を取扱っております。

※まことに残念ですが、全ての情報はここに載せられませんので、ご要望は直接お問い合わせ下さい。
詳細パンフレットをご請求下さい。ご氏名、ご住所、お電話番号を明記し、お申込み下さい。お電話でも結構です。

株式会社 アトラストレック　なんでも相談　☎03-3341-0030

〒160　東京都新宿区三栄町23番地

日本通運株式会社・東京海上火災保険株式会社代理店　運輸大臣登録一般旅行業代理店業第5084号

ISSN 0286-7508

The Journal of

The Japanese Alpine Club

SANGAKU

Vol. 87

1992